

# 小井川遺跡Ⅲ

—新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書—

2008.3

山梨県教育委員会  
山梨県土木部

## 序

本書は、山梨県埋蔵文化財センターが平成17年度に調査を行った、小井川遺跡（3年次）の発掘調査報告書です。この調査は、山梨県土木部が実施する新山梨環状道路建設に先行して、対象面積3500m<sup>2</sup>に及ぶ地域を発掘したものであります。

本遺跡は中央市・（旧田富町）に所在しており甲府盆地南部低位置にあって釜無川・笛吹川の堆積作用によってできた沖積地に立地しております。

このような地理的条件下では遺跡の薄い地域という事になっておりましたが、今回の調査では鎌倉時代の後半の大形五輪石塔や戦国時代の寺院と寺域がほぼ完全に発見されました。鎌倉時代の五輪石塔には、銘文が刻まれていて、本遺跡が中世布施荘の荘域であったことや、その管理者の可能性のある人物も特定されました。

また戦国時代の寺院では、被災された寺院が再建され、方形の塹が掘削され大規模であったことなどが注目されました。

このような成果は、これまでの遺跡の立地を考え直す必要をもたらすと共に、釜無川、笛吹川を中心とした水利の実態をも考慮する必要もでてまいりました。今後の周辺地域の調査研究に期待したいと思います。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に従事された方々にお礼申し上げます。

2008年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　末木　健

## 例言・凡例

- 1 本報告書は、平成 17 年度に実施した新山梨環状道路建設に伴う発掘調査・中央市布施（旧・中巨摩郡田富町布施）・小井川遺跡の、調査報告書である。
- 2 本調査は、山梨県環状道路建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘を山梨県教育委員会が県土木部より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本報告に関わる出土品及び写真、記録図面等は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 4 自然科学分析は、株式会社パリノ・サーヴェイに委託した。
- 5 炭素 14 年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 6 出土遺物の保存処理業務については、財團法人・山梨文化財研究所に委託した。
- 7 遺物の写真撮影は、ツカハラ・スタジオの塙原明生氏に委託した。
- 8 本書の編集及び執筆は、小林広和が行った。
- 9 遺構実測図は、山本三重子、石川千年、早川みどり、石坂恵理、保坂秋蘭、金子春枝が行った。  
遺物実測図、及び本報告に関わる平成 18 年度整理・トレースは中川美千子、矢野美鈴、新津多恵、清水真弓、山本三重子、石坂恵理、平成 19 年度整理・トレースは 中川美千子、山本三重子、北川洋が行った。
- 10 発掘調査及び整理作業において、次の機関、各氏によりご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。  
中央市教育委員会（旧・田富町教育委員会）  
秋山敬、今村直樹、宇佐美孝、岡本直久、小野正敏、数野雅彦、櫛原功一、沓掛貴彦、佐々木満、清雲主運、高橋修、出月洋文、内藤和久、中村忠宗、中山誠二、西川広平、萩原三夫、畠大介、平野修、宮澤公雄、室伏徹 他、（五十音順、敬称略）
- 11 本報告書の挿図等に関する指示は以下のとおりである。遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に以下のとおりであるが、資料の大きさにより便宜、縮尺を変化させてある。

遺構全体図	1/2000	1/300	(遺物) かわらけ、陶磁器、石製品、金属、骨、古銭	1/3
遺構配置図	1/300		木製品（東）紀年銘入地輪、大型壺、石臼	1/6
礎石建物遺構図	1/100		礎石、五輪塔部材	1/8
墓類（微細図）	1/20		大型木製品	1/6（例外的に縮尺を変えてある）
垂直分布図	1/100	1/200	に統一してある	

## 目 次

第1章 発掘調査の経緯と組織 ······	1
第1節 これまでの調査経緯 ······	1
第2節 調査に至る経緯 ······	1
第3節 基本層序 ······	2
第4節 発掘調査の組織 ······	2
第5節 小井川遺跡の概要 ······	3
第2章 遺跡の自然環境と歴史環境 ······	5
第1節 自然環境 ······	5
第2節 周辺の遺跡と環境 ······	6
第3章 I期の遺構と遺物 ······	9
第1節 I期の遺構と遺物 ······	9
小結 ······	12
第4章 II期の遺構 ······	13
第1節 II期の遺構 ······	13
第2節 東地区墓群 ······	14
小結 ······	15
第5章 III期の遺構 ······	17
第1節 III期の遺構 ······	17
小結 ······	20
第6章 IV期の遺構 ······	21
第1節 西地区墓 ······	21
第2節 墓の構造 ······	22
第7章 出土遺物 ······	23
まとめ ······	30
附編	
放射年代測定 ······	44
小井川遺跡の自然科学的分析 ······	49

## 図版目次

第1図	調査区域	第48図	錢拓本図2
第2図	小井川遺跡調査区全体図	第49図	錢拓本図3
第3図	小井川遺跡第3次造構配置図(全体図)	第50図	錢拓本図4
第4図	第Ⅲ期・造構配置図(1号礎石建物、2号溝)	第51図	錢拓本図5
第5図	第Ⅲ期・造構配置図(1)	第52図	出土遺物(東北下層) 実測図
第6図	第Ⅲ期・造構配置図(2)	第53図	出土遺物(東北下層・上層) 実測図
第7図	第Ⅲ期・造構配置図(3)	第54図	出土遺物(東北中層) 実測図
第8図	第Ⅲ期・1号礎石建物屋(上)、 第Ⅲ期・西附属屋(右)・南西隅造構(左)	第55図	出土遺物(東北中層・上層) 実測図
第9図	第Ⅲ期・西側壁(左) ・1号溝(右)	第56図	出土遺物(東北下層) 実測図
第10図	第Ⅲ期・主屋(1)	第57図	出土遺物(東北中層) 実測図
第11図	第Ⅲ期・主屋(2)	第58図	出土遺物(東北中層) 実測図
第12図	第Ⅲ期・東北附属屋(上) ・東附属屋(左) ・東南池の端造構(右)	第59図	出土遺物(東北上層) 実測図
第13図	第Ⅲ期・東側壁及池状造構	第60図	出土遺物(東北地区) 実測図
第14図	西1~5号墓・東1号墓	第61図	出土遺物(東南下層) 実測図
第15図	東2号墓~東5号墓	第62図	出土遺物(東南下層) 実測図
第16図	1号炉(上) 1・2号石机	第63図	出土遺物(東南中層上位) 実測図
第17図	橋状造構(上) 槌状造構(左)	第64図	出土遺物(東南中層中位) 実測図
	網代土状況(右)	第65図	出土遺物(東南下層) 実測図
第18図	東地区・遺物垂直分布図	第66図	出土遺物(東南下層) 実測図
第19図	祖母擧茶壺垂直分布図	第67図	出土遺物(東南下層・中層) 実測図
第20図	1号礎石建物遺物垂直分布図	第68図	出土遺物(東南中層) 実測図
第21図	常滑壺垂直分布図	第69図	出土遺物(東南中層) 実測図
第22図	東地区・土器垂直分布図	第70図	出土遺物(東南中層) 実測図
第23図	1号礎石建物・遺物垂直分布図	第71図	出土遺物(主屋下層・上層) 実測図
第24図	第Ⅲ期・主屋西側・土器垂直分布図	第72図	出土遺物(主屋下層・上層) 実測図
第25図	東地区・木製品・金属垂直分布図	第73図	出土遺物(主屋上層) 実測図
第26図	硯・砥石・古鉢垂直分布図	第74図	出土遺物(主屋一括・東断面) 実測図
第27図	東地区・著状垂直分布図	第75図	出土遺物(西地区下層) 実測図
第28図	東地区胡桃垂直分布図	第76図	出土遺物(西地区下層・中層) 実測図
第29図	五輪塔(火輪) 実測図	第77図	出土遺物(西地区中層) 実測図
第30図	五輪塔(地輪) 実測図	第78図	出土遺物(西地区中層) 実測図
第31図	五輪塔(地輪・火輪) 実測図	第79図	出土遺物(西地区) 実測図
第32図	五輪塔(地輪) 実測図	第80図	出土遺物(東地区) 実測図
第33図	五輪塔(地輪) 実測図	第81図	建築関連木製品(東北中層) 実測図
第34図	墨書き実測図	第82図	建築関連木製品(種) 実測図
第35図	茶臼・石臼実測図	第83図	建築関連木製品(主屋連絡口) 実測図
第36図	五輪塔(空風輪・火輪) 実測図	第84図	建築関連木製品(南西隅造構) 実測図
第37図	五輪塔(火輪) 実測図	第85図	建築関連木製品(南西隅造構) 実測図
第38図	五輪塔(火輪・水輪) 実測図	第86図	建築関連木製品(主屋・南西隅造構) 実測図
第39図	五輪塔(水輪) 実測図	第87図	建築関連木製品(南西隅造構) 実測図
第40図	五輪塔(水輪・地輪) 実測図		
第41図	五輪塔(地輪) 実測図		
第42図	五輪塔(地輪) 実測図		
第43図	五輪塔(地輪) 実測図		
第44図	五輪塔(地輪)・宝鏡印塔(塔身) 実測図		
第45図	宝鏡印塔(基壇・笠) 実測図		
第46図	礎石実測図		
第47図	錢拓本図1		

## 写真図版目次

1 小井川遺跡（第3次）第Ⅲ期全景	東附屬屋間連造構
小井川遺跡（第3次）第Ⅲ期全景（西方より）	東附屬屋間連造構
2 小井川遺跡（第3次）第Ⅱ期全景	裁出土状況
小井川遺跡（第3次）第Ⅲ期全景（東方より）	硯出土状況
3 第Ⅱ期・1号礎石建物（西方より）	箸出土状況
第Ⅱ期・1号溝	イノシシ牙出土状況
第Ⅱ期・1号礎石建物（北方より）	刀子出土状況
第Ⅱ期・1号礎石建物（南方より）	毛抜き出土状況
第Ⅲ期・西附屬屋（下層）竹柵検出状況	箸出土状況
（手前）東北附屬屋、（右上）1号礎石建物	刀子・土器出土状況
東附屬屋	11 木製品出土状況
4 1号礎石建物遺物出土状況	東附屬屋間連造構
第Ⅱ期・茶臼出土状況	木器出土状況
第Ⅱ期・硯出土状況	切匙出土状況
第Ⅱ期・茶臼出土状況	雑出土状況
祖母墳茶臼出土状況	新代出土状況
東4号墓検出状況	文字銘石・出土状況
東1号墓検出状況	東地区南端遺物出土状況
第Ⅱ期・五輪塔部材出土状況	12 東2号墓完掘状況
5 第Ⅲ期・道構検出作業風景	東2号墓検出状況
第Ⅲ期・建物群検出状況	東地区墓群
第Ⅲ期・雨落溝・礎石列	東3号墓検出状況
第Ⅲ期・主屋検出状況（東部より）	東3号墓完掘状況
第Ⅲ期・西附屬屋	東4号墓完掘状況
雨落溝断面	東5号墓完掘状況
西附屬屋・中央礎石（五輪塔部材）	1号炉出土状況
6 第Ⅲ期・池状遺構	13 西4号墓（左）、西5号墓（右）
池状遺構西端と五輪塔部材出土状況	西4号墓（左）、西5号墓（右）
池状遺構と東側塗	西3号墓
東側塗と五輪塔部材出土状況	西3号墓（底部）
第Ⅲ期・西側塗（南方より）	西1号墓
第Ⅲ期・西側塗（北方より）	西1号墓（上部）
7 東地区遺物出土状況	西2号墓
東地区遺物出土状況	西2号墓（底部）
池状遺構西側・橋	14 西南土層
池状遺構	東地区南端部基本土層
池状遺構西側・橋	東地区基本土層
池状遺構・五輪塔部材出土状況	東側塗断面
池南端・橋状遺構出土状況	東側塗断面
橋状遺構（西方より）	西側塗断面
8 第Ⅲ期・主屋基壇断面（南北トレンチ）	1号壕断面
第Ⅲ期・主屋基壇断面	西側塗下部土師器出土状況
主屋礎石断面	15 東地区第Ⅲ期・上面遺物出土状況
主屋床東出土状況	東地区第Ⅲ期・石列出土状況
主屋床東出土状況	16 出土遺物（石製品）
建築部材出土状況	17 出土遺物（石製品）
主屋東部石組	18 出土遺物（石製品）
主屋縁東出土状況	19 出土遺物（石製品）
9 東北部遺物出土状況	20 出土遺物（土器）
東地区五輪塔部材出土状況	21 出土遺物（土器）
東地区遺物出土状況	22 出土遺物（土器）
東北部土器出土状況（上層）	23 出土遺物（土器）
東北部遺物出土状況	24 出土遺物（土器・陶磁器）
木製品出土状況	25 出土遺物（陶磁器）
	26 出土遺物（鏡）
	27 出土遺物（砥石）
	28 出土遺物（歛角等）
	29 出土遺物（木製品）
	30 出土遺物（木製品）
	31 出土遺物（土器・輸入陶磁器）

# 第1章 発掘調査の経緯と組織

## 第1節 これまでの調査経緯

新環状道路通過対象地区の内、諸事情により実行不可能な地区は中央部を除いた、遺跡有無の確認調査の為15300m<sup>2</sup>に対しトレント11本を設定し平成14年10月22日から11月7日の間実行し、江戸後半以降の陶磁器を出土する大型V字溝、桶棺墓の底部を検出し、本調査の必要性を確認するに至った。また、試掘最東端部では、遺物包含層が薄く本調査には至らなかったが、古墳時代後期に属する环類が出土しており周辺地域にその存在を示唆するものであった。第1次調査は上記の結果を受けて、平成15年9月10日から平成16年1月28日の間に実施した。調査地区には、江戸後期から明治まで存在したといわれる無住職寺である慶勝院の寺域推定地と考えられる地点であった。遺跡の保存状況は良好とは云えず主たる遺構とされる桶棺墓の検出状況では桶棺底部のみが残存する程度であったが、大型溝からは江戸後期の陶磁器を始め土器、少量の仏具等が出土したことから慶勝院跡地としての確認となった。検出された遺構の内容は、溝2本、墓4基である。墓の内訳は、桶棺墓3基、破壊され形状不明なもの1基である。溝は現状・幅7m、深さ2mの大型V字溝と幅80cm、深さ40~80cmの小型溝が検出された。前記のように桶棺墓底部のみしか確認されないという事象は大規模な削平が行われたことを示唆するものであり、当時の地表面は消失して、小規模な庵程度の建築物の痕跡は当然消失しているものとされる。また、大型V字溝においても、当時の地表面を含めた上部構造は大きく削平されていることが容易に理解され、その掘削時の規模は調査確認時より巾、深さの点において確認数値が1m前後拡張することが推察される。

次いで平成16年3月16日から平成16年3月19日の間においては、平成14年度試掘調査の未調査地域の調査が行われ、その結果、隣接する墓地跡地区で木棺墓、桶棺墓が確認（16年度調査）され、統いて今回の発掘地点より五輪塔部材が検出された。

第2次調査での発掘対象は法星院墓地跡であり平成16年12月6日～平成17年3月24日の間行い、明治初期から昭和初期の墓117基、（木棺墓41基、桶棺墓66基）を検出するに至った。

## 第2節 調査に至る経緯

今回の発掘調査にかかる地域は山梨県土木部道路建設課による道路建設工事計画の発表後、山梨県土木部と山梨県教育委員会学術文化財課が遺跡保護の目的による協議を行い、道路建設に先立ち遺跡確認調査を実施することになり、山梨県埋蔵文化財センターに、遺跡確認の為の試掘調査を依頼した。

これを受けて、試掘調査を平成16年3月16日から3月19日まで埋蔵文化財センターが実施した。対象面積は、5780m<sup>2</sup>にトレント11本が設定され、平成17年度対象地区より、中世様式の五輪塔部材が検出された。以上の経過を通して今回の発掘地点（旧田富町布施地内）が平成17年度発掘予定地区として絞り込まれた。

（経緯及び法的な手続き等の主な概略）

平成16年 3月16日～平成17年3月19日	遺跡確認の為の試掘調査
平成17年 6月2日	文化財保護法第99条1による発掘調査を山梨県教育委員会に提出
平成17年 11月5日	小井川遺跡現地見学会
平成18年 3月14日	埋蔵文化財の発見通知を南甲府警察署に提出
平成18年 3月16日	発掘調査の完了

### 第4節 調査の方法

調査は、試掘結果に基づき新環状道路工事が施工される幅約40m、長さ約90mの範囲の調査区を設定、埋土約1mを重機により取り除き、引き続いて遺構確認面直上層から人力による掘下げを行い、遺構確認調査を行った。確認後は、遺構内を移植蔓、竹籠等により掘り進め、精査に努めた。

遺構配置図等の記録類は、国家座標に基づいて5m方眼のグリッドを調査区全体に設け、それを基準とする簡易やり方

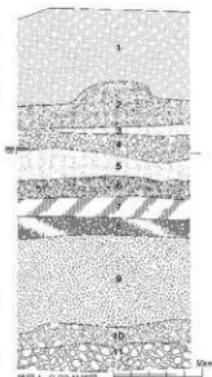
で行い、遺物の取り上げ方法も、同じく各グリットを基準とする簡易やり方で、全点を平面、垂直測量により取り上げた。各測点杭の名称は平成15・16年度に引き続き、東西方向に東から1・2・3…、南北方向に北からZ・A・B・C…と番号を付け、南西の角度を起点としてそのグリットを、C20等と呼称する。尚、調査の中心範囲である塙を伴う寺域を囲む座標軸は以下のとおりである。

C20	X 43800	Y 2175	J 20	X 43835	Y 2175
C32	X 43800	Y 2110	K 32	X 43840	Y 2110

### 第3節 基本層序

遺跡は甲府盆地の低位地区に立地することから、堆積土の主成分を微砂利質とする水成堆積土である。

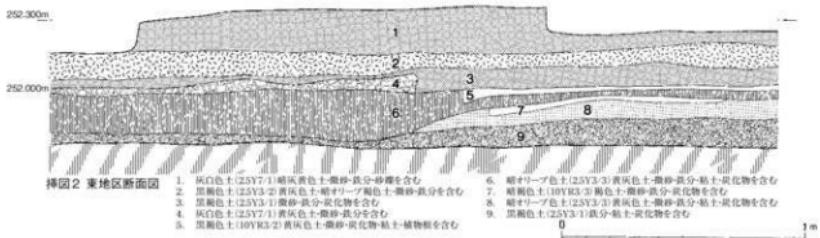
弘治三年以降は釜無川の本流が変化し渴水期以外では周辺の河川に影響を及ぼしたものと考えられ、遺跡内では本流や洪水による影響は認められないが、冠水による微砂利の水平堆積がG23南壁の柱状図（挿図1）に認められる。また各層は単純ではなくその中でさらに細分が可能な要素を含んでいる。挿団2は、東地区造成地区の中央よりやや北寄りの東西の断面図である。2から8層までが15世紀後半代を中心とする遺物が検出された遺物包含層であるが、層の境目では最上面が硬く締められ、腐食した黒色異物が12mmから5cm前後認められた。人工的な土層であり9層の地盤まで掘削した後、周辺の土で版築をまねた工法で盛土を行った痕跡が認められる。



挿図1 G23柱状図

1. 砂利土(2SY4-2)褐色土-微砂利質
2. 黄褐色土(2SY3-1)褐色土-微砂利質
3. 黄褐色土(2SY3-1)褐色土-微砂利質
4. 黄褐色土(2SY3-1)褐色土-微砂利質
5. 黄褐色土(2SY3-2)褐色土-微砂利質
6. 黄褐色土(2SY3-2)褐色土-微砂利質
7. 黄褐色土(2SY3-2)褐色土-微砂利質
8. 黄褐色土(2SY3-3)褐色土-微砂利質
9. 黄褐色土(2SY3-3)褐色土-微砂利質

10. 黄褐色土(2SY4-1)褐色土-5cm(1cm~10cm)  
小礫を含む



挿図2 東地区断面図

1. 灰白色土(2SY7-1)暗灰褐色土-微砂-粘分-砂利を含む
2. 灰白色土(2SY7-1)暗灰褐色土-微砂-粘分-砂利を含む
3. 黑褐色土(2SY3-1)微砂-粘分-炭化物を含む
4. 灰白色土(2SY7-1)暗灰褐色土-微砂-粘分-砂利を含む
5. 黑褐色土(10YK3-2)暗灰褐色土-微砂-炭化物-粘土-植物根を含む
6. 暗オリーブ色土(2SY3-3)暗灰褐色土-微砂-粘分-粘土-炭化物を含む
7. 灰褐色土(2SY3-3)暗灰褐色土-微砂-粘分-炭化物を含む
8. 暗オリーブ色土(2SY3-3)暗灰褐色土-微砂-粘分-粘土-炭化物を含む
9. 黑褐色土(2SY3-1)粘分-粘土-炭化物を含む

### 第4節 発掘調査の組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	副主幹文化財主事 小林広和　主査文化財主事 猪股一弘
発掘作業員	今村貞夫、時田薰、河野逸広、齊藤重信、山本三重子、真道みゆき、神沢正孝、望月忠、金丸亨、石川千年、甘利千恵子、早川みどり、石坂恵理、保坂秋蘭、金子春枝、石井弘文、渡辺旭光、原田みゆき、河住ふさ子、深沢徳子、浅野美代子、長谷川恵美子、齊藤真巨、今津武男、根津育美、遠藤実雄、望月明、河住光子、安原敏夫、金子春枝
18・19年度	
報告書作成作業	副主幹文化財主事 小林広和 作業員 北川洋 中川美千子 山本三重子 新津多恵 (18) 矢野美鈴 (18) 清水夏弓 (18) 石坂恵理 (18)

## 第5節 小井川遺跡の概要

本遺跡の性格は、鎌倉後期の莊園跡地と、戦国期に属する寺院跡地である。鎌倉期では遺構の検出はなく、中世様式の五輪石塔群のみが出土し、その内に紀年銘が確認された。これらの五輪石塔群はいずれも、原型、原位置を保っておらず各部材により手頃な形状に、破碎・再加工され、礎石や木橋の基礎、池の形状を保つ根石等に用いられていた。転用部材の五輪石塔部材の銘文は以下の通りである。

戊戌二藤布施兵□

忠光 法名 六十□□減  
真顔

戊の冠 二藤布施兵衛忠光 法名真顔 六十歳入減

正和四□六月

廿五日死亡日也

正和四年6月武十五日 死亡の日なり 日佛の為に助む 弥陀佛

日助佛為陀拂

未之時

延慶三年三月廿九日

延慶三年三月廿九日未の時、御往生。

御往生

以上からは、五輪五塔の製作に関する実年代、1305年（延慶三年）、1315（正和四年）が確定された、銘文の戊戌二藤布施兵衛忠光法名真顔六十□□減」からは、「没した」時、俗名、戒名、没した年齢と死を刻む仏教用語的な「入減」が刻まれている。

このような形態を有する銘文は、人の死に強く関連する墓碑として五輪塔では13世紀後半を画期として畿内地域を中心として出現（小林・2002）するが、甲斐国では14世紀前半の早い時期に高度な文化事象が伝播していたことになる。特に注目される事項としては在地名・布施の二文字が確認されたことである。布施は撰閑家領所である布施莊（磯貝1997・秋山1980）を示すとともに、推定2m前後の大型五輪石塔群の出土によって本遺跡を含む周辺一帯の地域空間が、布施莊跡地としての特定付けが可能なものになったことであり、さらに莊園の預所代としての二藤布施兵衛忠光なる人物が特定され該期における地方豪族の実態の一部が明らかになった。

戦国期（Ⅱ・Ⅲ期）においては被災と再建の過程で中世館に見立てた方形の塼を伴う寺院が成立した。

Ⅱ期の遺構は、礎石建物1棟、溝1本、墓5基が検出された。遺物特に該期の五輪石塔の量の割には遺構が少ないが、このことはグリッドF23・21グリッドJ23、21地区ではⅢ期の2号建物の建設時にあわせ造成が行われたことが原因と考えられる。1号礎石建物の規模は、東西7間×4間、1間=6尺（約1818mm・1尺=303mm 以下同様）であるが、これらの礎石の配置から、単独1棟の方丈構造を有する大型建物としたが附屬屋の存在の可能性も当然考えられる。また遺物からは寺院が想定され火災により消失したものと考えた。大多数の礎石が抜き取られているがその要因は上層建物の建設によるものであり、座りがよい大型石材あるいは形状の整った材はすべて上層のⅢ期の礎石建物に使用されている。Ⅲ期の遺構は中世以降に一般的に認められる伽藍配置の範疇に属し、方形の塼を巡らして中世館を見立てた寺院と考える。即ち、方丈造の構造を有する主屋を中心に西付属屋、東北付属屋、東附屬屋、東南池端遺構、西南隅遺構等が輻輳する。それらは北・及び南の大半では未調査となつたが、建物群は方形状の塼により取り囲まれていることが判明し、多くの寺院の部材、仏具関連遺物の出土を観た事により寺院関連遺跡として性格付けられ、その敷地のほぼ全容を明らかにすることが出来たものと考える。

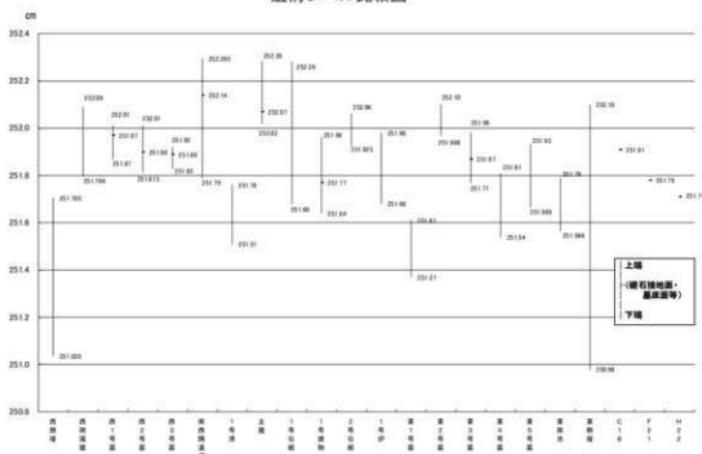
この年代観はⅡ期、Ⅲ期の建物の関係はⅡ期建物の被災からⅢ期の再建を考え、連続性が考えられる中で、建物構造及び出土遺物群の編年観から創建を室町後期の15世紀後半を中心とし、再建を武田信玄の時代1541～1573の間の後年代、さらに寺院廃棄を武田氏滅亡の1582年直後を考えた。

(遺跡年表)

1119年	元永二年	「中右記」 大井莊に対する割付「本名 布施」
1289年	正応二年	「勘仲記」四月二九日条 東北院領布施莊
1305年	嘉元三年	五辻中将忠氏朝臣 八丈絹一七四疋を納める。
1310年	未之時延慶三年	三月廿九日 御往生 発掘資料（五輪塔）
1315年	正和四□六月	拾五日死亡日也 日勵沸□ □陀仏 発掘資料（五輪塔）
□□□□年	戊戌二藤布施兵□	忠光法名六十□□滅 発掘資料（五輪塔）
	真顔	
II期建物創建	C 14・1310-1370・1410年	発掘資料（上層建物・厨増築部材）
	1425年 武田信直	
	C 14・1470年 — 1520年	発掘資料（2号組石+土器）
	1507年 小池図書助	
	1541年 天文10年銘	発掘資料（五輪塔・墨書）
II期建物・火災消失	1541年 ~	
III期建物創建	1573年	
III期建物地表面	C 14・1520年—1590年 C 14・1490年—1650年	発掘資料
III期建物廃絶	1582年直後 武田滅亡	

(遺構垂直関連図)

遺構レベル比較図



## 第2章 遺跡の自然環境と歴史的環境

### 第1節 自然環境

遺跡の属する中央市は甲府盆地のほぼ中央に位置する。盆地の外縁は、北西にハケ岳、南東の富士山を両極として、西は駒ヶ岳・白根山・赤石山脈の山々が標高3000mの壁をなして連なる。東は秩父山脈より続く山々が大菩薩嶺付近まで標高2000m前後で続くが、その南は富士東麓まで標高1500m前後で極端に高い山は見あたらない。

甲府盆地は山梨県の中央部に当たり、盆地内を流れる富士川上流部の釜無川と笛吹川の流れに沿って拡がっている。両河川の合流点の鰐沢町付近より釜無川を北上し韁崎市を過ぎると平坦地は少なくなり、丘陵地帯が河川の両岸に続き多くの支流に分かれてハケ岳、駒ヶ岳の麓に到達する。

一方、笛吹川は東北方向に上流部が伸び、多くの支流に分かれながら秩父山地に至るが、平坦地が拡がっているのは塩山市付近までである。このように甲府盆地は二本の主要河川の流域によって形成されるため、盆地中心部は一辺15km前後の三角形を呈し、上流部に向かって拡がり、変則的なY字状となる。

甲府盆地は日本でも有数の高山に囲まれ、中部高地と称されるように山岳地帯でありながら、平坦地は一辺15Km前後の三角形状の拡がりを持ち周辺の丘陵地帯を含めれば盆地として大型ばかりではなく、海浜部の小平野に匹敵する規模を有する。しかし、外縁部に連なる山々があまりにも高く、盆地外部に流れ出す富士川の流域は、両岸に急峻な山々が続き、駿河湾に至るまでの間、ほとんど平坦地を見ることなく続き、甲府盆地の孤立感を一層強くしている。

これより外部に通じるには、富士川を除くと盆地外へ流れ出す河川はなく、他は河川の上流部を遡上し越えて拡げる以外はない。しかし、盆地の西方は3000m級の山々により完全に通路は遮断され、北・南は山麓を迂回するルートが多くなる。南は富士川沿いに下る他は、笛吹川の支流を遡上し御坂山地に峰を越え、富士北麓を西に迂回すれば富士宮から駿河湾に、東に回れば鎌倉街道で御殿場より沼津あるいは相模平野にいたることができる。北西は釜無川上流部が源訪湖に続く信州往還で、ハケ岳山麓を東に回れば佐久盆地に至る。この両者は大きな峰越えはない。北東は笛吹川本流を遡上し、雁坂峠を越える秩父往還か、重川を上り柳沢峠を越え、丹波川を下り青梅に出るルートである。東は日川を遡上し笛子峠を越え桂川の支流・本流・を下れば相模川であり、流れに沿って下れば相模平野、東進すれば多摩川の流域に達することができる。

甲府盆地と外部との交渉は、以上のいずれかのルートが舞台となった事であろう。特に西方よりの文化の波及が問題となる弥生時代以降は、畿内勢力との関係を考慮すれば、盆地南部より駿河湾に至るルートが重視されたことは云うまでもない。このルートは富士川と御坂山地～富士山麓に大別できるが、後者は御坂山地のどの峰越えをするのか、富士山を東西に迂回するかによって、多くの経路が考えられ現在まで多くの説が提示されている。

本遺跡は、中央市（旧田富町）の西側を北から南に向かって流れる釜無川と、町の南側を東から西に向かって流れる笛吹川のほぼ合流点にあり、河川の堆積作用によって形成された沖積地である氾濫原地帯に位置する。遺跡の存在する旧田富町周辺での最も高い標高値を示す地点では、旧町北部の釜無川左岸付近において約265mを示しそれが最高値となる。また、本地域では南下するにあたり次第に高度を下げる地形となっているが、最低値においては約245mに至り比高差は僅か20m程度の数値が計測される（田富町誌・1981）。

遺跡は、上記のように釜無川扇状地の南西端部に占地して、現状はほぼ、平坦地形の標高252mに立地する。このような環境下にある本地域の地形については、特に微高地等の形成要因に限ってみれば、西側を流れる笛吹川の影響力よりも釜無川の流路による作用が顕著に現れているのも当然と考える。

弘治三年（1557年）信玄堤成立以前の釜無川は現代の甲府バイパスの線上にコースをとて落合町付近で笛吹川と合流していたものと考えられている（川崎・1994）。現在においても若草町、田富町には釜無川により分断され川の東西に飛び地が存在することからは現・釜無川の本流は東北部とされるのが妥当とされ小井川遺跡の西側は障害物のない平坦地が想定され西においても旧本流とされる荒川まで無障害で到達する。堤防成立後の本流は下八幡付近では鎌田川の周辺と現・釜無川のすぐ東側に南北併走す西流路（川崎・1994）が考えられている。本遺跡は布施莊跡地でありその性格からは広範

開な土地が取り込まれていたものと考えられ、東は弘治年以降の間の本流の痕跡を残す鎌田川を超し、上窪遺跡を含んだ荒川の手前までが、西部は加賀美の荘との関係から旧若草町・二本柳遺跡付近までがその範囲と考えられる（挿図4）。

## 第2節 周辺の遺跡と環境、

本遺跡の周辺一帯は、度重なる釜無川の氾濫作用によると思われる大量の土砂により、旧地表が地中深く埋没して発見し難いことに加え盆地内では、標高の低い最南端部に位置する低地面に占地するなど地形的制約から雨期の際には必然的にかつ頻繁に発生する水害等を被る土地柄であったこと、さらに近世以来現代に至る間において古来からの建築物が地表に残存しない事などから、いつしか中世以前は人間の活動に適さない過酷な環境の下に存在するものと考えられるようになり近年にまで至ってきた。

このような状況下で実施された平成13年度に行われた町内遺跡分布調査では、従来の予想を覆し複数の遺跡が検出された。このことにより周辺の歴史地理的環境を考える上で基礎的情報と地下に埋没する歴史事象の一端を推知することが可能となった。

旧石器時代の遺跡に関しては、該期の活動基盤が洪積台地には限られるため、地質学的条件からその存在は望めず、つづく縄文時代においても埋没する微高地にその存在の可能性が残されない説でもないが、釜無川氾濫原左岸に立地する低地部では、頻繁に繰り返された洪水とともに運搬された大量な土砂の堆積作用により覆われて深度が大きくなったり立地に、その存在を推定するにとどまっている。

仮にそれが存在したとしても地表にその一端（土器片）が出現する可能性は極めて低いものとなって、遺跡の有無の確認の端緒となる機会をも、閉じこめている状況となっている。この要因は、周辺地域全般に云える訳であるが、遺跡確認作業の初期段階の全般に重要な影響を及ぼしているものと思われる。一方、埋設深度、水分を含んだ土壤に覆われた遺跡全体の保存状態は、一般的な立地条件の遺跡と比較して良好な残りが確認されるものと思われる。このように前記の過酷な自然現象下に生成した沖積地帯での遺跡の分布状況は、全県的に見てやや希薄として捉えられるが、時代の進行とともに遺跡の密度も増加して地域周辺の重要度が高まった、新興の地域として把握される。

先の分布調査の結果（田富町教育委員会：2002）からは、沖村（16）で表面採集された弥生時代の所産と考えられる高坏の破片が最古段階となっている。微高地と平坦地が入り組んだ立地条件からは居住空間と生産を兼ね備えた、遺跡空間の存在が期待されている。

統いて、古墳時代前半では、上新手新田（1）、白井河原上河原（8）、整理地（13）、延里（14）、西花輪村北・村（11）において土器片が採集されている。この時代を象徴とする墳墓群は盆地の東縁辺部に集中することが周知となっていて、遺跡の性格としては上記同様な様相を呈するものと考えられる。

周辺の遺跡構造のあり方から観て（宮沢：2004）、高塚を有しない小規模な円墳等を取り込んだ集落跡が想定されるところである。またこれら遺跡群の内、白井河原上河原、西花輪村北・村遺跡の3遺跡では、やはり土器採集結果からではあるが古代までの継続性が指摘され、長期間にわたる土地利用が想定される。

古墳時代後半、特に6世紀末頃では、小井川遺跡東端部において、平成16年の本センターによる試掘調査、及び内藤和久氏の同地点の表面採集からは赤彩の杯が確認されている。これを受けてさらに包含層の確認の為の再調査が行なわれたが、地表下70cm以下の箇所に10~20cm前後の包含層が認められた。しかし、包含層は薄く不安定であることから本格調査には至らなかった経緯がある地点である。

周辺には後期古墳時代の象徵ともいえる横穴式古墳が現状及び過去においても、その存在を証明する痕跡や伝承等が皆無であることから、それは想定外とされるが摩滅されない赤彩土器の検出はやはり集落・関連遺構の存在が当地点の近在に想定される。

平安時代では今日までのところ、遺物の採集はなく本遺跡以外は確認はされないが、東方約1km付近に上窪、平田宮第2遺跡等、が立地する。

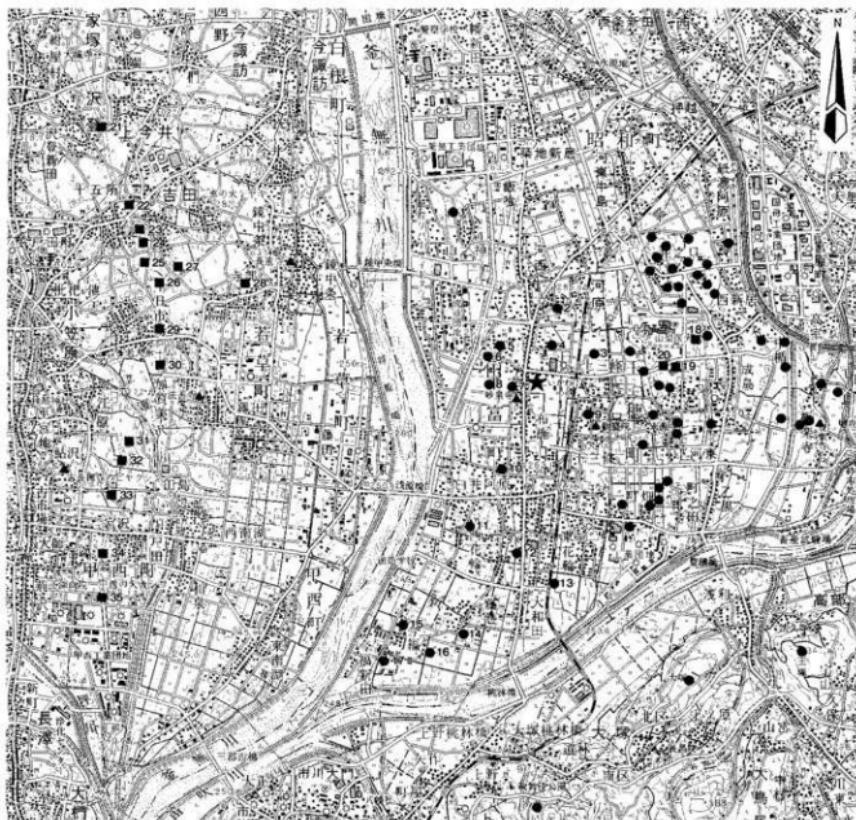


図3 小井川遺跡と周辺遺跡

国土地理院 1/50,000

★ 本遺跡

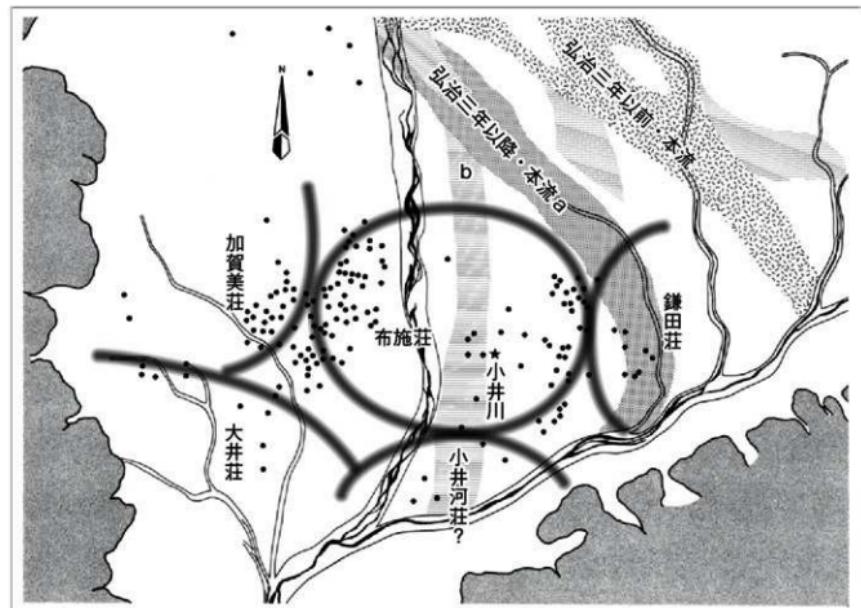
- |            |             |              |              |
|------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 上平新田遺跡  | 2. 布施村北遺跡   | 3. 三宮司遺跡     | 4. 神田遺跡      |
| 5. 冷久保遺跡   | 6. 三井右近糸屋敷跡 | 7. 小井川遺跡     | 8. 白井河原上河原遺跡 |
| 9. 竹之花遺跡   | 10. 古寺家遺跡   | 11. 西花輪村北村遺跡 | 12. 西花輪村東遺跡  |
| 13. 整理地遺跡  | 14. 延原遺跡    | 15. 今福村東遺跡   | 16. 沖村遺跡     |
| 17. 中道下遺跡  | 18. 上窪I次遺跡  | 19. 上窪II次遺跡  | 20. 平田宮第II遺跡 |
| 21. 七ツ石遺跡  | 22. 十五所I遺跡  | 23. 十五所II遺跡  | 24. 村前東II遺跡  |
| 25. 村前東I遺跡 | 26. 角力場II遺跡 | 27. 前原G遺跡    | 28. 寺部村附遺跡   |
| 29. 新居道下遺跡 | 30. 二本柳遺跡   | 31. 向河原遺跡    | 32. 油田遺跡     |
| 33. 中川田遺跡  | 34. 大師東丹保遺跡 | 35. 宮沢中村遺跡   |              |

その他中世関連遺跡では、本遺跡を中心に1 kmの範囲中に布施村北遺跡・神田遺跡・冷久保遺跡・三井右近屋敷跡の5遺跡が収まる。くり返すが新山梨環状道路建設に先立って遺跡確認の為の2004年度試掘調査が実施され、中世から戦国期にかけての所産と考えられる五輪塔の部材が確認されて、それらの出土範囲の拡大と、遺跡空間の存在が期待された。

近世・江戸後期に至っては古寺家、今福、中道下、小井川等が確認されている。特に、今回の調査地区と東側に隣接する小井川遺跡（第1次）では、江戸時代後期に存在したという無住職寺院・慶勝院に付属する墓地跡とその付属施設と考えられる、断面V字の大型溝が検出された。

慶勝院墓地は明治19年以降に平成16年度の発掘地点に移動されていることから、明治19年以前の慶勝院墓地の一端が検出されるに至った。この発掘地点は、農作業に伴う開墾、住宅開発による造成が急激に行なわれていて地形は変化が著しく、地層は1 m強まで搅乱が認められ遺構確認直上まで自然堆積層は確認されない。この為、遺物の出土区域はV字溝の覆土中に限定され、遺構の発見としては、墓では棺の上部が削平された桶の底部が残存する程度であり、さらに墓以外では、唯一遺物群の出土を観た大規模な掘削作業を必要とするV字溝の検出のみにとどまっている。

この他、近世においては、確認されている上記遺跡の他に、古文献、古地図をもとに想定された古代地割・条理制跡が指摘され、今後の調査が期待されている。



挿図4 弘治三年以前・降の釜無川本流と小井川遺跡関連図

(川崎1994原図を改編一部作図)

#### 参考文献

- |           |      |                              |
|-----------|------|------------------------------|
| 田富町誌編纂委員会 | 1931 | 田富町誌                         |
| 高木勇夫      | 1989 | 条理地域の自然地域                    |
| 川崎剛       | 1994 | 釜無川の流路変遷について                 |
| 田富町教育委員会  | 1995 | 町内遺跡詳細分布調査報告書                |
| 秋山敬       | 2003 | 甲斐の莊園                        |
| 宮沢公夫      | 2004 | 寺部村附第6遺跡 南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第2集 |

## 第3章 小井川I期の遺構と遺物

### 第1節 I期の遺構・遺物 —14世紀前半期・布施莊関連の五輪石塔—

該期では遺構の検出までには至らなかったが、中世様式の五輪石塔が検出されると共に、そこに紀年銘が確認されたことによって、それらの造立年代及びその歴史的背景がある程度、性格付けられたものと思われる。

これらの五輪石塔は、いずれも、原型、原位置を保っておらず各部材により手頃な形状に破碎・再加工され礎石や木橋の基礎、池の形状を保つ端石？等に用いられていた。このように原位置は勿論、現形等を著しく破壊された石塔であるが、その表面には銘文が比較的良好な状態で検出された。この要因としては転用目的が木橋の基礎、建物の礎石であり、建築物の最下部構造であったことが上げられる。さらに転用部材は、上屋が災害による廃棄あるいは外的要因による移転に伴い廃屋となった後は、地中に埋没しやすい条件下にあったことと、さらに埋没後に周囲の環境が変化し水位が上がり五輪石塔部材は水面下となり表面の風化を遅らせるという好結果をもたらしたもので、転用目的により解体され破碎行為を受けたにも関わらず保存良好な石塔表面をもたらした要因は上記の所からであると考えられる。

#### 東側塹・木橋の基礎（第13図）

出土状況：2号建物の付属施設である塹の東部の北側よりに検出された。塹は現状平均巾2m、深さ1m前後を計測し断面U字状に掘削されている。五輪石塔部材は北より空輪、地輪と密着して併設され、いずれも逆位に設置されていた。基礎は塹の掘削状況はU字を基本としている為薄壁は斜位となる為、2個体分の大型部材が取まる程度に垂直に掘削し五輪石塔部材は2個体の設置上面が平坦に揃えられ安定した状況で設置されている。

この設置状況からは当然建築物の一部として把握され遺構として捉えられるわけで、その目的は性格として塹内部と外部を連絡する渡り的な施設、すなわち木橋の基礎部分が想定される。

建設時期：設置箇所はⅢ期の建物群の塹の要素を持ち、その付属施設とされるところから、16世紀後半以降が考えられる。

#### 転用部材

火輪No1（第29図）本遺跡の五輪石塔部材の観察は（磯部：1992）にしたがっている。横57cm×高さ（38.5）cmの大型の部類に入る火輪であり、石材には古式の石塔類に多用される凝灰角礫岩を素材として用いている。逆位に転用され、地表に現れていた下端部は風化が著しく削平されていた。形態的特徴では、軒口の上端部と下端部では数値が一致し軒口は垂直となる。上端部の反りでは上端部幅と上端部軒反りの高さの割合が0.094を示し反りは急な下部をしめす。屋だるみの割合では0.062を示し緩やかな屋だるみを示している。

以上からの数値結果からは、火輪制作年代を鎌倉後期に与えることが妥当と考えた。

#### 地輪No2（第4図）

正面及び両側面の3面に梵字が印刻される、現存横幅43cm×高さ（38.5）cmの大型の部類に属する、凝灰角礫岩を素材とした地輪である。逆位に据え付けられ、下端部は打ち欠き削平されている。そのため地表面に接する部分では風化作用が著しく進行している。本例の正面形態は、下部が打ち欠きにより消滅していることから正確な高さは不明であるが現状での縦横比は0.895を示しそれ以上であることから比の数値は1に近い高さの割合を増したものが想定され、制作年代は鎌倉後期の14世紀後半が与えられる。

#### 池状遺構南西岸・木橋の基礎（第32図）

出土状況：東側塹は、南端部で池状遺構となり、その西南端部近くに半裁された五輪石塔の地輪2点が、塹木橋の基礎としての転用材として並んだ状態で設置されている。前記では設置し易いように掘削がなされ、溝底部に認められたが、本例では緩やかな傾斜の池の壁中段を2個体の据え置き空間として掘削するが、基礎材の安定化を図るために根石として15世紀代の五輪塔（火輪）がその下部に敷設される。また、その西側には、前記塹に繋がる觀賞を意識した巾1m前後の溝が設けられ、先の敷設された木橋（五輪石塔・基礎）の方向に伸び、一体として機能が想定されるかの如く木橋が架けられている。

#### 転用部材

#### 地輪No7

現存 高さ41cm×巾28cm×厚さ30cmである。

#### 銘文

戌刻二藤布施兵□

読み下し

忠光法名真顕六十□□滅

戌の刻 二藤布施兵衛忠光 法名真顕 六十歳入滅

地輪No.6

現存 高さ15.8cm×巾36.5cm×厚さ45.0cmである。

県内では、この延慶三年銘の地輪に次ぐ年代で最古級の部類にはいり、凝灰角礫岩を素材とする。

#### 銘文

正和四□六月

読み下し

廿五日死亡日也

正和四年六月二十五日死亡の日なり□□日佛の為に勵む□□弥陀佛

日勵佛為

陀沛

銘文の戌刻二藤布施兵衛忠光法名真顕六十歳入滅」からは、(没した)時、俗名、戒名、没した年齢、死を刻む仏教用語的な入滅が刻まれている。このような形態を有する人の死に強く関連する墓碑としての五輪塔は13世紀後半を画期として畿内地域を中心として出現するが(小林・2002)、甲斐国では既に14世紀前半に伝播していたことになる。さらに在地銘である布施の文字が確認されたことによって、今日も字名として残る旧田富町布施の発見であるとともに、本遺跡が1119年元永二年「中右記」 大井莊に対する割付「本名 布施 、1289年正応二年「勘仲記」四月二九日条 東北院領布施莊と記述されていた(磯貝 1997・秋山 1980) 摂関家領所の布施莊の跡地を指すものと考えられる。

#### 池状遺構底部・五輪石塔部材(第13図)

南北に設けられた壕の南端は極端に拡がり、円形の池状となり、その東端にはその形状に沿って人頭大の礫が敷き設されている。火輪No.5はその中に検出され中央よりやや北側に出土した。

火輪No.5 正面部分に梵字の印刻が認められ、正面・軒口左位部分には鋭利な刃物により叩き込まれた傷痕が断面・細V字に數カ所検出された。破壊を目的としたというより儀礼に伴う目的的行為の結果として捉えたい。巾44.5cm×高さ32cm×厚43.5cmの柔らかい凝灰角礫岩である。製作年代は、14世紀前半代が考えられる。

#### 西附属屋・五輪石塔部材

出土状況は1号建物(主殿)の附属施設に付いての詳述は後記する。ここでの礎石列は、東西に3列、5尺間隔で置かれ南北の間隔は不揃いな部分が多い。石材については河原石、15世紀後半代の五輪石塔の部材が転用され、容量が小さく不安定で揃いも悪い。このことから転ばし根太(大引き)を受け、低く床を張った構造が想定される。長方形部分のはば中央に据え付けられ、他の礎石には大きさ等にバラツキがあり、据え方も浅いのに対し、この礎石(31図)は深く慎重かつ丁寧に据えられていて他の礎石の様相とは異なることから転用前の五輪塔(被葬者)に対する何らかの祭祀的な意味が込められているとも考えられる。

#### 末之時

延慶三年三月廿九日

延慶三年三月廿九日未の時、御往生。

#### 御往生

この地輪No.3は本県における最古の年代値を示す例である。銘は石材に印刻した後、漆書しさらに金箔が入念に施されている。正面部分に上記が印刻される、現存横30.4cm×高さ25.7cmの中型の部類にはいり、凝灰角礫岩を素材とする地輪である。本例の正面形態の縦横比は0.895を示していて、初期の地輪正面は横長を呈するものとされ、鎌倉後期平均値の0.85を上まわり高さの比の割合が高くなっている。

渡来磁器:量的には少ないが上記に比較的年代が近く供伴の可能性のある13世紀代~14世紀初頭の遺物を取上げる。4点の内3点は半筒形の青磁、546、557、558である東地区造成地よりの出土である。863は小型破片で稿連弁文の碗である。出土地点は壕の最下部・南地点である。

未之時

延慶三年三月廿九日 未之時 御往生

延慶三年三月廿九日

時に生

延慶三年三月二十九日未の時、御往生。

正和四 六月

正和四□六月 拈五日死亡日也

□日勵佛為 □陀佛

廿五日死ニ二日也

正和四年六月、十五日死亡の日なり。□日仏の為に勵む。

南無阿彌陀仏。

日勵佛為

亡 佛

戌剋ニ藤布施兵

戌剋ニ藤布施兵□ 忠光法名六十□□滅

忠光

法名  
真顔

六十

滅

戌の剋、ニ藤布施の兵衛忠光

法名真顔

六十才入滅。

## 小 結

小井川での五輪石塔の造立年代は、紀年銘五輪石塔の

N o 1 未之時。延慶三年三月廿九日。御往生。

N o 2 正和四□六月廿五日死亡日也。□□日勅佛為。□□陀佛。

にそれぞれ刻まれることより、実年代の1305年（延慶三年）、1315（正和四年）が確定された。

のことから、13世紀後半から14世紀代にかけては供養塔と墓碑が併存して製作されて盛行するが（小林・2002）、本地域も14世紀第1四半期の鎌倉時代の後半には、供養塔と墓碑がほぼ並行して造立されていた訳でこのような趨勢の中に確認されることになる。なお、前者は甲斐国での紀年銘入り五輪石塔においては最古年代となる。この五輪塔の造立の背景については、「戊辰二藤布施兵衛忠光法名真願六十□□滅」からは、年・日は残存状況から観て欠損して不明であるが、没した時間、俗名、戒名、年齢が鮮明に刻まれているのが読み取れた。特に俗名を刻むという形態を有する五輪塔は墓碑として意義付られ、忠光自身が造立者という解釈が成り立つものと云えよう。また、在地名・布施の二文字が確認されたことによって、布施は撰閑家領所である布施莊を示唆するとともに、推定2m前後の大型五輪石塔群の出土によって本遺跡を含む周辺一帯の地域空間の性格は、布施莊跡地としての特定付けが可能なものになったと考えられる（挿図4）。

これら石塔群の造立時期である14世紀初頭における当莊の預家は、藤原氏の五辻中将忠氏朝臣（嘉元三年・1305年）であり、正安三年、正四位下左中将、徳治三年に従三位に叙せられて公家に列せられた人物（秋山・2003）である。従って布施莊の管理運営にあたっては、本人は直接現地には赴かず、預所代を置き管理運営の任を託すというシステムが確立していてその流れに沿って運営されていたものと思われる。

この預所代については今回の発掘調査結果によって、甲府盆地南西部における中世歴史舞台に本性・俗称を伴って新たに登場した二藤布施兵衛忠光なる人物が有力視される。この人物の素描については、第1に二藤姓であること、第2に預家・藤原忠氏とは一字違いの忠光で「忠」を共有すること、第3に兵衛の前に在地名の布施を俗称として付している。この三項目は、忠光の持つ姓の系統、出身、役職等について的確かつ重要なヒントを与えてくれているものと思われる（注）。

即ち、忠光の二藤姓は藤原系の出自と考えられる事であり前記の忠氏と「忠」の一字を共有することからは、忠光は藤原一族の一員に列せられる可能性も指摘される。仮に藤原氏の一員とすれば、莊司（預所代）として下向してきた族の者と考えられる訳で、在地名である布施を通称に用いて在地化の傾向を示しているという事実からは、中央より布施莊に赴き預所代としての任及び甲斐国での在住年数が長期間に及んでいた物と考えられる。

第二案は、同じく二藤は藤原氏系であり、忠氏の忠を用いることから擬族姓主従関係に近い関係を有する在地の有力豪族として捉える観点である。忠光は自身の通称を「布施兵衛」としていることが特に注目される。このような在地名に兵衛を付して通称とする事例は忠光は在地の人間として解釈することが一般的であると云える。前記にふれた長期に亘る在年数、大型五輪石塔群の保持、墓碑の他に供養塔における相当な規模の祭祀儀の開催等の条件を考え合わせれば、布施莊周辺一帯に多大な影響力を及ぼす在地有力豪族層としての忠光像が浮かび上がってくる訳で、その可能性は極めて高い確率をもって暗示しているものと云えよう。いずれにせよ、これらの石塔群は布施莊の莊司一族に関わる供養塔、墓碑であることが容易に理解され、中・小の範疇に属すると思われる延慶三年銘・石塔では、印刻の後漆を刻の中に入れ文字をボジ状に施し、さらにその上に金箔を貼る製作工程が看取される。このことからも藤原氏所領の布施莊の預所代としての二藤氏・在地豪族の勢力は、巨大かつ長期に及んだものと考えられ、前記の文書、調査結果から得られた少量の五輪塔部材からは莊司一族の経済力の質の高さと豊かさが垣間みえ、そこからは武力をも併せて保持することも困難なことではなかったものと想定される。このように、中央貴族との直接交渉を持ち、豊かな経済・文化さらに武力をも保有した二藤忠光を筆頭とするその一族の地域周辺に与えた影響力は決して小さくはなかったものと云えよう。（小林）

（注）秋山敬より御教示。

## 第4章 第Ⅱ期の遺構

検出した主たる遺構は大きく3時期に分けられるが、前章での14世紀前半代の歴史的事象を考慮しⅠ期とし、以下便宜的に下層からⅡ期、Ⅲ期、Ⅳ期と呼称する。

### 第1節 Ⅱ期の遺構

ここでは、礎石建物1棟、溝1本、墓5基が検出された。遺物特に該期の五輪石塔の出土量の割には遺構の検出が少ないが、このことはグリッドF23・21、グリッドJ23・21地区ではⅢ期の2号建物の建設時にあわせ造成が行われたことが原因と考えられる。

#### 1号溝（第4図・9図）

グリッドDからグリッドGにかかり、主軸はグリッド27ラインに沿っているが中央部が東に押し出される箇所を除いては、ほぼ直線状に検出された。掘り込み面は、1号建物上面と一致する8層である。北部は未確認で、現状18mが確認され、南端部は27Gラインで先細りとなり消失する。巾65cmの小型なV字溝であるが上部は両サイド共浸食され当初の形態を保っておらず、掘削当時は大きく開いたV字（巾130cm）を形成していたものと思われる。堆積状況は掘削後7層が全面的に10から5cmで覆い、その後6層が溝堆積する。出土遺物の範囲は平面ではF・Gグリッドに限定され、垂直分布は7層上面において全てが溝底から浮いた状態で出土している。

遺物は、大窓1期の端反皿Na720、漆器Na722、土器（皿）Na777、778、壺Na316の一部である。壺Na316は、東側地域で集中して検出されるが、一部は本例同様に破片で2号建物下部・北端、西より2.75m付近で検出されその分布は広範囲に及んでいる。

本溝が1号建物の創建と同時に掘削されたとすると、100年以上かけて7層の土層がゆっくり堆積したことになる。この出土状況は7層上面において壺の破壊期、即ち1号建物の廃棄時を反映したものと思われ、Na316壺は破壊後東地区に意図的に破片群が一括処理廃棄された様相を呈するが本溝や1号建物西部下位に検出されていることは何を意味するのか課題として残る。

#### 1号礎石建物（第4図・8図）

グリッドD22・25、E22・25におさまる1号溝の東方10mに位置する。規模は、現存する礎石間は、東西7間×4間、1間=6尺（約1818mm・1尺=303mm以下同様）であるが、南から2間目は1尺のびて7間を計測し、北側では1尺間で縁が存在したか、間延びしている部分が認められた。

礎石の多くは抜き取られ、南面・1、3、4間、東面・1、2間、西面3、4間、北面・2、5、6、7間、中央の東5間であり、40~30cmの小型石材である。これらの礎石の配置からは、単独1棟の方丈構造を有する大型建物が想定されるが後述の通り礎石抜取りが行われている為、確認された規模以上の可能性も高い、また何らかの附属施設の存在も十分推察される。

上記の結果からは、黒青灰色の水性堆積土上に直に礎石は設置されるが、確認面上に20cm前後の基壇状の盛土が存在した可能性は考慮に値する。

大多数の礎石が抜き取られているがその要因は上層建物の建設によるものであり、座りがよい大型石材あるいは形状の整った材はすべて上層建物の礎石に活用されている。従って残存する礎石は、いずれも自然石で30~40cmの大の比較的小型石材である。この礎石に関して特筆すべき事象としては火災によると思われる加熱を受けた痕跡を多く残している事である。後述する上層建物の礎石では本址より抜き取り再利用している石材にも火熱を受け変色、剥離した痕跡が複数の礎石から認められことからも、そのことを証明付けていいるものと云える。

柱の上位・加工状況は不明であるが、礎石に乗る下位・部分は丸太材に近い形態の材を使用し、礎石上に立てられたものと考えられる。即ち複数の礎石の中心からはずれた周縁部には、火熱を受けた痕跡が共通現象として認められ、その熱作用を受けにいく中央部の立柱箇所には直径20cm前後の柱痕が礎石中央に円形状に観察される。

以上本建物の機能廃止という問題に関しては、上記した礎石の観察及び主屋における建築部材、東地区・遺物群の状態が加熱を受け変質していることから見て火災による被害が及ぼした諸条件が機能廃止への直接要因と断定されるのである。

すなわち礎石中央に残る、熱作用によって生じたと考えられる柱痕の存在は、そのことを強烈に裏付けるものであり、柱痕の周囲は火災から派生する強力な熱風の影響により、柱痕を残した礎石表面には、彈け飛んだものと考えられる剥離痕が各個体に何枚にも重複して看取される。さらに本建物の焼け跡から抜取り転用されたと考えられる南北隅遺構の木材の多くが火災の際に生じた焼痕を残していること、東地区の一画に炭化した木材が集中して出土していることなどからは、機能廃止決定要因である火災被害を強く示唆するものである。

下層建物に伴う遺物群は上層・主屋の建設の際にかたづけられ、使用可能な建築部材は南北隅遺構に認められた様に上層・主屋あるいは付属施設に転用されていったと思われる。残りの使用不能な物質は廃棄された後ガレキ類として土と混合され寺城の整地の際に廃棄されている。このため下層・1号建物に残された遺物は意外と少なく、2次焼成を受けた輸入染付磁器、茶臼、砥石、瀬戸・水滴、端反皿、土器等が散見されるのみであった。

## 第2節 東地区墓群

グリッドC～K、23ライン以東から東側塙までの間を便宜上東地区と呼称した。この地域は後記するが2号建物建築の際に造成を受けたと考えられる地域で、30cm以上に及ぶ土壌層中からは上・下位にかけて多くの遺物接合関係が認められている。下記に示す墓群は造成の際に上部は削平され下部が残存するものであったが、これらの墓は3分類が可能であった。1は、1号墓の土壙に、藏骨器を埋納するもの。2は、長方形の主体部をもち、底部に多量の木炭を敷き詰めるもの、3は基本的に方形土壙であり、木炭を充填し下部に集石を施すものである。このほかにも墓は存在したものと思われるが、墓壇の底部が上位にあるものは削平されすでに消滅したものと思われ、遺跡内における多くの五輪石塔・部材の存在がそれを跡づけている。

### 東1号墓（第14図）

グリッドE19北東寄りに位置し東側塙と重複関係にあり、大部分は削平・破壊を受けている。復元に携る土壙推定規模は長軸91cm×短軸78cm×深さ84cmで、その底部東端に藏骨器が安置されていた。広口壺を用いた藏骨器であり上端はすでに破壊欠損している。埋葬時期は、広口壺・No.317の年代観からは古瀬戸後Ⅳ期に属することから15世紀後半と考えられる。

### 東2号墓（第15図）

グリッドD20におさまるが、一部21ラインにのり1号建物の東4mに位置する。Ⅲ期建物群の建設に伴い上部構造が削平され下部の方形土壙のみが残存する。検出状況は上部の土壙を取り除くと平面的に認められる。この各辺は直線を呈し底部は平坦となり棺を納める目的土壙と想定される。方形土壙のギリギリに棺が納まる規格で掘削されていて、土壙壁西南部には棺の一部と思われる板材が検出された。

土壙内部には多量な炭化米を含み火葬中に生じたと考えられる燃え津の内、木炭のみが搬入された墓の基底部用材として硬く縮めつける様に充填されていた。副葬品等遺物は検出されないが試料炭化米のC14カーボン測定からは1540A.D.(43.2%)～1600A.D.が求められた。本墓の帰属時期は、2号建物建築時に並行して造成されたと考えられる土壙層の下位に認められること、さらに遺構の垂直関係、前記のC14測定からは1号建物と並行するが、その後半代であると断定した。

### 東3号墓（第15図）

グリッドG22中心より南東に位置し、東地区墓群の中では2号墓について上位に存在する。規模は76cm(南北)×77cm(東西)×深さ25cmである。確認時点では、方形プランの中に木炭が硬く縮めつけられ充填して認められたが、やはり検出状況は2号墓同様墓上面と土壙とが分離し易い状態となっていて墓は平面的に確認されて上部構造が造成により削平され墓の下部遺構のみが残った様相を呈している。木炭は平均10cm前後では均一な木炭が充填され、

その下部では拳よりやや大きい礫が平面・方形・断面・皿状に認められた。本墓の帰属時期の、伴出遺物は皆無であるが、本造構の直上を覆う土壤層は2号墓を覆う同一層であること、試料炭化米のC14カーボン測定からは1520 A.D.(55.9%) 1590 A.D.が求められたことから1号建物活動期の後半と断定される。

#### 東4号墓（第15図）

グリッドG22のGライン上やや東寄りに位置し、2号建物建築の際に東側部分の整地を目的とした1号建物の廃棄物を多量に含む混合土を取り除いた後に、平らなプランが現れ、自然堆積層の9層から掘り込んでいるのが看取される。また、この掘り込み面は1号建物と同一面上であると云え、規模は、長軸1m25cm×短軸1m7cm×深さ0.22cmを計測し、4隅が隅丸を呈する長方形に近い形態である。上部は、多量な炭化米を含んだ木炭が粉状に近い状態で5cm前後均一に敷き詰め、それ以下では拳大の礫を土壌内に充填する。遺物は土器No476、477の2点が炭化物に混入して土坑の東北と東南の位置から出土している。土器No476、477は共に器部の中段が膨らむような特徴を示して土器の年代観からは、15世紀後半代が与えられ1号建物に近い年代相を示している。帰属時期は、前記の遺物の年代観と試料炭化米のC14カーボン年代測定結果から1470 A.D.(41.9%) 1520 A.D.が与えられることより1号建物並行期でも前半代15世紀後半~16世紀前半が求められる。

#### 東5号墓（第15図）

グリッドH22の中心より南西よりに位置する。掘り込み面は東4号と同一である。規模は長軸（東西）1.40m×短軸（南北）91cm×深さ15cmの平面梢円、断面皿状を呈する。土壌内下部に枕大の礫が東縁に4固体並んで、規則的に配列されているのが観察される。さらにその上には拳より小さめな小礫が集石状に認められ、小礫の間には木炭が僅かに看取され東4号同様に土壌内部に木炭が充填されていた痕跡を残している。

### 小結

Ⅱ期では、1号礎石建物とそれに伴う幕群と溝1本を検出することができた。ここでは本遺構群の性格と機能を考察する。

1号建物は礎石の抜き取りが行われ残存する礎石の配置からの復元規模は7間×4間が推定されたがそれ以上の可能性も含む大型建物である。出土遺物では、墨書・天文十年銘五輪石塔地輪他多量な五輪石塔部材、木炭と化した宝珠状具、連子窓枠等の寺院関連建築部材、また多量な硯、墨書土器、河原石への墨書き行為等は施設の性格を特定付けるものとして有効と思われる。

これらの遺構、遺物から観て、高度な知識と教養を保持していたことが窺え、このような遺跡空間及び遺物からの読み取り可能な行動様式からは、僧侶による修行、特に写經道場的な活用が想定されるのである。

創建年代であるが、建築物の寸法体系（木割法）としては、古代より柱の太さ～柱間寸法を基準に各部の寸法を決めていく方法が一般的であったが、中世以降繁垂木の場合は垂木間隔を基準とする支割法が確立する。しかし疎垂木の場合は相変わらず柱間（柱太さ）が基準になっている。それぞれの特徴として、支割法では柱間寸法は垂木間隔の倍数になるが必ずしも整数にはならない。一方柱間基準の場合には一般的に柱間寸法が割り切れる数になる。

現代では一般に1間=6尺と考えられているが、古代から中世にかけての単位は、周知のとおり713年の格で唐制となり1尺が29.7cmに相当するなど、1間=6尺でない建築例は多く認められ、古相を呈するほど建築物の1間は6尺より大きい物が多くみられる（6尺3寸～6尺5寸）、1間6尺という寸法が統一される時期は地域差もあるが一般的に室町後期から近世の間と考えられている。これらのこととふまえて、山梨県内寺院修理報告書に記載されている甲斐国における寺院建築の柱間寸法をまとめ以下に示す山梨県内文化財指定建物柱間寸法等一覧表の通りとなる。

山梨県内文化財指定建物柱間寸法等一覧表

社寺名	建物名	沿定	画石	建立年代	根拠	柱行	梁間	構造形式	柱間寸法(尺)	
大善寺 本堂	国宝	勝沼町	弘安9年	1286	前割跡	59.458尺	57.434尺	前行5間・梁間5間、一重、宮神造、繪庇且 梁間3間・梁間4間（前面1間既状）、一重、苦極造、繪庇且 梁板貫（元繪透貫）	10.720～13.000	
長作觀音堂	墨文	小菅村長作				49.45尺	60.23尺	前行3間・梁間4間	計画尺=305.78mm (1.000尺) として、5.3～5.6尺	
勝白寺 本殿	仏殿	山梨市三ヶ所	応永22年	1415	墨書	23.9尺	23.9尺	前行3間・梁間3間、一重、苦極造、繪庇且 梁間3間・梁間4間、一重、苦極造、繪庇且 梁間3間・梁間4間、一重、苦極造、繪庇且	4.320～6.480 (2.160×2～3)	
東光寺 本堂	墨文	甲府市東光寺	室町期			60.1尺	30.05尺	前行3間・梁間4間、一重、苦極造、繪庇且 梁間3間・梁間4間、一重、苦極造、繪庇且	6.01	
雲峰寺 本堂	墨文	甲府市上森坂	室町期			39.976尺	36.82尺	前行5間・梁間5間、一重、切妻造、茅葺 梁間5間・梁間5間、一重、切妻造、茅葺	7.364～10.520 (1.052×7～10)	
瑞沢寺	地藏堂	墨文	甲府市山村	室町末期				前行4間・梁間3間、一重、苦極造、繪板貫（茅葺型）	6.000～9.000	
勝白寺 庫裏	墨文	山梨市三ヶ所	元禄2～6年	1689～1693	寺伝	17.445尺	13.109尺	前行9間半・梁間6間半、一重、切妻造、茅葺	6.03	
雲峰寺	書院	墨文	甲府市上森坂	正徳6年	1716	墨書	48.12尺	30.75尺	前行8間・梁間5間、一重、宮神造、茅葺	6.015

これを観るかぎりでは全国の動向に対応して甲斐の建築物も室町後期から1間6尺に移行し固まっている事が窺え、東光寺、雲峰寺本堂では支削法によっていることが観てとれる。本1号建物は、残存する礎石が少なく、一部礎石間が伸びていて7尺と考えられる箇所も認められるが、ほぼ1間=6尺で計画されていることから室町後期以降の様相が捉えられる。

また伴出する土器の年代観の詳細は後章で述べるが、武田氏館跡出土土器との共通点が認められ15世紀後半が考えられ、さらには陶磁器類に関しては古瀬戸、瀬戸・美濃関連遺物及び輸入磁器はいずれも15世紀後半から16世紀前半に限定される。

さらに実年代資料としては、天文十年銘地輪の存在と本建物と同レベルからの掘り込みが認められる石組み遺構（1号墓）があり、その底部からは多量の木炭とともに炭化米が検出された。試料としては、炭化米を数点無作為に選出し炭素14年代測定を行った結果、1470A.D—1520A.D年があたえられた。以上の結果は全て15世紀後半周辺に集中していることが判明した訳で、これらの結果を考え合わせると創建年代は、室町時代後半の15世紀後半以前に特定づけられる。

廃絶期については後節でも述べるが、2号建物・縁石に用いられている五輪石塔（地輪）は1号建物に伴う墓と考えられるもので、墨書紀年銘から天文十年（西暦1511年）に造墓にされたことが理解される。従ってその時点では展開期にあたり当然廃絶はそれ以降のこととなる。この要因は火葬であることが明確となっていて、2号建物が規模、建物軸等からは1号建物のコピー的要素が垣間見られ、転用建築材の状態、2号建物の建設時期から観ても短期間に上層建物が建設されたものと解釈される訳で、1号建物の廃棄時は限定され、新しく考えても16世紀第3四半期以前が妥当かとされる。

東地区における土塙墓群について3・4・5号を墓と認定した根拠は2号墓の存在がある。棺埋納を目的とする施設では長方形土塙・底部を平坦に造出という特徴の他に、下部に木炭を敷くという行為が顕著である。この木炭が土塙に用いられている内容は火葬墓を想定した場合であるが、その際に生じる燃え津の内、木炭のみを敲逆して用いて、炭化米を多量に含む事、さらにそれらを土塙内部に硬く敷き詰め充填し施設の一部として機能させている事などが一致することである。さらにその下部には、小砾をもじいた集石があり底部構造としての定式化が認められる。現状での規模・深度、特に深度は10から20cm前後が計測されたのみであり、これらは墓としての構造的要件を満たすものではなく認定までは到底及ぶものではないが、盛り土や石塔を含んだ上部構造を作り造墓活動が行われたものと思われる。（小林・北川洋）

## 第5章 III期の遺構

該期の遺構群は中世以降に一般的に認められる伽藍配置の範疇に属するものと考える。即ち、方丈形式を有する主屋を中心に西附属屋、東北附属屋、東附屬屋、東南池の端遺構、南西隅遺構等が幅較する。さらに、それらは北・及び南の大半では未調査となつたが、建物群は方形状の塙により取り囲まれていることが判明し、多くの寺院関連の部材、仏具関連遺物の出土を観た事により寺院関連遺跡として跡づけられ、その敷地のほぼ全容を明らかにすることが出来たものと考える。

### 第1節 III期の遺構

#### 東地区の造成と出土状況（第5図）

グリッドD I 21~24の地区はIII期建物群の建築の際に造成を行っている箇所である（以後・東造成地区と呼称）。単に窪地に土砂を埋めるというものではなく、9層の基盤まで削平を行い順次水平に盛り土を行い締めながら作業が行われている、従って各層の上面は特に硬く上部層との境目には上部からの沈殿物とされる腐食した黒色土壤が形成されている。

出土遺物は基本的にII期の1号建物に伴う遺物群である。3~8層がIII期造成層であり、祖母壇茶壺、常滑壺は3層から8層にかけて垂直接合関係を示してこのことを裏付けて、2層はそれ以降の自然体積層ということになる。またIII期における地表は3層上面が該当する。東地区造成地は本遺跡内での遺物出土量が最も多い地区であり、ここでの遺物垂直分布は、標高252、4mを0mとして-35cm前後にピークが存在するが他は全面に散漫に認められる（全体の出土平面位置については観察表参照）。グリッドG・Fラインを中心にやや密度が濃くなっているが、その大部分はIII期の地表であり平坦面に出土した胡桃、箸の類である。

#### 塙（第6図、図版第6）

規模は、東西55.82m（内側55、3m）×南北36m以上を計測する。形状は方形区画に近い様相を呈するものと考えられるが、敷地の南部溝の東半分と北部は路線範囲外もしくは安全地帯確保の為未調査となり、全容解明には至らず主要な出入り口は特定されない。

東側では、ほぼ直線に近い状態で南端部は、巾3.9m深さ1.1mの梢円を呈する池状となる。その東南端部では、南側を流れる溝との間を樋によって連結している。池の排水は樋の北側に1m未溝の排水路が設けられ、東方に流れ出しているものと思われる。附属施設としては、北側部分Gラインと南端部池部に端受と考えられる石組が認められる。西側では、小刻みに蛇行して直進する形態であり、巾は2.25~1.96mであり、確認時の深さは79~64cmと東塙よりやや浅く確認される。調査区南西端では、直に折れ、8mほど進んだ箇所でさらに一段折れ敷地の中央部まで溝は伸びる事が確認された。従って門の位置の確認箇所は中央部以東が想定される。また溝の南への拡張は、北南部に位置する南西隅遺構を意識した掘削作業の基に体現されたものと考える。

#### 主屋（第6図、10図）

グリッドD23、C27、F24、F27の範囲に収まる。基壇の規模は、東西約18m×南北13mを有する大型建物である。中心部は、砂利を主体とする土壙層を版築に近い工法で築き、周囲より平均30cm程度盛り上げ基壇を形成している。壇上には礎石を樹状に配するが端部には縁束受の礎石が建物西面南端1間から南全面、東面南端1間、北東面2間に設置する。外側では西側を除く南・北・東3面には、雨落ち溝・巾50cm~60cmが基壇端部に接して回る（第10図）。

礎石は加工途中と思われる一例を除き30cm~70cm大の自然石をそのまま利用して、東西9間×南北6間がほぼ均一に整然と配置されている。また礎石上には芯墨が一部残り、床束も9箇所残っているのが認められたが、いずれも僅かに移動していて各礎石間を正確に計測することは出来なかった。しかし実測図に縦横1818mmのグリッドを重ねると僅かにバラツキはあるものの、柱間1間=6尺（1尺=303mm）が計画されていたことが看取される。

南側の正面部分に当たる一列目の礎石は、見栄えが良く比較的座りが良い大型品が意図的にもちいられており60~70cmの石材が配置される。また、基壇内部の礎石上には床東が9カ所で直立して検出された（第10図）。使用石材の多くは加熱を受けた痕跡が認められることより、第Ⅱ期1号礎石建物からの抜き取りによる再利用品であることが伺える。縁束受けの礎石には、規格され統一された20cm×10cmの小型方形・切石が一様に用いられ、南側西5間に化粧加工が施された縁束が検出された（図版5左中段）。

東面中央2間には、側柱より2尺2寸5分離れて礎石が並ぶ。さらに、東前南より1間半には東へ張り出して、側柱から2尺2寸5分のところから6尺×9尺に礎石が残る。一方、西面も南より2間目、側柱より2尺離れて一対の礎石が残る。西面の北側2間分ほどに縁石状の石列が残り、それと並行するようにさらに西へ13尺~14尺の位置にも縁石が残る。

主屋の間取りについては礎石の寸法に大小のバラツキが認められることは既に記した。この内、小振りな礎石上に大引き受けの床東が残存していることが確認された。床東が残るということは、通常部屋の中で柱を用いない箇所であり、礎石の大小ともよく符合している。床東が原位置を保っているものと仮定し、礎石の大小を加味して観ると、柱列（壁）の位置が理解され、おおよその間取り即ち、横4列8間取りの前面に入側のつく禪宗系方丈型本堂（客殿形式）が想定可能なものとなる。また、若干の疑問の余地も残るが、仏間に当たる部分の中央には半間間の礎石が位置し須彌壇を置くための床の補強として考えられなくもない。東前面の部屋の内部には、石組が施行され、全体で約1畳大を呈し、西側半分では4カ所に配した支柱石、東半分は小児頭大の襍の敷き詰が認められる。

上部構造については、情報量が少なく推測の域を出ないが、屋根は、遺跡より屋根瓦の出土が皆無であることから、板葺きあるいは茅葺きと考えるのが妥当であろう。床の高さは、床東の長さから2尺から3尺程度が考えられる。このことは近世のものと比べると比較的低いものとなっている。

#### 西附屬屋（第8図）

主屋の西面から、2間目に下屋柱を支えるように一対の礎石が施され、その延長上から、ほぼ直角に鍵の手の様に南へ伸びる礎石造構とそれを囲む竹列が検出された（第8図：図版第5左下段）。さらにそれらを含んで長方形に竹の列が並び、それに合わせたと思われる掘立柱のピットと柱根が一部に検出された。外郭の竹列は3間×5間を計測するが、5間のうち中3間は1間半（9尺）×2に割られている。

礎石列は、東西に3列、5尺間隔で配置されるが、南北の間隔は不揃いな部分が認められる。また、石材については河原石、五輪石塔の部材が用いられ、全体的に容量が小さく不安定で揃いも悪い。転ばし根太（大引き）を受け、低く床を張った構造が想定される。いずれにせよ竹列配置の主目的は、掘っ立て柱や壁の足下を隠すものと推定される。残存する柱根は、4~5寸の断面・八角形に加工された材を用い、ピット上端では周囲に押さえの石組が残存している。上部構造は、主屋との兼ね合いを考慮すれば茅葺か板葺きの比較的簡素な建物であったことが伺える。

主屋とのつなぎ部分については、回廊状に床がつながっていたかは不明であるが、回廊上には屋根がかかり主屋まで延び、下屋柱とみた一対の礎石はその端と観ることも出来る。しかし、屋根はなく床だけ、また回廊ではなく全く別棟として立っていた可能性もある（復元立面図：参照）。

本建物の性格については、延慶三年銘のある地輪が転用され、礎石群のうち主屋への連続部分を除くと長方形部分のはば中央に据え付けられ、他の礎石には大きさ等にバラツキがあり、据え方も浅いのに対し、この礎石は深く慎重かつ丁寧に据えられている感がある。これらのことから、転用前の五輪塔（被葬者）に対する何らかの祭祀的な意味が込められているとも考えられる。この場合寝殿形式における中門廊的なものというより、近世以降に多く見られる位牌堂に近いような建物であった可能性が高い。

#### 東北附屬屋（第12図）

主屋東面・中央2間に下屋柱状の礎石が3カ所施工され、それと並ぶように柱穴が確認された。22尺×17.39尺×17.5尺の範囲で、柱間は一定しないが、梁間（南北）6尺×2、桁行（東西）8尺+7尺×2（+7尺×2+3尺）で下屋が北側に3.5尺、南側に2尺張り出しているものと思われる。また中央より西南寄りには2カ所の

石組が看取された。その一つの中心よりのものは暖房装置の基礎部分として想定され加熱の痕跡を有しないもので、上部に拳大の小石を15cm程度集石し、下部に人頭大の河原石を敷くという2重構造を有する方形集石（長軸99×87cm×深さ34cm）であった（第13図左下段）。西南端のものは人頭大の礫20個前後が長方形状に上面がほぼ平坦に整えられ整然と配列されているのが確認された。

上部構造は、茅葺、板葺の建物が想定され、主屋とは主軸が若干ずれるが軒が重なるように立っていたものと考えられる。

#### 東附屬屋（第12図）

主屋の東面南よりの張り出し部分に続くよう東南方向に柱穴と柱根が検出された。桁行（南北）6尺×5、梁間（東西）は中央に7.5尺×2とその両側に6尺、さらに東側には3尺の下屋が付くと考えられる。南側にもう1間あるとも考えられる。床組等も全く不明だが、位置的には庫裏に相当するものとして考えられる。桁行5間の内南2間は土間だったと考えられる。上部構造は、茅葺き、もしくは板葺きが想定される。

#### 主屋・東面張出と東附屬屋（第6図）

主屋の4面に回る縁は当初からのものと考えると、それより大きく出ている西面南より2間目と東面中央の2間も、周囲の溝の残り具合からみて、当初から存在したものと考えられる。一方東面南端の1間半は、縁東石と重複してあることや溝が乱れることなどから、後に付け加えられたものと考えられる。

しかし、主屋、東北附屬屋、との位置関係も不自然で近すぎるごとや柱筋がずれていることなどから、縁は当初から東へ張り出していたとしても、東北附屬屋は、東附屬屋よりも遅れて建てられたとも考えられる。



西附屬屋・主屋・東附屬屋正面復元図

#### 東南池の端遺構（第12図）

敷地東南隅に池状の遺構が存在するが、その西半を跨いで位置する。規模は、柱間2間×4間（6尺×11尺）で礎石が配されている。構造は、柱間が小さいこと池の上に存在することなどから縁台が想定されるが、上屋が付けられたとしても釣殿のような簡易なものが考えられる。

#### 南北隅遺構（第6図）

塹に閉まれた敷地の南北隅付近に位置する。下部には基礎状に石列が並び上部は土台より床板が10cmほど張り出す舞台（縁台）状の木組が看取され、四隅には柱が立って簡易な屋根を支えた可能性も考えられる。また土台に乗る枘穴や板の切り欠きなどから、手すりのようなもの的存在が窺える。規模は5尺×12尺である。東北隅の部分は消失しているが、西側の土台、縦横の床地下と一部床板が張られた状態であり、火災による痕跡が複数例の材に認められ、下位建物からの転用品であることが推知される。南北隅は、礎石ではなく杭状の木材が深く入っていて上部構造を支えているが、敷地内の最南端の低位置にあたり、さらに塹に近いなど地盤が軟弱であることが起因しているものと思われる。

## 小結

以上、Ⅲ期における建物群及び遺構の調査結果を記るしてきた訳であるが、本遺構の年代を決定付ける考古資料は、廃絶時において組織的に執り行われた事が跡付けられるように着実かつ手際よい片付け作業がなされたものと考えられ、その結果資料的には豊富とは云えないのが現状であり遺物からの類推可能な資料は、東北側で縁石に使用された地輪と廃棄後、冠水により上位から緩やかに運ばれた砂利等により埋没にバックされそこに含まれる僅かな出土遺物に限定されている。

しかし、建物群を建設する際に直接あるいは間接的に重複関係にある墓群の炭化物、当時の地表面と考えられる木枝等の試料、さらに検出された遺構・建物群と現存する中世所産の建物との比較検討等による方法を組み合わせることが時期確定に最も有効な手法となるものと考える。以下に試料を提示し検討を加えるが、紀年銘とC14測定は実年代の手懸かりとして、1・2号建物の比較検証は建て替に及ぶまでの期間の長短の検証という側面から試みることとする。

主屋の年代を考える手懸かりの中で確実に年代を示す資料は、既に上記で触れている2号建物・北側縁石に再利用されている1号建物の展開期に造墓されたと考えられる天文十年と銘記されている五輪石塔・部材の地輪である。それを転用しているわけであるから、それ以降であることは明白である。

主屋の展開期を示す実年代資料として、東地区における遺構の展開期である地表面と考えられる腐食土壌の上端面において検出された枝木の伐採・試料がある。C14年代測定による結果では、C14・1520—1590年が確認され、ほぼ上記の年代を補完するものとなっている。

東地区は、主屋建築に伴い造成された地区でありそのことは既に触れたが、残存する幕がいずれも下底部であることから墓及び記念碑が建てられ一部墓域を占めていたことは想像に難くない。これら墓群の下部構造まで削平し造成に及んだ時期を建設時期として見立てることが可能である。

カーボンC14の測定結果東1号墓 C14・1520—1590年、東2号墓 C14・1529—1580年を示す遺構を切り壠す行為が確認された事例でその時期は限定される。

次に主屋を含む建物群は、1号建物の火災により機能が停止した後、造成を行な建造されるわけであるが、その時間は比較的短期の内に建造がなされたことは既に述べた。その根拠の一つとして上げられる例として東附属屋との連絡口に用いられた1号建物からの転用材（大引）の存在がある。表面は斑状に火災による炭化が認められる物で、材の表面における加工痕は顯著に認められ長期に及ぶ野ざらし状態を免れた事を表面・加工痕は物語っていること、さらに大引の下部には束が使用されるがそれも前代の柱頭部を切断し束として利用した事が理解され、そこにも腐食した痕跡が認められない等である。

また1号建物と2号建物（主屋）との比較において規模、規格、位置関係を観ると、いずれも柱間計画、寸法が六尺（約1818mm）と考えられること、建物の方位（軸線）が一致していること、建物規模が幾分大型化しているか同程度と考えられることが指摘できる。位置関連に注目すると塚と附属屋を含めた全体配置計画から決定付けられたものと考えられるが、重なった部分で観ると1号建物の柱間六尺四方のほぼ中央に2号建物の礎石がくるように配置されている。このことから、1号建物の礎石を抜き取りながら、2号建物の基礎を造成していった状況をも想定されるのである。上記の二項からは、1号建物廃棄からは短期間に内に建造計画が決定され、それは1号建物の再建として意義付けられる。

以上、Ⅲ期の建物群の再建と廃棄年代は16世紀後半から終末の間に与えられた。再建に当たって、現実的に当面の問題として浮かび上がるがその費用・財の裏付けである。本地域は古くは中央貴族の莊園として、時代が下がるにつれ、甲斐・武田氏による寄進、武田系布施氏の勃興等に觀られる様に、一族の影響下に置かれたことは周知とされその庇護下にあったことが推知される。

西暦1573年は、武田信玄の没年にあたりそれ以降付近は経済的、政情にも不安定な状況が発生したものと考えられ、このような火災により直ぐ再建計画がなされ実行される余裕は、1541年以後～1573年前の間に、それ以後より

財力及び政情面から観て妥当と考えた。

建物群の廃棄時期の下限は、西地区における附属屋と墓群との重複関係からは、西地区墓群はC14・1520 A D—C14・1590 A D・1580 A Dの値を示し附属屋の層位的に上位を占めていることから、再建・推定年代の（1541年～1573年）から1590年が与えられる。

再建前では、1号建物の1棟と墓群であったのに対し再建後は方形の塀を掘削し東南隅には池を伴う庭園をも配し、さらに建造物は主屋を中心両側に附属屋を設けるなど前期と比較すると大がかりな中世館として見立てたものとなっていて、この時点では半恒久的な活動拠点を意図した事が窺える。しかし、長くて20年という短期の内に機能が停止され建築部材やその他物質等が運びだされるという強引とも捉えられる状況は内的要因より、外的要因が強く働いた結果として捉えたい。即ち再建推定年代（1541～1573）とC14の最新値1590年の中には武田氏滅亡という重大項目が存在する。武田の庇護の下に15世紀後半から確実に存続し、後半では中世館に見立てた寺院は、西方より進行する織田軍の標的となり得た条件を揃えていたことが窺え、直接的な破壊行為は免れたものの建築部材は転用材として運び出され寺院の消滅が確定した。その時期は武田勝頼の死亡1582年の直後に置きたい。

尚、弘治三年以前・以降の釜無川本流についてであるが、地理学には門外であり口を挟む余地はないが、本流bについては本遺跡の觀点からひととこ付け加えておきたい。以前・本流と以後・本流Aは数キロの差は存在するが、水流の勢いではほぼ同一方向の水路を形成して小井川周辺を遠巻きに流れ笛吹川と合流している。この事実と、本遺跡を含む周辺地域との関係は無縁でないと考える。即ち平安から中世にかけての遺跡が群集する（今村2003～2006）周辺一帯は、集落と水田、畑でありそこには大きな水害による痕跡は認められていないことから周辺一帯は微高地となって周辺より高い位置に存在していたものと理解され、以東を流れる本流Aの流路は否定される。しかし、本流bについては本遺跡の調査により流路の痕跡は認められないことが判明した。弘治三年（1557）以降としての、bの流路が思案されているが、遺跡（寺院）は1520から1590年前後まで存続しそれ以後でも大きな流路はなく周囲からの冠水により微砂の堆積が発達となった後も観察されている。さらに火災からの再建工事がなされ（1541年～1573年・の後半）寺院の規模が拡大されている事実からは、遺跡の住人達の間における本流bに対する危機感は現代のように治水工事が発達していなかった当時においても感じとれる動きがなく、殆ど存在しないことが読み取れ、仮にbの存在を想定しても極小規模の小河川程度のものが、現代の本流に近い位置に想定されるのである。

（小林・北川）

## 第6章 IV期の遺構

1号建物廃棄後、冠水が要因と考えられる細砂層が遺跡内全面を覆うように堆積する。それを切るように5基の墓が造墓される。遺跡内における時間的関係は、1号建物より新しく、下限はC14年代測定によりC14・1520 A D—C14・1590 A D・1580 A Dの測定結果より下限をとると17世紀初頭前後が与えられる。西1～3号墓は西附属屋と同一軸で東部に一直線でE～G28に検出され、西4・5号墓は3号墓の南東7m、G28南端・東寄りに検出された。

### 第1節 西地区墓

#### 西1号墓（第14図）

グリッドE28南端や東寄りに位置する。上部は削平されるが規模、長軸（東西）52cm×短軸41cm×深さ25cm、形状は方形に近い不正形で底部鍋底を呈する土塙である。内部は、炭化米を多量に含んだ黒褐色から黄灰色の木炭混じりの灰が層をなして充填され、底部には小枝が數十本、散かれているのが確認された。土塙内に遺物は検出されなかつたが土塙外壁付近で土器1点が検出された。年代は、出土炭化米のC14カーボン測定結果ではC14・1520 A D（55・5%）C14・1590 A Dが与えられた。

#### 西2号墓（第14図）

グリッドE28のEライン上、やや東寄りに位置する。上部はすでに削平され、現状は長軸（東西）58cm×短軸56cm×深さ24cm、形状は円形に近い不正形で底部鍋底を呈する土塚である。土塚内では多量な炭化米を含んだ木炭と灰が充填され下部ではそれらにシルト質が混合する。検出面において木挽1点検出された。木炭及び灰等を取り除くと、底部には火葬の際に使用されたであろう燃え滓の薪が組んで検出された。

#### 西3号墓（第14図）

グリッドG28の中央よりやや北寄りに位置する。上部はすでに削平され、現状は長軸（東西）55cm×短軸43cm×深さ19cm、形状は円形に近い不正形で底部鍋底を呈する土塚である。土塚内では多量な炭化米を含んだ木炭と灰が充填され下部ではそれらにシルト質が混合する。検出面において木挽1点検出された。木炭及び灰等を取り除くと、底部には火葬の際に使用されたであろう燃え滓の薪が組んで検出された。

#### 西4号墓（第14図）

グリッドG28の南東寄りに位置し5号墓の東40cmに位置する。上部はすでに削平され、現状は長軸（東西）61cm×短軸45cm×深さ11cm、形状は方形に近い不正形で底部は平坦となる土塚である。底部より5cm程度浮上して拳大の小礫が僅かに隙間を残しながら全面に認められる。遺物及び炭化物等は検出されない。

#### 西5号墓（第14図）

グリッドG28の南東寄りに位置し4号墓の西40cmに位置する。上部はすでに削平され、現状での最下部の土塚は長軸（南北）58cm×短軸56cm×深さ19cm、形状は梢円形に近い底部鍋底を呈する土塚である。底部には杉の枝と思われる枝木を全面に敷いてその上に疊をまばらに押さえとして用い、さらにその上部には小兎頭大の疊及び燃え滓の薪を用い平坦面を作出しているのが確認された。遺物は、土器Na3081点が伴出している。

## 第2節 墓の構造

墓の上部構造は、東地区に続き西地区の墓においても目的は不明であるが削平を受け、確認された部分は下部の構造に限定されたが、東地区と西地区においては僅かな差異が認められる。東地区の2、3、4、5号での墓の内部は硬く締めつけられ、木炭が充填され下部構造の疊敷に到達する構造となっているが、西地区では木炭は認められるものの灰、燃え滓等が交互に認められ内部の締めつけはほとんど認められず軟弱なものとなっていた。また最下部は疊敷ではなく火葬の際の燃え滓である薪を底部に組んだもの西2、3号や木枝を敷設するものが検出されている。いずれも、中世の通常墓として認識されつつある火葬がなされた墓であり、共通事項としては、木炭の中には多量の炭化米が含まれている。上部は五輪石塔の存在が推定されるが、東地区と西地区との間で、僅かな時間内での墓内部の構造の変容が認められる要因について今後の検討課題とする。（小林・北川）

## 第7章 出土遺物

本遺跡の最終ステージは、中世館に見立て塹を伴う寺院跡である。一般の遺跡に認められる遺物の出土状況と異なり、再建に伴う造成により遺物の大半は移動を余儀なくされ、東地区の造成地区に集中する。統いて西附属屋周辺に古期の遺物が集中し、廃寺となった後は礎石建物東南部、南部端中央、東北地区に集中して出土する。

五輪塔：Ⅰ期の関連遺物は既に前章で述べているのでⅢ期以前、主にⅡ期に造立されたものを扱う。

空風輪（第36図）表面の摩滅が著しく風の下部は不明瞭であり形状の正確な把握は困難であるといえる。総計4点の出土である。4例の巾と高さの比率は、1.5～1.7であり15世紀後半以降の数値を示している。

火輪（第36・37・38図）総計24点が出土している。屋だるみは、0.7を最小として0.16の数値を示し軒口の外開きは0.8から0.9を中心とした1390～1500年代を示している。

水輪（第38・39・40図）総計25点が出土している。最大は巾24.6cmのNo.66、最小は巾17.4cmのNo.50である。上巾を1とした最大幅の割合では1.5以上を占める割合が多数を占める傾向にあり球体の中央部が突出するものである。数値の大きいものはNo.49の2.364で最も大きくNo.65の1.255が最も小さい。室町中期から戦国期では、1.5以上となるという傾向に対応し、本遺跡のⅡ期の編年観と合致する。

地輪（第40・41・42・43・44図）総計39点が出土している。最大はNo.4の横29.8×巾28.5cm、最小はNo.80の14.7×12.3cmであり大半は25～15cmに収まり規格・大量生産されたものと考えられる。巾に対する高さの割合では時代が下がるにしたがって高くなると云われる。ここでは7例を除いた残り数値は0.6～0.8におさまり、0.7～0.8に集中する。応永期以降戦国期では0.8となる傾向といわれ、その数値はほぼ一致するものと云えよう。

宝鏡印塔（第44・45図）笠蓋（112、113）。石材は安山岩のタイプである。塔身（108、109、110）、石材は安山岩である。四面には墨書きあるいは印刻により梵字が認められる。基礎（111）、安山岩である。上面には孔があり、底部では大きく抉る様な加工痕が認められ、煤の付着が確認された。

### 石製品

茶臼（第35図 11、12、13、14、15）上白11は摺り目9条が認められる。13とセットの可能性が高い。下白12は摺り目7～9条単位の8分割である。下白13は摺り目12条単位である。この下白2点は、鉗を含めて一石から彫り出されている。

粉挽臼（第35図 14、15）15上臼、14下臼である。

鉢（第59図）2点が看取された。片口を呈し三脚を有する一石造りの石鉢456である。巾35cm、高さ11.9cmを計測する。安山岩。457は口縁部推定径35.6cmの大型製品で石材は安山岩。

硯：12点の出土があり多くは被災による加熱を受けている。

743、744は1号建物下部より出土するが、残り全ては東地区造成区である。形態は、長方形408、410、561、601、602、603、743、744、頭部ドーム409、撥形407、破片562、877である。法量は、巾7.5cm前後561、601、巾4.5cm前後602、743、744、巾3.5～4cm407、408、409、410、562、603、877であり写経用の小型品が最も多く、中には円弧文で水流と見立てた中に鯉を泳がした彫刻を施すものも認められる561。

砥石 411～416、459、563～567、604～611、842、844、846で、総計23点が出土した。石材は、凝灰岩もしくは粘

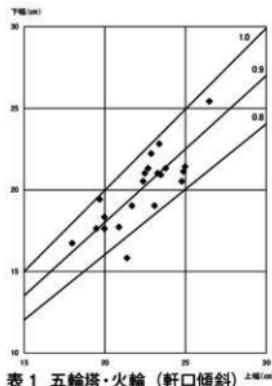


表1 五輪塔・火輪（軒口傾斜）

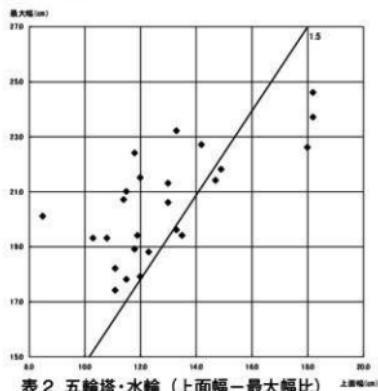


表2 五輪塔・水輪（上面幅-最大幅比）

板岩を使用している。844はグリッドE—2の8西附属屋付近から出土するが、他は拠点を暗示するかのように東地区の造成地に集中する。

一般的にNo.563の短冊形を原型とするものと思われるが、使用頻度が高く原型をとどめるものは少ない。564は角柱で、砥石特有の磨擦痕の他に、正面・側面・背面には、縦軸にはば並行に無数の条痕が看取られるが、使用によるものか製作時のものであるのか不明である。しかし磨擦痕は正面1面であり、形態から察するに他の砥石とは使用目的が異なる事が明白である。

経石？：9、10、843が看取された。9砂岩、10花崗岩で共に20cm大の河原石に恐らく経文が墨書きされたものと推察されるものである。文字は解読不能。843は8.2×3.3cm花崗岩に墨書きで経文の一部が認められるものである。

かくらさん軸受：綱を引っ張るロクロの軸受けと考えられている（大輪寺跡遺跡1990）。ほぼ球形に近い河原石に孔・深さ13cmが認められる。孔は上部で垂直に下半部では湾曲して丸底となる。680は口径15.5cm高さ、15.7cm、878口径16.9cm高さ17.3cmで石材は安山岩である。

建築部材：床梁（土台）888、889、大引887、根太884、886は、いずれも南西隅構造の床組部材で、一部に床板が釘打ちされた状態で検出された。東753、754、梁881は2号建物（主屋）東南に張り出した礎石上に組み込まれた状態で検出された。東753、754は2段ほどの仕口を持ち、柱頭部を切断・転用した物と考えられるが、渡り廊下部分の手すり受柱の為に施された仕口とも考えられる。縁東751、床東752・755～764は、2号建物（主屋）の礎石上に立った状態で検出された。連子窓枠883は、深さ15mmの連子子が並ぶ、上枠または下枠である。鶴居885は深さ15mmの溝が突き止めにされ、玄関大戸のような片引き戸の鶴居と考えられる。火災により大部分は炭化している。

木製品814の西1号幕副葬品以外はすべてグリッド出土で東地区が多い。

宝珠？：（第58図 434）炭化状態で、球状の付け根部分に一部旧表面が残る。須彌壇あるいは建物の高欄部分など仏教関連遺物と思われるが詳細は不明な部分が多い。

#### 木製品

切趾：431、613、617、618 握り鉢の握り目あるいは底に詰まったものを取るための道具と云われる。厚さ2mm前後の薄板を素材として、ナイフの形状をまねたもの、櫂状に線条を施したものがある。長さは6.7cm～11cmを計測する。

杓子：569、570、572 569はやや長めの円形を呈し、内面・赤漆、外面・黒漆が施される。飯を盛る部分は緩やかな溝みが認められる。570は平面が玉葱形を呈する大型なものである。内面・赤漆、外面・黒漆が施される。572は、断面平坦な材を用いている。先端部は丸みを設け主部から柄への移行部分は相対的な円弧の加工が認められる。漆は認められない。

漆器：319、320、321、368、513、514、796、797、814、866で外面に黒漆後朱塗りの文様を施す。796は大型で計13cm、高台4cmを計測する。321、322は底部には戊子の銘がある。814は西1号幕の副葬である。出土品の多くは炭化したもののが存在する。出土状況は、東地区では造成による一括廃棄、西地区では、墓を除くと冠水流の作用が看取され様相が異なる。

箸：総数304点の内、本報告には紙面の関係から66点を意図的に掲載するにとどめた。内容は、一方の端のみを細かく削られた片口箸、両端ともに削られた両口箸、同じ太さの寸胴箸の3種が検出された。特殊例としては648、649の東地区で近接して出土した、形態及び寸法等が近似し一対と考えられる黒漆が施されたもの、また、中間が黒漆、両端末においては赤漆の鮮やかな色彩が施される儀礼用箸と思われる674が検出された。また、578のように巾0.9×厚0.9cm×長30.8cmの大型製品も認められる。

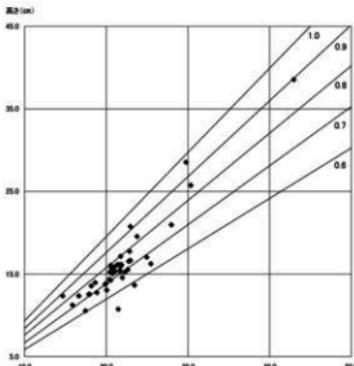


表3 五輪塔・地輪（横幅-高さ比）

鞘？869：鞘としたが上部には数mmの小孔が認められ縫等に掛られる飾りの一種かと考えられ、鞘の部分に飾り金具？等が仕込まれていたものと觀ることができる。

玩具：430、射的を意図したものと考えられ、ほぼ円形である。墨書で中心に点が描かれ同心円状に円が3重描かれ、中心には矢が刺さった状態が描かれる。

輸入陶磁器：碗、皿が出土している。編年の位置は15世紀後半が与えられ被災による二次焼成が認められる。

染付碗547、555は2点共に胴部は直線的に少し開きながら、直行する口縁部を有する形態であり染付碗D類の範疇に属する。547外面は唐草文が認められ内面は一重巻である。また焼き接ぎには漆が使用され古式の技法が顯著である。555は被災によると考えられる2次焼成を受け全面に気泡が認められる。1号礎石建物下部から出土している。染付皿545、556、721は高台をもつ端反皿であり、文様には牡丹唐草が手書きで施文される。口径9~12cm前後を計測する染付皿B1類（小野1982年）に属する。

吉瀬戸：祖母娘茶壺316は破片であるが復元可能であった。口縁部は玉縁状、頸部で内傾し、肩部に横耳が四方に貼り付けられ鉄軸が顯著であり吉瀬戸IV期古に属する。出土地点は、1号建物下部、1号溝に各1点出土した他は全て東地区造成地でありレベルは上位～下位に観られる。

鉢皿552は摺り目をつける際斜めに削り込み、一定方向に鋭角の稜を持たせる意図が顯著である。543は施状工具により線引き状の沈線が集合する。共に吉瀬戸IV期古と考える。

瓶子317は上部欠損する。1号墓の藏骨器で吉瀬戸IV期古である。鉄軸が顯著であり見込みには胎土目痕が3点認められる。天目はいずれも小型破片で鉄軸が顯著である。中碗310、815、碗310である。水滴312は、口径2cm、高さ3、1cmの小型品で鉄軸が顯著であり、小瀬戸IV期古に属する。

瀬戸美濃：端反皿として分類される311、313、376、377、379、382、386、541、549~551、792、812、839がある。見込みには印花文が顯著である。

反皿315は、口縁は指による摘み痕が8カ所認められ、見込みに印花文が施される。

#### 金属製品

刀子594、595、683、684は、中央よりやや基部寄りに闊を設け片刃の刃部と茎に分かれる形態であり長さ22.3cm、幅1.3cm前後を計測する。寸法形態が近似していることから規格品としての性格が与えられる。

鉄鍔444は、五角形の鍔身3cmを有し、茎5cmを計測する計13cmの鉄鍔である。

鉄製火箸は、397寸法17.1×0.6cm、455、寸法21.8cm×0.4cmで形態もよくて規格品と考えられる。

鉄釘400、403、404、451、597、598、685、686、687、750、848、849は断面四角を呈し頭部は折り曲げて造られている。

鍔は、619、396、443、445、452、453、454、619の総計8点の出土をみた。619は木製の柄が残存するが残りは總先のみで木製柄は消失している。

毛抜442は、ほぼ完形である。鉄製で対照的にU字に折り曲げて造られる。

銭：（第48図～51図）上部からの混入品3点（288一銭、289摩滅不明、寛永通宝1）以外は全て渡来銭である。固まりで出土した例は、162~188の東南地区（G22）と東北地区（F22）があり、他は単独出土である。表4では、鑄造の古い順に示し、表5では数量と時代順の関連を示してある。

骨格類猪牙 鹿角334、436、436、438、588、589、691の計7点で、二股の上部で切断588、二股の直上438、394、先端が切断され付け根まで残存する436がある。いずれも装飾品の部材と思われる。

土器（カワラケ）（第52図）本遺跡の土器は、皿を主体とし三足付碗である。

皿：総数218点を図示した。粗い胎土に金雲母が目立ち、焼成は良好であると云える。また使用による痕跡とは異なる被災により二次焼成を受けた土器の量は少なくない。機能は口縁部から胴部にかけて煤の付着が認められる灯明皿、また付着の認められない例は酒杯等の食器としての用途が与えられている。本遺跡出土の全ての土器製作に関する基本的な工程はロクロ成形から回転を伴うナデ調整、回転糸切を基盤とし、形態は皿という器形の制約で底部か

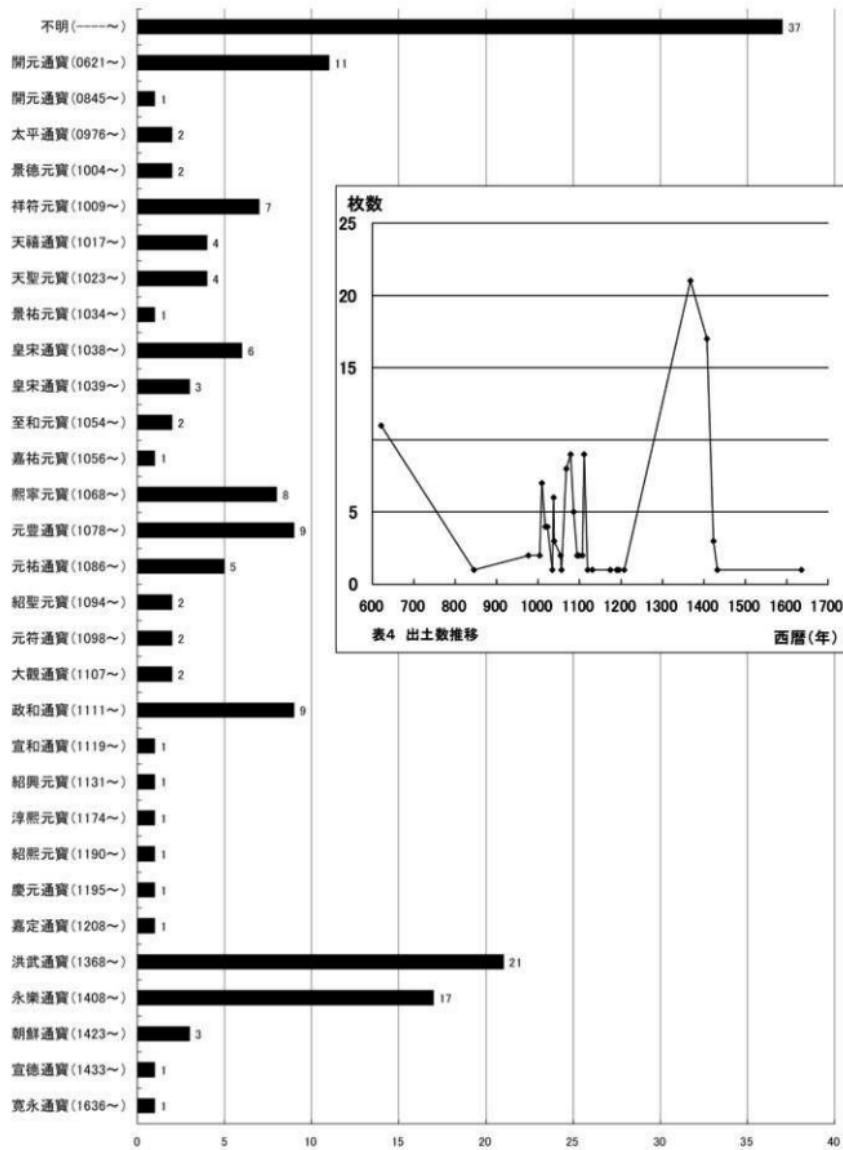


表5 古錢種類(年号)別出土数

ら緩やかに立ち上がるタイプである。器壁は全体的に厚くボッテリ感がありシャープさに欠ける。分類にあたっては層位的事実を最優先したが、一部グループを型式学方法による細分を行った。I類からV類を出土量の最も多いⅢ、VI類に三足付碗、VII類に鉢、VIII類に内耳鍋をあてた。

I類：表2・（76図798～803。）西地区・墓群の周辺から検出したものである。出土層位は西附属屋を微砂利層が覆いそれに包含され、墓群はそれを切る関係となる。この為時間的関係に矛盾も生じるが、ここでは本地區の上流より流出した一群としてとらえることとする。底部より緩やかに立ち上がり口縁部付近から僅かに内湾するが、これは調整の際に内面口縁部直下から親指頭で支え外面は人差し指以降でナデ調整をおこなった結果の所産であり、口縁部直下の内部は緩く浅い横U字曲線を形成する。このことにより、本類は皿でありながら杯に近い形状を有することとなる。器面はロクロ成型後、前記の工程による回転を伴うナデ調整痕が横位に全面に認められる。口縁部、内面では使用による煤痕が顕著であり、僧侶の個人名（道清）を含む、経典を想起させる（妙□）、國・の墨書き器でもあることから何らかの儀礼に用いられた後、廃棄された一群と位置付けておく。法量は口径11cmに集中する。時期は、製作技法・形態等から観て15世紀後半以前、即ちII・III・IV類前に考えられ（注）後半は連続するが前半部での上限時期は不明である（表6-2）。

II類：（表6-3）・口径と高さのa類11cm以上～12cm付近・b類9cm以上～11cm以下・c類7cm～8cmにそれぞれピークがある。ナデは回転を伴う内面を親指、外面をそれ以外で挟むように調整される。その為I類で認められた内面での口縁部直下の横U字曲線は消失するが弱いものとなる。一方内面中央部では輪積み？の痕跡を思わせるような隆起が認められる。外面においては単純な微湾曲を示し緩やかに立ち上がる皿である。

III類：製作基盤等はII類と一致するが器壁が直線的に開くものをまとめた。10cmに集中するIIIa類と8cm前後のIIIb類に分けられるが、II類に吸収される可能性も残る（表6-4）。

IV類：体部に輪積痕に似たドーナツ状の稜を形成する一群である。口縁部を中心に回転を伴うナデ調整が口縁部付近に集中して施されるが、稜へのナデは僅かに認められ口縁部ほどではない。しかし、923を含めた複数にはナデ調整が底部まで達しほば全面に調整痕が看取されるものも存在するが、それらの器面からは稜が消えかかっているものが見受けられる。このことからナデ調整の際における指の調整により稜の有無を決定付けることが可能であることから、意図的に稜を残した工程が観てとれるのである（表6-5）。

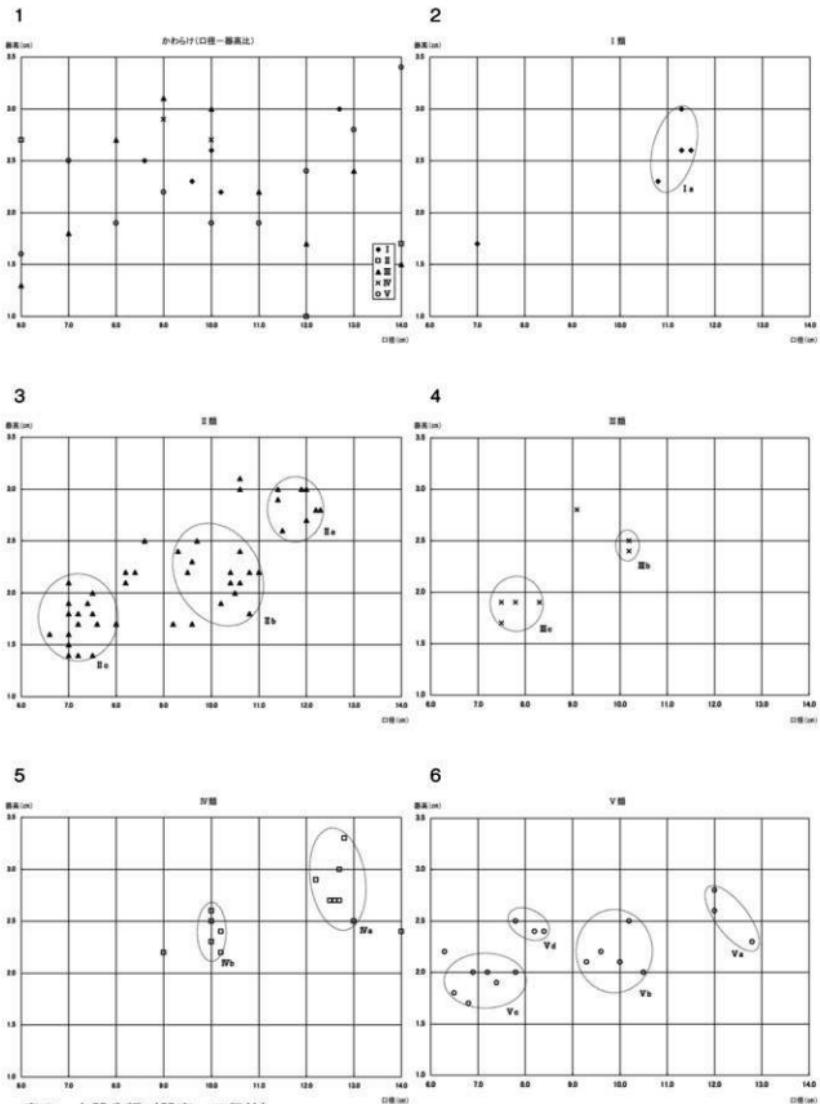
a類12cm～13cm、b類10cmに細分が可能であり出土器の傾向に拠つて規格化が進行している。15世紀後半から16世紀後半が考えられる。

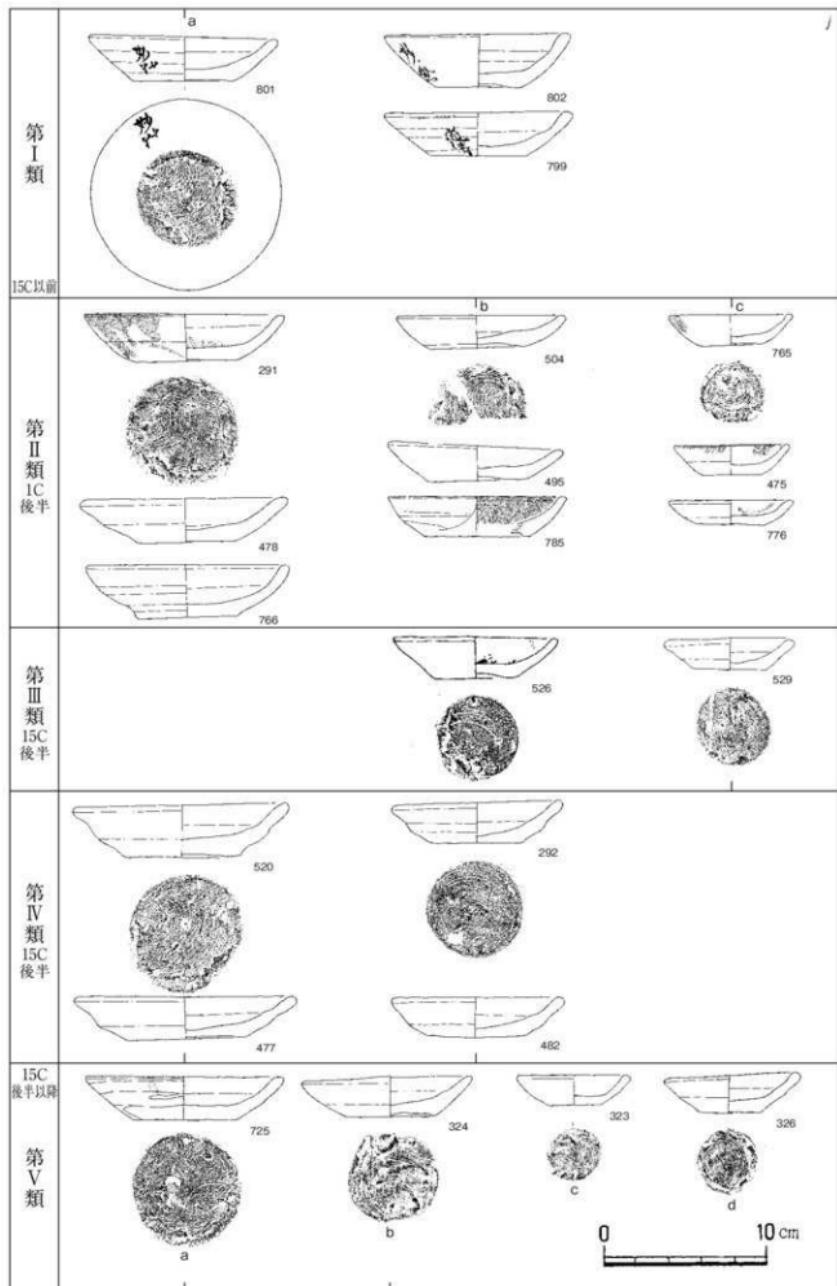
V類：2号礎石建物の住人が撤退し完全に機能が停止すると、冠水の影響により周辺からは微砂利が運ばれ堆積層となるが、その上面から検出されたものである。主に1号礎石建物・南端中央部、1号礎石建物北東端、1号礎石建物・東部から主に検出された（表6-6）。

a類は数量が少なく不明な点が多い12cm～13cmに集中するものをまとめた。外面は全面に内面は全面のものと下部にナデ調整が認められるものとがある。b類外面は直線的に立ち上がり、内面はドーナツ状の稜を有する。7cm、8cmを中心としたc・d類は内湾する器壁で、内側にはドーナツ状の稜を有する。

VI類：三足付碗でロクロ成型、回転糸切り痕を有し、一形態にまとまる。器壁は厚くボッテリ感が強い。口径は11、6cm～7、7cm、高さ4、7cm～2、8cmでバラツキ感が認められる。（小林・北川）

（注）甲府市教育委員会 佐々木満氏より教示。





## まとめ

小井川遺跡はこれまで述べてきたとおり、14世紀初頭・鎌倉期の遺構は全く認められないが、礎石の銘文からは遺跡が摂関家領の布施荘跡地であることが確認された。Ⅲ期建物群の再建にともない、これらの関連遺構は消失し、以後は新たな遺構が出現し複雑な内容を提示している。遺物として、Ⅱ期建築部材がⅢ期の建造期に転用材として、Ⅱ期建物の主たる礎石はⅢ期建物の主屋の礎石として用いられてその他遺物の大半は人為的な移動が確認された。

今回は限定された資料の範囲で推定を重ねた部分が多く、今後さらに検討が必要な事は云うまでもないが、以下調査により得られた成果を列記し、今後の課題としたい。

### (1) 遺跡内での大型五輪石塔の検出と、五輪石塔の表面に

No1 未之時。延慶三年三月廿九日。御往生。

No2 正和四〇六月廿五日死亡日也。 □□日勧佛為。 □□□陀佛。

がそれぞれ刻まれることより、遺跡の初期段階の実年代の1305年（延慶三年）、1315（正和四年）が確定された。

また「戊鬼二藤布施兵衛忠光法名真顔六十□□滅」からは在地名・布施の二文字が確認され、摂関家領所である布施荘の実在を、今日においても布施の地番を使用する遺跡の内に証明することができた。

当荘の預家は、藤原氏の五辻中将忠氏朝臣（嘉元三年・1305年）であり、該期での各地域に展開する荘園の管理運営にあたっては、預所代を置き管理運営の任を託すというシステムが確立され、その流れに乗って運営されていたものと思われ、この預所代については今回の調査で新たに登場した二藤布施兵衛忠光が有力視される。

在地名に兵衛を付して通称とする人物の出自は在地の人間とすることが一般的であること、忠光は忠氏の一字、忠を取り忠光とし、藤原系の二藤を名乗る背景には中央貴族である忠氏との間に擬族姓主従関係に近い関係が発生し氏姓を授与された人物、在地豪族の可能性が高いことを指摘した。

次に、当荘の範囲は資料が皆無の中で推定しておく、弘治3年（1557年）信玄堤成立以前の釜無川の本流は現代の甲府バイパスの線上にコースをとって落合町付近で笛吹川と合流していたものと考えられている。西地区は現在においても若草町、田富町には釜無川により分断され川の東西に飛び地が存在することからは現・釜無川の本流は先記の東北部とされるのが妥当とされ（川崎剛1994）小井川遺跡の西側は障害物のない平坦地が想定され、併せて東においても旧本流とされる荒川まで無障害で到達する平坦な地域が想定される。布施荘はその性格からは広範囲な土地が取り込まれていたものと考えられ、東端は平安～鎌倉期にかけての平田宮第2遺跡や上窪遺跡を取り込み、1557年以降の本流痕を残すと考えられる鎌田川を超した荒川の手前までが、西端は水田址が検出されている旧若草町付近を想定した。

(2) Ⅱ・Ⅲ期では、主に戦国後期～末期に属する遺構、遺物が検出された。特に遺構面でのⅡ期とⅢ期との間に被災による機能停止と再建復興を関連付けることができた。復興に当たっては規模が拡大され中世館に見立てた方形の塹を伴う寺院が成立したことは既に述べたが、それは短期間で廃寺へと追い込まれる結果となった。その要因と年代決定を発掘資料から以下にまとめる。

Ⅱ期の遺構は、礎石建物1棟、溝1本、墓5基が検出された。遺物特に該期の五輪石塔の量の割には遺構が少ないが、このことはグリッドF23・21ーグリッドJ23・21地区ではⅢ期の2号建物の建設時にあわせ造成が行われたことが原因と考えた。1号礎石建物の規模は、東西7間×4間、1間=6尺（約1818mm・1尺=303mm 以下同様）であるが、これらの礎石の配置から、現状では単独1棟の方丈構造を有する大型建物であるが附屬屋の存在も考えられないわけではない。礎石建物及遺物からは寺院が想定され、遺物の多くに焼痕が確認され火災による消失を考えた。

創建年代は、1間6尺という寸法が統一される時期は地域差もあるが一般的に室町後半以降と考えられ、甲斐の建築物も室町後半から1間6尺に移行している事を確認した。本1号建物は、一部礎石間が伸びていて7尺と考えられる箇所も認められるが、ほぼ1間=6尺で計画されていることから上限は室町後半以降の様相が捉えられる。

また伴出する土器の年代観は武田氏館跡出土土器との共通点が認められ15世紀後半代が考えられ陶磁器類に関しても古瀬戸、瀬戸・美濃関連遺物及び輸入磁器、五輪塔部材はいずれも、15世紀後半から16世紀前半に限定されていることから、創建年代は、室町後期の15世紀後半以前を考えた。

その後火災により1号建物の焼失し再建が行われるが、時期と再建根拠と着工時期の関係は以下の通りとなる。

再建とする根拠は1号建物と2号建物（主屋）との比較において規模、規格、位置関係を観ると、いずれも柱間計画、寸法が6尺（約1818mm）で同一規格と考えられること、建物の方位（軸線）が一致していること、建物規模が幾分大型化しているか同程度と考えられること、また1号建物の転用材は、主屋と東附属屋との連絡口に用いられた大引881とその下部には東753、754が使用されているが、これらの材の表面における加工痕は新鮮な面が顕著であり、長期に亘る野ざらし状態は認められない事、1・2号建物の重複関係を観ると1号建物の柱間6尺四方のほぼ中央に2号建物の礎石がくるように配置されて、1号建物の礎石を抜き取りながら、2号建物の基礎を造成していった状況をも想定され1号建物廢棄から短期の内に建造計画が決定されたものと思われる。以上からは、焼失から再建への過程が連続的な流れの中で読み取れ、その年代は造営展開期1541年～東2・3号幕（C14測定1520～1590年）より古く東地区造成直後となる。

2号礎石建物の撤退後に冠水による微砂利が運ばれ堆積層となるが、その上面から検出された土器の編年観からは、15世紀後半以降から終末に位置付けられるもので古期に属する土器（Ⅱ・Ⅲ類）との時間差は小さいものであり、時間的に遡る余地が残ると共に下限は限定されてくる。このことを解決する背景として信虎時代では雲峰寺1532年をはじめ多くの寺社が創建・移築され活発な様態が読み取れるが、信玄期においても本妻の菩提寺である慈眼寺や善光寺（1558～1564）の移築が行われその活動の勢いは止むことはなかったものと思われ、この趨勢の中で規模拡大を伴う大がかりな再建が行われたものとすれば信玄の生前の1541～1573年の間に考えられなくもない。

寺院消滅については、再建前は方丈型式の1棟に附属屋が伴った形態であったのに対し再建後は方形の塼を掘削し東南隅には池を伴う庭園をも配し、さらに建造物は主屋を中心に両側に附属屋を設けるなど中世館を見立てていて、前期と比較すると半恒久的な文化拠点を意図した事が窺える。しかし、長くて50年という短期の内に機能が停止され建築部材やその他物質等が運びだされるという強引とも捉えられる状況が捉えられた。このことは内的要因より外的要因が強く働いた結果として捉えたい。即ち再建推定年代（1541～1573）とC14の最新値1590年の時間枠の中には武田氏滅亡という重大事件が存在する。武田の庇護の下に15世紀後半から確実に存続し、後半では規模が拡大した寺院は、西方より進行する織田軍の標的と成り得た条件を、揃えていたことが窺え直接的に軍事的破壊行為は免れたものの建築部材は転用材として運び出され寺院の消滅が確定した。その時期は武田勝頼の死亡1582年の直後に置きたい。（小林、北川）

## 参考文献

小野正敏	1982	15~16世紀の染付碗、皿の分類	貿易陶磁研究	No.2
広島考古学研究会	1985	中世遺跡出土の漆器		
磯貝正義	1997	大井莊と大井氏	増穂町史・上巻	
秋山敬	1980	大井莊について	甲斐路	No.37
網野善彦	1991	甲斐の莊園・公家と地頭・御家人 国立民族博物館研究報告		第25集
磯部淳一	1992	群馬県における五輪塔の編年 高崎市史		第2号
藤澤典彦	1993	五輪塔の研究	(財)元興寺文化財研究所	
降矢哲夫 佐々木満山 下孝司	2001	山梨県内における中世の土器様相について 中世土器研究論集		
小林義孝	2002	五輪塔の造立目的	帝京大学山梨文化財研究所報告 第10集	
秋山敬	2003	甲斐の莊園		
国宝大善寺本堂修理工事委員会	1956		国宝大善寺本堂修理報告書	
重要文化財観音堂修理工事報告書	1963		観音堂修理委員会	
国宝清白寺佛殿修理工事報告書	1958		清白寺保存会	
山梨県指定有形文化財清白寺庫裏修理工事報告書	1991		清白寺保存会	
重要文化財東光寺本堂修理工事報告書	1982			
重要文化財雲峯寺本堂修理工事報告書(第1集)	1956		雲峯寺修理委員会	
重要文化財雲峯寺庫裏修理工事報告書(第2集)	1957		同上	
重要文化財雲峯寺修理工事報告書	1958		同上	
重要文化財藍澤寺地蔵堂修理工事報告書	1957		藍澤寺地蔵堂修理工事委員会	
甲府市教育委員会	1985		史跡 武田氏館跡 I	
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	1993		一乗谷朝倉遺跡発掘調査報告書IV	
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	1995		一乗谷朝倉遺跡発掘調査報告書V	
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	1999		一乗谷朝倉遺跡発掘調査報告書VI	
福井県教育丁埋蔵文化財センター	2004		福井城跡	
南アルプス市教育委員会	2004		寺部村附第6遺跡	
玉穂町教育委員会	2003		上庄遺跡	
玉穂町教育委員会	2005		上庄遺跡(2次)	
玉穂町教育委員会	2006		平田宮第2遺跡	
愛知県	2006		愛知県史 窯業2	





















回数 No.	測定 No.	測定地 所	高さ mm	マーク	分類1	分類2	分類3	分類4	計測値 (cm)			平均粒径 (mm) (%)	密度 (g/cm <sup>3</sup> )	孔隙率 (%)	比例	電子 顕微 鏡	測定場所	測定年代	備考
									1000/標 高	1000/緯 度	1000/経 度								
78 833 内 部	上部	J25	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	2.1	1.2	0.2	1.80	47.0	自然	樹枝	—	—	
78 841 内 部	下部	J22	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.2	1.0	41.0	2.4	66.0	自然	樹枝	—	—	
78 844 内 部	下部	J22	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.2	1.0	41.0	2.4	66.0	自然	樹枝	—	—	
78 845 内 部	下部	J22	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	2.1	0.7	1.2	2.2	68.0	自然	樹枝	—	—	
78 847 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.3	1.0	44.0	2.3	67.0	自然	樹枝	—	—	
78 849 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.1	1.0	44.0	2.3	67.0	自然	樹枝	—	—	
78 850 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	44.0	2.3	67.0	自然	樹枝	—	—	
78 851 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	7.0	0.2	0.9	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 852 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 853 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 854 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 855 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 856 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 857 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 858 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 861 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 863 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
78 865 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 867 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 870 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 872 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 873 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 874 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 875 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 876 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 877 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
79 878 内 部	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	0.0	0.0	1.0	42.0	2.4	57.0	自然	樹枝	—	—	
80 879 —	—	—	石質層	樹木	樹枝	—	—	—	16.0	12.0	17.0	0.0(0.0%±1.0)	18.000	100	安山岩	—	—	—	
81 879 東方	小丘	J23	砂質	樹葉材	樹木	—	—	—	15.0	85.0	8.0	—	—	—	—	—	—	—	
82 880 東面	下部	J20	砂質層	樹葉材	樹木	—	—	—	23.7	15.0	3.0	—	—	—	—	—	—	—	
83 881 東面	—	—	J23a	樹葉材	樹木	小枝	—	—	15.0	22.5	2.0	—	—	—	—	—	—	—	
84 882 南西面	下部	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	9.0	34.0	3.0	—	—	—	—	—	—	—	
84 884 南面	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	—	16.0	12.0	17.0	0.0(0.0%±1.0)	18.000	100	安山岩	—	—	—	
85 885 南西面	下部	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	9.0	34.0	3.0	—	—	—	—	—	—	—	
86 887 南西面	下部	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	7.0	140.0	7.0	—	—	—	—	—	—	—	
86 888 南西面	下部	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	16.0	27.0	15.0	—	—	—	—	—	—	—	
87 889 南西面	下部	J28	砂質	樹葉材	樹木	小枝	—	—	8.0	99.0	6.0	—	—	—	—	—	—	—	

# 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

## 1. はじめに

山梨県中巨摩郡・小井川遺跡より検出された試料8点について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料採取は佐々木、試料調整は山形、瀬谷、Lomtatidze、Jorjoliani、測定は小林、丹生、伊藤、測定に用いた種実の写真撮影は新山が担当し、本文は佐々木、伊藤が作成した。

## 2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料の時期はいずれも中世の16世紀代と考えられており、遺構の切り合い関係から新旧2時期あることが想定されている。測定した8点のうち、1・2・3・6・7が下層の建物に伴う遺構から出土した遺物、4・5・8が上層の建物に伴う遺構から出土した遺物と考えられている。

試料は試料番号1から6(PLD-6473~6478)までが遺構内もしくは板の下から出土した炭化イネ胚乳で、これらは他の種実と共に一括取り上げられ、山梨考古博物館によって水洗選別されていたものである(写真1)。種実は上・中・下層と区別されて洗浄されていたが、なるべく下層から状態が良く大きめの炭化イネ胚乳を3~4点抽出し、うち1点を測定試料とした。

試料番号7(PLD-6479)は柱材を転用した床材の一部で、最外年輪が遺存していない生の角材である。残存部で最も外側の年輪から試料を採取した。

試料番号8(PLD-6480)は密集して出土した芯持丸木の枝材で、枝材の最外年輪から試料を採取した。

試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6473	遺構: 東ノ号墓 遺物 No.: 一括 その他: 試料番号1	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6474	遺構: 東ノ号墓 遺物 No.: 一括 羽位: 下層 その他: 試料番号2	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6475	位置: 東山区 遺構: 2号墓 遺物 No.: 一括 羽位: 下層 その他: 試料番号3	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6476	位置: 西山区 遺構: 1号墓 遺物 No.: 一括 羽位: 中層 その他: 試料番号4	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6477	位置: 西部区 遺構: 2号墓 遺物 No.: 一括 羽位: 下層 その他: 試料番号5	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6478	位置: G94 遺物 No.: 板の下の黒色層 羽位: 下層 その他: 試料番号6	試料の種類: 炭化物・種実(イネ胚乳) 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6479	遺構: 主殿 遺物 No.: 柱材(角材) その他: 試料番号7	試料の種類: 生試料・材 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6480	位置: 南西地区 遺物 No.: 枝 羽位: 中上面 その他: 試料番号8	試料の種類: 生試料・材 状態: 最外年輪 カビ: 無	超音波煮沸洗浄 醸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った $^{14}\text{C}$ 年代、 $^{14}\text{C}$ 年代を曆年年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

$^{14}\text{C}$ 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した $^{14}\text{C}$ 年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

#### 曆年較正

曆年較正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年) を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の曆年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年年代範囲は95.4%信頼限界の曆年年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年年代に較正した年代範囲		曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )
			$1\sigma$ 曆年年代範囲	$2\sigma$ 曆年年代範囲	
PLD-6473	-26.08 $\pm$ 0.11	315 $\pm$ 15	<u>1520AD(55.9%)1590AD</u> 1620AD(12.3%)1640AD	<u>1490AD(95.4%)1650AD</u>	316 $\pm$ 17
PLD-6474	-23.57 $\pm$ 0.11	355 $\pm$ 15	<u>1470AD(41.9%)1520AD</u> 1590AD(26.3%)1620AD	<u>1460AD(48.2%)1530AD</u> 1550AD(47.2%)1640AD	355 $\pm$ 16
PLD-6475	-25.34 $\pm$ 0.11	330 $\pm$ 15	<u>1510AD(10.8%)1530AD</u> 1540AD(43.2%)1600AD 1610AD(14.2%)1640AD	<u>1480AD(95.4%)1640AD</u>	328 $\pm$ 16
PLD-6476	-24.08 $\pm$ 0.16	315 $\pm$ 20	<u>1520AD(65.5%)1590AD</u> 1620AD(12.7%)1640AD	<u>1490AD(95.4%)1650AD</u>	317 $\pm$ 18
PLD-6477	-24.10 $\pm$ 0.17	310 $\pm$ 15	<u>1520AD(64.2%)1580AD</u> 1630AD(14.0%)1650AD	<u>1510AD(72.8%)1600AD</u> 1610AD(22.6%)1650AD	308 $\pm$ 16
PLD-6478	-24.26 $\pm$ 0.12	290 $\pm$ 15	<u>1520AD(68.7%)1560AD</u> 1630AD(29.5%)1650AD	<u>1520AD(59.4%)1600AD</u> 1620AD(36.0%)1660AD	289 $\pm$ 17
PLD-6479	-24.20 $\pm$ 0.13	595 $\pm$ 15	<u>1315AD(65.3%)1355AD</u> 1385AD(12.9%)1400AD	<u>1300AD(72.4%)1370AD</u> 1380AD(23.0%)1410AD	593 $\pm$ 17
PLD-6480	-21.73 $\pm$ 0.11	315 $\pm$ 15	<u>1520AD(66.2%)1590AD</u> 1620AD(12.0%)1640AD	<u>1490AD(95.4%)1650AD</u>	317 $\pm$ 17

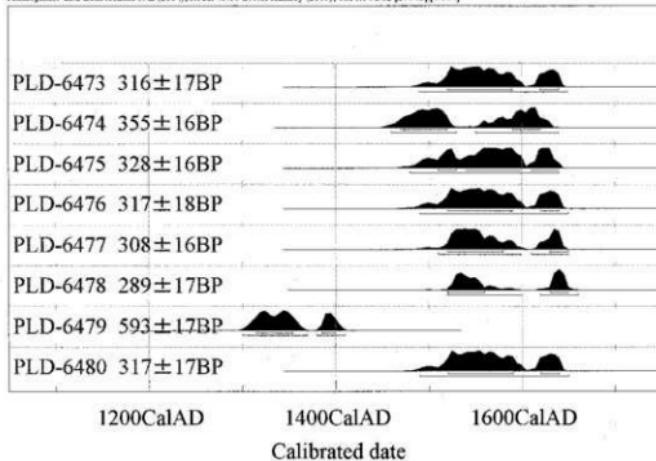


図2 历年較正マルチプロット図

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び歴年較正を行った。得られた歴年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

古い年代値が得られたのは試料番号7(PLD-6479)で、得られた年代は $^{14}\text{C}$ 年代値で  $593 \pm 15$ yrBP、 $1\sigma$  (68.2%の確率) の歴年代範囲では 1315-1355calAD (55.3%)、1385-1400calAD (12.9%)、 $2\sigma$  (95.4%の確率) の歴年代範囲では 1300-1370calAD (72.4%)、1380-1410calAD (23.0%) の年代範囲を示した。 $1\sigma$  では 14世紀代、 $2\sigma$  では 14世紀から 15世紀初頭までの年代範囲で、14世紀代の確率が高かった。この試料は、主殿の床材であるが、焼失した下層の建物の柱材を転用し、床材としたものと考えられている。測定試料は木材の伐採年代である最外年輪が不明のため、ある程度の古木効果により古い年代が出ていていることも考慮しなければならないが、測定結果は遺構構築年代の 16世紀代より古い年代値であることから、遺構より古木を使用していることを考慮する必要がある。

その他の年代値は比較的まとまっており、 $^{14}\text{C}$ 年代値で  $290-355 \pm 15-20$ yrBP、 $1\sigma$  の歴年代範囲で 1470-1650calAD、 $2\sigma$  の歴年代範囲で 1460-1650calAD の年代範囲であった。いずれも $^{14}\text{C}$ の誤差範囲は小さいが、歴年較正を行うと年代範囲が広くなる理由として、1500年代半ばに歴年較正曲線が一端上昇する箇所により年代範囲は大きく2分され(図1、2)、歴年代範囲が広くなることがあげられる。そのため、得られた試料は15世紀中葉から17世紀中葉の範囲内の年代を示した。年代範囲からは上層と下層の明確な区別はできなかった。

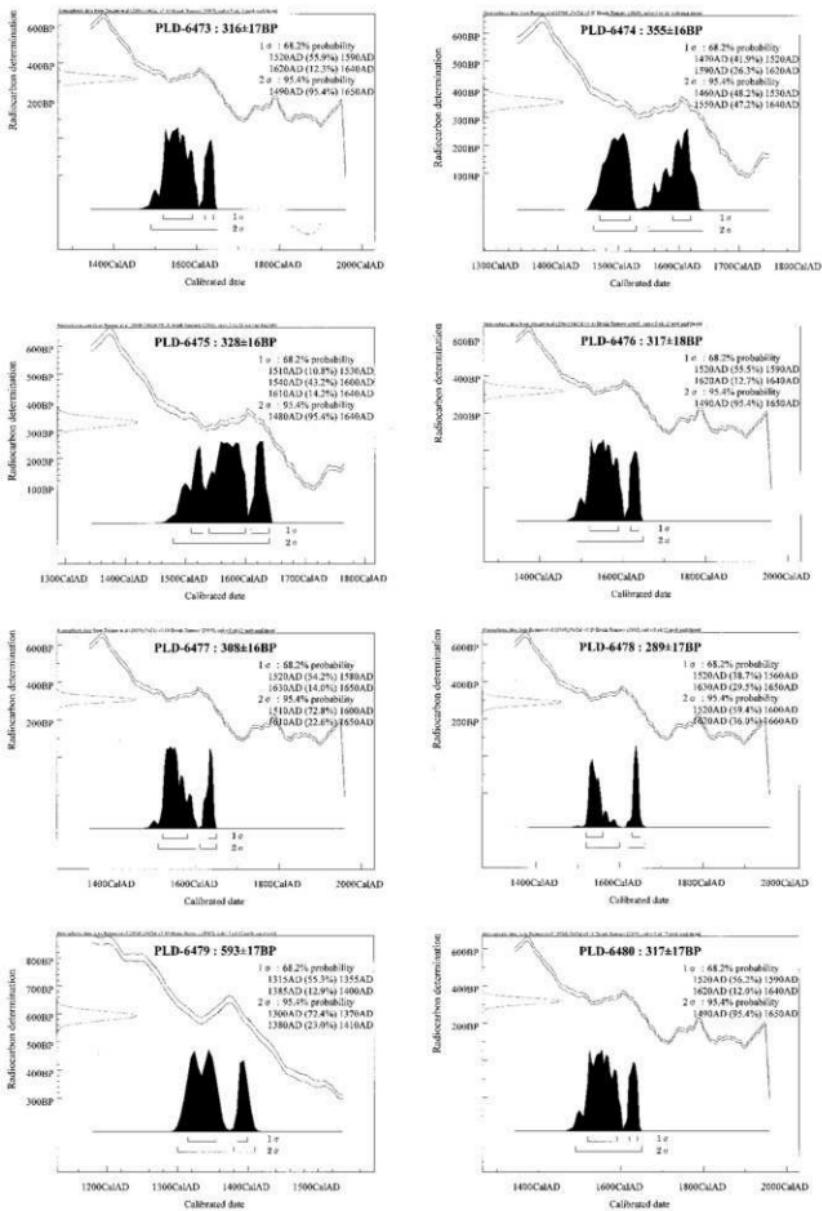
佐々木由香・小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫  
Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・新山雅広

## 参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. *Radiocarbon*, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. *Radiocarbon*, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) INTCAL04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.



写真1 炭化イネ胚乳(試料番号1~6)スケールは1mm



# 小井川遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

山梨県中央市（旧田富町）布施に所在する小井川遺跡は、甲府盆地中西部の釜無川土石流扇状地（今泉・町田・松田、2006）上に立地している。本遺跡の発掘調査では、中世の布施庄に関する銘文が刻まれた五輪塔が出土したほか、16世紀代の大型建物跡等が確認されている（小林・猪股、2006）。なお、大型建物跡の南東側から検出された付属屋と考えられる建物跡周辺からは、多くの炭化物や植物遺体が確認されたことから、これらの植物片の抽出を目的として、各地点から採取された土壌の水洗選別も実施されている。

本報告では、上記した水洗選別により回収された種実遺体を対象に調査を行い、種実遺体の種類構成や周辺植生、当時の植物利用について検討する。

## 1. 試料

試料は、発掘調査時に採取された土壌の水洗選別により回収された炭化物を含む微細植物片159試料である。これらの試料は、それぞれ土壌試料の採取された地点毎（G494(種群種)、G494東側板の下(種炭)、G494西側(種群種)、東側2号墓、G520-521(炭化物内種)、2号(種)）に分類・整理されている。また、各試料は、複数の微細植物片が認められる。

以上の試料について、便宜上、通し番号(仮No.1~159)を付し、個々の番号毎に種実同定を実施する。試料の詳細は、結果と共に表2に記す。

## 2. 分析方法

各試料の観察及び概査の結果、複数の分類群・個数が多量認められる試料や、水洗選別及び分類後の残渣と考えられる土壌や植物微細片等が多量認められる試料が確認された。そのため、本分析を実施するにあたり、調査担当者と協議を行い、規定の式数を最小抽出数とし、調査目的や試料の状況に応じて以下の方法にて調査を行っている。なお、結果に示した大型植物遺体の検出量の評価については、各地点・遺構における土壌の採取方法や土壌分析量、水洗方法に関わる情報を考慮し、検討することが望まれる。

各試料を粒径4mm、2mm、1mm、0.5mmに篩別し、シャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実や葉等の大型植物遺体を、ピンセットを用いて抽出する。また、植物微細片が多量混在する試料は、試料の量に応じて、粒径1mmまたは2mm以上を分析対象とし、土壌を主体とする試料は分析対象外としている。

抽出された大型植物遺体を、双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。針葉の破片は先端部と基部の個数を数える。ヒノキの枝条は、十字対生の4枚の葉を1対として対の数を数える。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。多量或いは塊状などで検出された分類群は、容量（重量）を表示する。分析後の種実遺体は種類毎に容器に入れ、抽出後の分析残渣は袋に戻して保管する。

## 3. 結果

大型植物遺体分類群一覧を表1に、結果を表2に、試料別検出状況を表3に示す。

### (1) 試料別検出状況

159試料からは、裸子植物5分類群182個、被子植物63分類群計25889個(+181cc)の種実や葉等の大型植物遺体、種類・部位の特定に至らなかった不明種実が98個確認された。

栽培植物は、スモモ2個、モモ1個、カキノキ4個、イネの胚乳8187個(+29cc)、穎1615個(+145cc)、ヒエーキビ近似種362個、オオムギ6982個、コムギ287個、ムギ類185個、ソバ680個(+7cc)、マメ類685個、ワタ類427個、シソ属(エゴマを含む)77個、メロン類386個、ヒヨウタン類3個、トウガン8個と、栽培種の可能性があるナス科5438個の計25329個(+181cc)と全検出個数の約97%を占める。以下に、各試料の大型植物遺体の検出状況を記す。

#### 1) G494(仮No.1~8)

栽培植物は、イネ胚乳3個・穎146個、ヒエーキビ近似種7個、シソ属3個、ナス科4341個、メロン類21個の計4521個が検出された。ナス科が多く、G494下から3622個、同中から522個、同上から197個確認された。

この他に、木本3分類群(マツ属複雑管束亞属、ケヤキ、キブシ)10個、草本9分類群(エノコログサ属、ホタルイ属、カヤツリグサ科、サンエタデ近似種、ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、クサネム近似種、アカネ科)33個が検出された。

#### 2) G494東側板の下(仮No.9~40)

栽培植物は、スモモ1個、モモ1個、カキノキ4個、イネ胚乳444個・穎202個、ヒエーキビ近似種32個、オオムギ6418個、コムギ282個、ムギ類101個、ソバ12個、マメ類607個、ワタ類217個、シソ属10個、ナス科85個、メロン類312個、トウガン5個の計8733個が検出された。オオムギが多く、G494東側板の下中から3584個、同上から2154個、同下から552個確認された。

この他に、木本15分類群(マツ属複雑管束亞属、マツ属、スギ、オニグルミ、コナラ属コナラ亞属、コナラ属、シイ属、ブナ、ケヤキ、イスザンショウ属、サンショウ属、カエデ属、モチノキ属、ブドウ属、ミズキ)235個、草本3分類群(トウダイグサ属、アカネ科、スズメウリ)16個が検出された。針葉樹のスギの葉が多い(157個)。

#### 3) G494西側(仮No.41~73)

栽培植物は、スモモ1個、イネ胚乳5個・穎324個(+)、ヒエーキビ近似種41個、オオムギ1個、ソバ13個、ワタ類1個、シソ属60個、ナス科984個、メロン類45個、ヒヨウタン類2個、トウガン3個の計1480(+)個が検出された。ナス科が多く、G449西側下から594個、同中から324個確認された。

この他に、木本4分類群(マツ属複雑管束亞属、オニグルミ、コナラ属、サンショウ属)14個、草本11分類群(エノコログサ属、ホタルイ属、サンエタデ近似種、タデ属、アカネ科、ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、エノキグサ、オミナエシ属、タカサプロウ)62個が検出された。

#### 4) 東側2号幕(仮No.74~90)

栽培植物は、イネ胚乳609個+塊状炭化物4cc(0.48g)・穎204個+75cc(5.78g)、ヒエーキビ近似種32個、オオムギ303個、ムギ類58個、ソバ594個+7cc(0.77g)、マメ類56個、ワタ類57個、ナス科23個、メロン類3個の計1887個(+86cc)が検出された。東側2号幕中からは、イネ胚乳・穎とソバの果皮片が多量確認された。

この他に、木本8分類群(マツ属、オニグルミ、イスシデ、ブナ、クワ属、イスザンショウ属、サンショウ属、ドクウツギ)62個、草本3分類群(イネ科、ミゾソバ近似種、タデ属)4個が検出された。

表1. 大型植物遺体分類群一覧

木本	草本
裸子植物亞門	被子植物亞門
マツ属複雑管束亞属	単子葉植物属
マツ属	●イネ エノコログサ属
スギ	●ヒエーキビ近似種
ヒノキ	●オオムギ
ヒノキ科	●ムギ類
被子植物亞門	●コムギ
双子葉植物網	イネ科 ホタルイ属 カヤツリグサ科
離弁花亜網	双子葉植物網
オニグルミ	離弁花亜網
アサダ	ギンザン属
サワシバ	サンクダテ近似種
クマシデ	ミソゾバ近似種
イスシデ	タデ属
アカシデ	●ソバ アカシデ
コナラ属コナラ亞属	アカゲ科 ヒユ科 ナデシコ科
コナラ属	キンボウゲ属 キケンラン属
シイ属	●マメ類 カサゴサ属
クリ	●タケ科 ヒユ科
ブナ	●タケシ属 合弁花亜網
ケヤキ	サンショウ属
クワ属	●ソバ属 シソ科
マタタビ属	●ナス科 アカネ科 オミナエシ属 スズメウリ
●スモモ	●メロコ類 ●ヒヨウタン類 ●トウガン タカサプロウ キク科
モモ	
キチゴ属	
キハダ	
イヌザンショウ属	
サンショウ属	
ドクウツギ	
カエデ属	
モチノキ属	
ブドウ属	
キブシ	
ミズキ	
合弁花亜網	
●カキノキ	
ハクウンボク	

#### ●栽培植物

### 5) G520-521 (仮No.91~98)

栽培植物は、イネ胚乳1656個+塊状炭化物25cc (5.01g)・顆302個、ヒエーキビ近似種5個、オオムギ81個、ムギ類3個、マメ類18個、ナス科4個の計2069個 (+25cc) が検出された。イネ胚乳が多く、G520-521 下から864個、同中から651個、同上から141個+塊状炭化物25cc (5.01g) が確認された。

この他に、木本のサンショウ属5個、草本のアカネ科11個が検出された。

### 6) 2号炉 (No.99~159)

栽培植物は、イネ胚乳5470個・顆437個+70cc (8.92g)、ヒエーキビ近似種245個、オオムギ179個、コムギ5個、ムギ類23個、ソバ61個、マメ類4個、ワタ類?204個、シソ属4個、ナス科1個の計6639個+70ccが検出された。イネ胚乳・顆が多く、2号炉下から胚乳3835個、同中から胚乳1635個・顆232個+70cc (8.92g) が確認された。

この他に、木本20分類群（マツ属、ヒノキ、ヒノキ科、オニグルミ、アサダ、サワシバ、クマシデ、イスシデ、アカシデ、クリ、ブナ、マタタビ属、キイチゴ属、キハダ、イスザンショウ属、サンショウ属、カエデ属、ブドウ属、キブシ、ハクウンボク）75個、草本14分類群（イネ科、ホタルイ属、ギシギシ属、タテ属、アカザ科、ヒユ科、キケマン属、エノキグサ属、トウダイグサ属、スミレ属、シソ科、アカネ科、タカサゴプロウ、キク科）33個が検出された。

### (2) 大型植物遺体の記載

本分析で検出された大型植物遺体の状態は不良であり、水洗後の乾燥処理のため表面組織が壊れている個体が多く認められた。また、カキノキ、イネの胚乳と顆の一部、ヒエーキビ近似種の胚乳と果実の一部、オオムギ、コムギ、ムギ類、ソバの一部、マメ類、ワタ類?の一部、シソ属の一部、ナス科の一部、メロン類の一部、ヒヨウタン類の一部、オニグルミの一部、コナラ属コナラ亜属の一部、コナラ属の一部、シイ属、ブドウ属の一部、ギシギシ属には炭化が認められたほか、多量のイネ胚乳が密集固結した塊状炭化物も確認された。

なお、炭化の有無は、元々黒く硬い内果皮や種皮をもつ分類群（キハダ、イスザンショウ属、サンショウ属、エノキグサ等）も含まれるなど厳密な判別は困難である。そのため、元来の色調とは明らかに異なる黒色個体を炭化としている。また、イネ、ヒエーキビ近似種、ソバには、褐色を呈す果皮内部の胚乳は黒く炭化しているなど、色調による判別が困難な個体も含まれるため、これらは炭化合と一括している。

以下に、大型植物遺体の形態的特徴を、栽培植物とその他（針葉樹、広葉樹、草本、種類が特定される可能性のある不明種実）の順に記す。

#### <栽培植物>

##### ・スモモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。灰褐色、長さ1.4cm、幅1.1cm、厚さ8mm程度のレンズ状広楕円体。基部は丸く臍点がある。1本の明瞭な縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

##### ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ1.5cm程度で、頂部が尖る個体や丸みを帯びた個体など複数の形状がみられる。基部は切形で中央部に済入した臍がある。1本の明瞭な縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。縫合線に沿って半分に割れた破片や、齧歯類（ネズミなど）による食痕と考えられる円形の孔をもつ個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縫に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状にみえる。表面が磨耗した個体もみられる。

##### ・カキノキ (*Diospyros kaki* Thunb.) カキノキ科

種子が検出された。炭化しており黒色、非対称な倒皮針形で偏平。長さ0.9-1.1cm、幅4-8mm、厚さ1-1.5mm程度。基部が嘴状にやや尖る。背面は曲線状、腹面は直線状で稜をなす。種皮は薄く硬く、表面は粗面。

##### ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎（果）が検出された。穎（果）は淡・灰褐色、胚乳と一部の穎は炭化しており黒色。長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ4.5-5.5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1.5mm程度。多量の胚乳が密集固結した塊状炭化物もみられる（仮No.77、91、92）。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部があり、発芽個体もみられる（仮No.144）。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縱列する。穎が付着する個体もみられる。胚乳を包む穎（果）は長さ6.7-5.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の特徴的な果実序柄がある。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縱列する。

・ヒエーキビ近似種 (*Echinochloa cf. utilis* Ohwi et Yabuno - *Panicum cf. miliaceum* L.) イネ科ヒエ属-キビ属  
胚乳と果実が確認された。淡・灰褐色、胚乳と一部の果実は炭化しており黒色。狹卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面はやや平ら。胚乳は長さ2.25mm、幅1.5-2mm、厚さ1mm程度。胚乳は基部正中線上に幅広い胚の凹みがある。表面はやや平滑。胚乳を包む果実は長さ3-3.5mm、幅2mm、厚さ1mm程度。果皮表面は平滑で、微細な縱長の網目模様が縱列する。

ヒエ、キビの同定は、走査型電子顕微鏡下による内外穎の観察で判別可能とされるが（松谷、1980:2000など）、実体顕微鏡下での観察による厳密な判別は難しく、周辺域に生育していた可能性がある他のイネ科野生種との厳密な区別も困難である。ただし、今回は、まとまった検出量と炭化個体が確認されたことから、栽培種に由来する可能性が高いと判断し、ヒエーキビ近似種までの判別にとどめている。

・オムギ (*Hordeum vulgare* L.) イネ科オムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、糸錐状長楕円体で両端は尖る。長さ5-6.5mm、径2.8-3.5mm程度。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。表面に果皮（穎）が付着した個体もみられ、穎果の長さは7.5-8mm程度。

・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色、楕円体。長さ3-4.5mm、径2.5-3.5mm程度。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。なお、頂部を欠損するなど遺存状態が悪く、オムギとの判別が難しい個体をムギ類としている。

・ソバ (*Fagopyrum esculentum* Moench) タデ科ソバ属

果実が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色。三稜状広卵体。長さ5.5-6mm、径4.5mm程度。三稜と頂部は鋭く尖り、面の部分は凹む。三稜に沿って削れた破片もみられる。基部は切形で果皮とは別組織の萼片が残る個体もみられる。果皮表面はやや平滑。

・マメ類 (Leguminosae) マメ科

種子が検出された。炭化しており黒色、長楕円体。長さ3.5-6mm、径2.8-3mm程度と、大きさが異なる複数の種を一括している。子葉の合わせ目上に長楕円形で縁が隆起する細長い臍がある。種皮表面はやや平滑で光沢がある。

遺跡等から出土する炭化マメ類は、子葉内面の幼痕や初生葉の形態から、ササゲ、アズキ、リョクトウなどを判別する試みが行われている（吉崎、1992）。ただし、野生種との雑種も多いため、形態のみから現在の特定の種類に比定することは難しいとも考えられている（南木、1991;南木・中川、2000など）。最近では、DNA分析による判別が開発されつつある（矢野、2002）。今回検出された種子には、子葉内面の幼痕や初生葉は確認されないため、現時点では形態のみによる種類の特定は控えている。

・ワタ類? (*Gossypium* spp.?) アオイ科ワタ属

種子に近似する個体が確認された。灰褐色、炭化個体は黒色。長さ6-7mm、径4-4.5mm程度の広卵体でやや偏平。頂部は鈍形、基部は種皮が伸びて臍部突起の鞘となる。種皮は厚さ0.4mm程度で断面は柵状。表面には繊毛（基毛）が密生するが、磨耗欠損した個体が多く、粗面。頂部と基部付近に短毛が残存する個体がみられる。種子内部に納まる子葉は長さ4.5mm、径3.5mm程度の倒卵形で幾重にも折り畳まれている。

笠原・湯浅（2001:2002）は、兵庫県西岡本遺跡の水車遺構出土炭化種実について、走査型電子顕微鏡下観察による綿種子特有の繊毛と、種皮横断面の特徴的な長い柵状細胞の確認、および現生標本との対照により、綿種子と同定している。綿は重要な栽培植物であるため、本遺跡から確認された近似個体についても、走査型電子顕微鏡下観察

および現生標本との対照による確認が望まれる。

・シソ属 (Perilla) シソ科

果実が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色。倒卵形。径1.6-2.4mm程度と、エゴマ (*Perilla frutescens* (L.) Britt. var. *japonica* Hara) と思われる大型個体を含む。基部には大きな臍点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は浅く大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科 (Solanaceae)

種子が検出された。灰褐色、歪な腎臓形で偏平。径3mm程度と大型であることから、栽培種に由来する可能性がある。基部のくびれた部分に臍がある。種皮表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡灰褐色、炭化個体は黒色。狹倒卵形で偏平。長さ5.5-8.7mm、幅2.3-4mm、厚さ1-1.5mm程度と、藤下(1984)の基準による小型の雜草メロン型(長さ6.0mm以下)、中粒のマクワ・シリウリ型(長さ6.1-8.0mm)、大粒のモモルディカメロン型(長さ8.1mm以上)が確認される。種子の基部には倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

・ヒヨウタン類 (*Lagenaria siceraria* Standl.) ウリ科ヒヨウタン属

種子が検出された。灰褐色、基部のみ炭化し黒色を呈す個体(仮No.132)もみられる。長さ1-1.3cm、幅5-6mm、厚さ1.5mm程度の倒卵形針形。頂部は切形で角張り、基部は切形で臍と發芽口がある。種皮表面は粗面で、両面外縁部の幅広く低い後に2本の縫線がある。

・トウガン (*Benincasa hispida* (Thunb. ex Murray) Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が検出された。灰褐色、長さ1cm、幅6mm、厚さ1.5mm程度の倒卵形。基部は切形で梢円形の臍がある。種子両面の全周の縁には段差があり薄くなる。種皮は厚くやや堅く、表面は粗面。

<針葉樹>

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) マツ科

針葉の破片が検出された。灰褐色、破片の長さは7.5mm以下、径0.8mm程度の針形で2葉性。横断面は半円形で、中心部に2つの維管束がある。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

種子が検出された。灰褐色、長さ4.5-5mm、幅2.3-2.8mm、厚さ1.5mm程度の非対称倒卵形。側面は棱をなし、頂部や基部はやや尖る。頂部に付く倒三角形で腹質の翼を欠損する。種皮は木質で表面は粗面。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.) スギ科スギ属

葉が検出された。灰-黒褐色、長さ3.5-5mm、径0.5-1mm程度の枝側に歪曲する鎌状針形で断面は菱形。基部は次第に細まり、枝条に流れる。枝条の破片は長さ1-2cm程度。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

枝条が検出された。灰褐色、4枚の鱗片状の葉が十字対生して茎を包む。長さ2.8mm、幅2mm程度。葉は長さ2.5mm程度、側部は梢円形で先は内曲し、面部は菱形で鈍頭-鋭尖頭。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

種子が検出された。灰褐色、長さ2.5mm、幅1.5mm、厚さ1mm程度のやや偏平な狭卵形。頂部に短い突起があり、両側に膜状の翼がつく。種皮はやや平滑で、表面には数個の細長い樹脂腺がある。

<広葉樹>

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の破片が検出された。灰褐色、炭化個体は黒色。長さ2.5-3.5cm、径2.5-3cm程度の広卵形で頂部は尖る。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線上に沿って半分に割れた個体や、齧歯類(ネズミなど)による食痕と考えられる円形の孔が開いた個体(仮No.13)がみられる。また、側部が黒く炭化した個体(仮No.13)がみられる。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内面は平滑で、縫合線に沿って半

分に割れた面の正中線両側には子葉が入る2つの大きな窪みがある。

- ・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

果実が検出された。灰褐色、長さ6mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度の偏平な皮針状狭卵体で頂部は尖る。果皮両面にはそれぞれ10本程度の縦隆条が配列する。

- ・サワシバ (*Carpinus cordata* Blume) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4mm、幅2.8mm、厚さ1mm程度の偏平な卵状長楕円体。頂部には6-10個の歯牙があり、花柱は短い。線形で2個の柱頭は欠損する。果皮両面にはそれぞれ5-6個の縦隆条が配列する。

- ・クマシデ (*Carpinus japonica* Blume) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4mm、幅2.5mm、厚さ1.3mm程度の偏平な狭卵体で頂部は尖る。果皮表面はやや平滑で、10本程度の縦隆条が配列する。

- ・イヌシデ (*Carpinus tschonoskii maxim.*) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4.5mm、幅4mm、厚さ1.5mm程度の偏平な広卵体で頂部はやや尖る。果皮表面はやや平滑で、両面に各6本程度の縦隆条が配列する。

- ・アカシデ (*Carpinus laxiflora* (Sieb. et Zucc.) Blume) カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ2.7-3.2mm、幅2mm、厚さ1mm程度の偏平な広卵体で頂部はやや尖る。果皮表面はやや平滑で、両面に各6本程度の縦隆条が配列する。なお、イヌシデとの判別が難しい大きさの個体を、イヌシデアカシデとしている。

- ・コナラ属コナラ亜属 (*Quercus* subgen. *Quercus*) ブナ科

殻斗と幼果が検出された。椀状で表面には狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。殻斗は灰褐色、炭化個体は黒色。高さ5.5mm、径9mm程度。幼果は炭化しており黒色、径3.5-5mm程度、頂部に3花柱が残存する個体がみられる。花柱は短く太く、柱頭の先端部は内側から舌状に開く。

- ・コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

果実の破片と子葉が検出された。果実破片は灰褐色、炭化個体は黒色。基部の着点部で、径4mm程度の円形。表面には維管束の穴が輪状に並ぶ。子葉は炭化しており黒色、長さ1.1-1.3cm、径5.5-7mm程度の卵状楕円体。子葉の合わせ目に沿って縦半分に割れた破片もみられる。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上には僅かに窪み、頂部には径1mm程度の孔（主根）がある。

- ・シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

果実が検出された。炭化しており黒色、径5-6mm程度の広卵体で頂部は尖る。基部を占める着点は円状不定形。果皮は薄く、表面には細く浅い溝が縦列する。子葉の合わせ目に沿って縦半分に割れた破片もみられる。子葉は硬く緻密で、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上頂部には径1mm程度の孔（主根）がある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

果実の破片が検出された。黒褐色。完形ならば径2-3cm程度の三角状広卵体で、一個面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。検出された破片は、表面の縦筋模様に沿って割れており、大きさ2cm以下。果皮表面は平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。内面には灰褐色の内果皮（淡皮）がある。基部の全面を占める着点は、灰褐色で粗く不規則な粒状紋様がある。

- ・ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

果実を包む殻斗の破片が検出された。長さ1.9cm、径1.1cm程度の卵状楕円体。縦に4裂した1片は長さ1.9cm、幅1mm、厚さ2-3mm程度の卵状楕円形。外面は刺状突起が密布するが、質が柔らかいため突起頂部を欠損する。内面はやや平滑で微細な縦筋がある。

- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

果実と葉が検出された。灰褐色、果実は径3.5-4mm程度の重んだ心状倒広卵体で背面方向に湾曲する。花柱が嘴状

突起状に残る。基部に円形の臍があり、褐色の纖維が放射状に発達する。葉は長さ2.5-3cm、幅1.1cm程度の卵形で、先端は鋸尖形、基部は左右非対称な鈍形。鋸歯は大型で、基部がふくらみ先端は鋸尖形。2次脈は12本程度、葉縁で先端側へカーブし、鋸歯に入る。質は薄い。

・クワ属 (*Morus*) クワ科

種子が検出された。灰褐色、長さ1.8mm、径1.5mm程度の三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一辺が鋭利で、基部に爪状の突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。

・マタタビ属 (*Actinidia*) マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、長さ2mm、幅1.3mm程度の両凸レンズ状捨円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円-梢円形の凹点が密布し網目模様をなすことから、横長梢円形の網目模様をなすシマサルナシ (*Actinidia rufa* (Sieb. et Zucc.) Planchon ex Miq.) とは区別される。

・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)が検出された。形態上差異のある複数種を一括した。灰褐色、長さ2mm、幅1.5mm、厚さ0.7mm程度の半円形三日月形。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核(内果皮)が検出された。黒褐色、長さ4.5mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度の半横広卵形でやや偏平。種皮は硬く、表面には浅く微細な網目模様が継列する。

・イスザンショウ属 (*Fagara*) ミカン科

核(内果皮)が検出された。黒褐色、長さ3.35mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度の非対称広倒卵体でやや偏平。腹面正中線上に広線形の臍がある。内果皮は厚く硬く、表面にやや深く大きな網目模様がある。

・サンショウ属 (*Zanthoxylum*) ミカン科

核(内果皮)が検出された。黒褐色、長さ4.5mm、幅3.5mm、厚さ1.5mm程度の倒卵体でやや偏平。腹面正中線上基部に斜切形の臍がある。内果皮は厚く硬く、表面には浅く細かな網目模様がみられる。表面に黒色で薄い果皮が付着する個体もみられる。

・ドクウツギ (*Coriaria japonica* Asa Gray) ドクウツギ科ドクウツギ属

核が検出された。暗灰褐色、長さ2mm、幅4mm、厚さ1.5mm程度の偏平な半横卵体。背面は横狭卵形で、正中線上に1個の隆条がある。側面は各数個の葉脈状の横隆条がある。

・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

果実が検出された。灰褐色、長さ3.5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度の広卵体。頂部につく非対称倒三角形の翼を含めた長さは1.1cm程度。翼果の角度は鈍角。果実基部は切形で2翼果の合着面は平ら。果皮両面の正中線上に鈍棱がある。表面には葉脈状の隆条模様がある。

・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

核が検出された。灰褐色、長さ4.5mm、径2.5mm程度の3稜状倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線上は稜をなす。横断面は扁形。表面には3-5個の縦隆条からなる葉脈状網目模様がある。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。灰-黒褐色、炭化個体は黒色。長さ4.5mm、径3.3-3.7mm程度の広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。背面にさじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には梢円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は薄く硬く、断面は横状。

・キブシ (*Stachyurus praecox* Sieb. et Zucc.) キブシ科キブシ属

種子が検出された。黄褐色、長さ1.8mm、径1.5mm程度の三角状広倒卵体。一側面観は狭倒卵形で、他方は稜になり薄くなる。表面は平滑で光沢があり、内部に微細な粒状の網目模様が密布する。

・ミズキ (*Cornus controversa* Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核(内果皮)が検出された。淡灰褐色、径4mm程度の偏球体。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、

表面には一周する1本のやや幅広く深い縦溝と、やや深い縦溝が数本走る。

・ハクウンボク (*Styrax obassia* Sieb. et Zucc.) エゴノキ科エゴノキ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.3cm、径7.5mm程度の紡錘状卵体。頂部はやや尖り、頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部に斜切形、灰褐色で粗面の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は横状。表面にはエゴノキ (*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.) よりも微細な粒状網目模様がある。

<草本>

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実が検出された。黄灰褐色、長さ2.8mm、径1.5mm程度の狹卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

・イネ科 (Gramineae)

果実が確認された。イネ、ヒエーキビ近似種、オオムギ、コムギなどの栽培種や、エノコログサ属以外の形態上差異のある複数種を一括した。果実は淡茶褐色、長さ2.3mm、径1.2mm程度の狹卵-半偏球体で背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面は平滑で微細な縦長の網目模様が縦列する。表面に毛が密生する個体もみられる。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ2.23mm、径1.8mm程度の片凸レンズ状の広倒卵体で頂部は尖る。背面正中線上は鈍棱。基部は切形で、刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。果皮表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

果実が検出された。黒褐色、長さ2.2mm、径1.8mm程度の広倒卵体で頂部は尖る。基部は切形。背面正中線上は鈍稜。果皮表面はやや平滑。

・ギシギシ属 (*Rumex*) タデ科

果実が検出された。暗灰褐色、長さ2.5mm、径1.5mm程度の三稜状広卵体。三稜は鋭く明瞭。頂部は尖り、基部は切形で果皮とは別組織の萼片が残る。果皮表面はやや平滑。

・サナエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実が検出された。黒褐色、径2.25mm程度の円形で偏平な二面体。両面中央はやや凹む。頂部はやや尖り、2花柱が残存する個体もみられる。基部には灰褐色の萼があり、先が2つに分かれ反りかえる花被の脈が伸びる。果実表面は平滑で光沢がある。

・ミゾバ近似種 (*Polygonum cf. thunbergii* Sieb. et Zucc.) タデ科タデ属

果実が検出された。灰褐色、長さ4.8mm、径2.5mm程度の三稜状広卵体。頂部は尖り、基部は切形で果皮とは別組織の萼が残る。果皮は薄く柔らかく、表面は微細な網目模様が発達しがらつく。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。サナエタデ近似種、ミゾバ近似種以外の形態上差異のある複数の種を一括した。黒褐色、長さ2mm、径1.3mm程度の丸のある三稜状卵体で、基部に灰褐色の萼片があり、果皮表面はやや平滑で光沢がある、イヌタデ (*Polygonum longisetum* De Bruyn) に似る個体や、径2mm程度の背面正中線上に鈍稜のある広卵体で頂部は尖り、表面には明瞭な網目模様が発達しがらつく個体などがみられる。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、径1.3mm程度の円盤状でやや偏平。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・ヒユ科 (Amaranthaceae)

種子が検出された。黒色、径1.3mm程度の円盤状で偏平、縁は稜状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が配列し、光沢がある。

・ナデシコ科 (Caryophyllaceae)

種子が検出された。淡茶褐色、径1mm程度の腎臓状円形でやや偏平。基部は凹み、鱗がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には瘤-針状突起が鱗から同心円状に配列する。

・キンポウゲ属 (*Ranunculus*) キンポウゲ科

果実が検出された。灰黄褐色、長さ3mm、幅2mm、厚さ0.5mm程度の偏平な非対称広倒卵形。頂部や基部はやや尖る。果皮は薄くスponジ状で表面はざらつく。

・キケマン属 (*Corydalis*) ケシ科

種子が検出された。黒褐色、径1.7mm程度の腎臓状円形で扁平レンズ形。基部は切形でやや突出し、長方形の鱗がある。種皮表面は平滑で光沢が強く、微細な縦長の網目模様が鱗を取り囲むように同心円状に配列する。

・クサネム近似種 (*Aeschynomene cf. indica* L.) マメ科クサネム属

果実(豆果)の破片が検出された。灰褐色、完形ならば長さ3.5cm程度、幅5-6mm、厚さ1mm程度の偏平な非対称広線形で頂部と基部は伸びる。縁に筋があり、腹面方向にやや湾曲する。破片は、6-8個程度の短軸方向の節に沿って分離した1片で、長さ7mm、幅5mm程度の偏平な長方形、一端は斜切形。果皮表面は粗面。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒褐色、長さ1.6-1.8mm、径1.1-1.3mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面には細かい粒状の凹みが密布しづらつく。

・トウダイグサ属 (*Euphorbia*) トウダイグサ科

種子が検出された。黒褐色、長さ1.8mm、径1.5mm程度の倒卵体。腹面正中線上に隆条がある。鱗は基部の嘴状突起の先端にある。種皮表面には5-6角形の凹みによる大型網目模様がある。

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、長さ1.5mm、径1.2mm程度の広倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の鱗点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面は細かい縦長の網目模様が配列する。

・シソ科 (Labiatae)

果実が検出された。灰-黒褐色、長さ1.8-2mm程度の倒広卵形。基部には鱗点があり、舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面は粗面。

・アカネ科 (Rubiaceae)

核が検出された。黒褐色、長さ1mm、径1.5-2mm程度の偏球体。腹面中央に径0.5mm程度の楕円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様が発達する。

・オミナエシ属 (*Patrinia*) オミナエシ科

果実が検出された。灰褐色、長さ1.7mm、幅1.3mm程度の卵形でやや偏平。腹面の正中線上に隆条があり、その上部は突起し孔がある。背面はやや平らで縁は翼状。表面には微細な網目模様がある。

・カラスウリ (*Trichosanthes cucumeroides* (Ser.) Maxim.) ウリ科カラスウリ属

種子が検出された。灰褐色、長さ8mm、幅9mm、厚さ3mm程度のやや偏平な横楕円体。正中線は幅4.5mm程度の帯状に隆起し、基部に鱗がある。種皮表面は粗面。

・スズメウリ (*Melothria japonica* (Thunb.) Maxim.) ウリ科スズメウリ属

種子が検出された。灰褐色、長さ6.5mm、幅4mm、厚さ0.5mm程度の倒卵形。縁は肥厚せず、両面中央には倒卵形の浅い凹みがある。基部は斜切形で鱗と発芽口がある。種皮表面は微細な網目模様が縦列する。

・タカサゴロウ (*Eclipta prostrata* (L.) L.) キク科タカサゴロウ属

果実が検出された。灰褐色、長さ2.2mm、径1mm程度の狭倒皮針体。両端は切形、表面はスponジ状で、背腹両面には瘤状突起が分布する。両縁に翼があり、水に浮きやすい。

・キク科 (Compositae)

果実が検出された。淡灰褐色、長さ1mm、径0.3mm程度の線状長楕円体。頂部は切形で円形の鱗があり、冠毛が伸びる。冠毛を含めた長さは3.2mm程度。果皮表面には微細な網目模様が縦列し、毛が密生する。

## <不明種実>

### ・不明種実A

灰褐色、長さ2-2.2mm、径2mm程度の楕円体。基部にY字状の棱がある。表面には縦隆条が数本配列し、粗い網目模様がある。

### ・不明種実B

淡灰褐色、長さ1.8、径1.6mm程度の三角状広倒卵形。一側面観は狭倒卵形で、他方は稜になり薄くなる。腹面正中線上基部に斜切形の溝がある。表面は粗面。

## 4. 考察

### (1) 栽培植物

栽培植物は、大型植物遺体分類群の全検出個体数25987個 (+181cc) の約97% (25329個) と、極めて高い割合を示した。種類構成は、スモモ2個、モモ1個、カキノキ4個、イネの胚乳8187個 (+29cc) 、穎1615個 (+145cc) 、ヒエーキビ近似種362個、オオムギ6982個、コムギ287個、ムギ類185個、ソバ680個 (+7cc) 、マメ類685個、ワタ類? 427個、シソ属（エゴマを含む）77個、メロン類386個、ヒヨウタン類3個、トウガン8個、栽培種の可能性があるナス科5438個と、イネ胚乳、オオムギ、ナス科が多く検出され、次いで、ヒエーキビ近似種、ソバ、マメ類、ワタ類?、メロン類が多い傾向が認められた。

このうち、スモモ、モモ、カキノキは、観賞用の他、果実が食用、薬用等に広く利用される。イネ、ヒエーキビ近似種、オオムギ、コムギ、ムギ類は胚乳、ソバ、マメ類は種子が食用される。ワタ類は種子が繊維や油料に利用される。管見の限りでは、山梨県内における縄の出土例は認められていないことから、本分析結果で検出された近似個体については、走査型電子顕微鏡下観察および現生標本との対照による確認・検証が望まれる。シソ属（エゴマを含む）は、種子が食用や油料に利用される。メロン類は、果実が食用とされるが、雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、モモルディカメロン型に該当する種子（藤下、1984）が確認されたことから、複数の品種が利用されていた可能性がある。ヒヨウタン類は果実が食用や容器等に、トウガンは果実が食用に利用される。また、大型種子が検出されたナス科は、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種莢以外の部位の利用形態も考えられる（青葉、1991など）が、現段階では種類の細分化に至っておらず、詳細な検討については今後の課題である。これらの栽培植物（およびその可能性がある種類）が多量に検出されたことから、当該期の周辺域における栽培の可能性や本遺跡における利用が窺われ、炭化した個体が多数認められたことから、何らかの要因で被熱した状況や廃棄等の人為的行為も推定される。

各地点の栽培植物の種類構成は、それぞれ異なる特徴を示している。G494やG494西側では未炭化のナス科が多く検出される一方、G494東側板の下では、炭化したオオムギ、コムギなどのムギ類やマメ類、ワタ類? や、未炭化のメロン類が多く検出され、ナス科やメロン類には炭化個体が確認される。東側2号墓では、炭化したイネ胚乳・穎とソバの果皮片が多く、メロン類にも炭化個体が確認される。G520-521ではイネの炭化した胚乳が多く、2号炉では、発芽個体を含むイネ胚乳・穎や、ヒエーキビ近似種、ワタ類? が多く、シソ属、ヒヨウタン類には炭化した個体が確認される。以上の種類構成の特徴や栽培植物の検出状況から、建物跡内の施設との関連性も想定されるが、この点については、発掘調査所見と合わせ評価・検討することが望まれる。

### (2) 周辺植生

上記した栽培植物と不明種実を除く分類群は、針葉樹5分類群（マツ属複維管束亜属、マツ属、スギ、ヒノキ、ヒノキ科）、広葉樹25分類群（オニグルミ、アサダ、サワシバ、クマシデ、イスシデ、アカシデ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属、シイ属、クリ、ブナ、ケヤキ、クワ属、マタタビ属、キイチゴ属、キハダ、イスザンショウ属、サンショウウ属、ドクツツジ、カエデ属、モチノキ属、ブドウ属、キブシ、ミズキ、ハクウンボク）、草本23分類群（エノコログサ属、イネ科、ホタルイ属、カヤツリグサ科、ギシギシ属、サナエタデ近似種、ミゾソバ近似種、タ

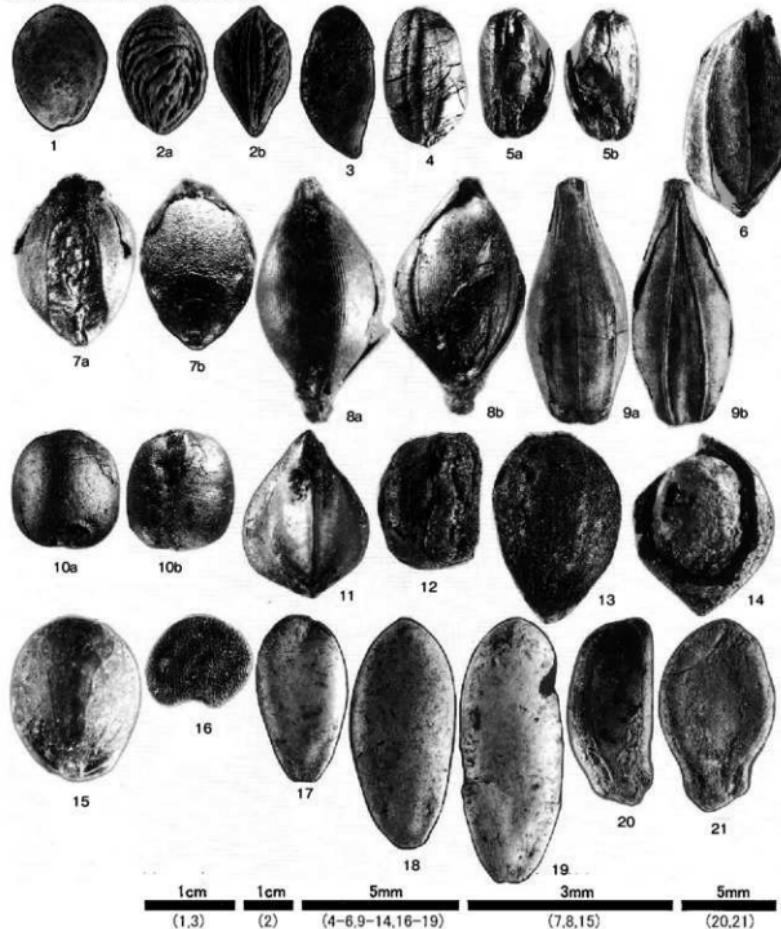
デ属、アカザ科、ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、キケマン属、クサネム近似種、エノキグサ、トウダイグサ属、スマレ属、シソ科、アカネ科、オミナエシ属、スズメウリ、タカサブロウ、キク科)が確認された。

針葉樹は、植林(植栽)や二次林等に由来する可能性や、供給域に比較的近い山地・丘陵等に生育していたものに由来すると推定される。広葉樹では、ブナ等の冷温帯に分布する落葉広葉樹や暖温帯に分布する落葉広葉樹、常緑広葉樹のシイ属等は、現在の遺跡周辺にも生育する種類であり、これらは後背の山地・丘陵に生育していたと考えられる。また、オニグルミやケヤキ、ミズキ等は湿地林・河畔林を形成する分類群である。サワシバ、クマシデ、イスシデ、アカシデなどのシデ類、クリ、クワ属、キハダ、イスザンショウ属、サンショウウ属等の高木やキイチゴ属やドクウツギ等の低木、マタタビ属やブドウ属などの藤本等は、伐採地や崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種である。これらは、周辺の河川沿いの低地や人里と林地の境界、後背の森林との境界付近を中心に生育していたものに由来すると推定される。

草本類は、明るく開けた場所に生育する人里植物に属する分類群が多く確認されたことから、遺跡内や周辺域の草地等に生育していたものに由来すると考えられる。さらに、水生植物を含むホタルイ属や、湿った場所に生育するミゾソバ近似種、クサネム近似種、スズメウリ、タカサブロウなどが認められたことから、周辺域には水湿地の存在も推定される。

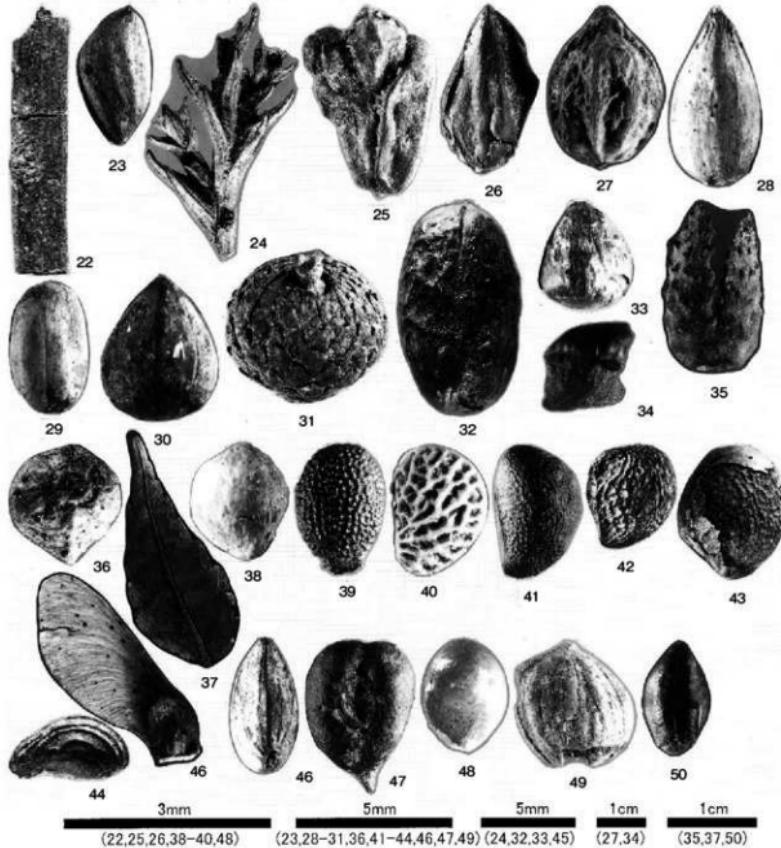
また、これらの自生していたと考えられる分類群のうち、オニグルミ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属、シイ属、クリ、ブナ等の堅果類は、子葉の食用や長期保存が可能であり、クワ属、マタタビ属、キイチゴ属、ブドウ属等は果実が食用可能な種を含む。東側2号墓と2号炉から確認されたオニグルミや、G494東側板の下から確認されたコナラ属コナラ亜属、コナラ属、シイ属、G494東側板の下と2号炉から確認されたブドウ属には炭化した個体が認められたことから、被熱の影響が指摘される。また、上記したように多量の炭化した栽培植物と共に伴する状況から、これらの栽培植物とともに利用されていた可能性もある。

図版1 大型植物遺体（栽培植物）



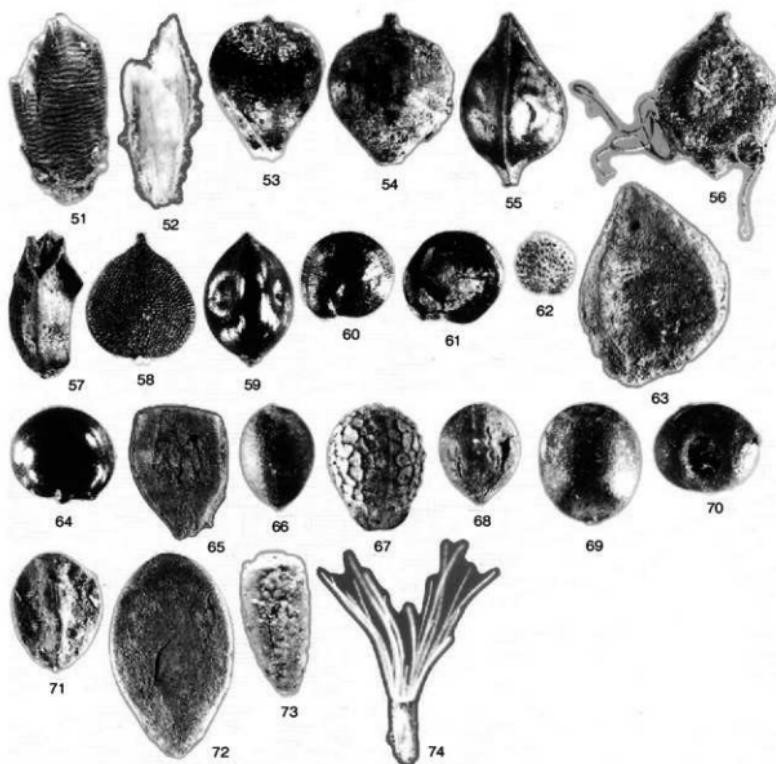
1. スモモ 核(G494東側板の下;上 13)  
 2. モモ 核(G494東側板の下;上 13)  
 3. カキノキ 種子(G494東側板の下;上 12)  
 4. イネ 胚乳(2号炉;下 144)  
 5. イネ 胚乳(発芽個体)(2号炉;下 144)  
 6. イネ 頸(東側2号墓;中 80)  
 7. ヒエーキビ近似種 胚乳(2号炉;下 120)  
 8. ヒエーキビ近似種 果実(2号炉;下 120)  
 9. オオムギ 胚乳・穎(G494東側板の下;中 22)  
 10. コムギ 胚乳(G494東側板の下;中 21)  
 11. ソバ 果実(東側2号墓;中 82)  
 12. マメ類 種子(G494東側板の下;中 21)  
 13. ワタ類? 種子(2号炉;中 110)  
 14. ワタ類? 種子(G494東側板の下;中 18)  
 15. シソ属 果実(G494西側;下 48)  
 16. ナス科 種子(G494;下 7)  
 17. メロン類 種子(雑草メロン型)(G494東側板の下;中 17)  
 18. メロン類 種子(マクワ・シロウリ型)(G494東側板の下;中 17)  
 19. メロン類 種子(モモルディカメロン型)(G494東側板の下;中 17)  
 20. ヒヨウタン類 種子(2号炉;中 132)  
 21. トウガン 種子(G494西側;1-2上 51)

図版2 大型植物遺体(木本)



22. マツ属複維管束亞属 葉(G494;中 6)  
 24. スギ 葉(G494東側板の下;上 28)  
 26. ヒノキ科 種子(2号炉;中 112)  
 28. アサダ 果実(2号炉;中 107)  
 30. イヌシデ 果実(2号炉;下 154)  
 32. コナラ属 子葉(G494東側板の下; 30)  
 34. クリ 果実(2号炉;上 102)  
 36. ケヤキ 果実(G494;上 2)  
 38. クワ属 種子(東側2号墓;下 84)  
 40. キイチゴ属 核(2号炉;下 150)  
 42. イヌザンショウ属 核(2号炉;下 152)  
 44. ドクウツギ 核(東側2号墓;下 84)  
 46. モチノキ属 核(G494東側板の下;上 11)  
 48. キブシ 種子(2号炉;下 151)  
 50. ハクウンボク 種子(2号炉;上 126)
23. マツ属 種子(東側2号墓;下 84)  
 25. ヒノキ 枝条(2号炉;中 112)  
 27. オニグルミ 核(G494東側板の下;上 13)  
 29. サワシバ 果実(2号炉;中 133)  
 31. コナラ属コナラ属 幼果(G494東側板の下;中 21)  
 33. シイ属 果実(G494東側板の下;中 21)  
 35. ブナ 肢斗(東側2号墓;上 76)  
 37. ケヤキ 葉(G494;上 3)  
 39. マタタビ属 種子(2号炉;下 150)  
 41. キハダ 核(2号炉;下 155)  
 43. サンショウ属 核(東側2号墓;中 79)  
 45. カエデ属 果実(G494東側板の下;下 35)  
 47. ブドウ属 種子(2号炉;中 137)  
 49. ミズキ 核(G494東側板の下;上 11)

図版3 大型植物遺体（草本）



3mm

(51-56,58-64,66-71,73,74)

5mm

(57,72)

5mm

(65)

- 51. エノコログサ属 果実(G494;下 7)
- 53. ホタルイ属 果実(G494西側;1-2下 67)
- 55. ギシギシ属 果実(2号炉;下 120)
- 57. ミゾリバ近似種 果実(東側2号墓;中 78)
- 59. タデ属 果実(2号炉;下 153)
- 61. ヒュ科 種子(G494西側;1-2下 67)
- 63. キンボウゲ属 果実(G494西側;下 48)
- 65. クサネム近似種 果実(G494;中 4)
- 67. トウダイグサ属 種子(2号炉;下 150)
- 69. シソ科 果実(2号炉;下 150)
- 71. オミナエシ属 果実(G494西側;下 49)
- 73. タカサゴロウ 果実(G494西側;下 49)

- 52. イネ科 果実(2号炉;中 112)
- 54. カヤツリグサ科 果実(G494;下 7)
- 56. サナエタデ近似種 果実(G494;上 3)
- 58. タデ属 果実(2号炉;下 150)
- 60. アザガ科 種子(2号炉;下 153)
- 62. ナデシコ科 種子(G494;下 7)
- 64. キケマン属 種子(2号炉;下 153)
- 66. エノキグサ 種子(2号炉;下 150)
- 68. スミレ属 種子(2号炉;下 120)
- 70. アカネ科 核(G494東側板の下;下 36)
- 72. スズメウリ 種子(G494東側板の下;中 16)
- 74. キク科 果実(2号炉;中 112)

## 引用文献

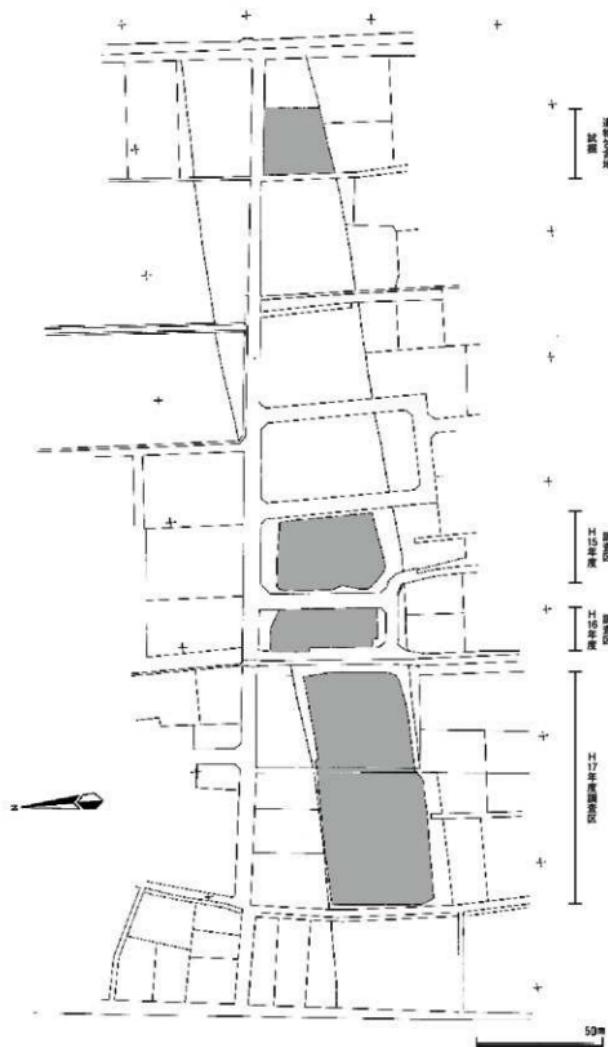
- 青葉 高, 1991, 野菜の日本史.八坂書房, 317p.
- 藤下典之, 1984, 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法.古文化財の自然科学的研究, 古文化財編集委員会編, 同朋舎, 638-654.
- 今泉俊文・町田 博・松田時彦, 2006, 甲府盆地とその周辺日本の地形5中部, 町田 博・松田時彦・海津正倫・小泉武榮編, 東京大学出版会, 65-70.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 笠原安夫・藤沢浅, 2001, 西岡本遺跡の水車遺構から出土した炭化綿種子の同定.神戸市灘区西岡本遺跡, 六甲山麓遺跡調査会編, 209-219.
- 笠原安夫・藤沢浅, 2002, 西岡本遺跡の水車遺構から出土した炭化綿種子.東大阪市文化財協会ニュースVol.5, No.4, 財団法人東大阪市文化財協会, 7-10.
- 小林広和・猪股一弘, 2006, 小井川遺跡2005年度下半期遺跡調査発表会要旨, 山梨県埋蔵文化財センター, 8-9.
- 松谷 晓子, 1980, 十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について.浦幌町郷土博物館報告, 第16号, 203-211.
- 松谷 晓子, 2000, 植物遺残の識別と保存について.Ouroboros, 東京大学総合研究博物館ニュース, Volume5, Number1, 8-10.
- 南木睦彦, 1991, 栽培植物, 古墳時代の研究 4 生産と流通 I, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 165-174.
- 南木睦彦・中川治美, 2000, 大型植物遺体琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 粟津湖底遺跡 自然流路(粟津湖底遺跡Ⅲ), 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会, 49-112.
- 中山至大・井口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑.東北大学出版会, 642p.
- 矢野 桦, 2002, 遺跡から出土した小型豆のDNA分析. DNA考古学Newsletter3.
- 吉崎昌一, 1992, 古代雑穀の検出.月刊考古学ジャーナル, No.355, 2-14.



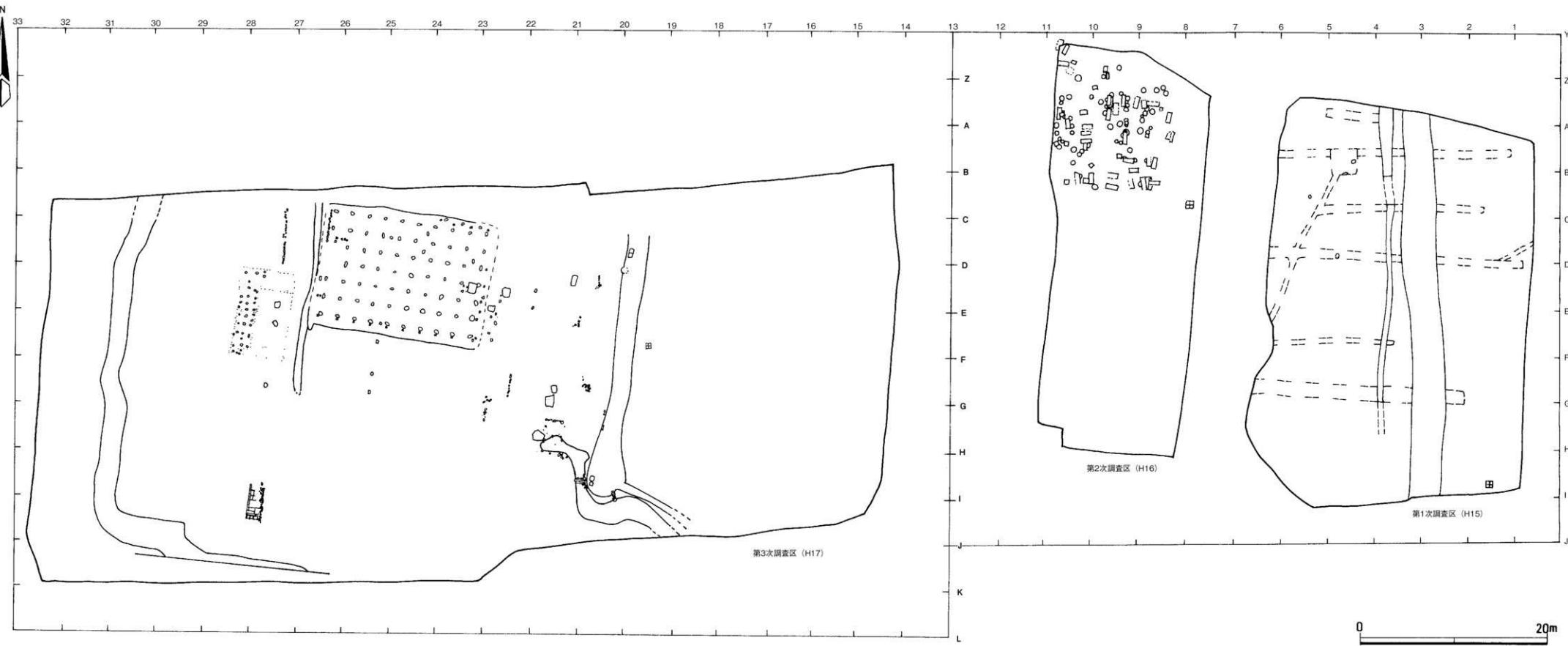




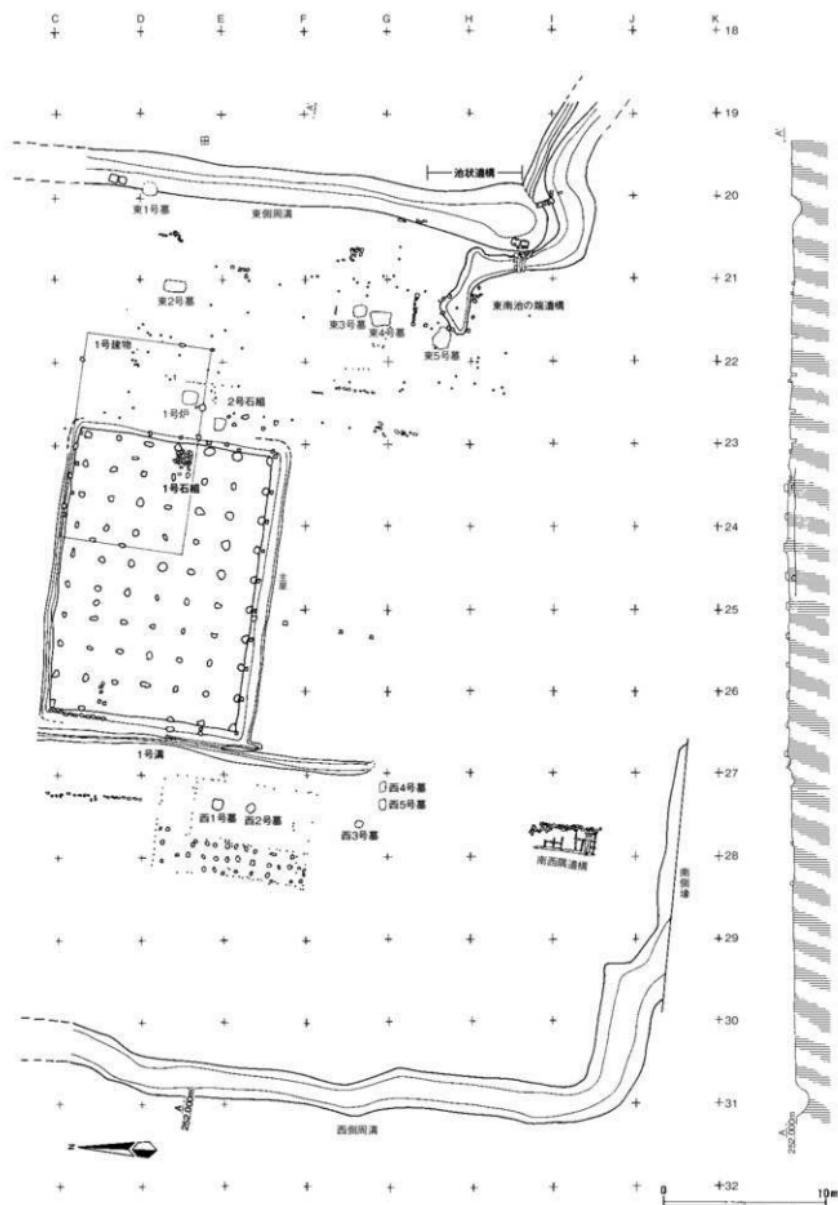




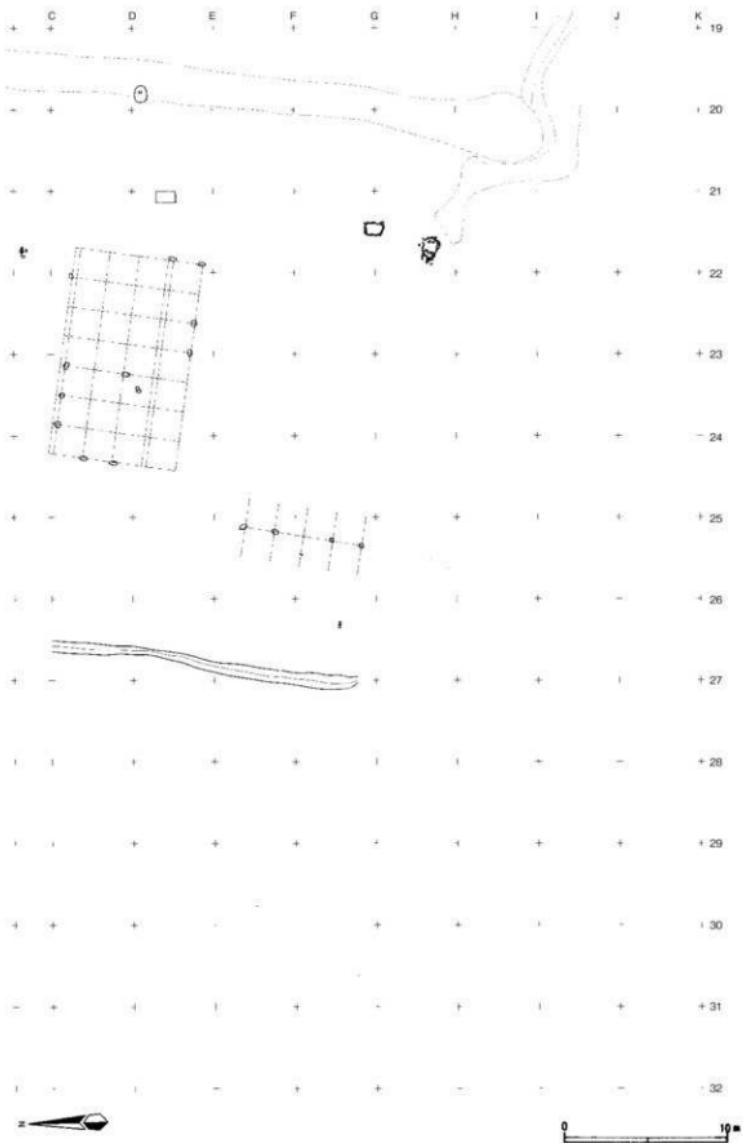
第1図 調査区域



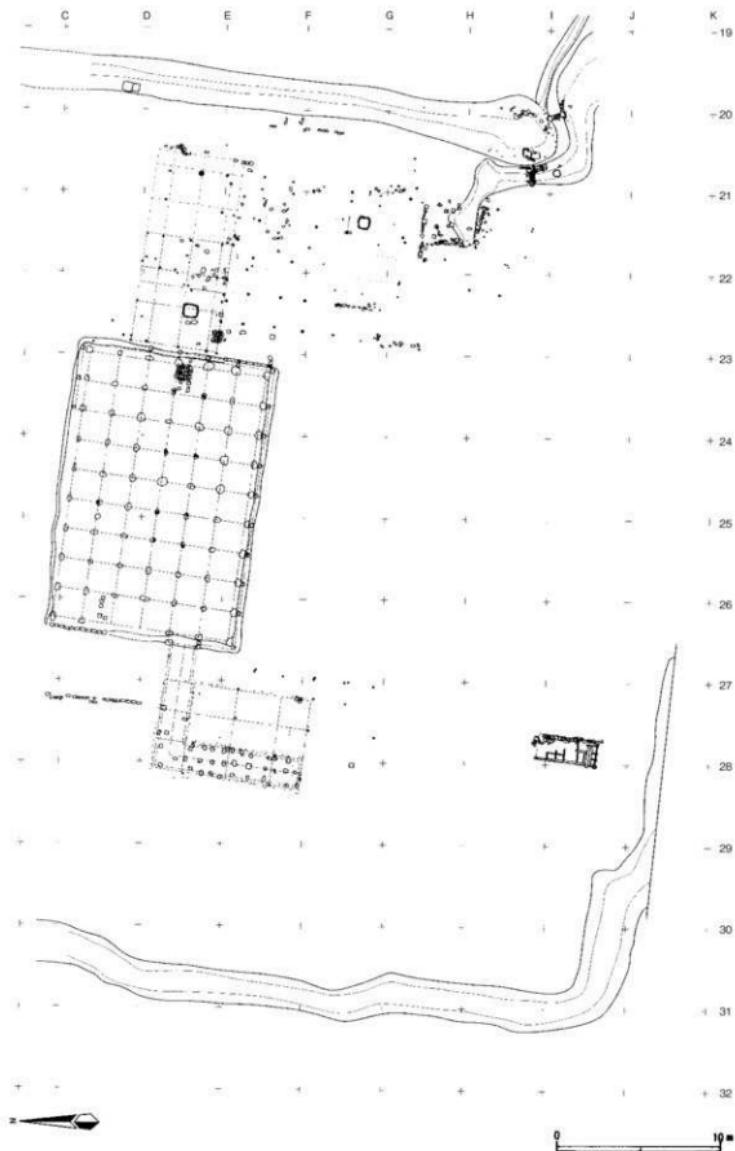
第2図 小井川遺跡調査区全体図



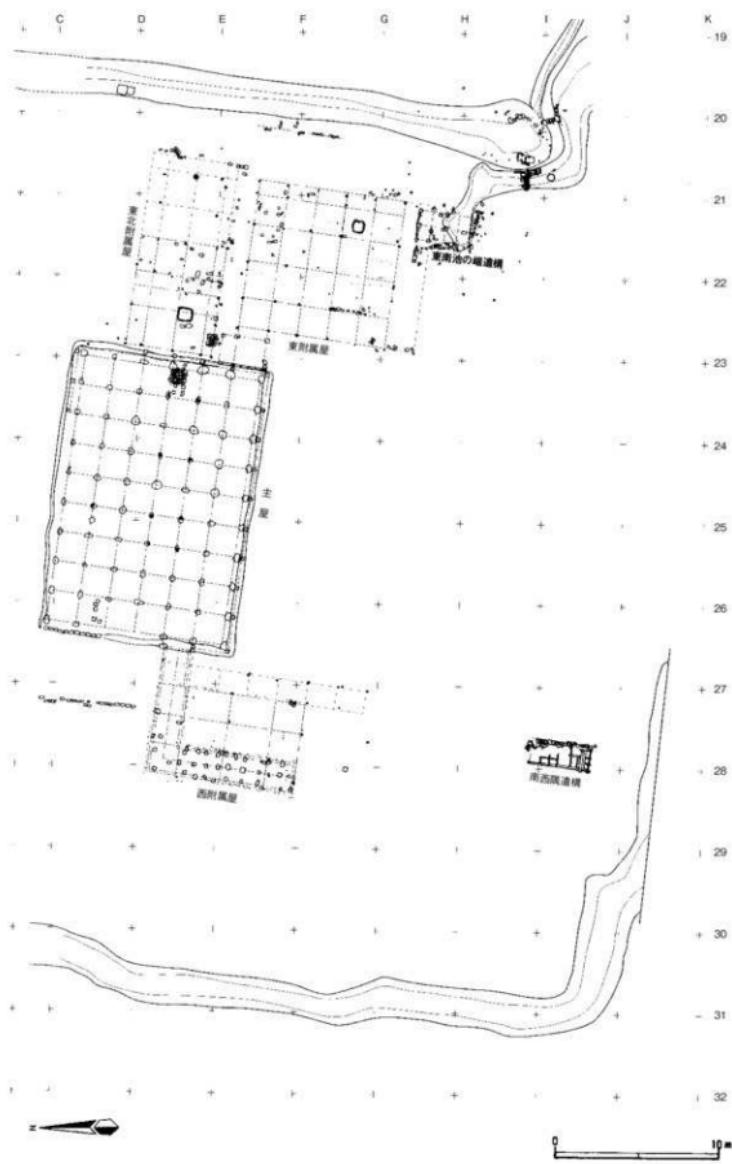
第3図 小井川遺跡第3次遺構配置図（全体図）



第4図 第Ⅱ期・遺構配置図（1号磁石建物・2号溝）



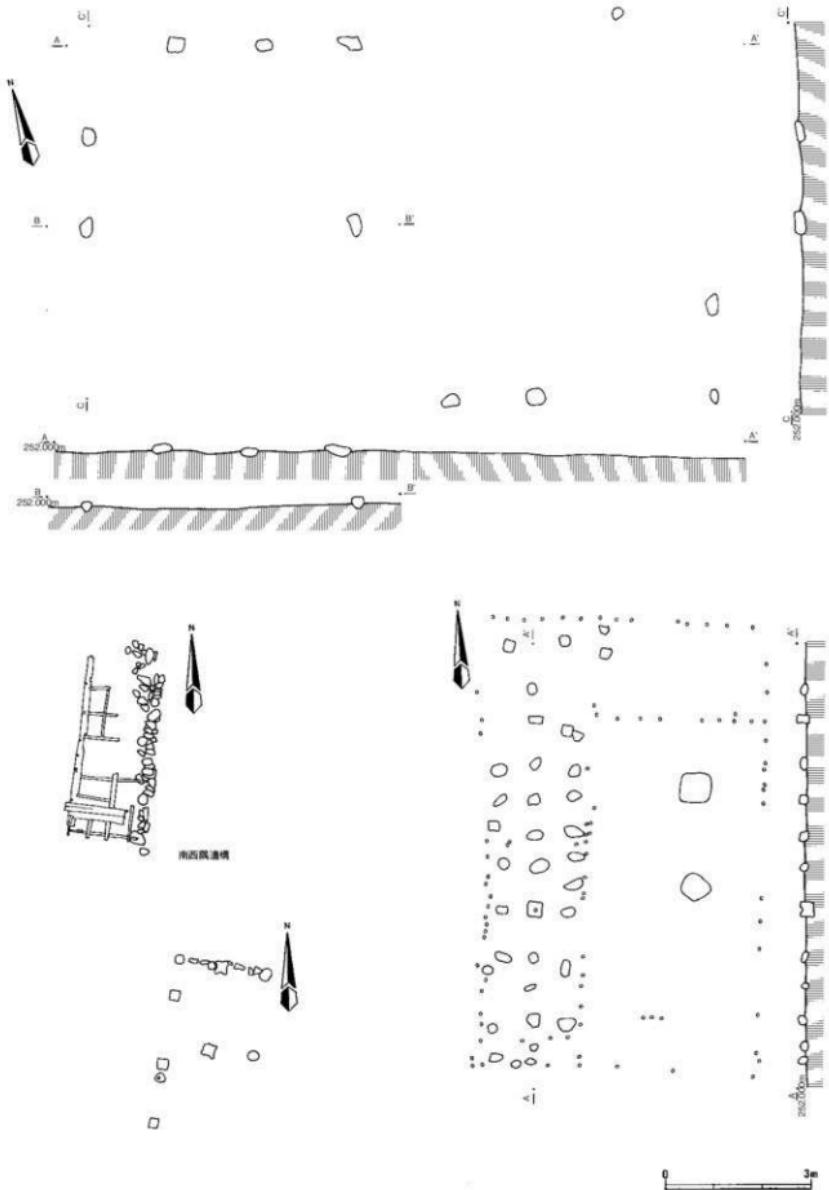
第5図 第III期・遺構配置図(1)



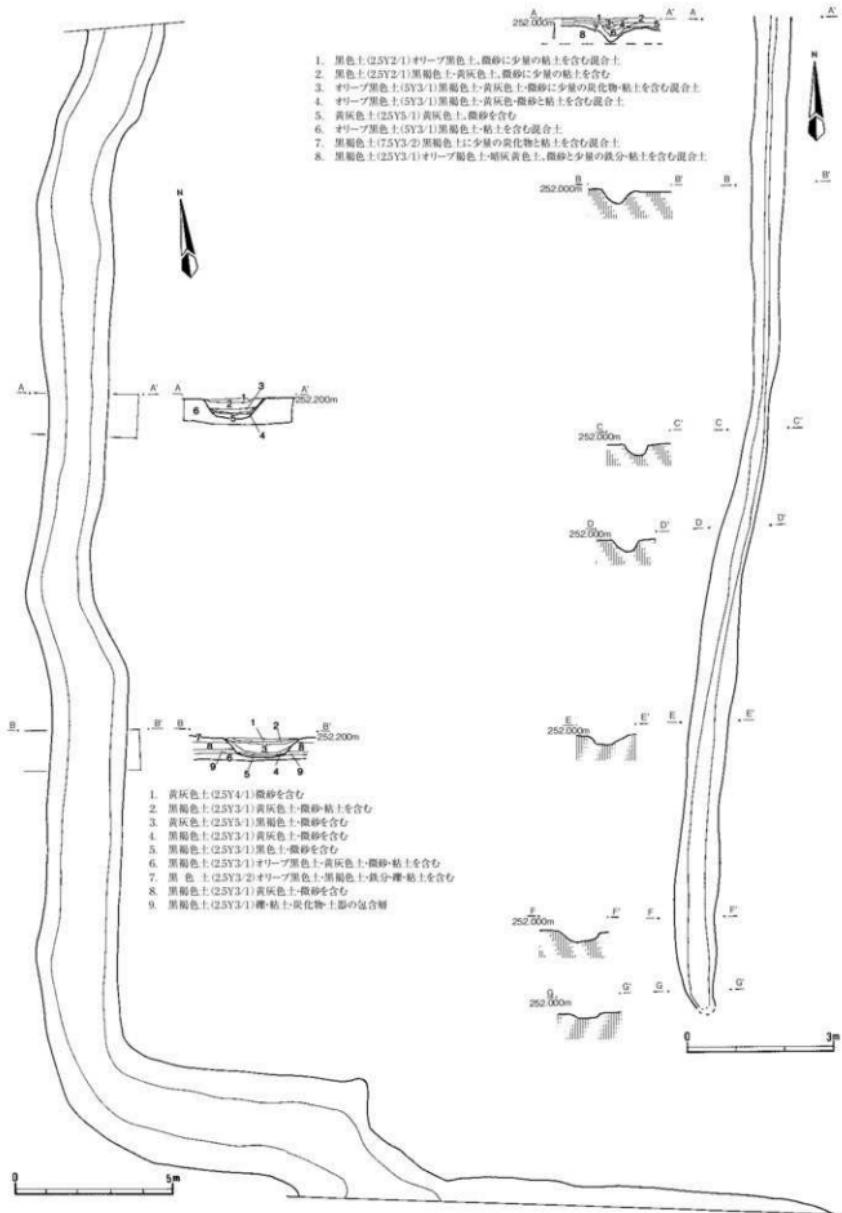
第6図 第Ⅲ期・遺構配置図(2)



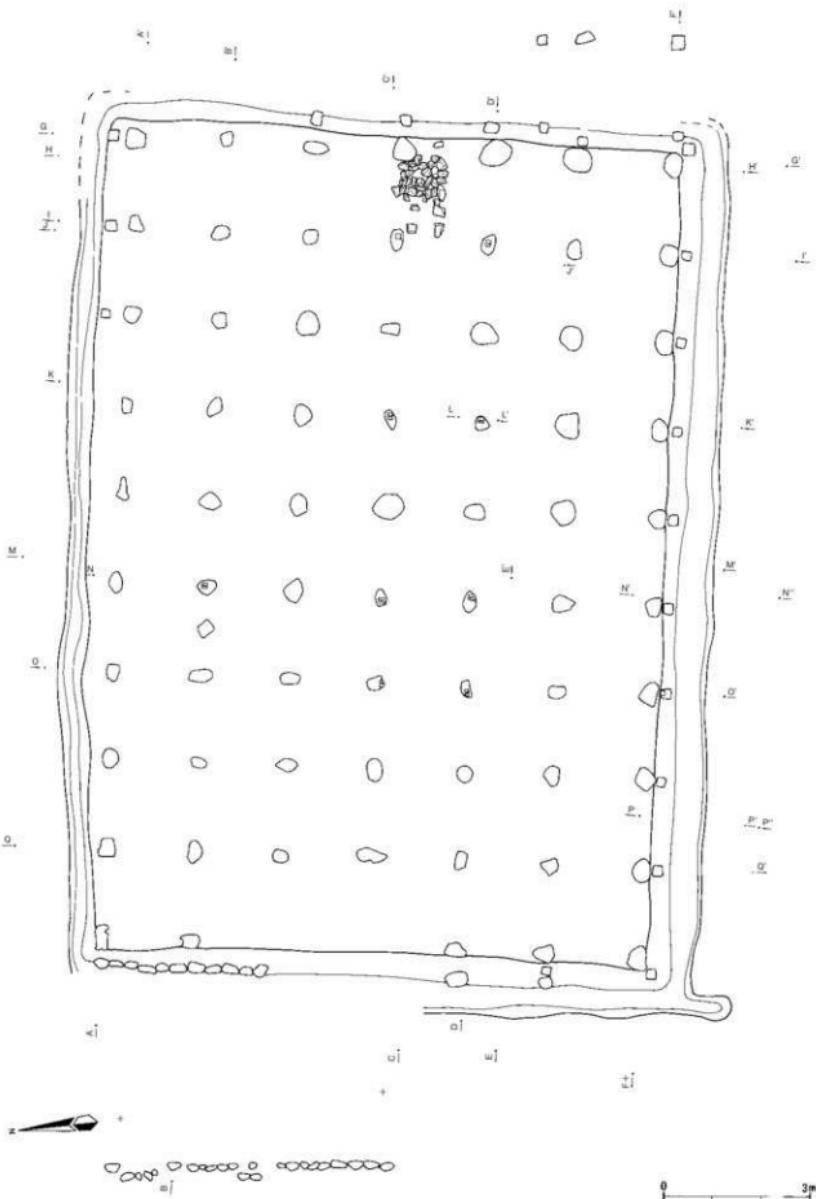
第7図 第III期・遺構配置図(3)



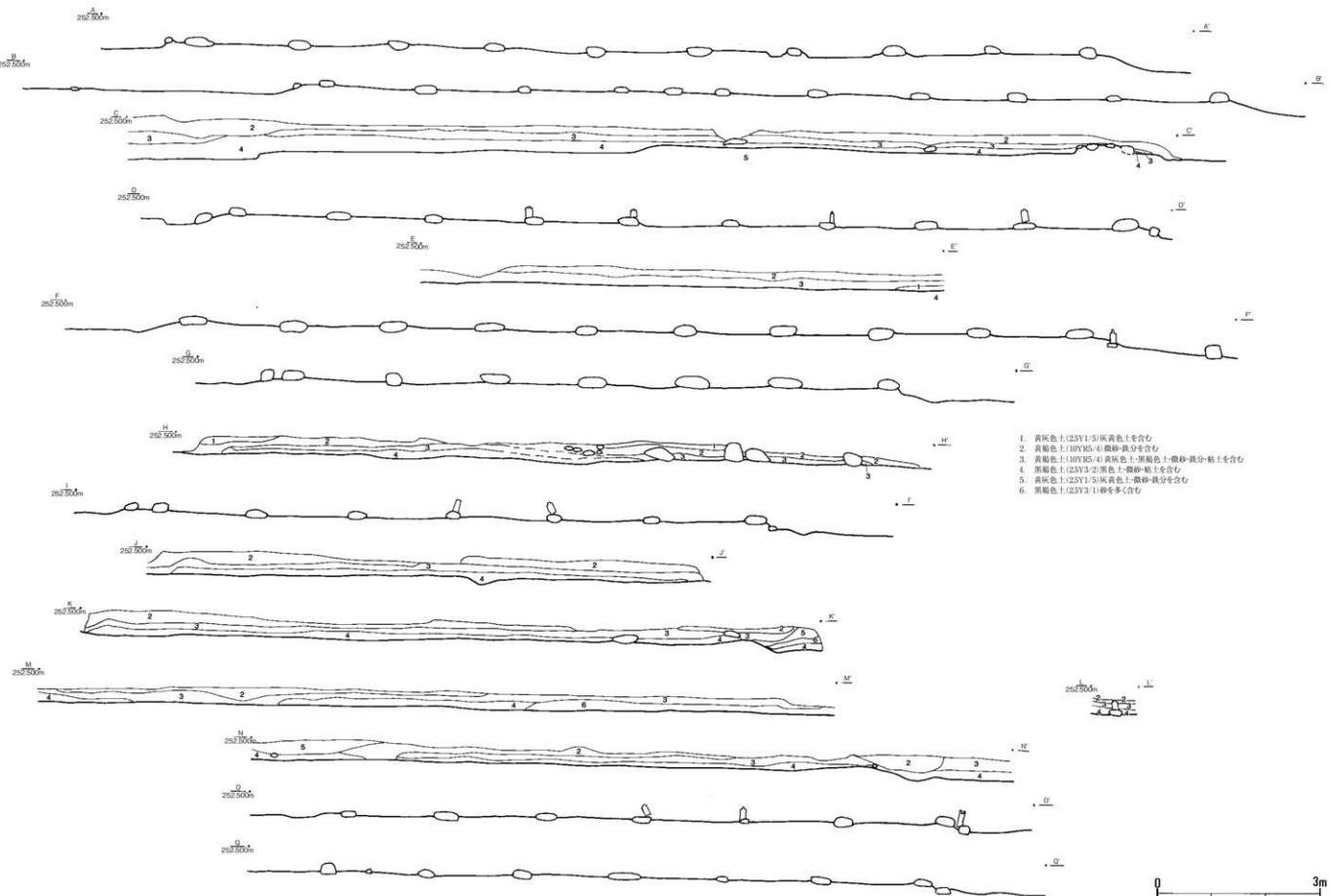
第8図 第Ⅱ期・1号礎石建物屋(上)、第Ⅲ期・西附属屋(右)・南西隅遺構(左)



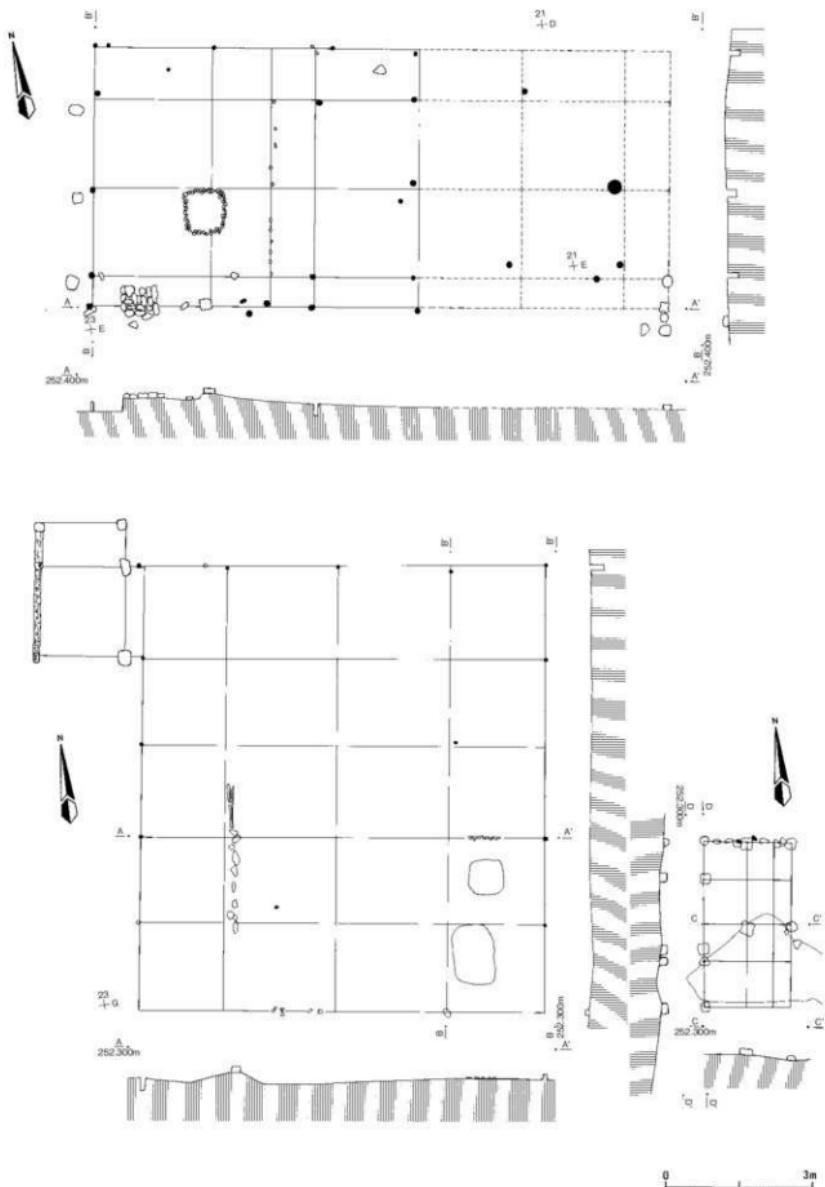
第9図 第III期 西側壕(左)・1号溝(右)



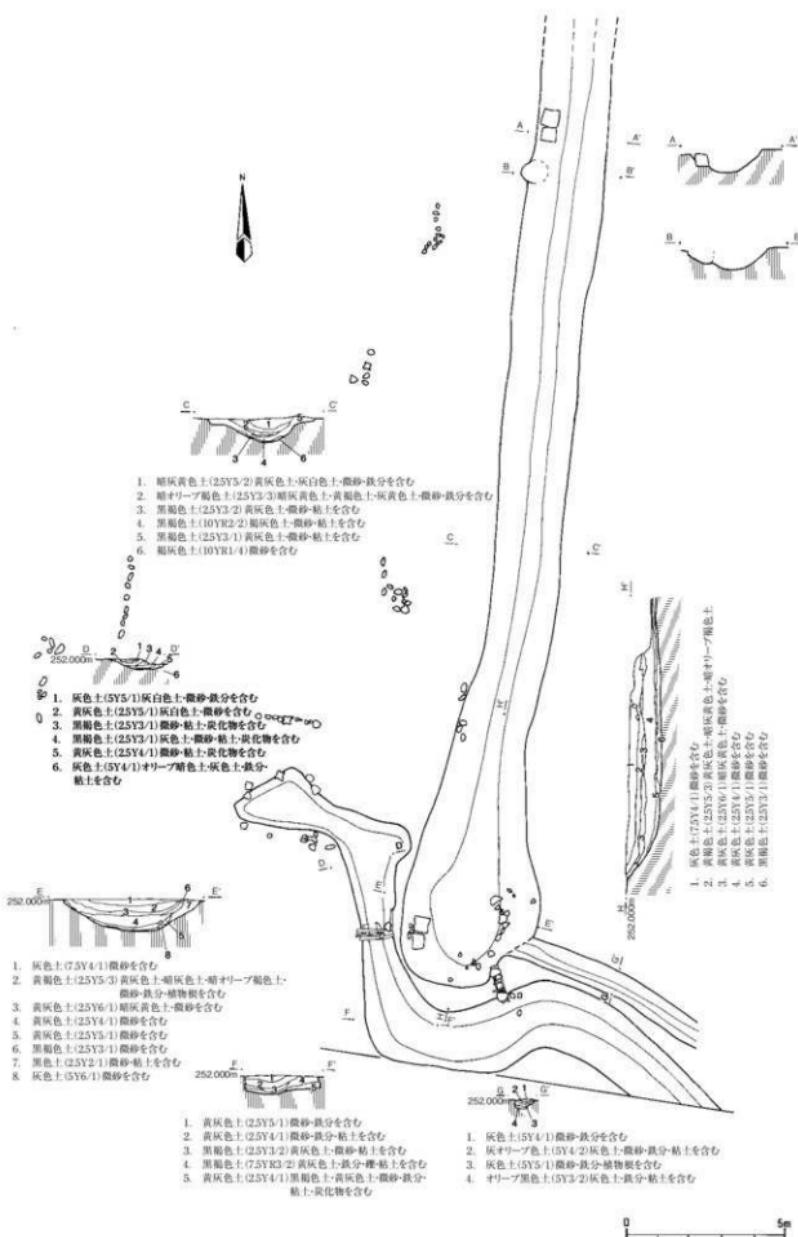
第10図 第Ⅲ期・主屋(1)



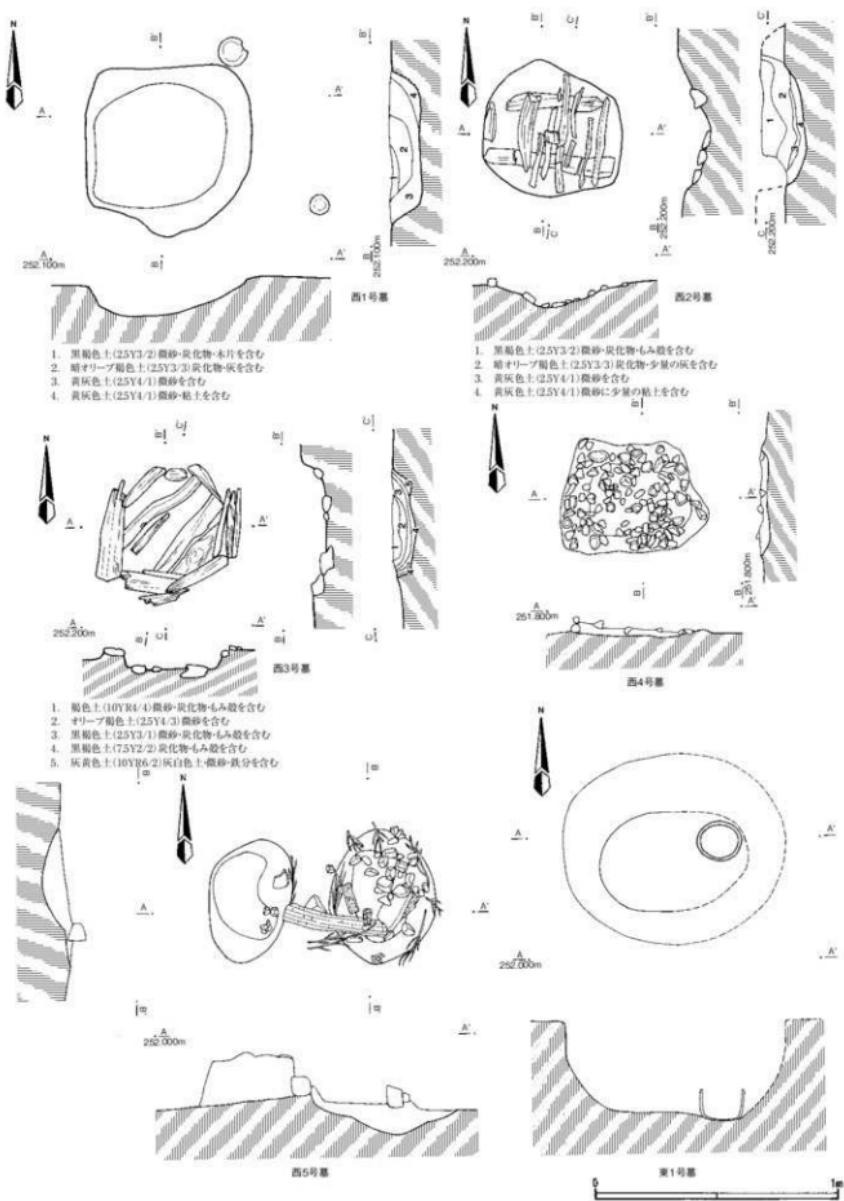
第11図 第Ⅲ期・主屋(2)



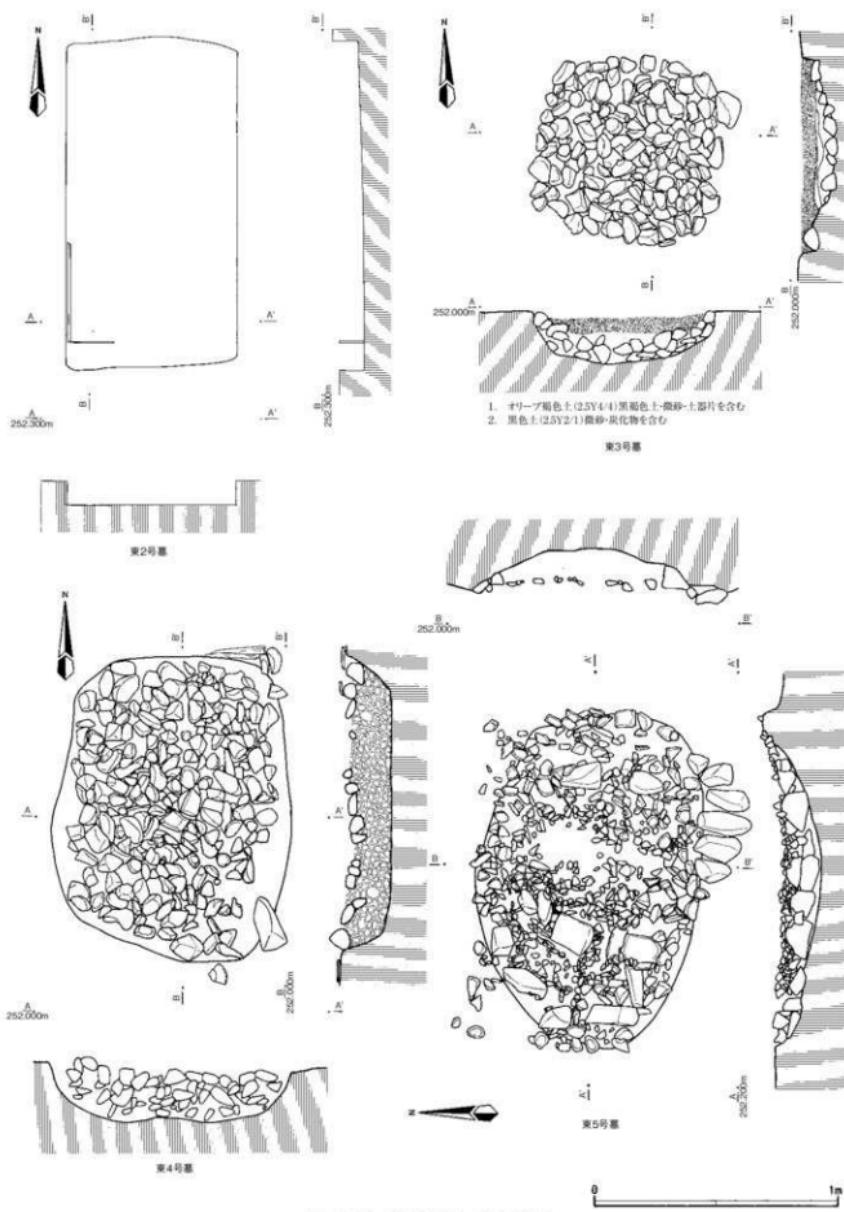
第12図 第III期・東北附属屋(上)・東附属屋(左)・東南池の端遺構(右)



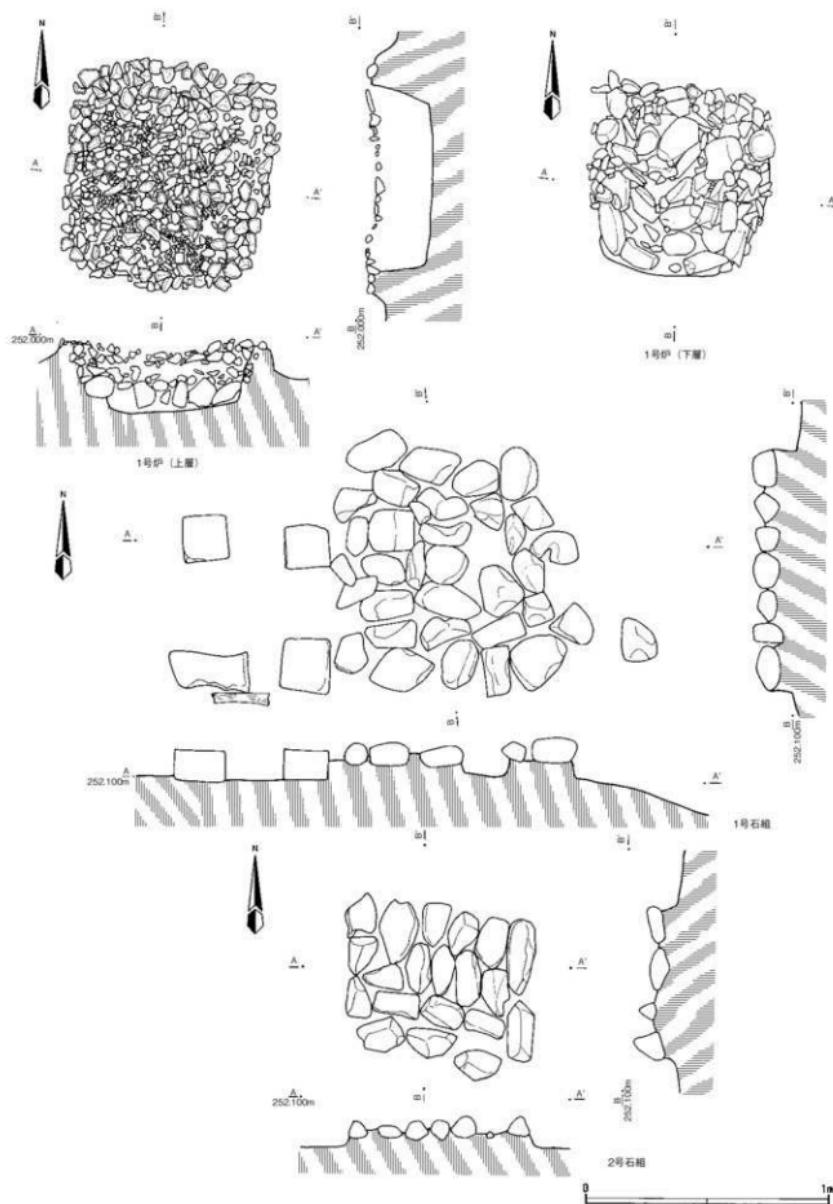
第13図 第III期・東側壕及池状遺構



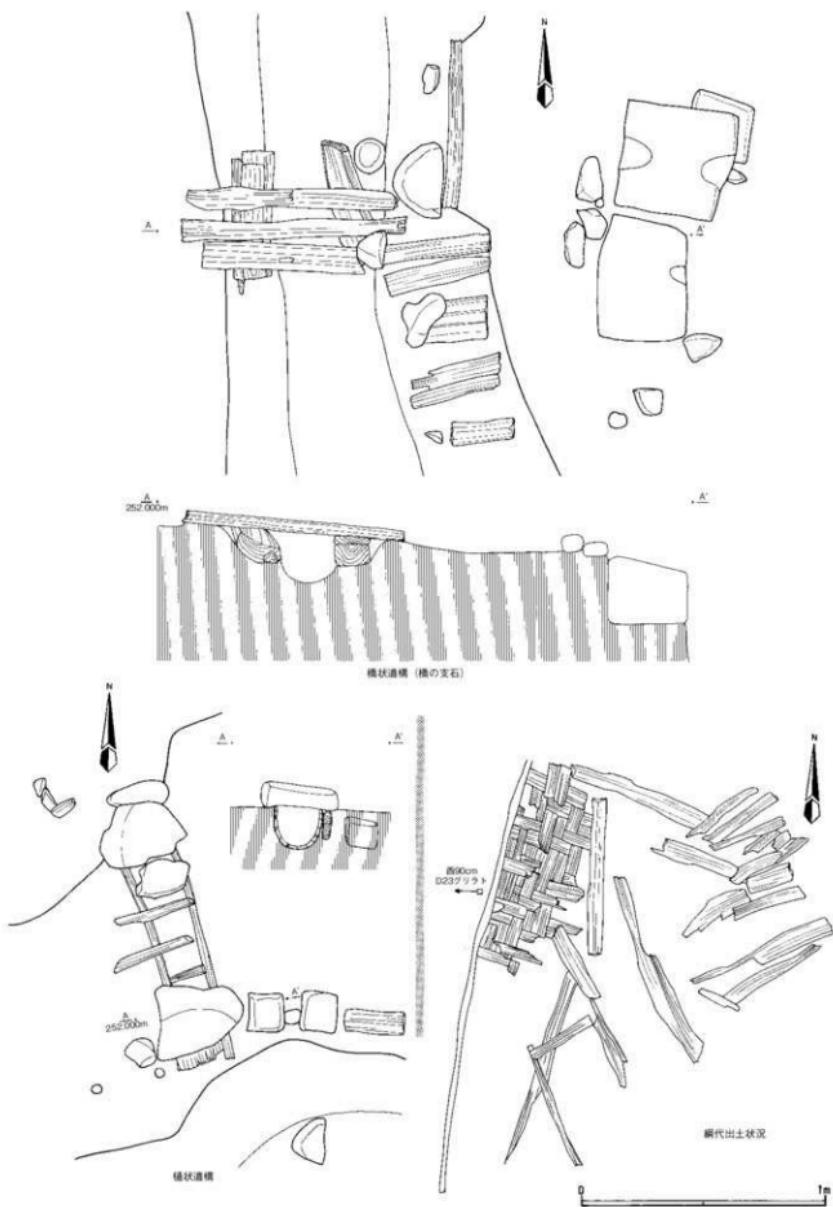
第14図 西1～5号墓・東1号墓



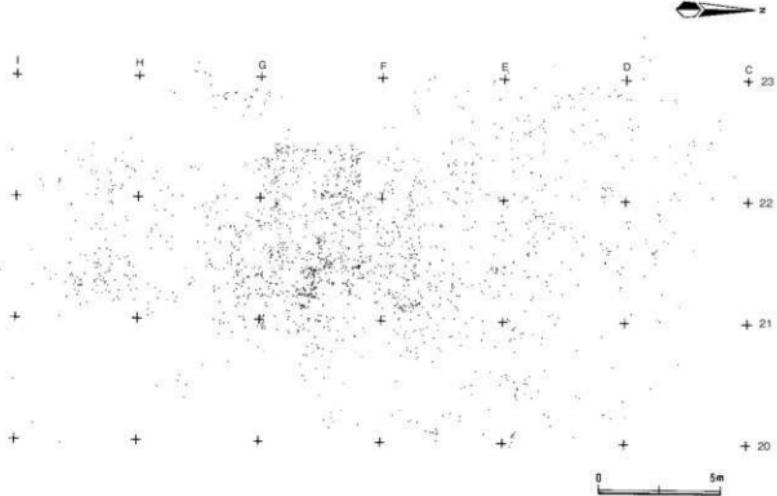
第15図 東2号墓～東5号墓



第16図 1号炉(上)1号・2号石組



第 17 図 橋状遺構（上） 桿状遺構（左） 綱代出土状況（右）



第18図 東地区・遺物垂直分布図

24

+

22

+

20

+

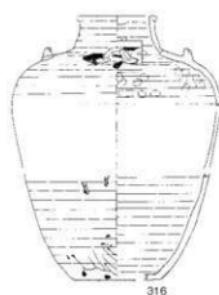
c



+

+

+ E



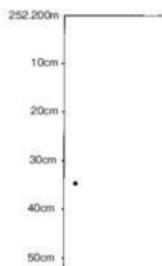
316

+

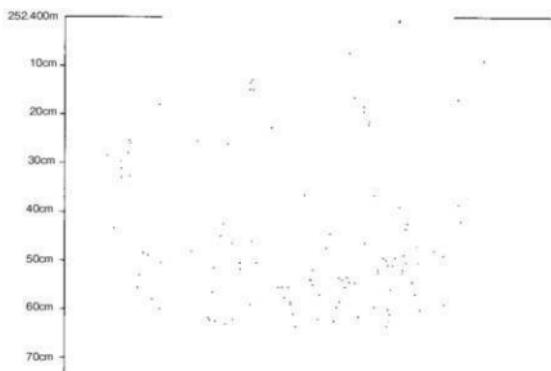
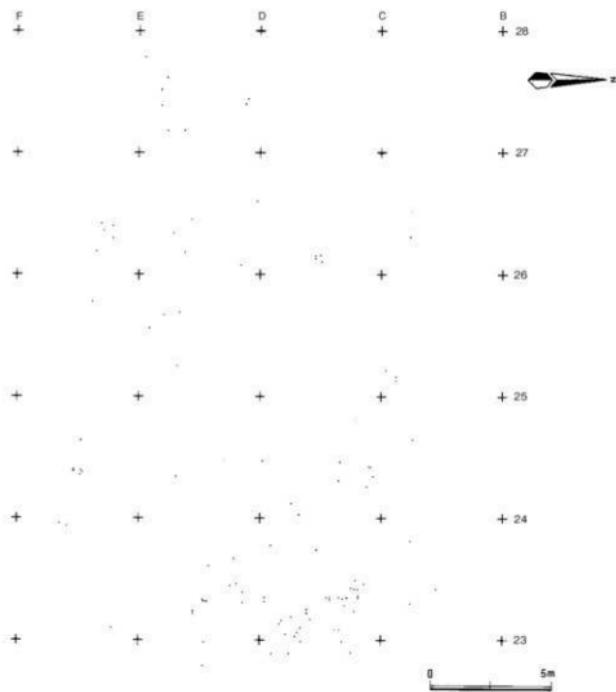
+ G

+

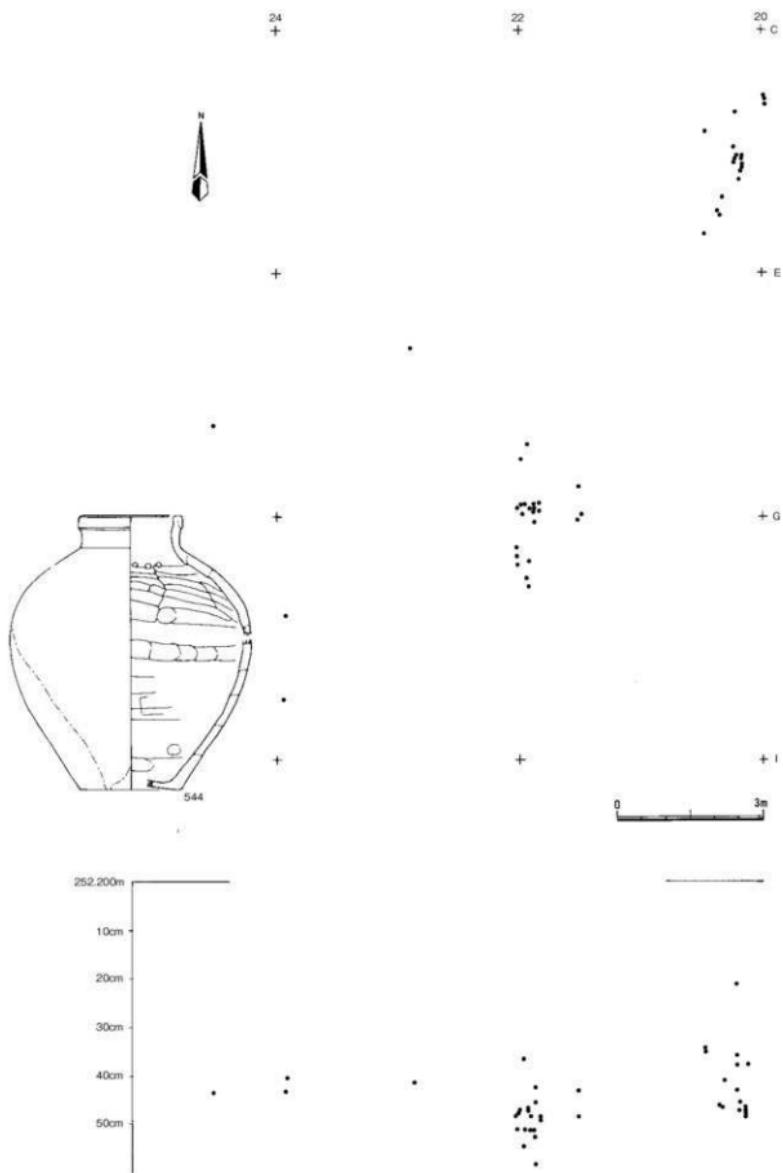
+ I



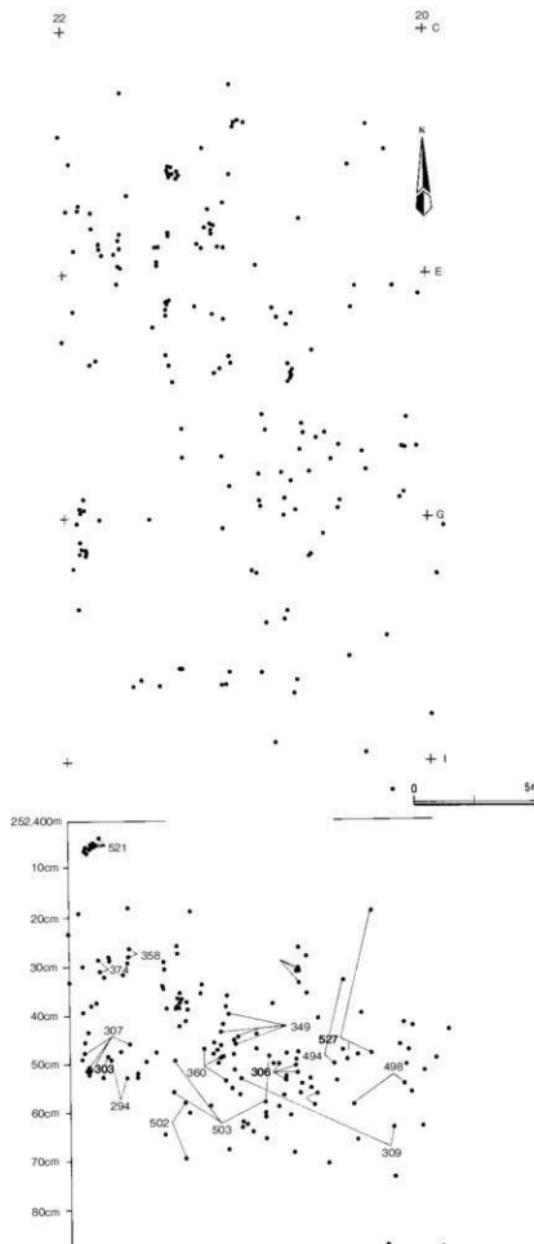
第19回 祖母懷茶壺出土遺物垂直分布図



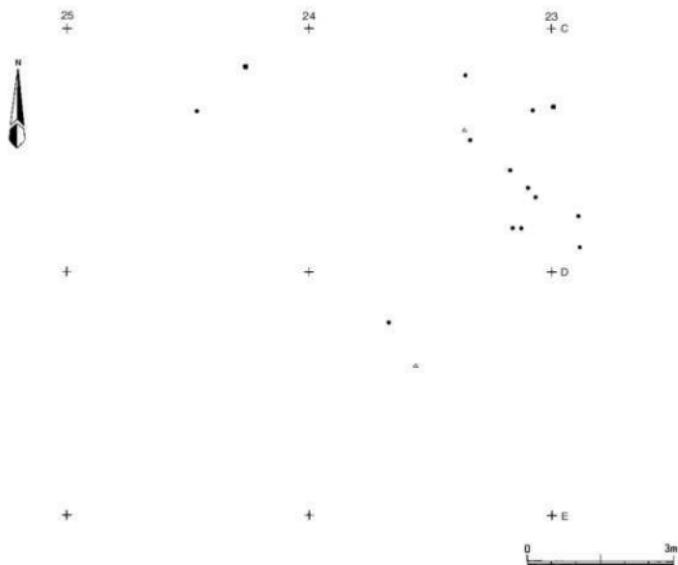
第 20 図 1 号磁石建物遺物垂直分布図



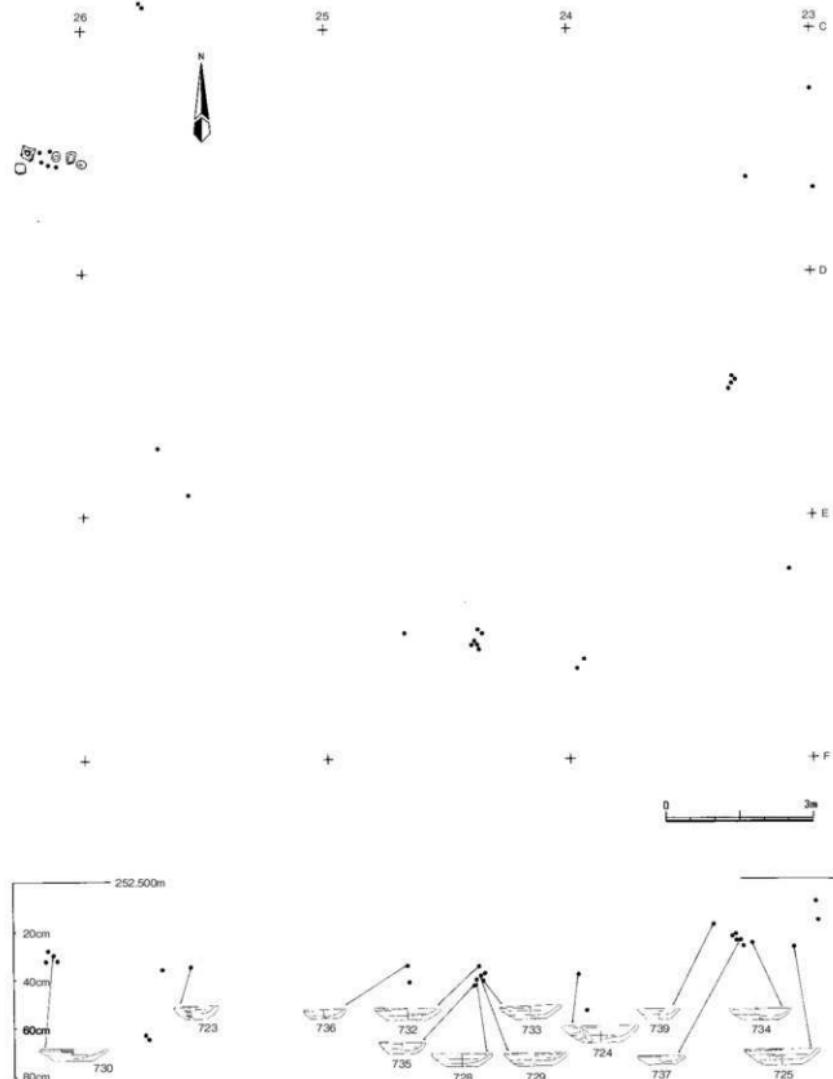
第21図 常滑垂直分布図



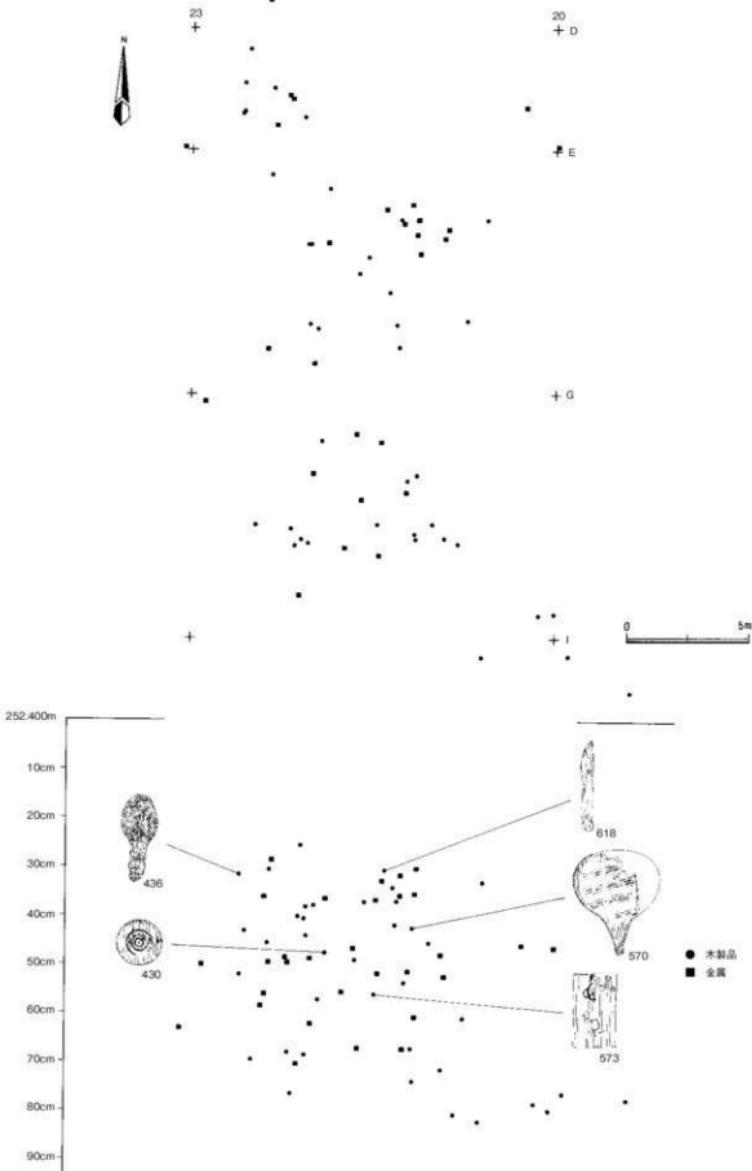
第22図 東地区・土器垂直分布図



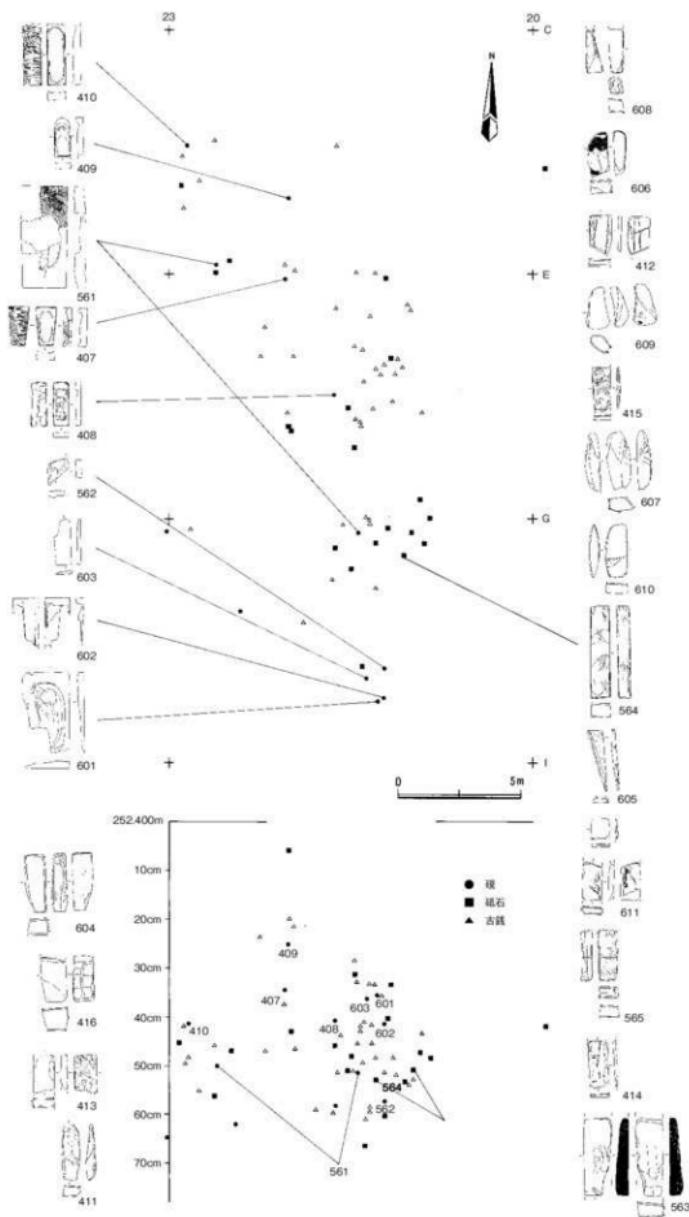
第23図 1号礎石建物・遺物垂直分布図



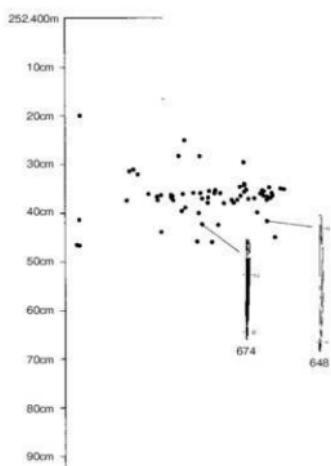
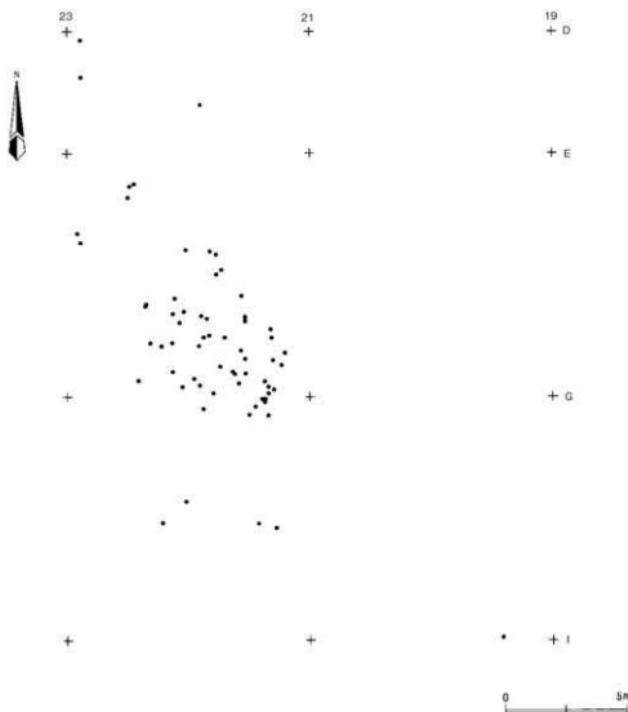
第24図 第III期・主屋西側・土器垂直分布図



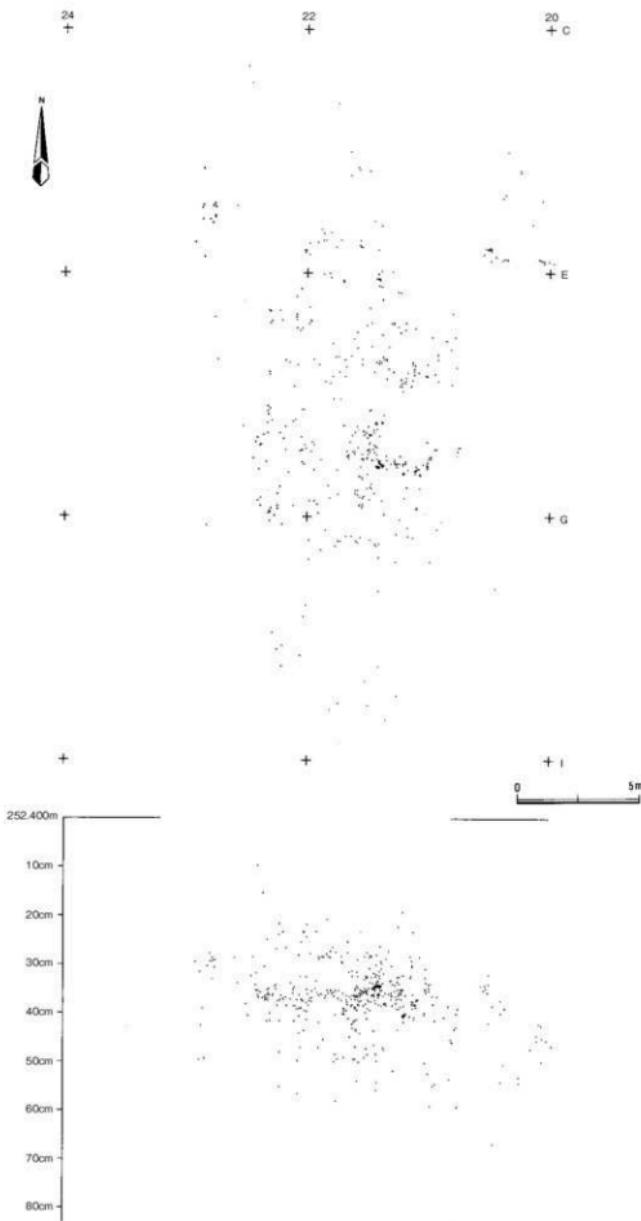
第25図 東地区・木製品・金属垂直分布図



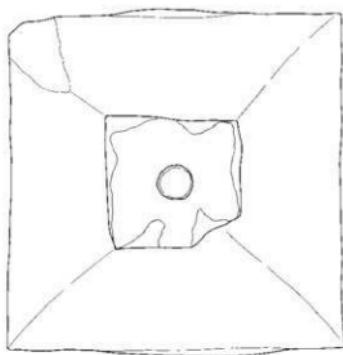
第26図 砥・砥石・古銭垂直分布図



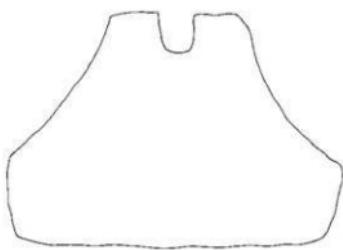
第27図 東地区・箸状垂直分布図



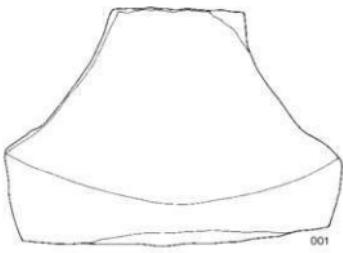
第28図 東地区・胡桃垂直分布図



1



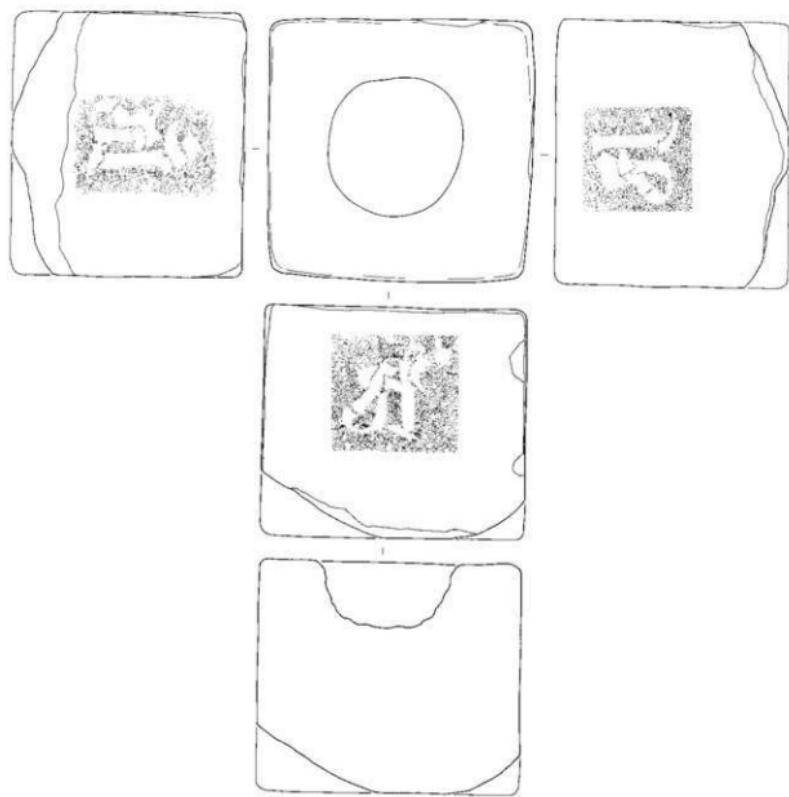
1



001

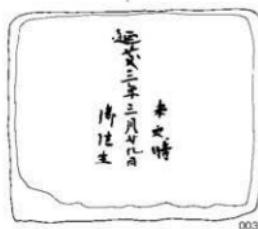
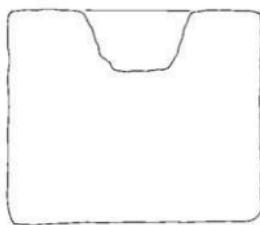
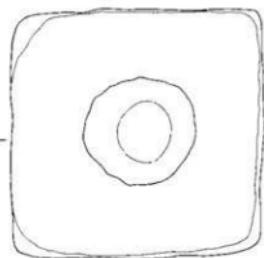
A scale bar at the bottom right of the diagram, labeled "20 cm".

第29図 五輪塔（火輪）実測図



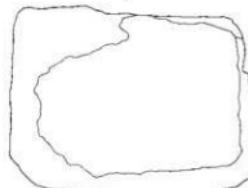
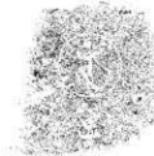
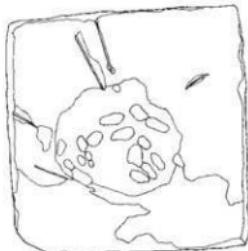
0 20m

第30図 五輪塔（地輪）実測図

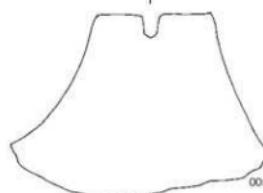
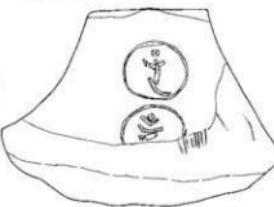
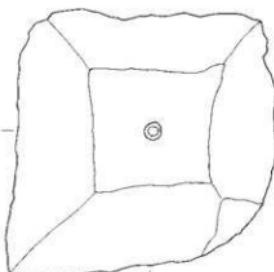


003

0 20m



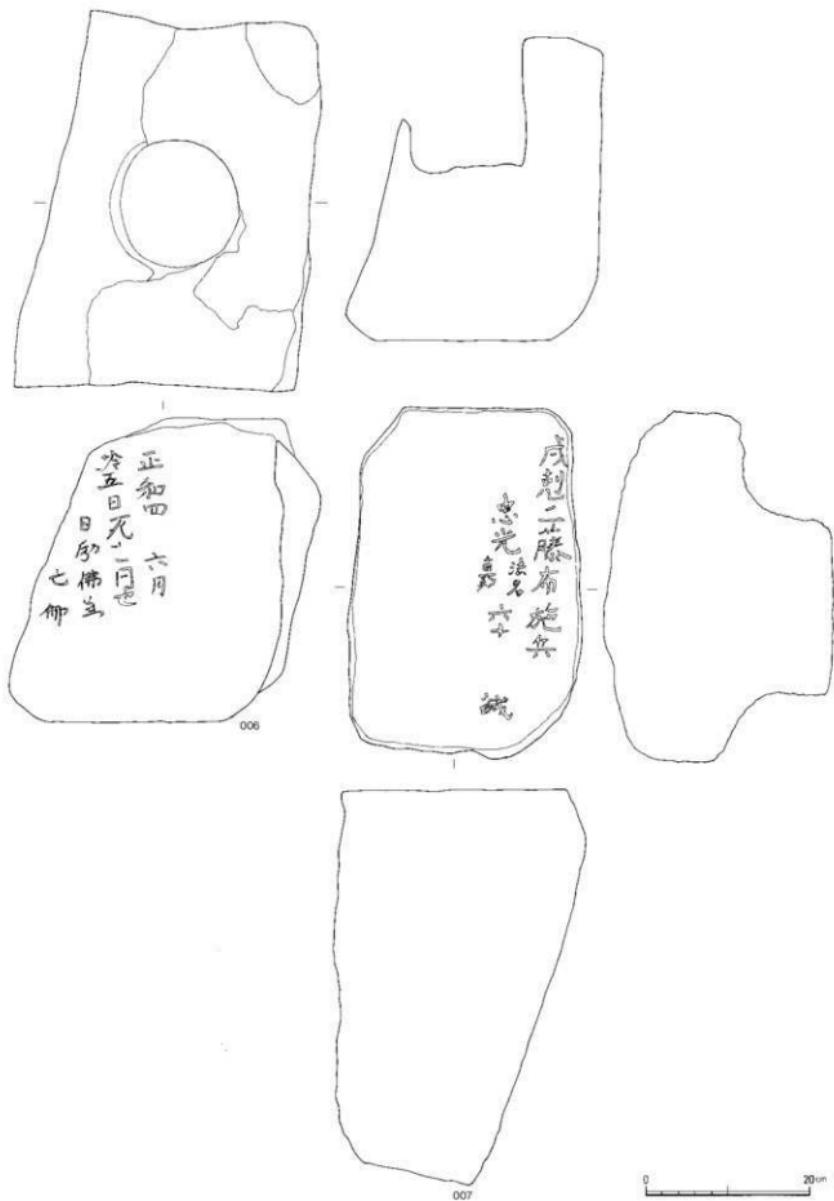
004



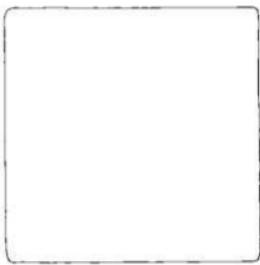
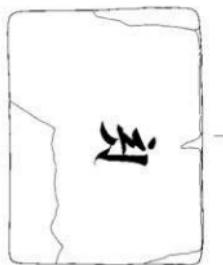
005

0 20m

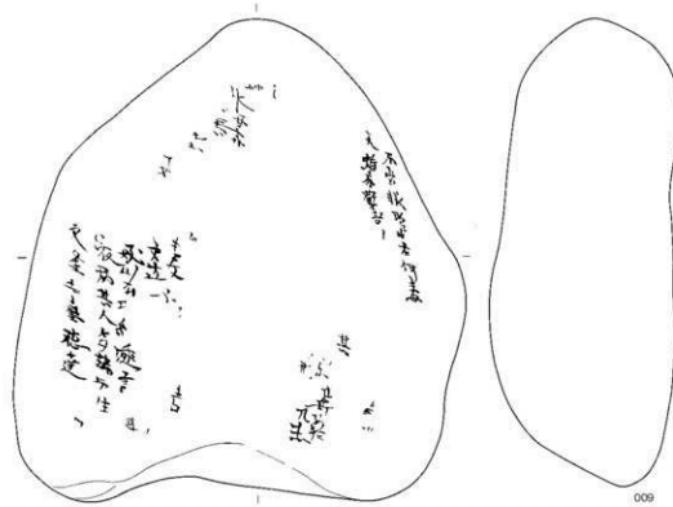
第31図 五輪塔（地輪・火輪）実測図



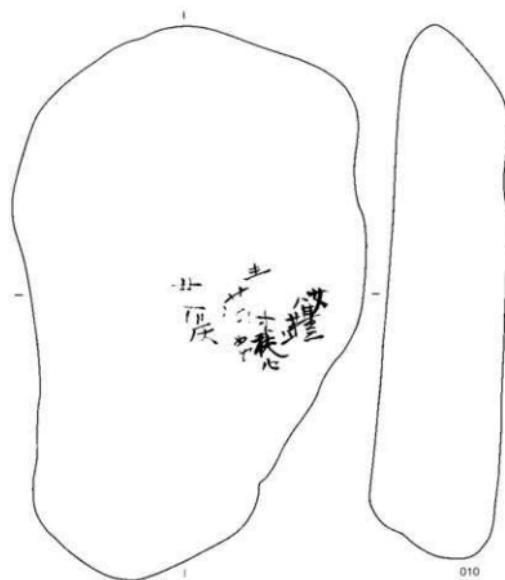
第32図 五輪塔（地輪）実測図



第33図 五輪塔（地輪）実測図

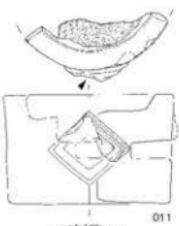


009

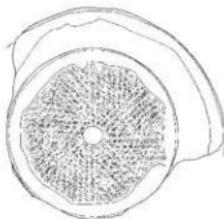


0 10 cm

第34図 墨書き石実測図



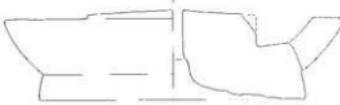
011



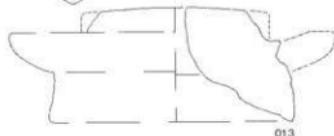
012



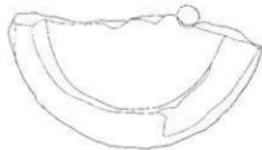
013



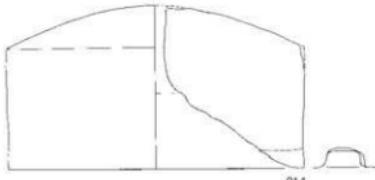
014



015



016

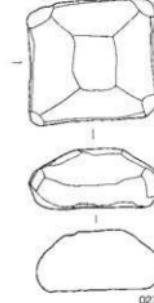
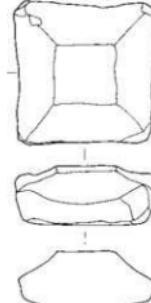
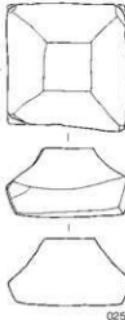
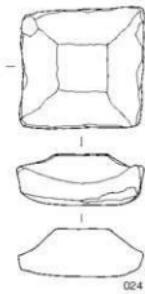
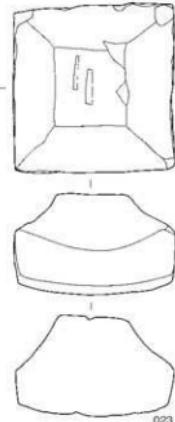
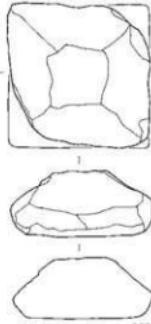
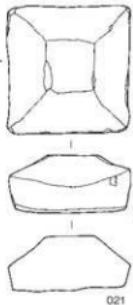
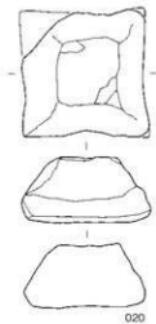
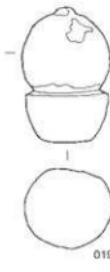
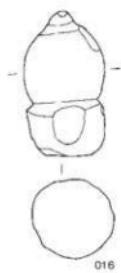


017



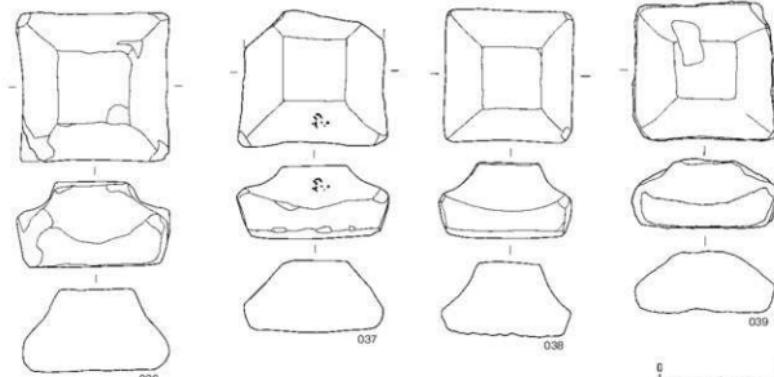
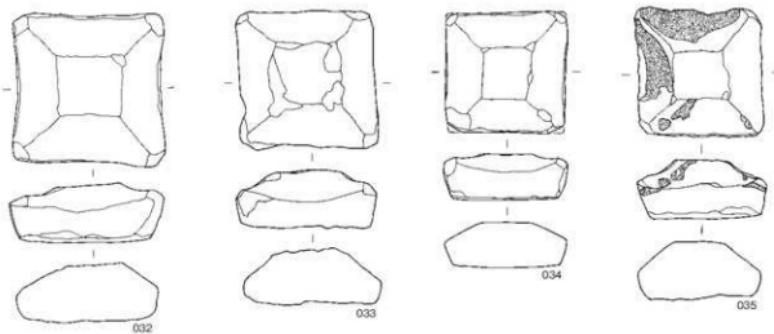
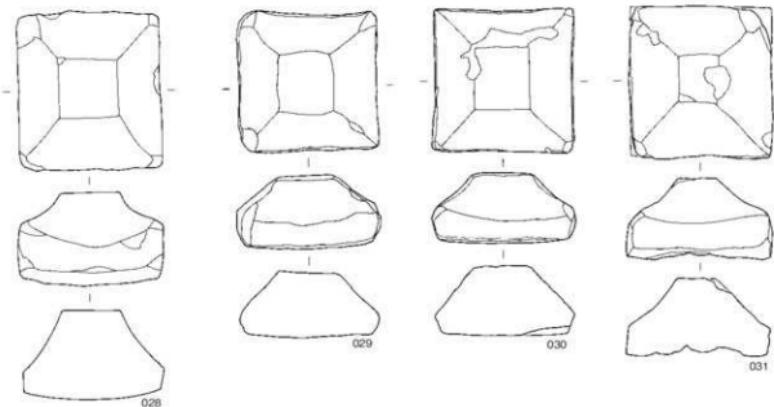
018

第35図 茶臼・石臼実測図



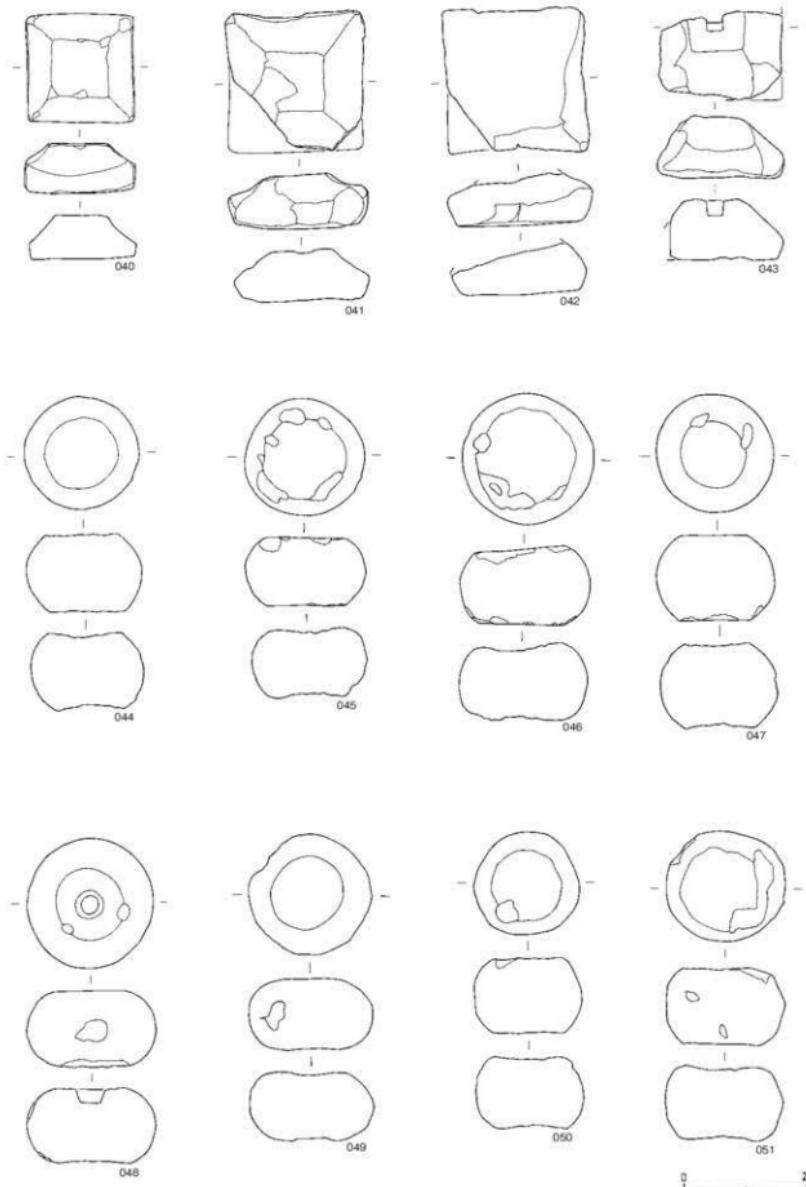
0 20 cm

第36図 五輪塔（空風輪・火輪）実測図

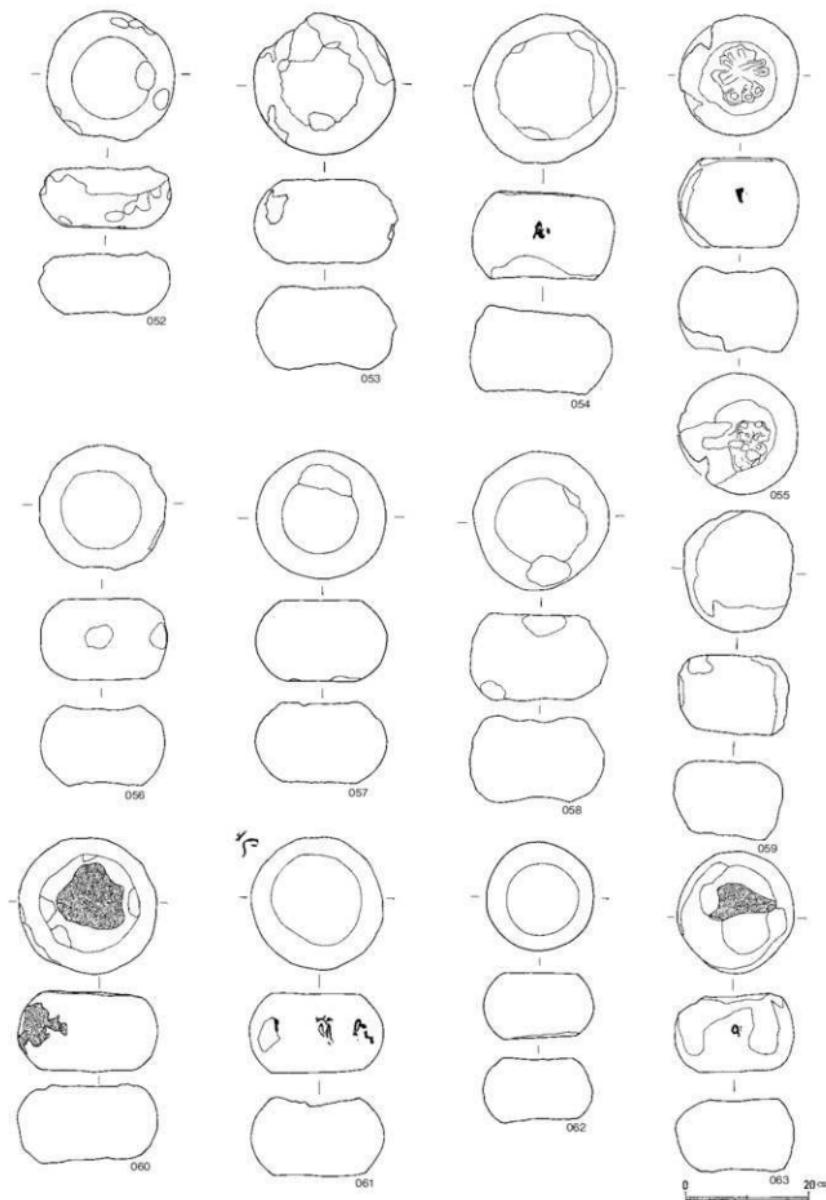


0 20cm

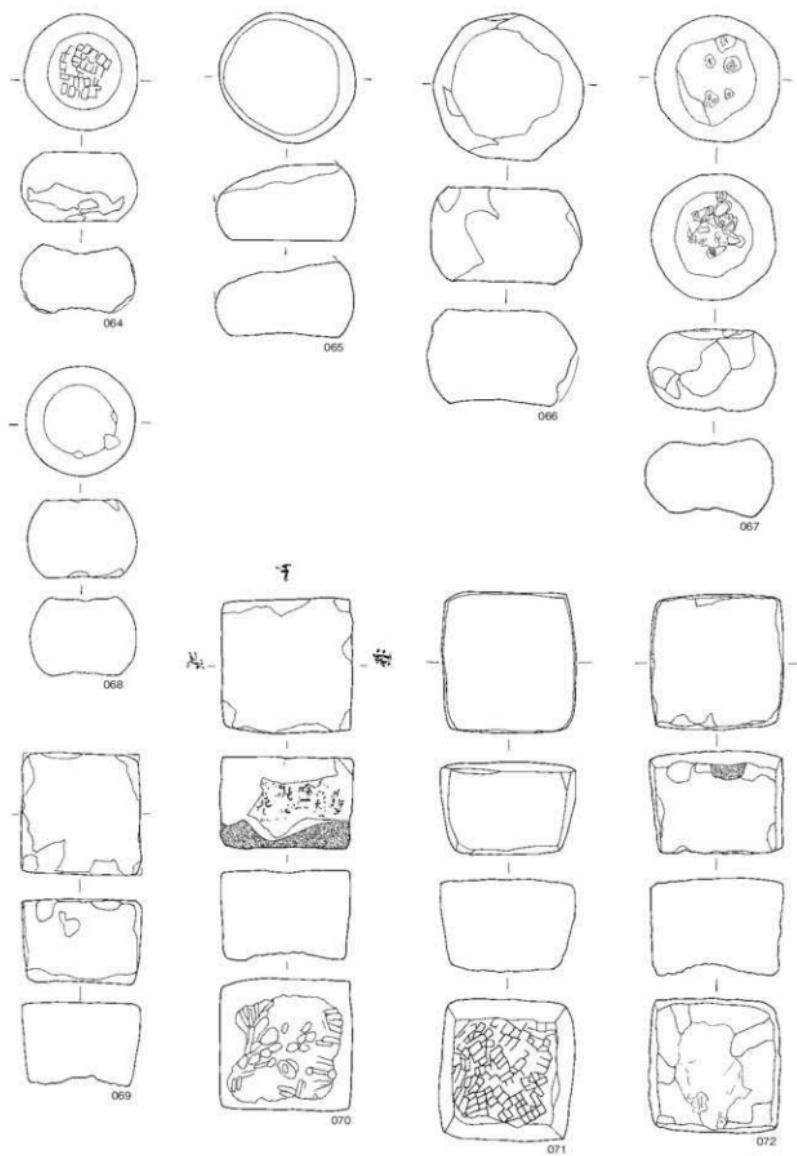
第37図 五輪塔（火輪）実測図



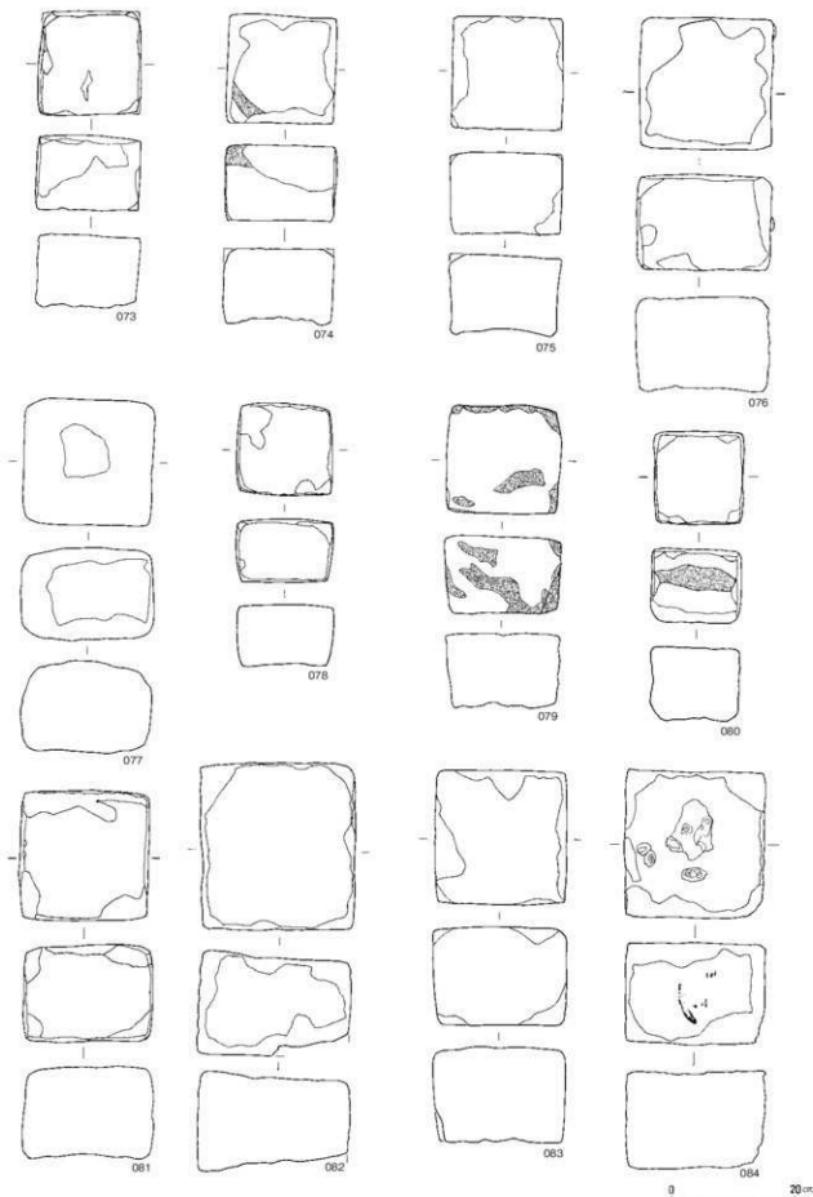
第38図 五輪塔（火輪・水輪）実測図



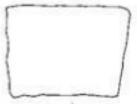
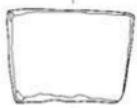
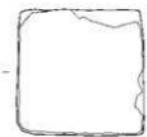
第39図 五輪塔（水輪）実測図



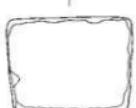
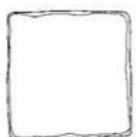
第40図 五輪塔（水輪・地輪）実測図



第41図 五輪塔（地輪）実測図

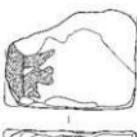


085

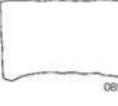
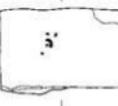
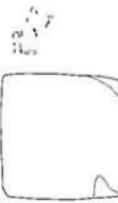


086

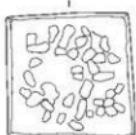
087



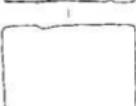
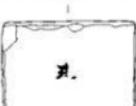
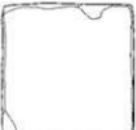
088



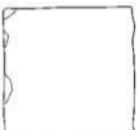
089



090

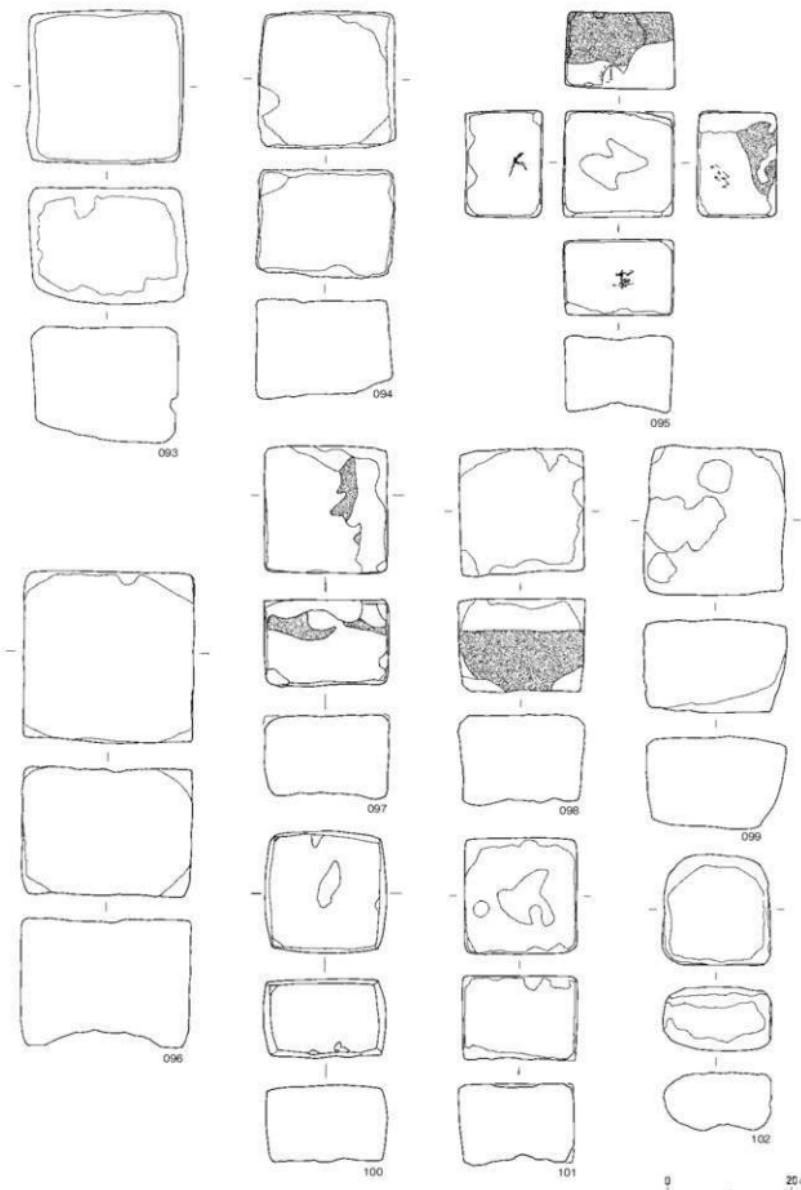


091

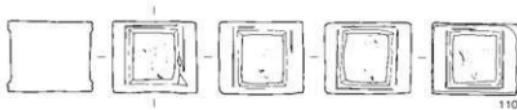
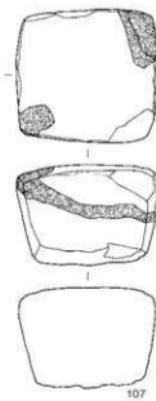
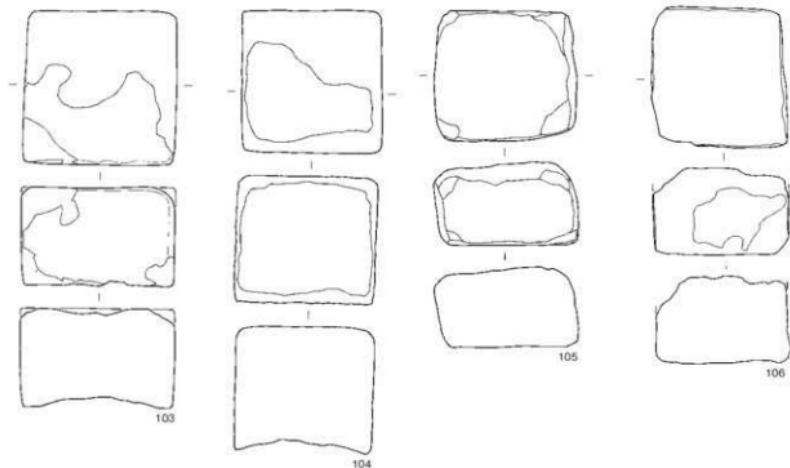


092

第42図 五輪塔（地輪）実測図

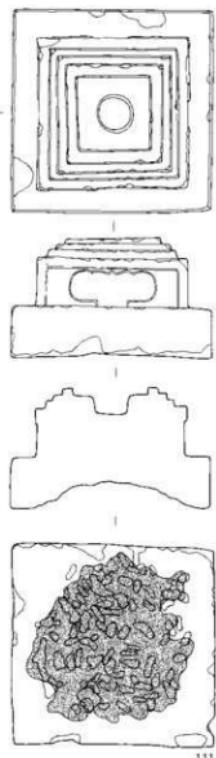


第43図 五輪塔（地輪）実測図

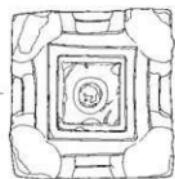


0 20cm

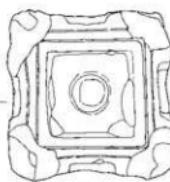
第44図 五輪塔（地輪）・宝篋印塔（塔身）実測図



111



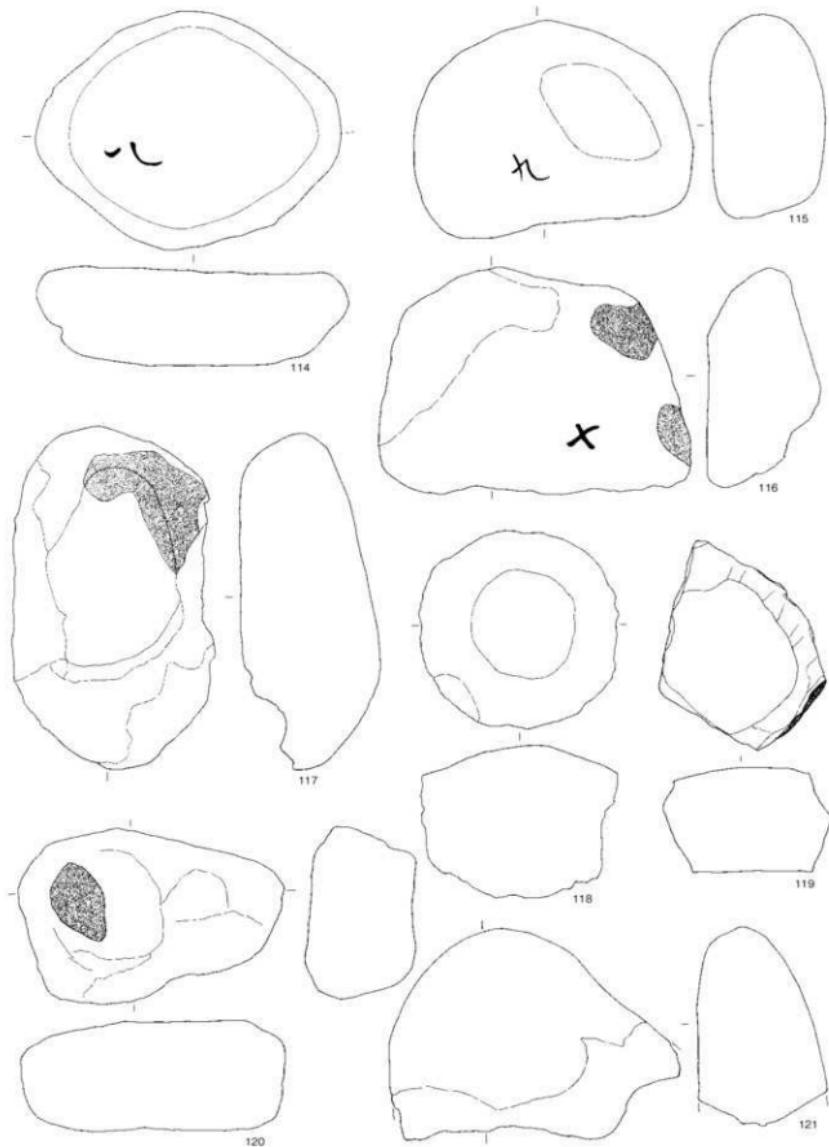
112



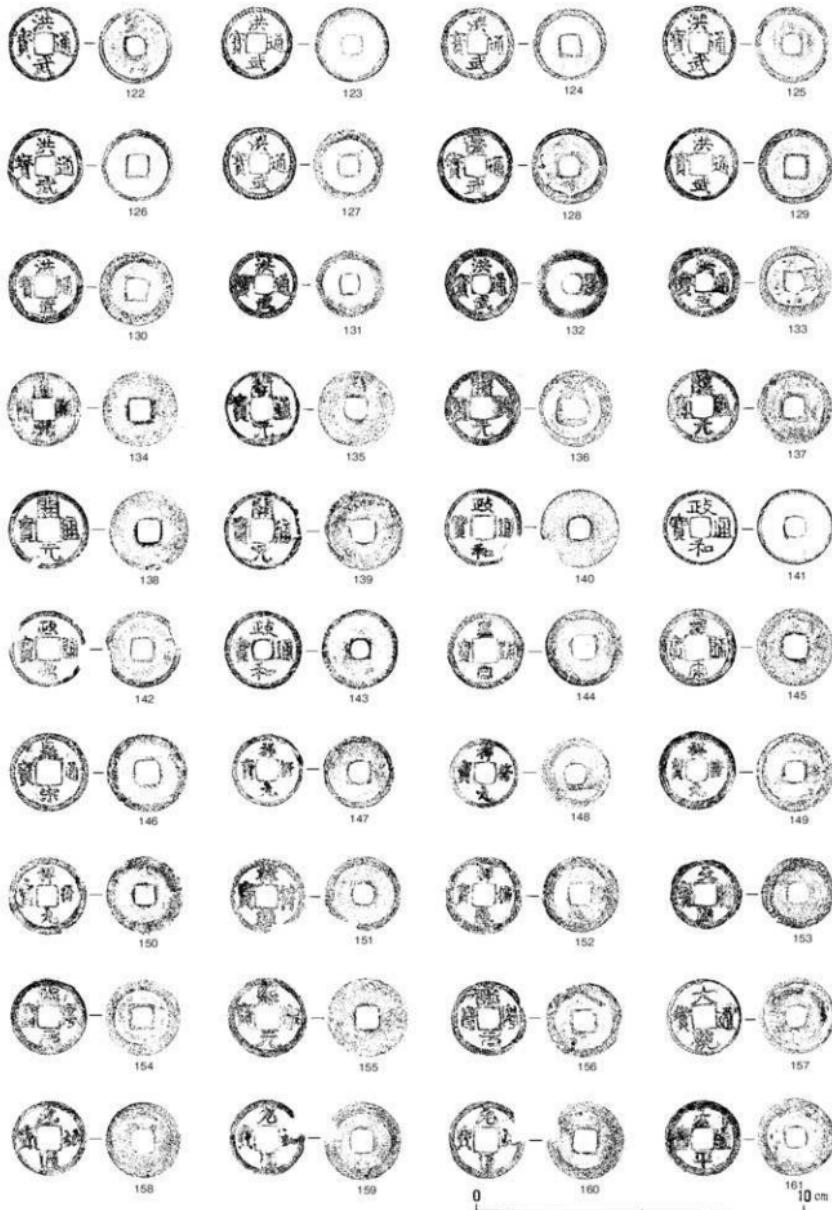
113

0 20cm

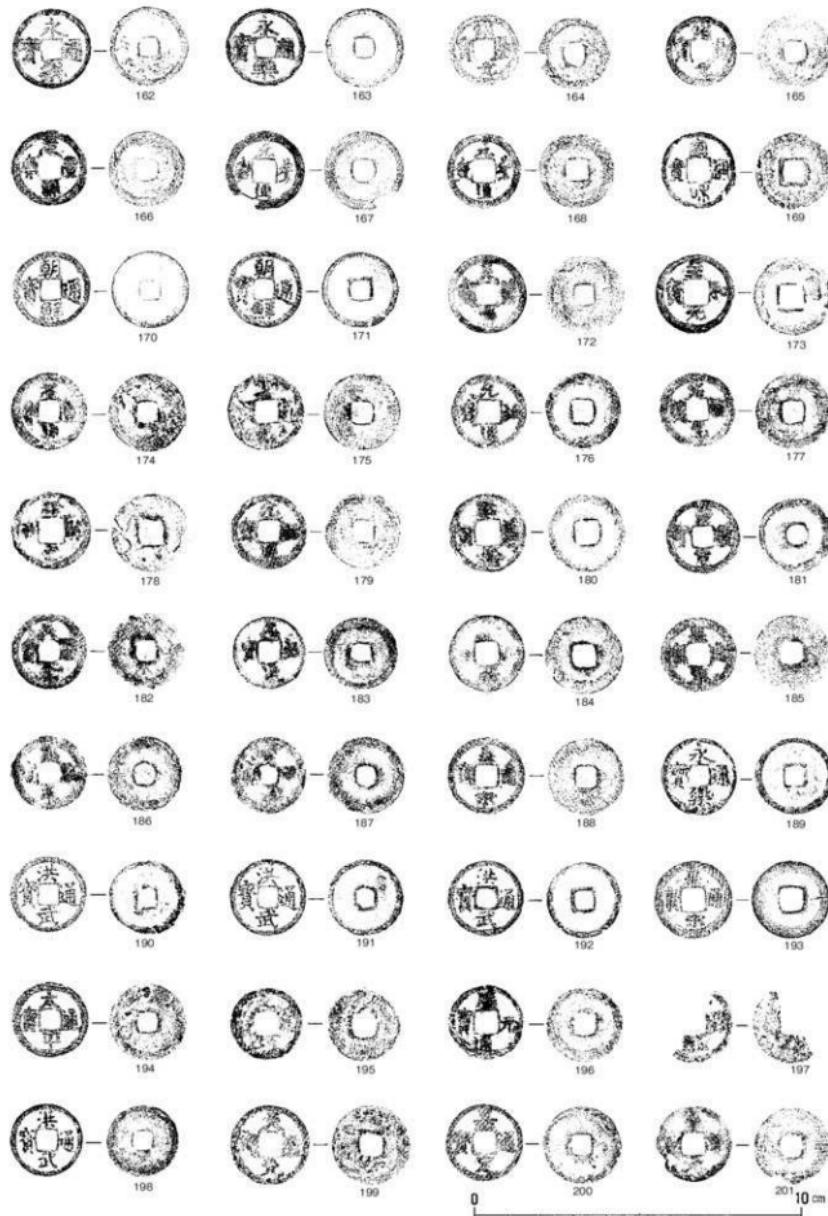
第45図 宝瓶印塔（基壇・笠）実測図



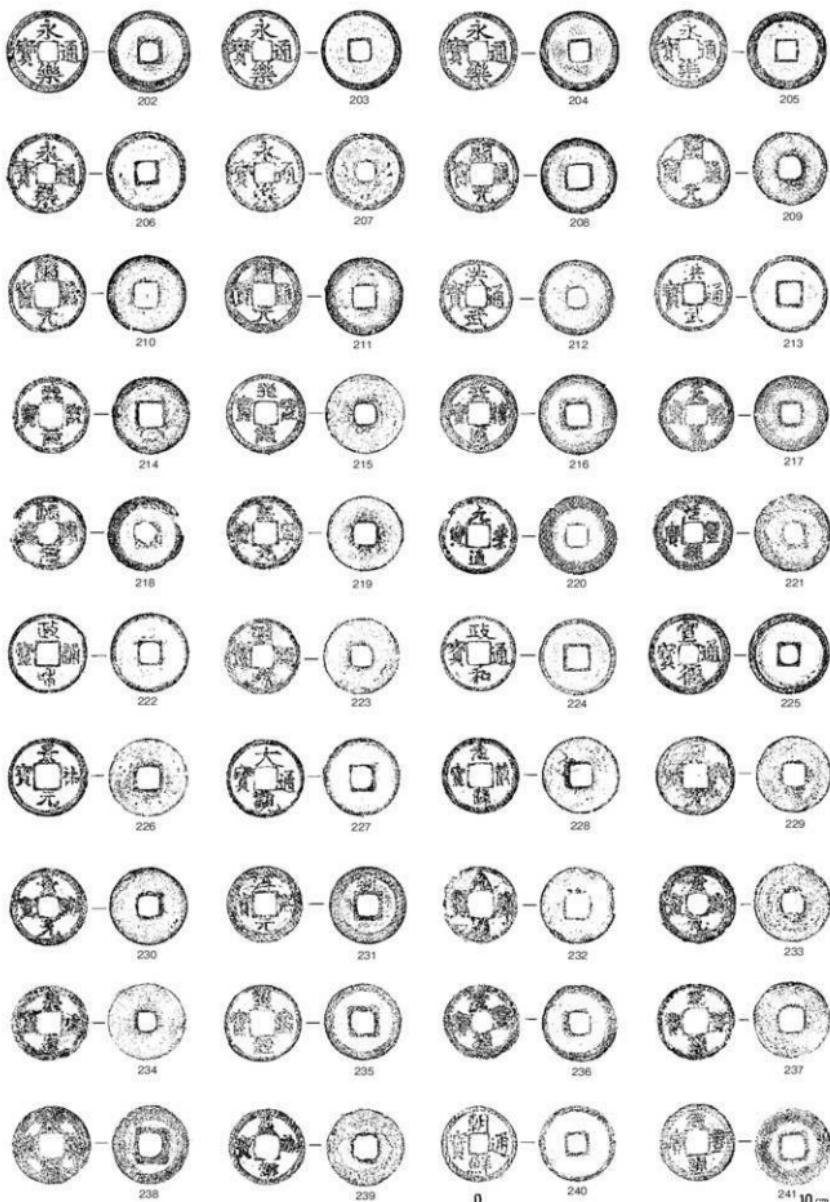
第46図 碓石実測図



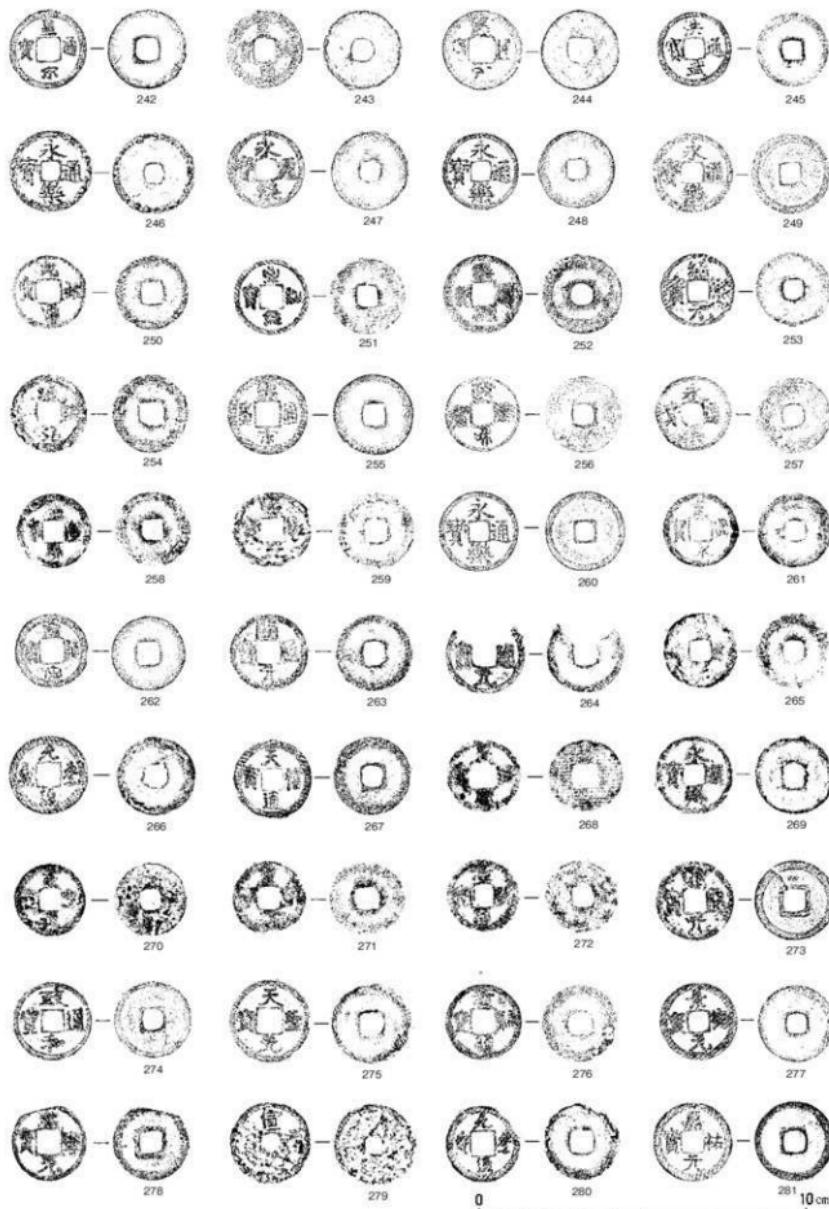
第 47 図 錢拓本圖 1



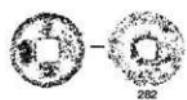
第48図 錢拓本図2



第49図 錢拓本3



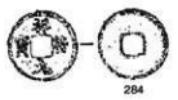
第50図 錢拓本図4



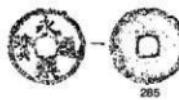
282



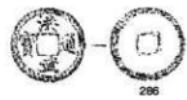
283



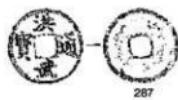
284



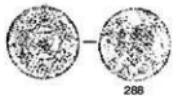
285



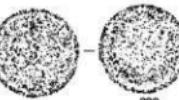
286



287



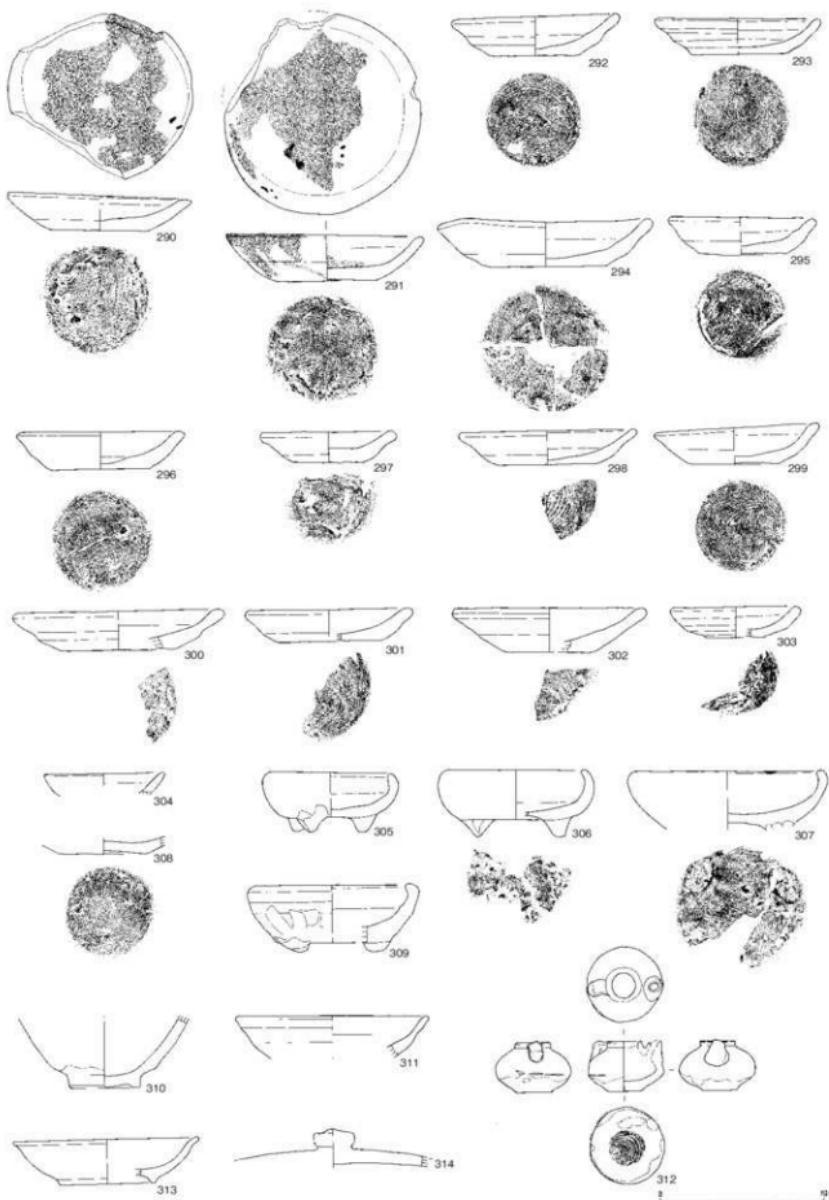
288



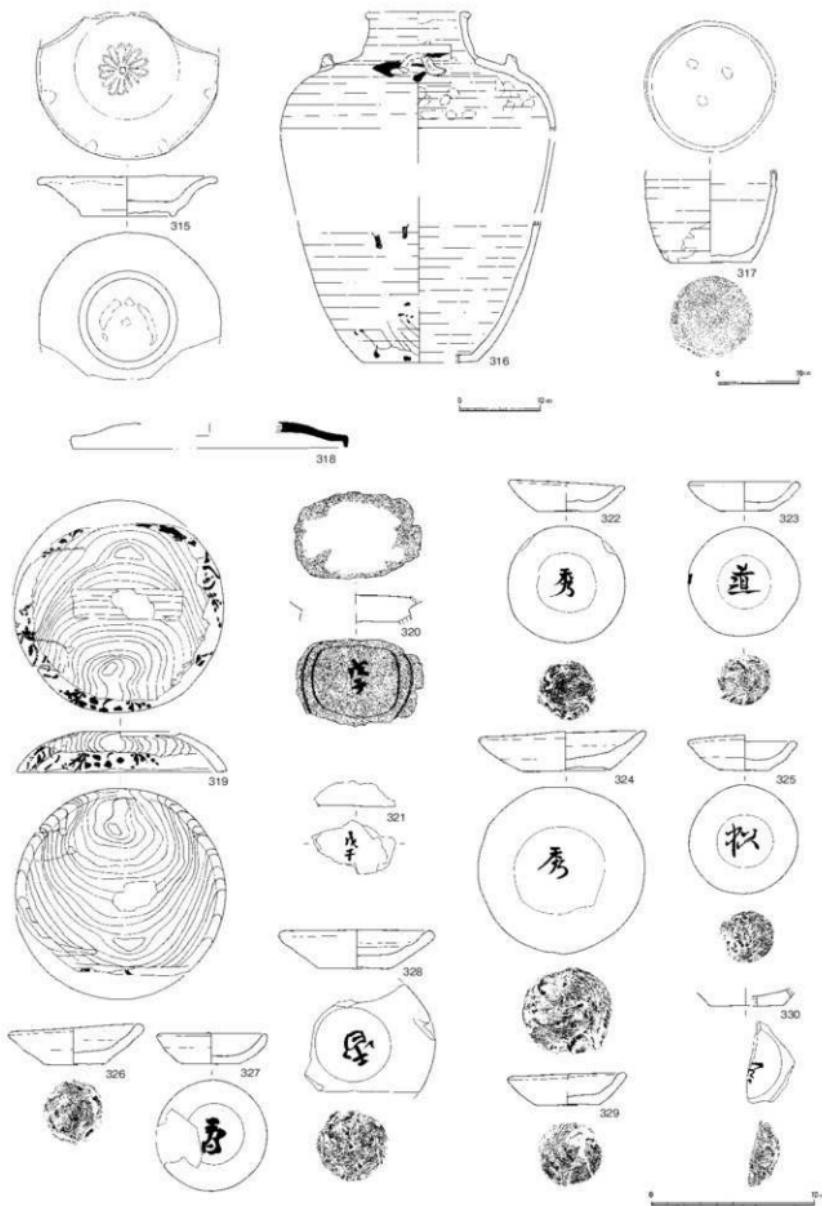
289

0 10 cm

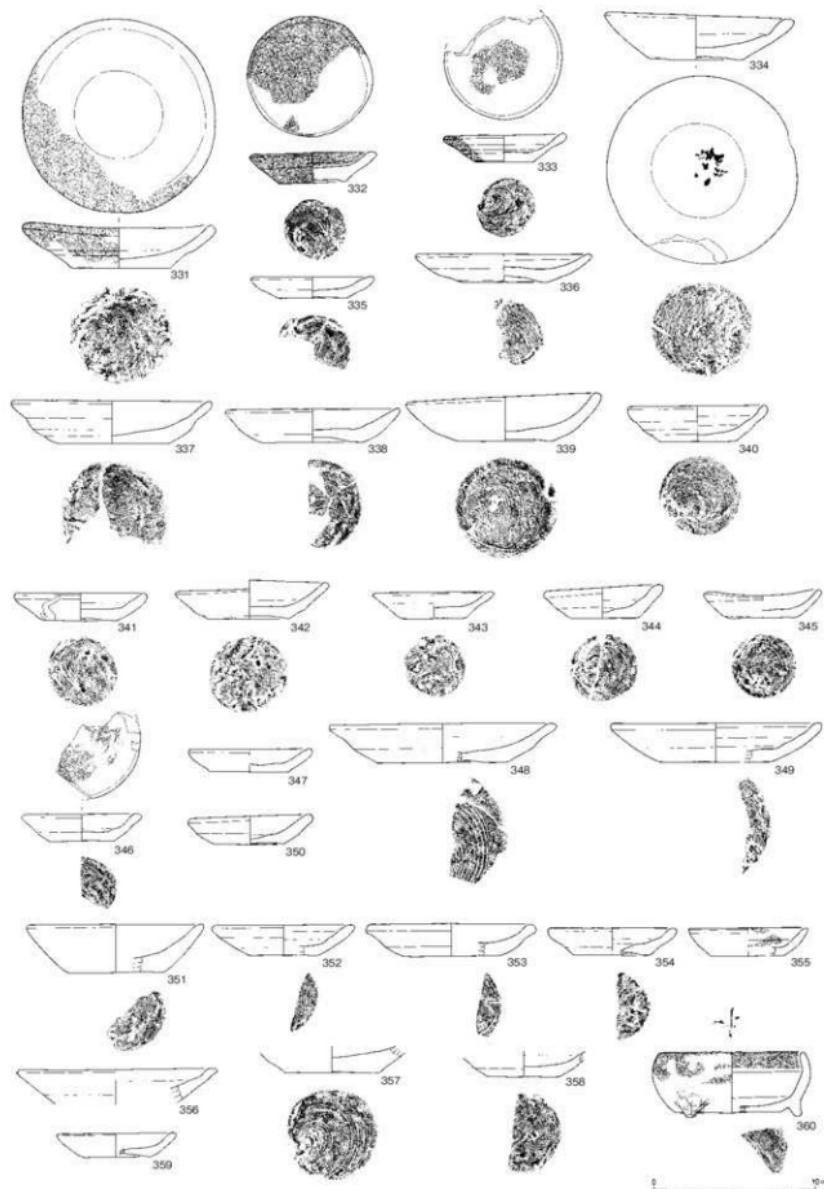
第 51 錢拓本図 5



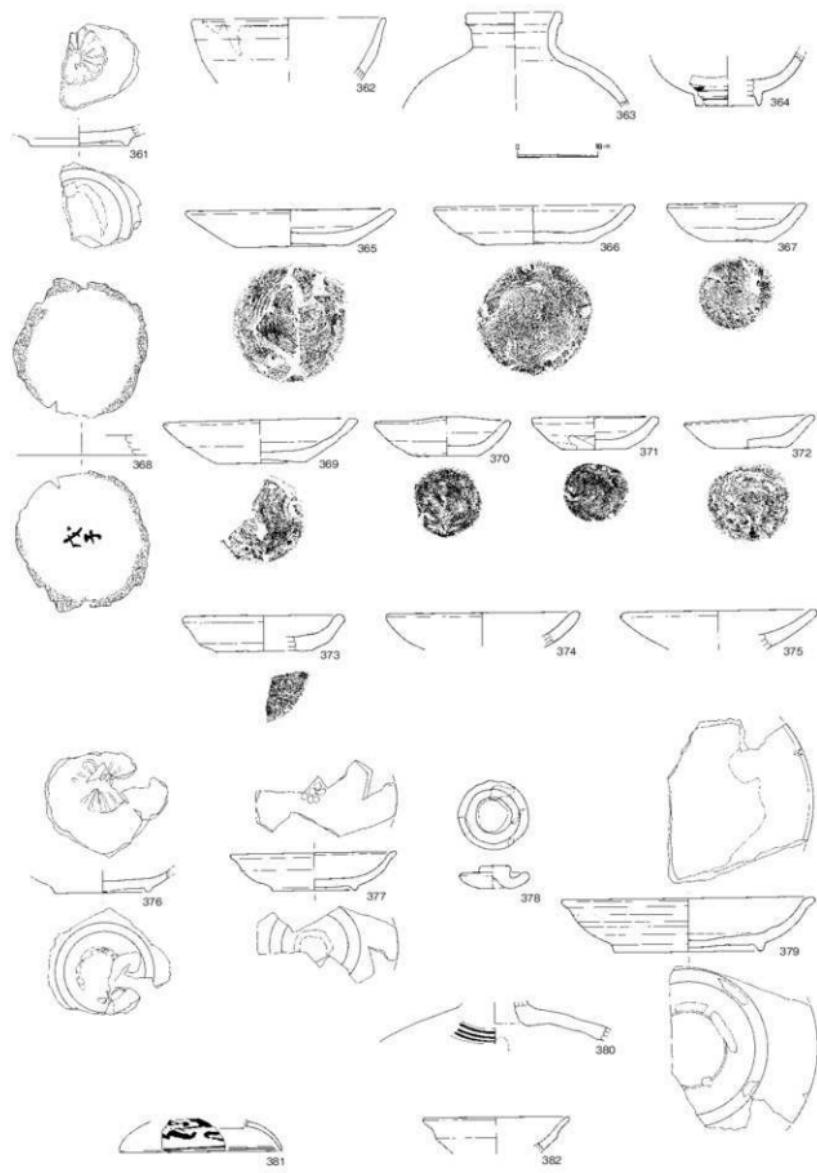
第52図 出土遺物（東北下層）実測図



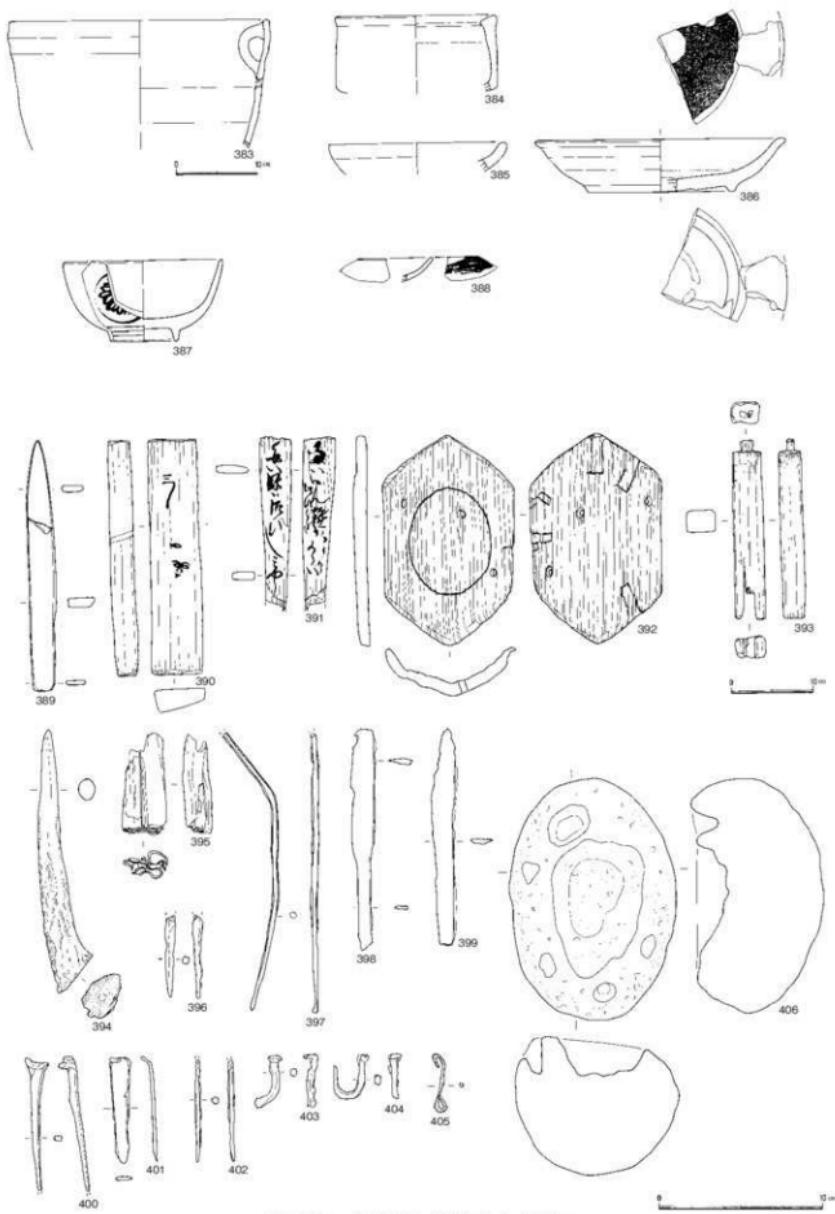
第53図 出土遺物（東北下層・上層）実測図



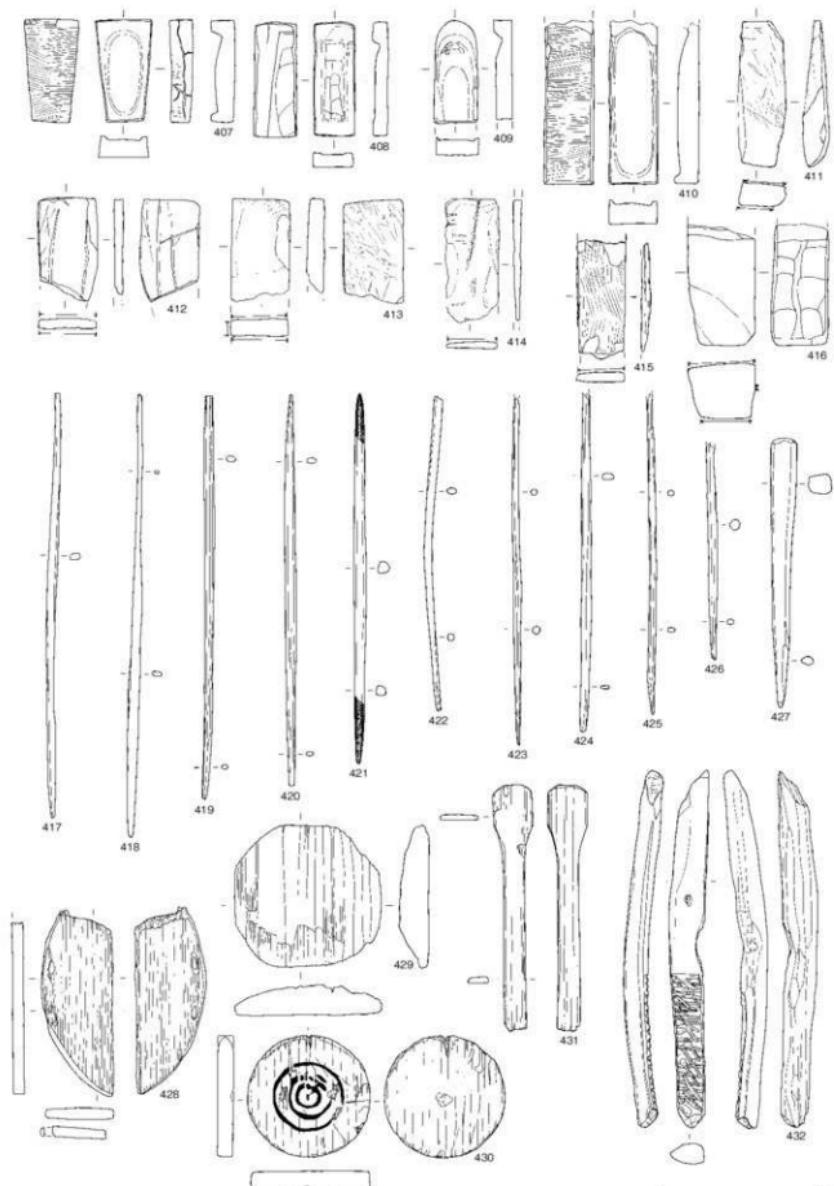
第54図 出土遺物（東北中層）実測図



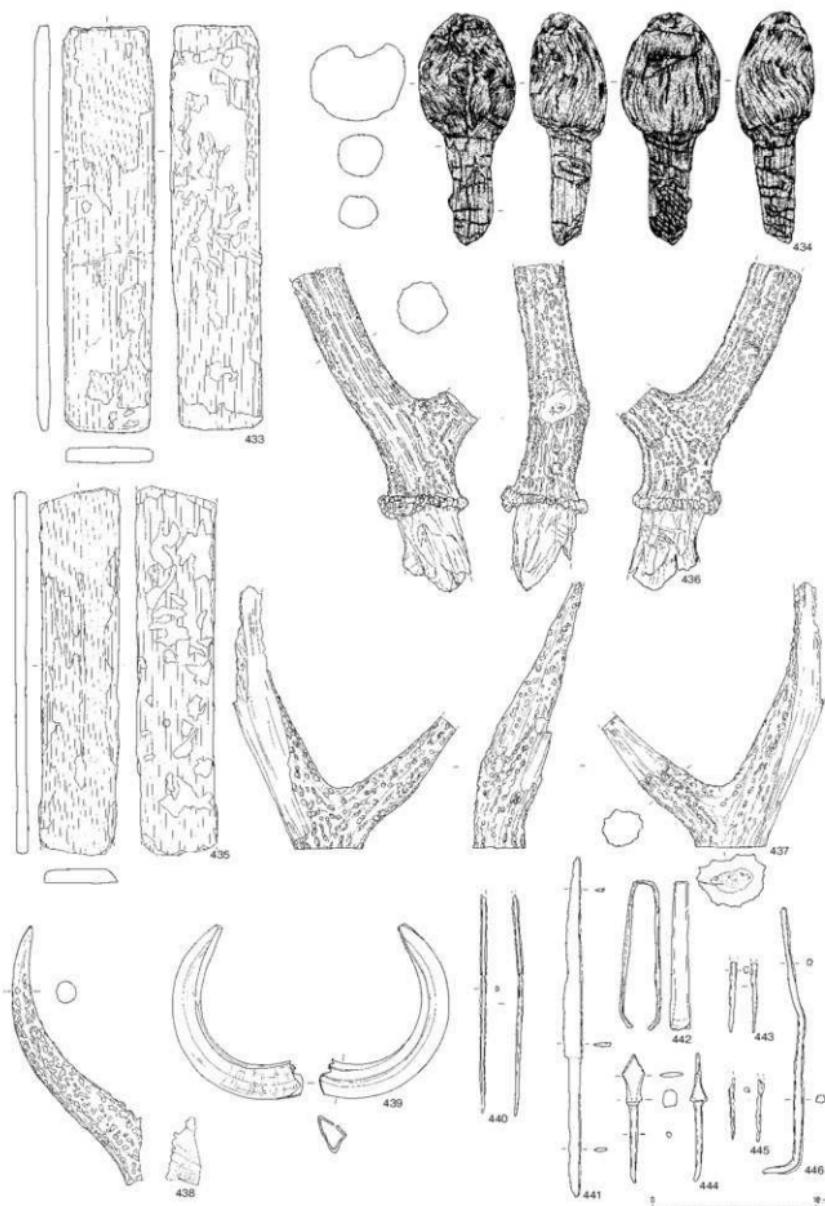
第 55 図 出土遺物（東北中層・上層）実測図



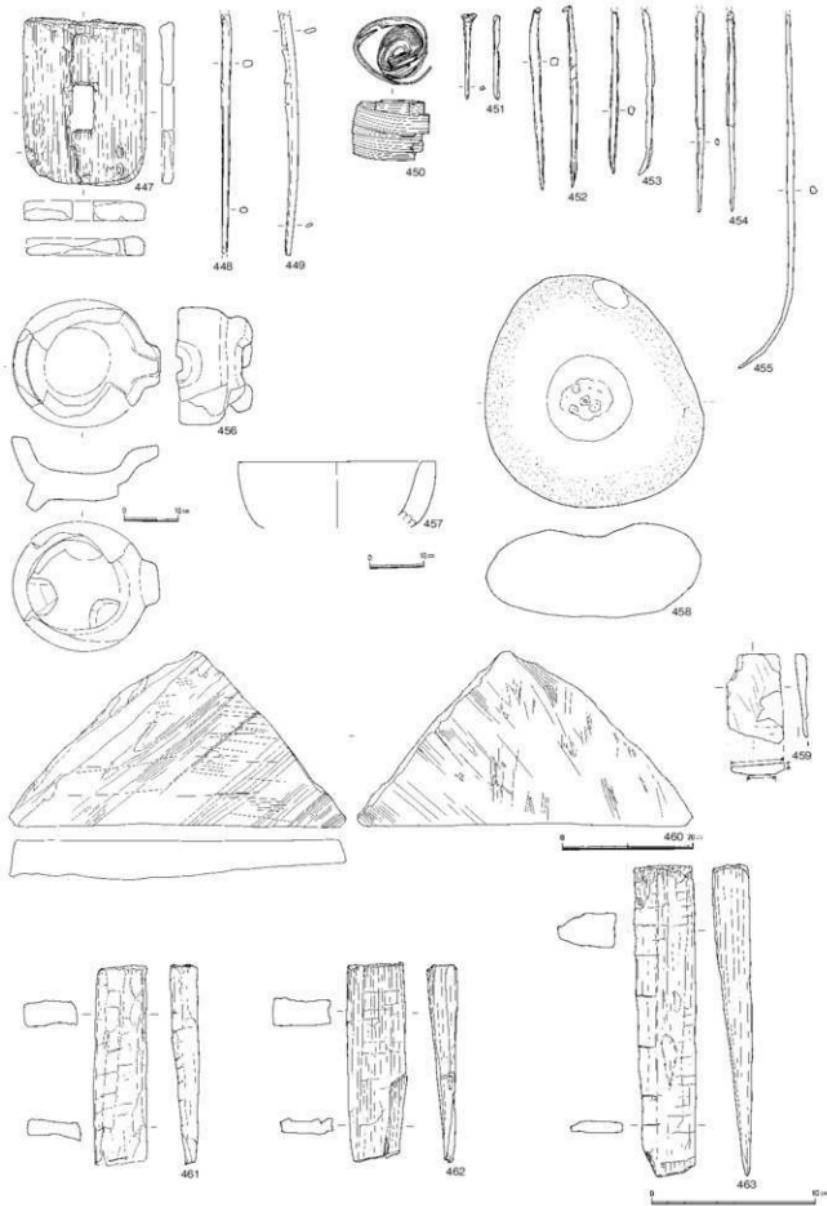
第 56 図 出土遺物（東北下層）実測図



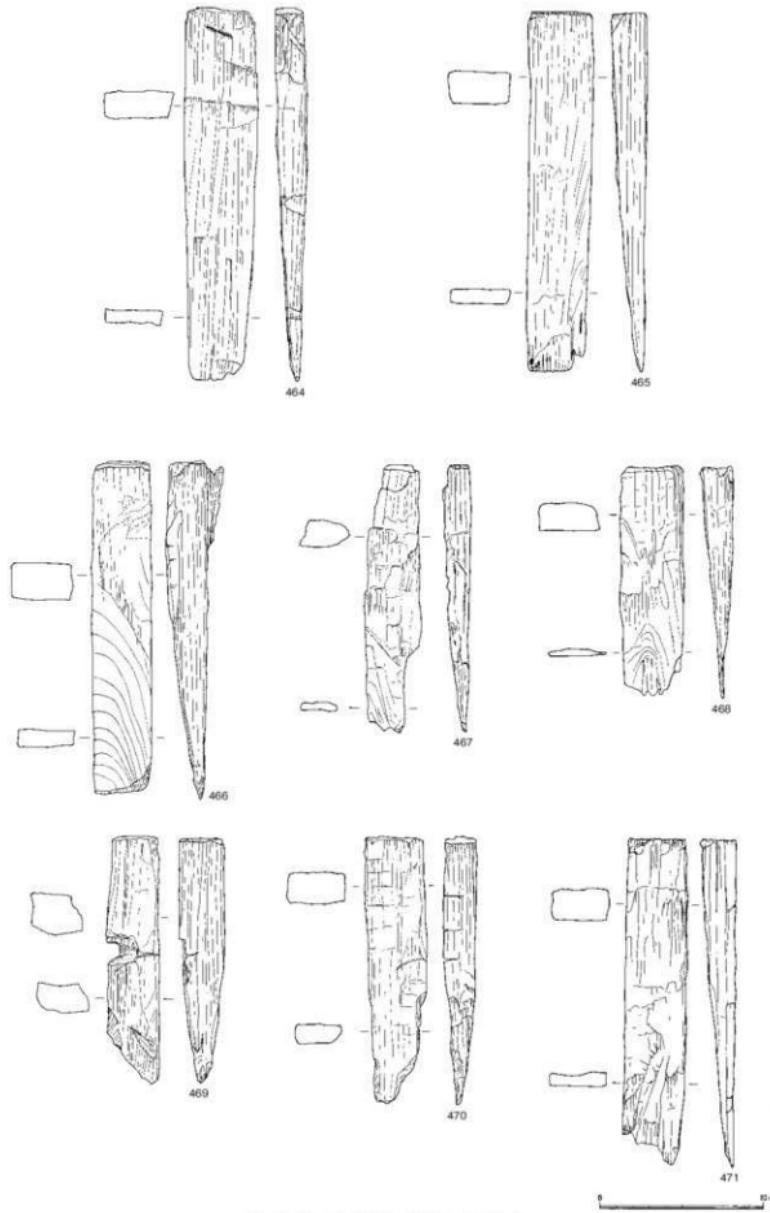
第 57 図 出土遺物（東北中層）実測図



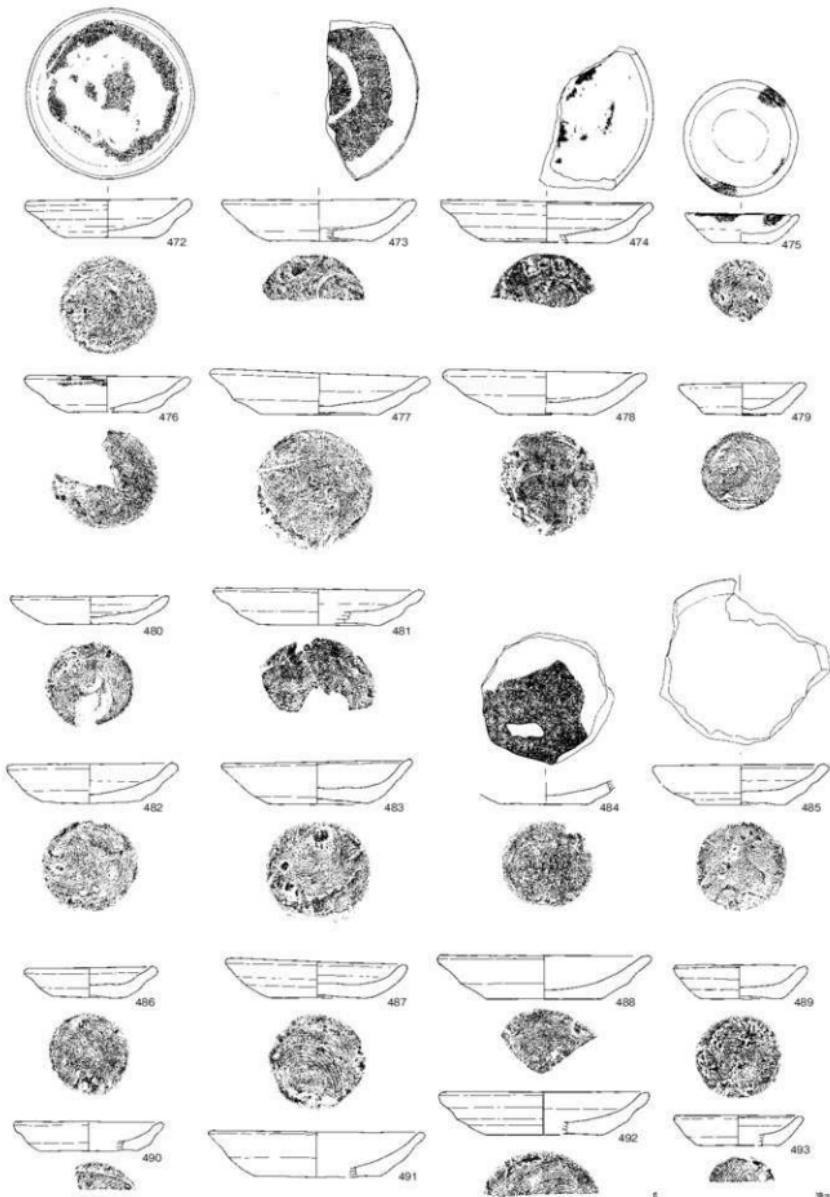
第58図 出土遺物（東北中層）実測図



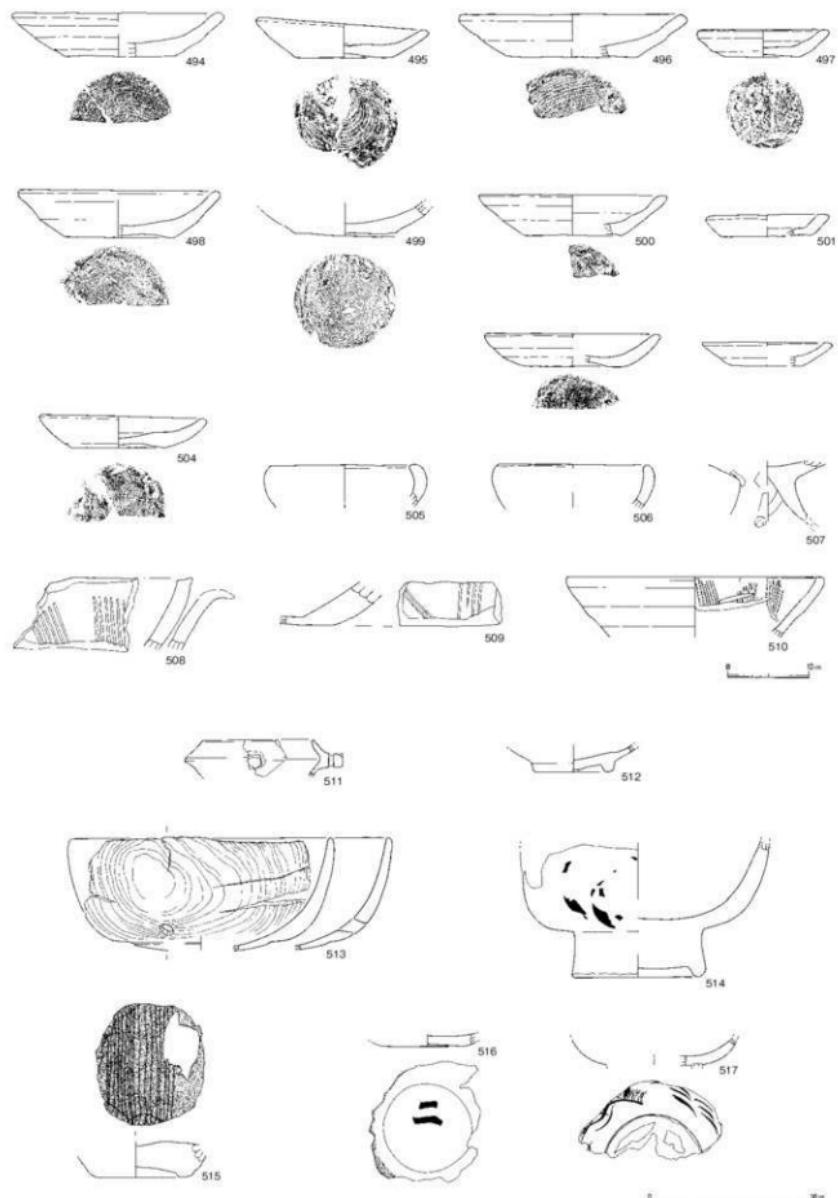
第59図 出土遺物（東北上層）実測図



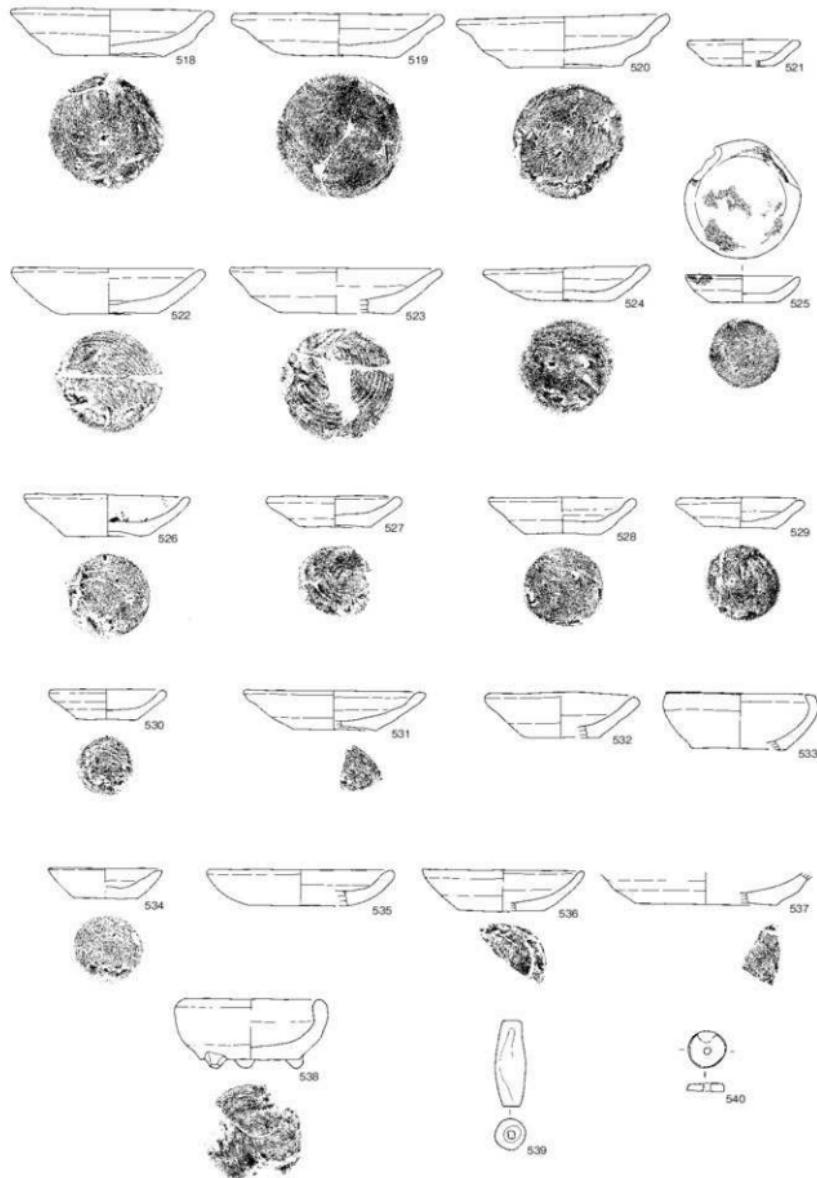
第60図 出土遺物(東北)実測図



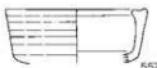
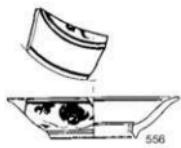
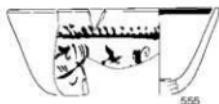
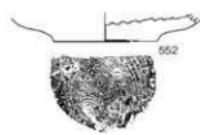
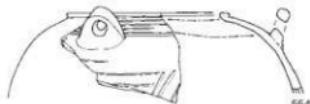
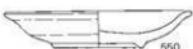
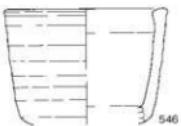
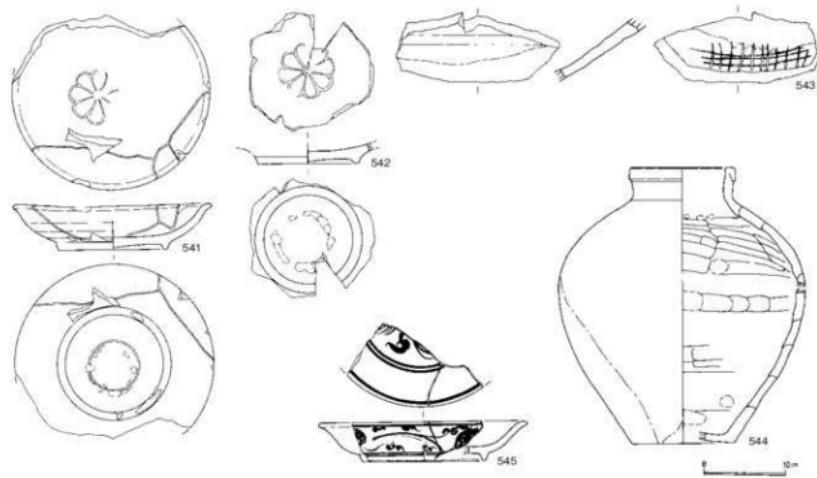
第 61 図 出土遺物（東南下層）実測図



第62図 出土遺物（東南下層）実測図

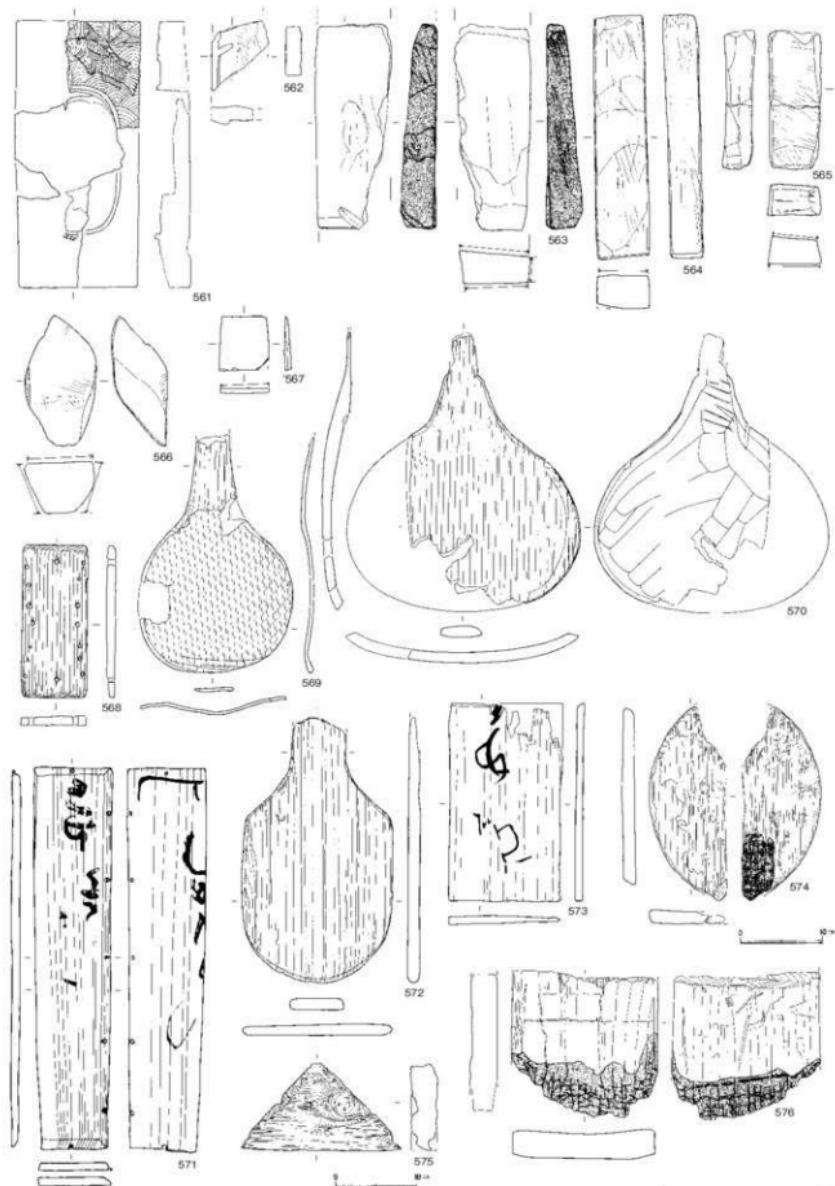


第 63 図 出土遺物（東南中層上位）

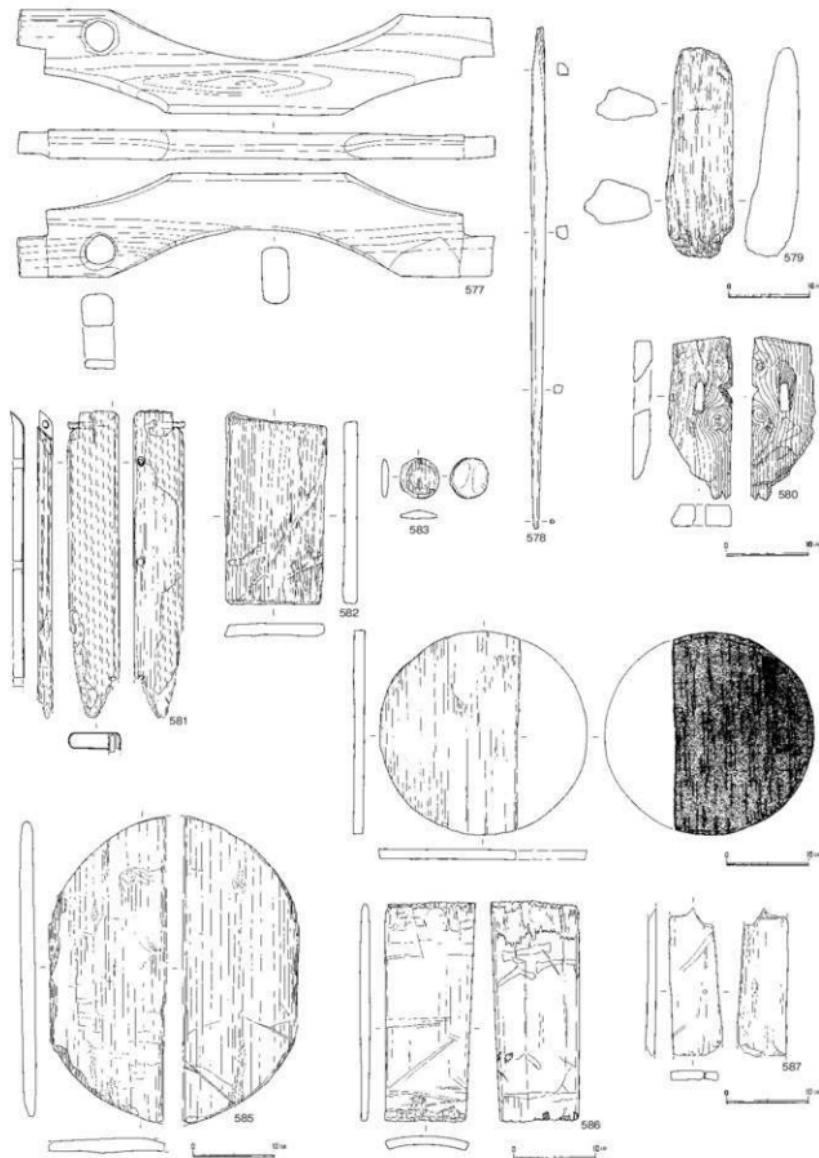


— 136 —

第 64 図 出土遺物（東南中層中位・下層）実測図



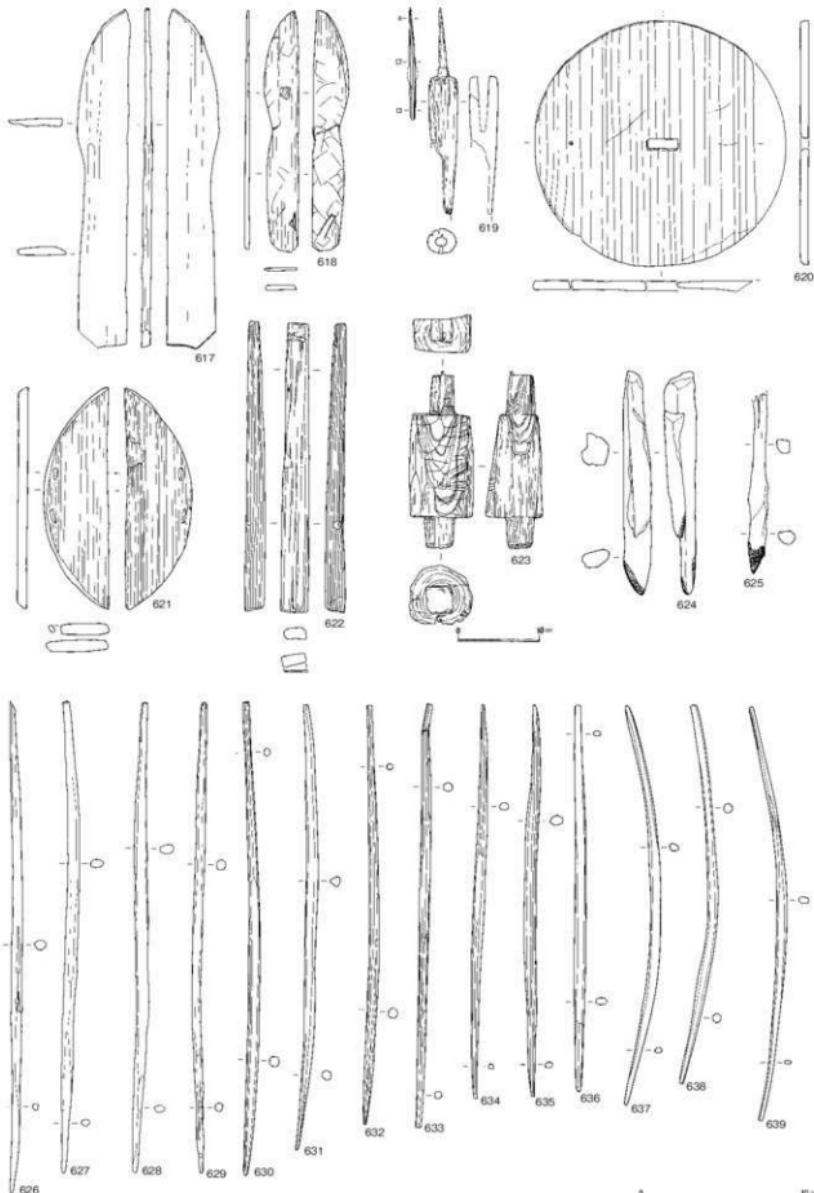
第65図 出土遺物（東南下層）実測図



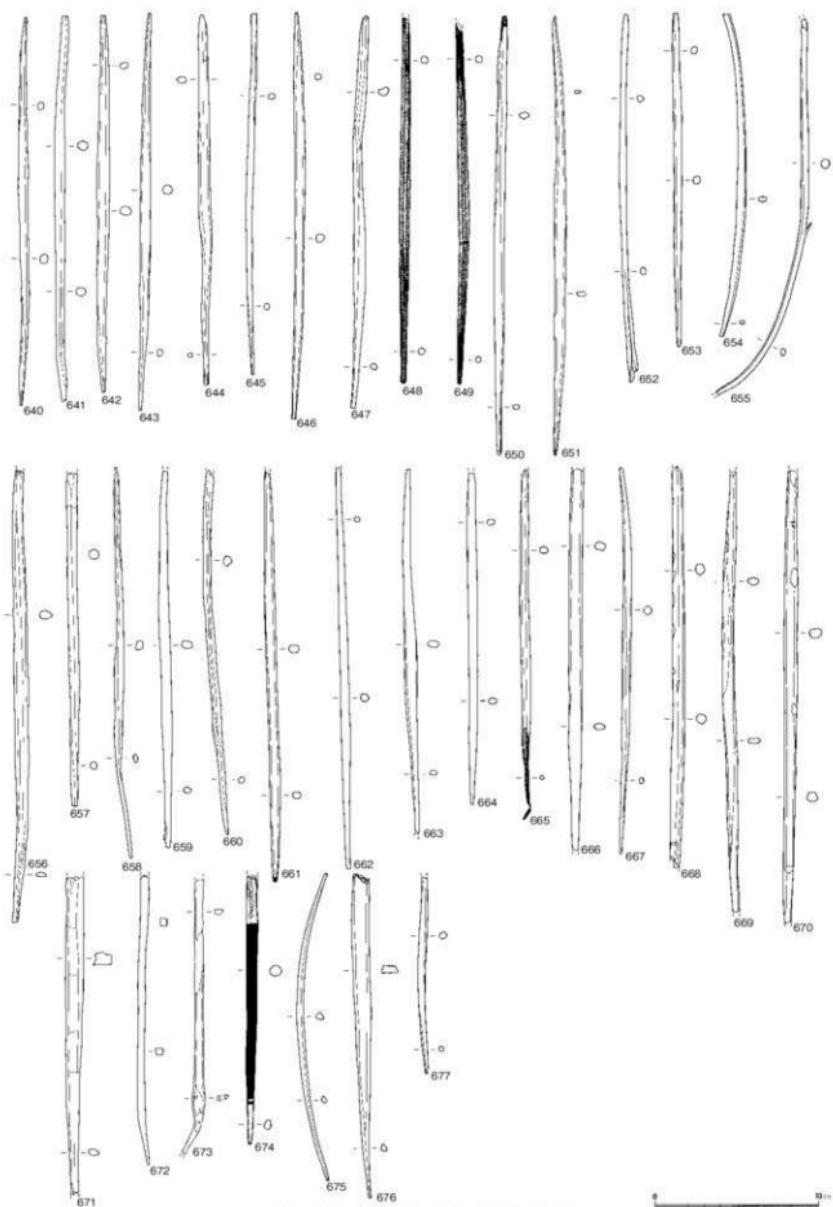
第66図 出土遺物（東南下層）実測図



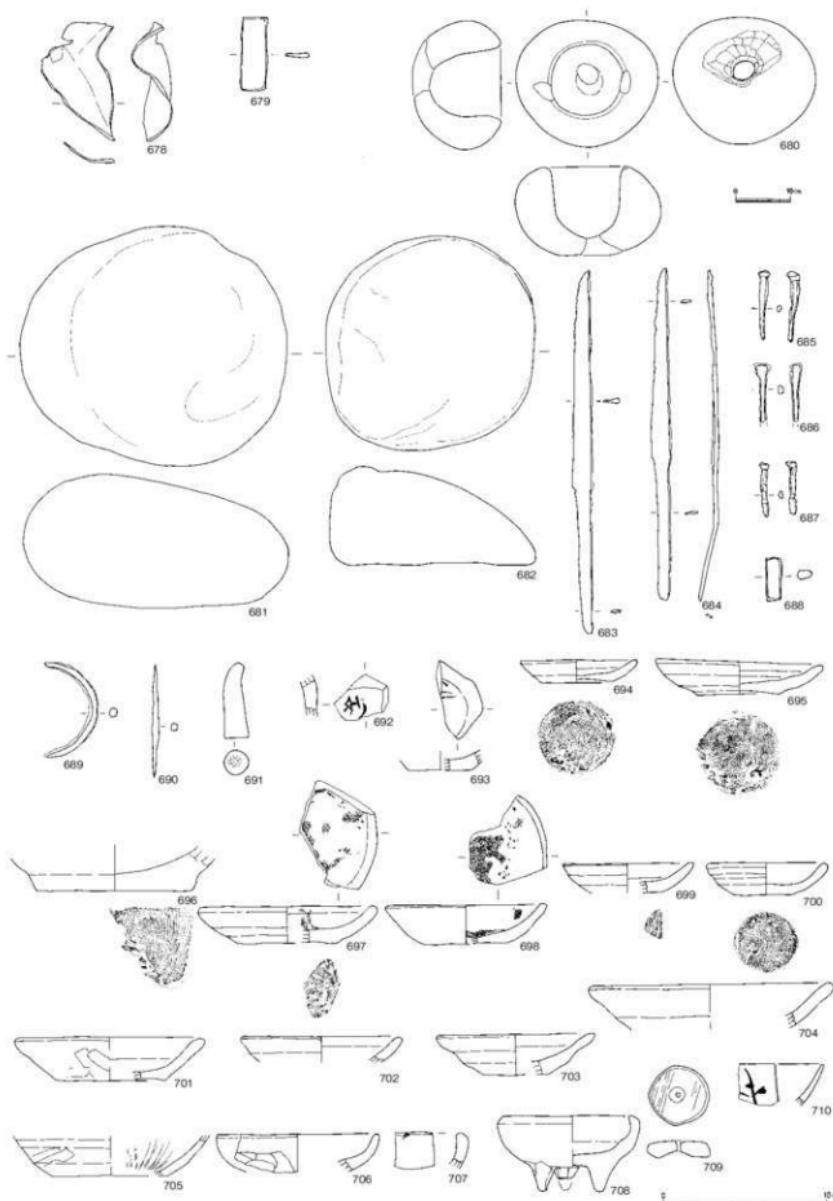
第 67 図 出土遺物（東南下層・中層）実測図



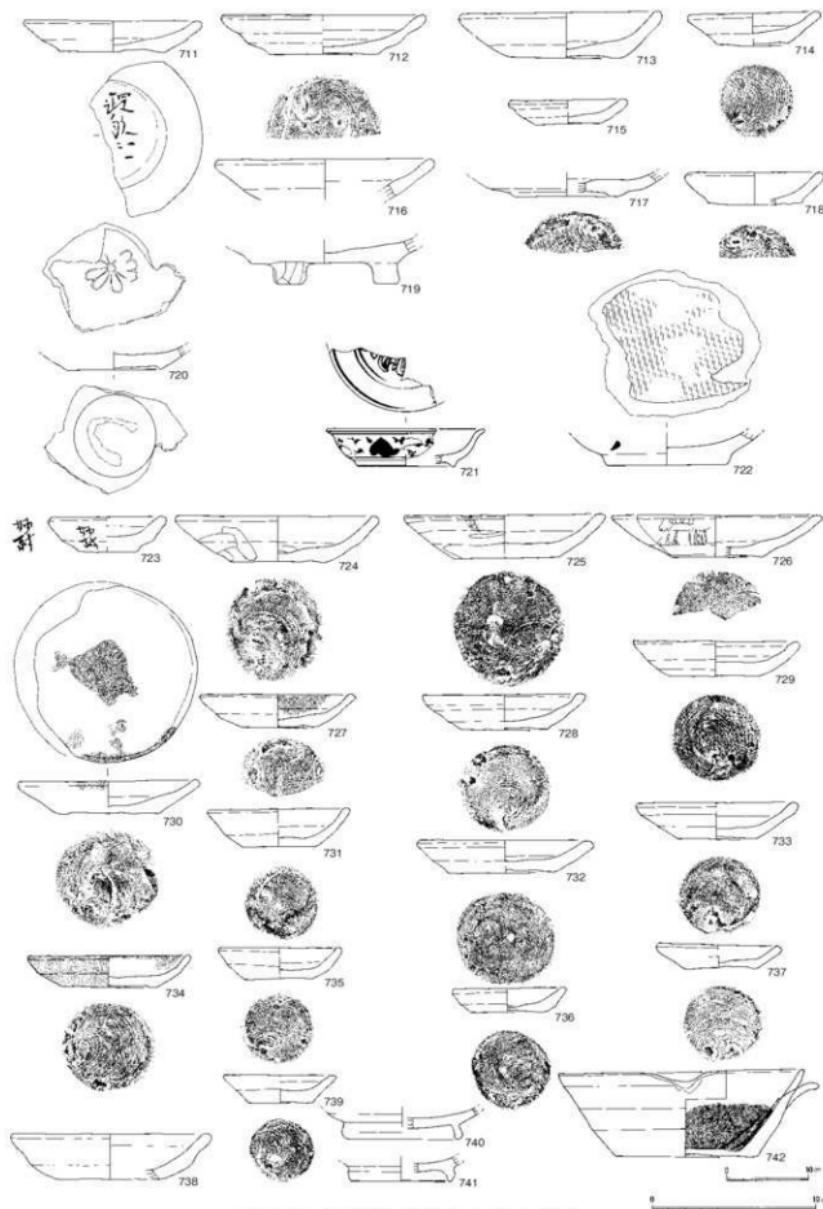
第68図 出土遺物（東南中層）実測図



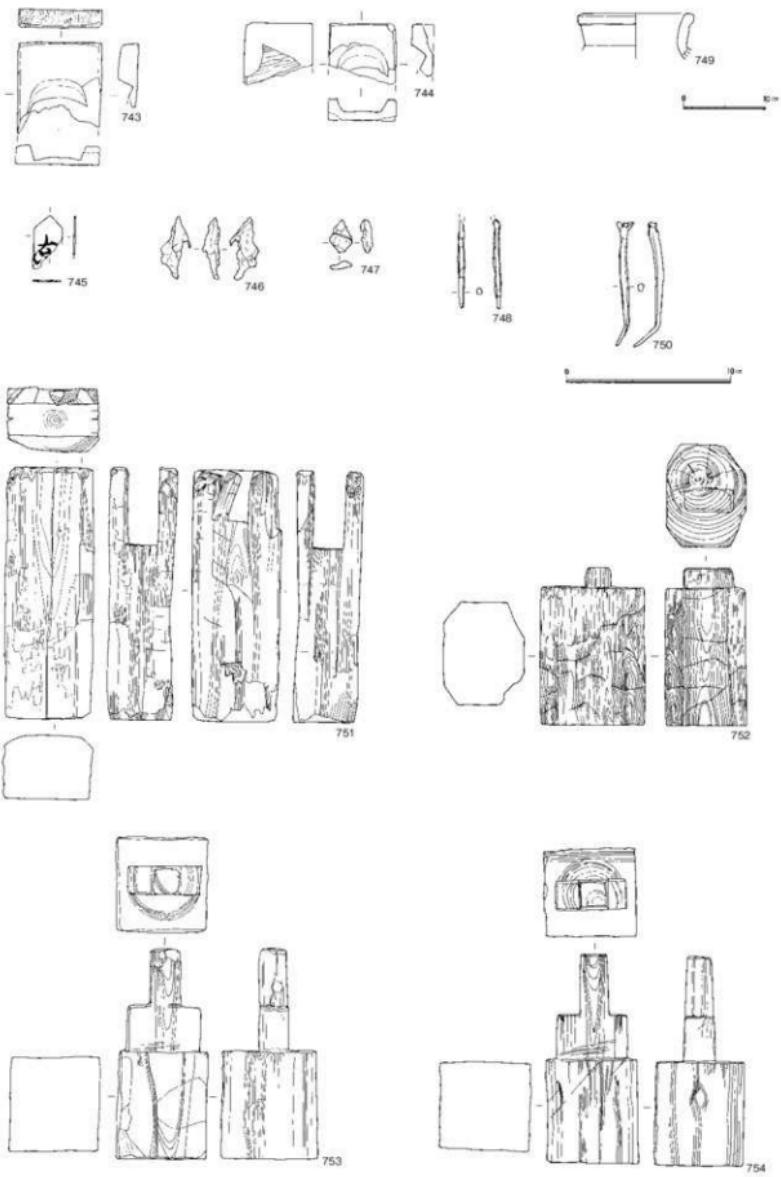
第69図 出土遺物（東南中層）実測図



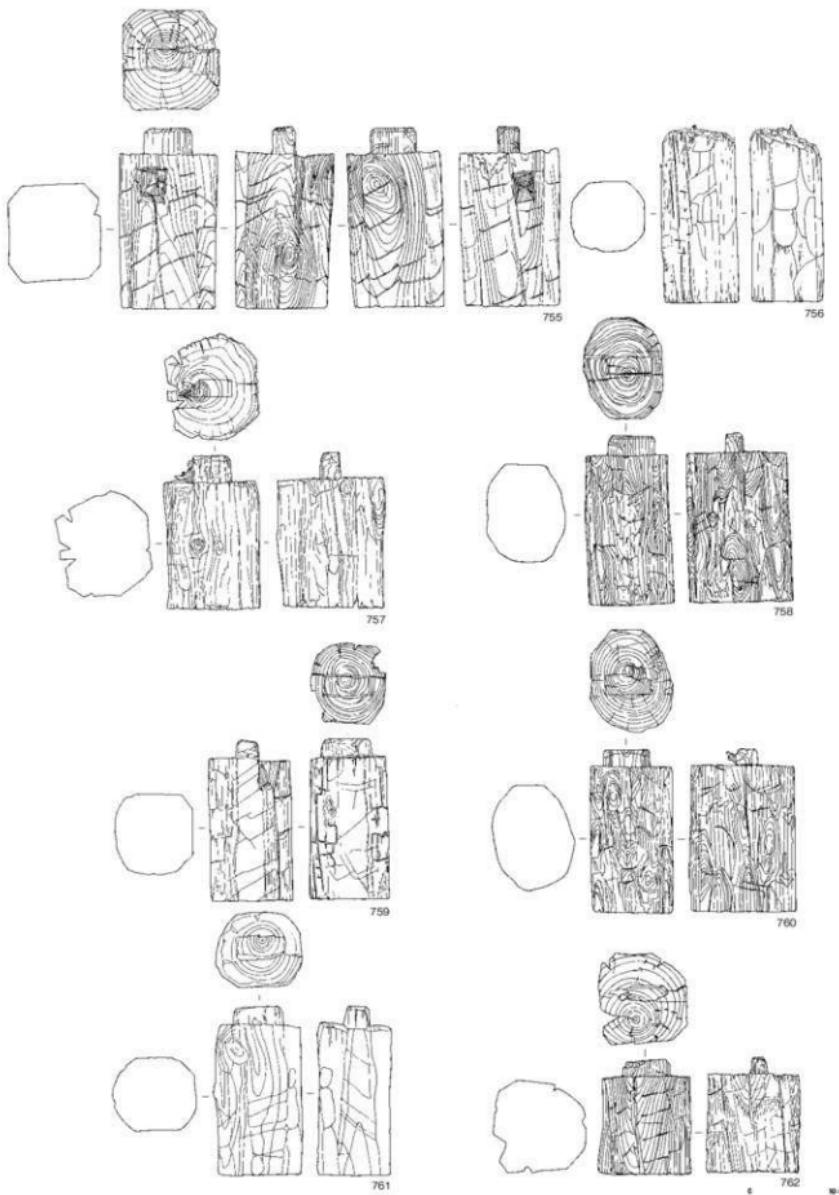
第70図 出土遺物（東南中層）実測図



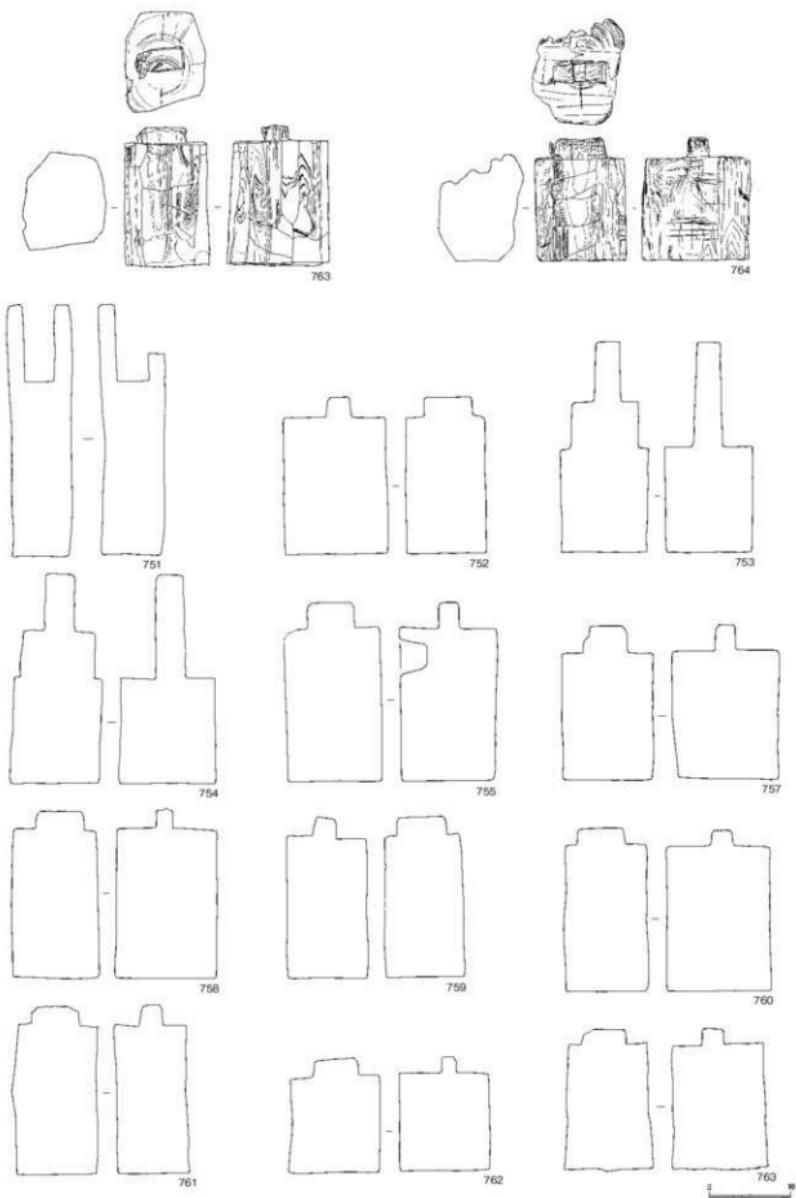
第 71 図 出土遺物（主屋下層・上層）実測図



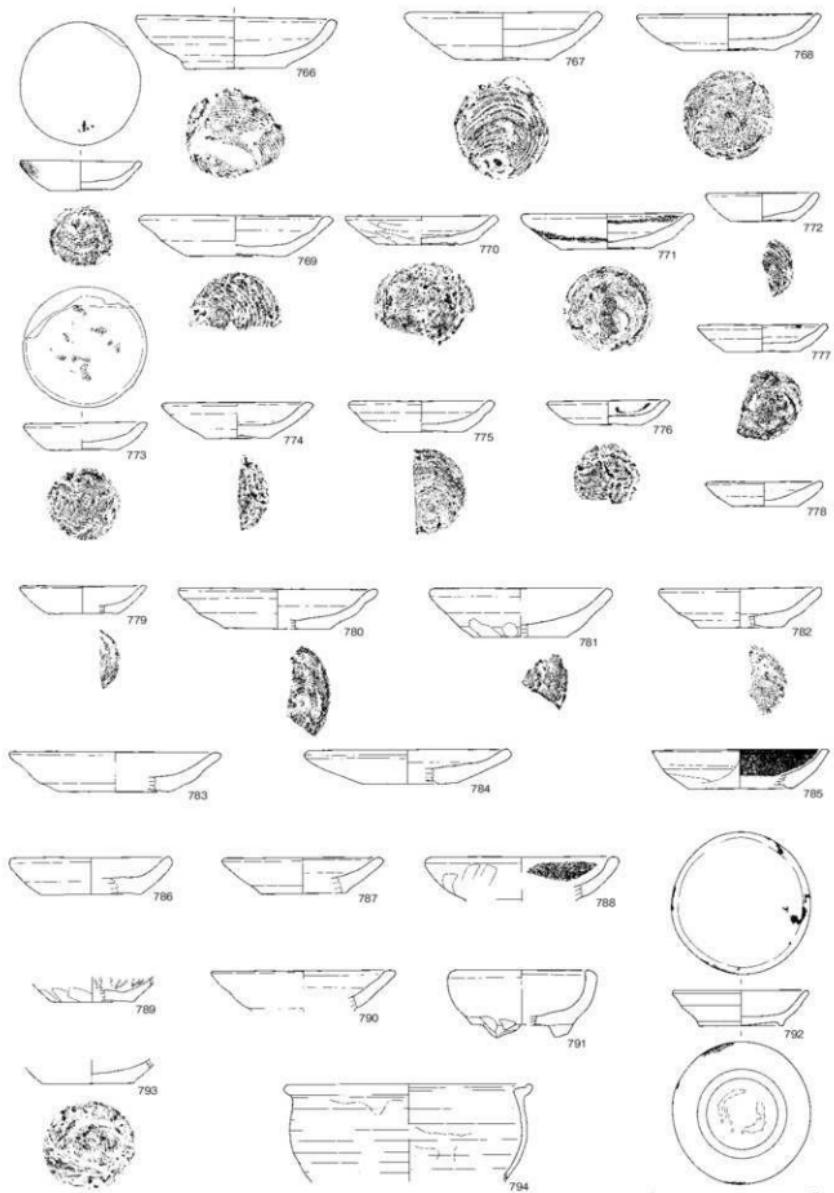
第72図 出土遺物（主屋下層・上層）実測図



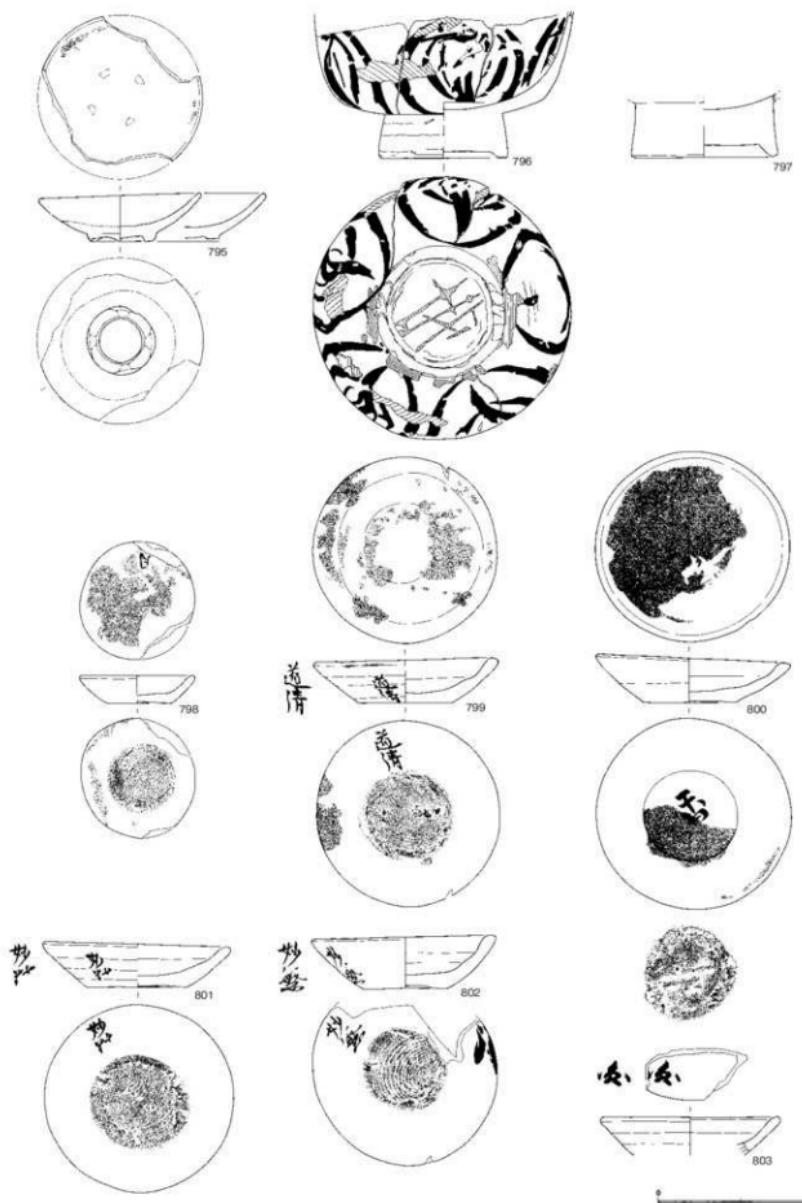
第73図 出土遺物（主屋上層）実測図



第74図 出土遺物（主屋一括・束断面）実測図



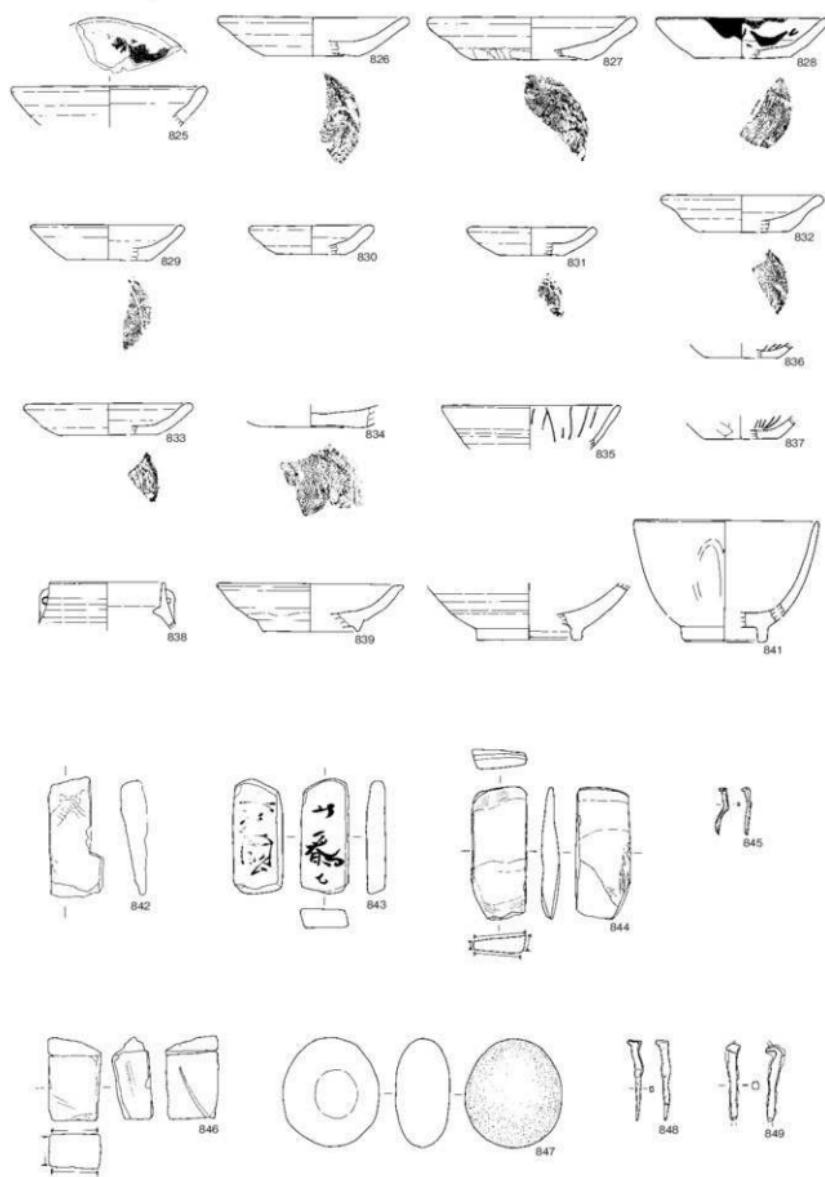
第75図 出土遺物（西地区下層）実測図



第 76 図 出土遺物（西地区下層・中層）実測図

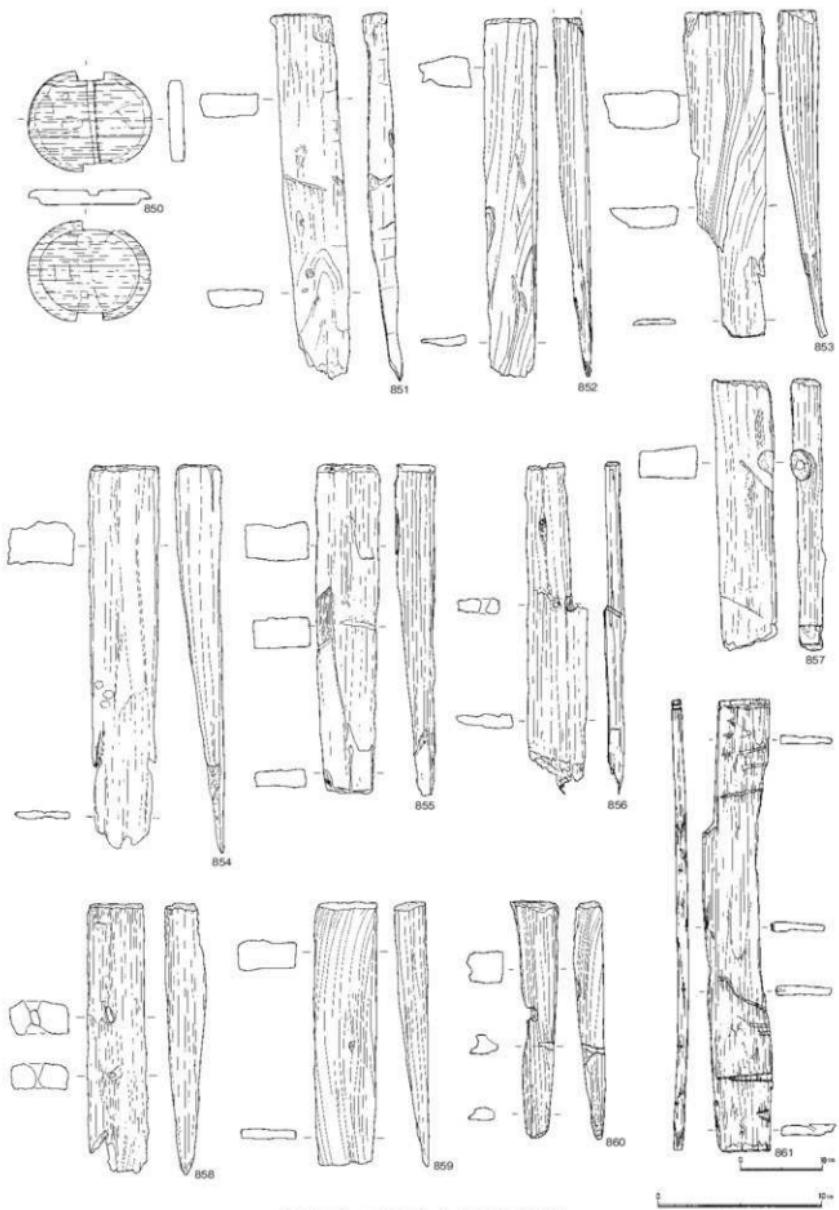


第77図 出土遺物（西地区中層）実測図

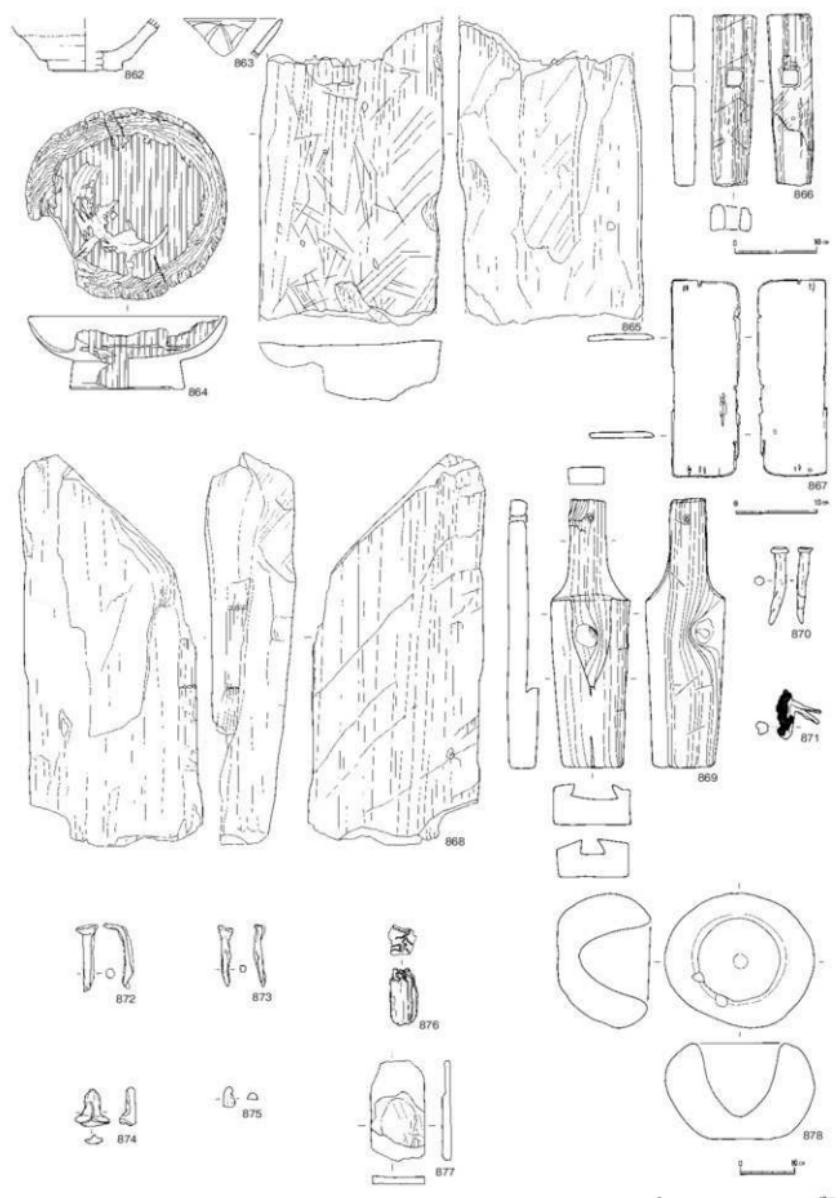


第78図 出土遺物（西地区中層）実測図





第79図 出土遺物（西地区）実測図



第 80 図 出土遺物（東地区）実測図



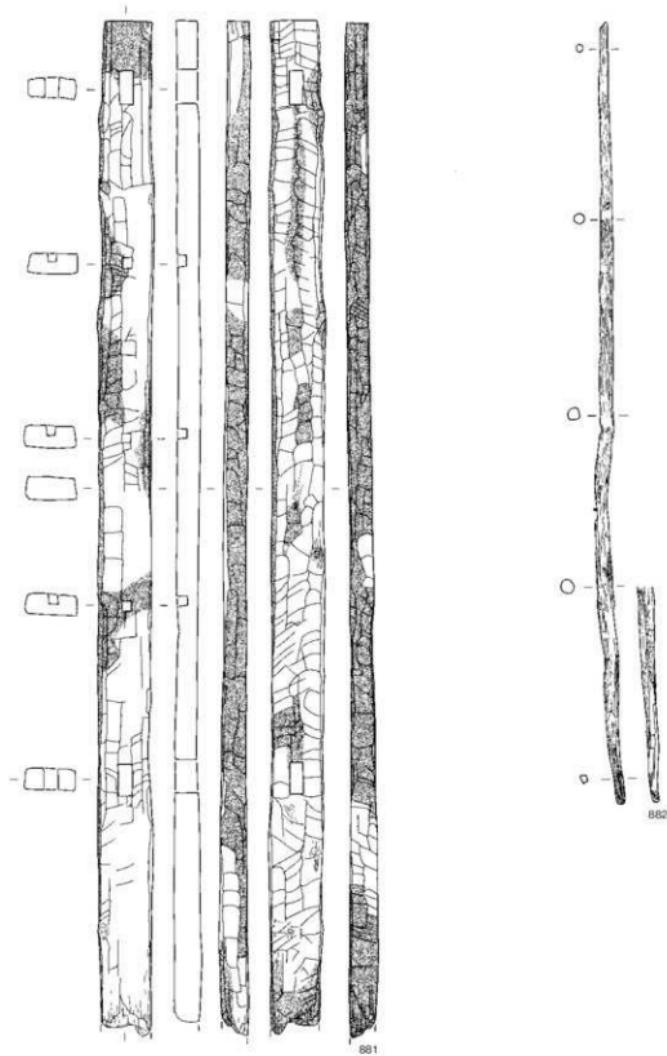
第 81 図 建築関連木製品（東北中層）実測図

0 1 20 cm

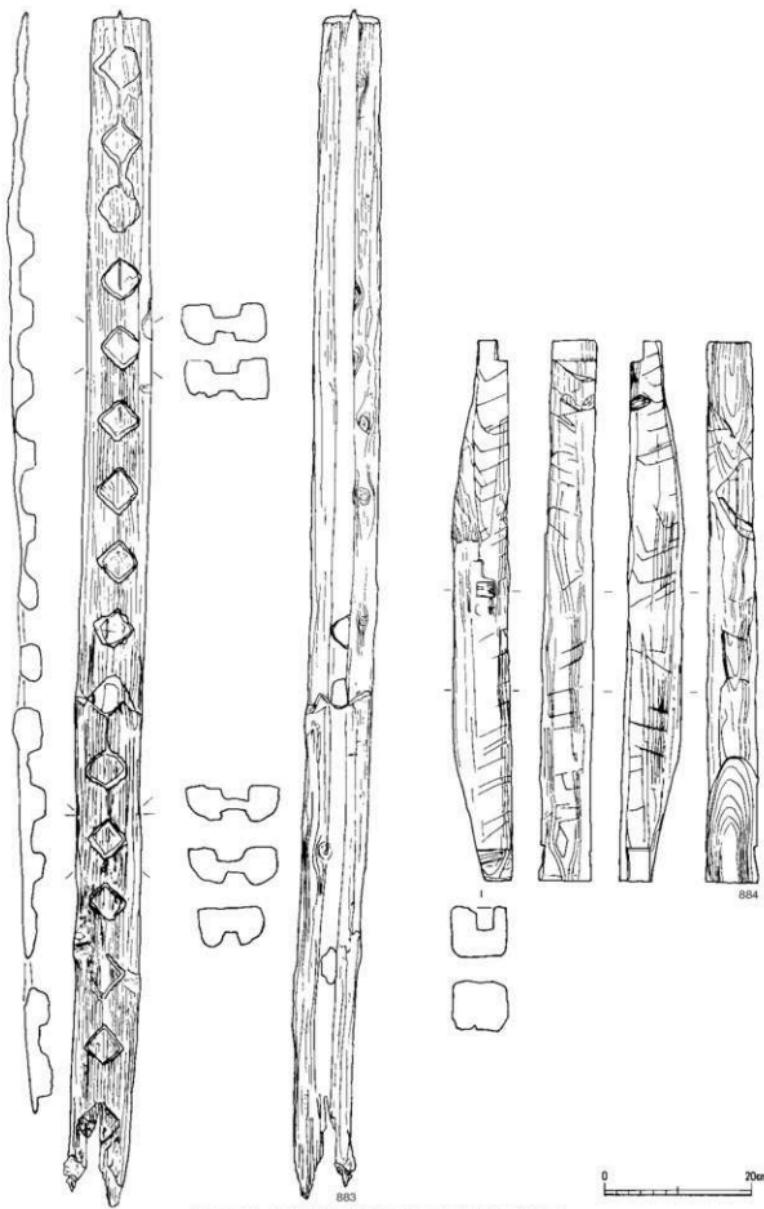


0 20

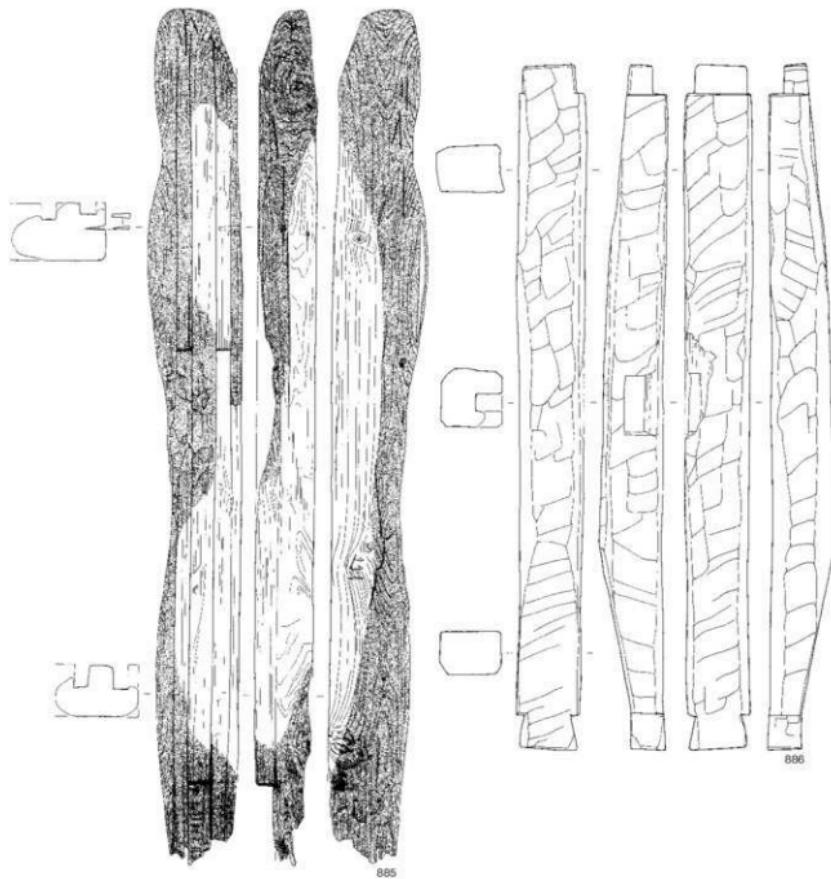
第82図 建築関連木製品（主屋連絡口）実測図



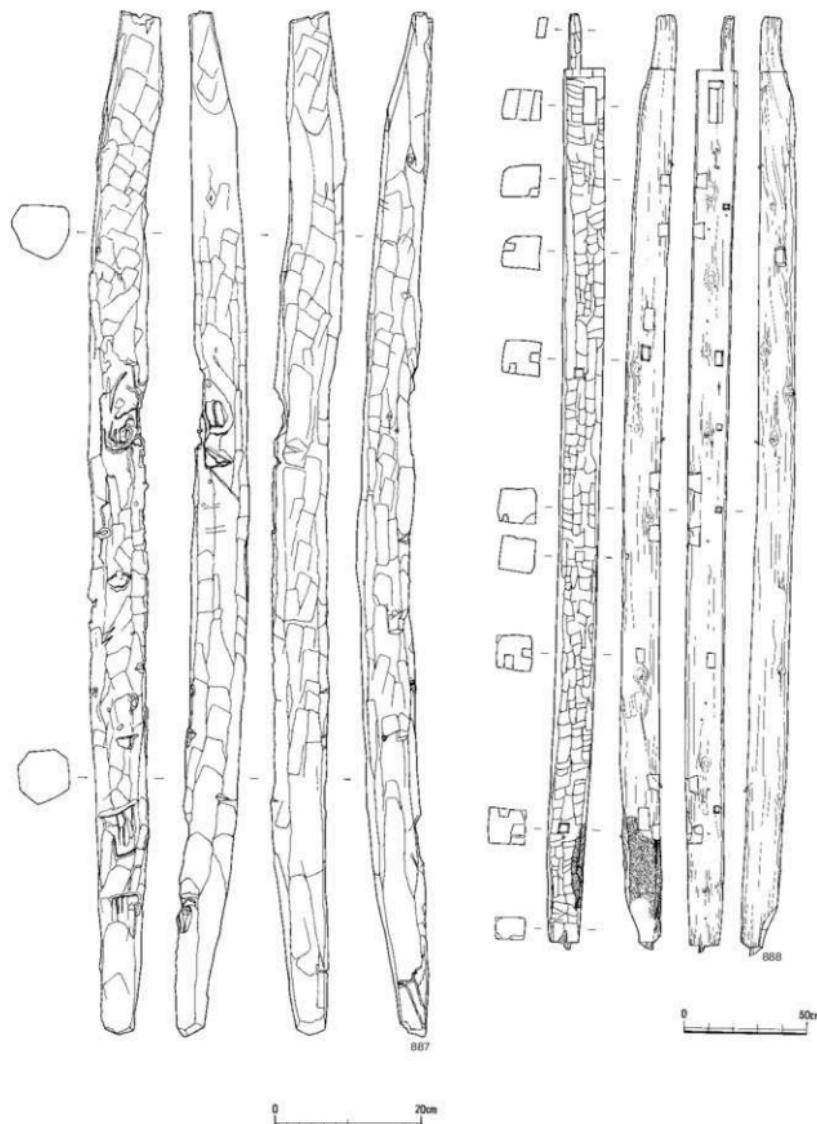
第 83 図



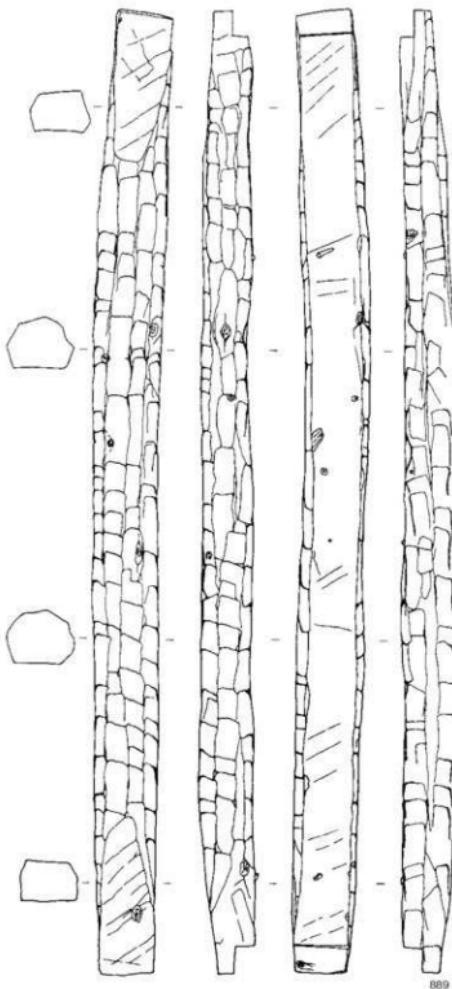
第84図 建築関連木製品（南西隅遺構）実測図



第 85 図 建築関連木製品（南西隅遺構）実測図



第 86 図 建築関連木製品（主屋・南西隅遺構）実測図



0 20cm

第 87 図 建築関連木製品（南西隅遺構）実測図



小井川(3年次)第Ⅲ期全景



小井川(3年次)第Ⅲ期全景(西方より)



小井川(3年次)第Ⅱ期全景とⅢ期塚



小井川(3年次)第Ⅲ期全景(東方より)



第Ⅱ期 1号溝



第Ⅱ期 1号礎石建物(西方より)



第Ⅱ期 1号礎石建物(北方より)



第Ⅱ期 1号礎石建物(南方より)



第Ⅲ期 西附属屋(下層)竹柵検出状況



(手前)・東北附属屋・(右上)1号礎石建物



東附属屋



1号墓石建物・遺物出土状況



第Ⅱ期 茶臼出土状況



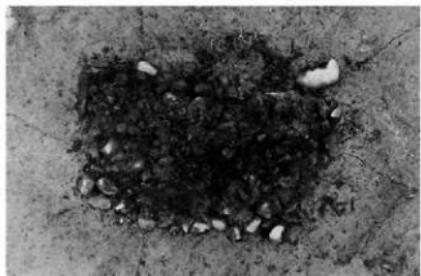
第Ⅱ期 研出土状況



第Ⅱ期 茶臼出土状況



第Ⅱ期 祖母塚茶壺出土状況



東4号墓検出状況



東1号墓検出状況



第Ⅱ期 五輪塔・部材出土状況



第Ⅲ期 遺構検出作業風景



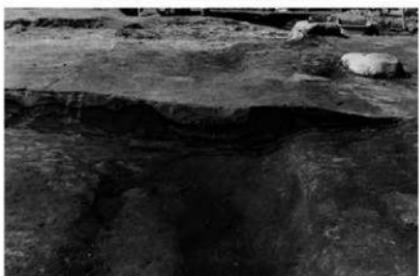
第Ⅲ期 建物群検出状況



第Ⅲ期 雨落溝,礎石列



第Ⅲ期 主屋検出状況(東部より)



雨落溝断面



第Ⅲ期 西附属屋



西附属屋・中央礎石(五輪塔部材)



第Ⅳ期 池状遺構



池状遺構西端と五輪塔部材出土状況



池状遺構と東側塙



東側塙と五輪塔部材出土状況



第Ⅳ期 西側塙(南方より)



西側塙(北方より)



東地区 遺物出土状況



東地区 遺物出土状況



池状遺構西側・橋



池状遺構



同上



池状遺構・五輪塔・部材出土状況



池南端・桶状遺構出土状況



桶状遺構(西上より)



第Ⅲ期 主屋基壇断面(南北トレンチ)



第Ⅲ期 主屋基壇断面



主屋・礎石断面



主屋・床束出土状況



主屋・床束出土状況



建築部材出土状況



主屋・東部石組



主屋・縁束出土状況



東北部 遺物出土状況



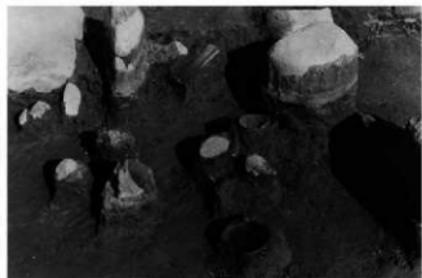
東地区 五輪部材出土状況



東地区 遺物出土状況



東北部 土器出土状況(上層)



東北部 遺物出土状況



木製品・出土状況



東附属屋・関連遺構



東附属屋・関連遺構



錢・出土状況



硯・出土状況



箸出土状況



イノシシ牙・出土状況



刀子・出土状況



毛抜き・出土状況



箸・出土状況



刀子・土器出土状況



木製品・出土状況



東附属屋関連造構



木器・出土状況



切匙・出土状況



錐・出土状況



網代・出土状況



文字経石? 出土状況



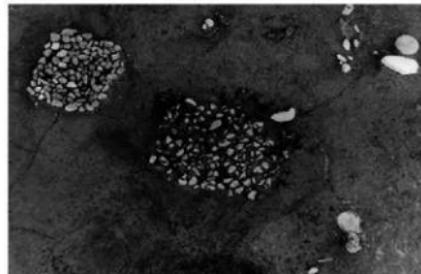
東地区 南端・遺物出土状況



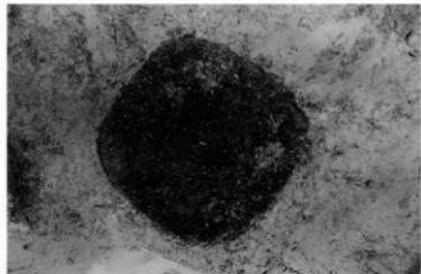
東2号墓・完堀状況



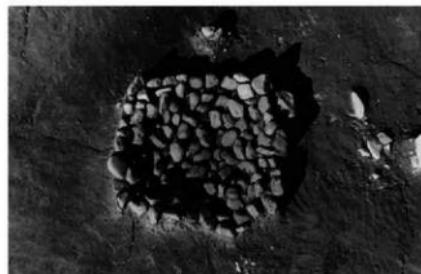
東2号墓・検出状況



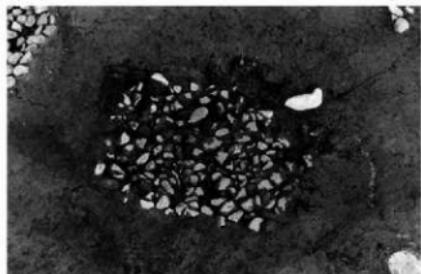
東地区・墓群



東3号墓・検出状況



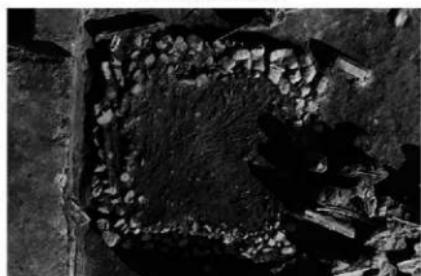
東3号墓・完堀状況



東4号墓・完堀状況



東5号墓・完堀状況



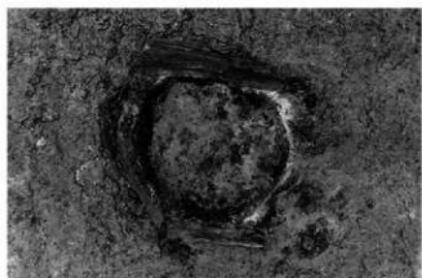
1号炉 出土状況



西4号 墓



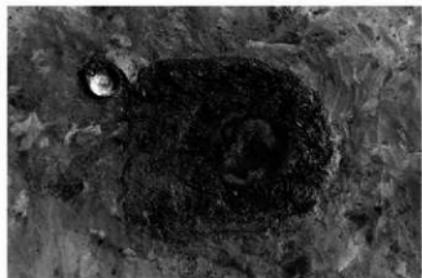
西4号 墓



西3号 墓



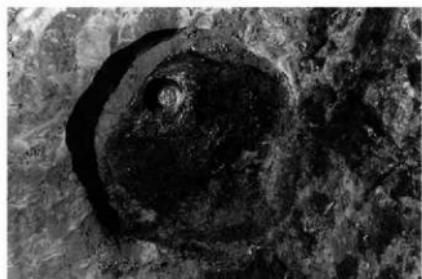
西3号 墓(底部)



西1号 墓



西1号 墓



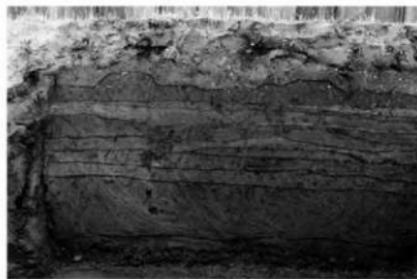
西2号 墓



西2号 墓(底部)



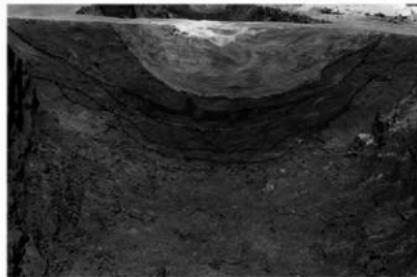
西南土層



東地区・南端基本土層



東地区・基本土層



東塹断面



東塹断面



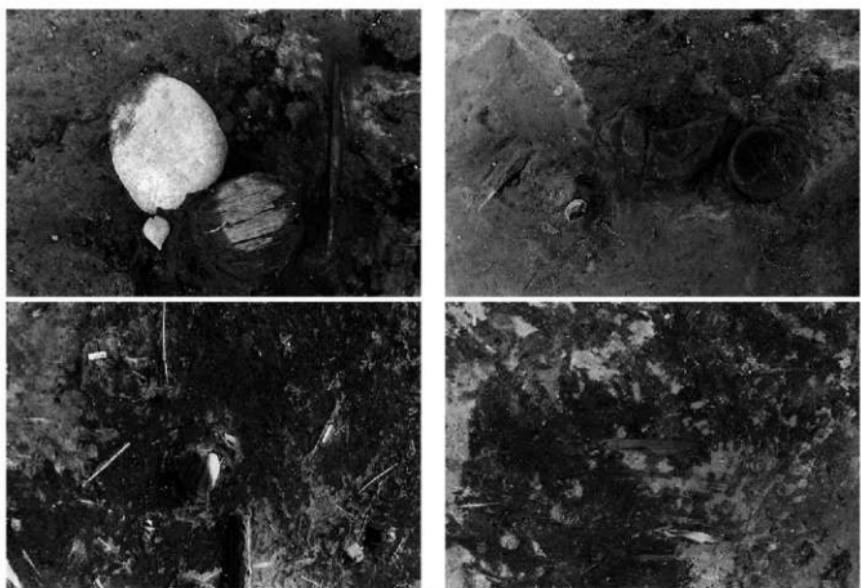
西塹断面



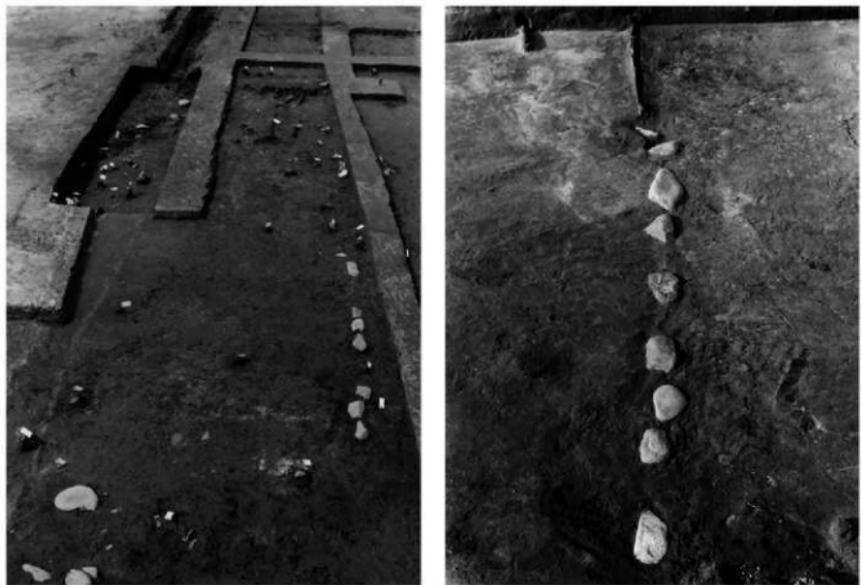
1号溝断面



西塹・下部 土師器 出土状况



東地区・第Ⅲ期上面 遺物出土状況



第Ⅲ期 石列出土状況



001



002



005



003



009



010



006



007

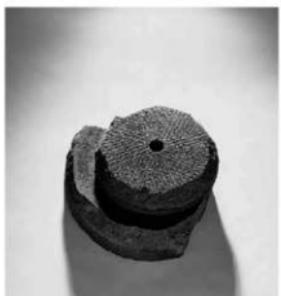


014

出土遺物(石製品): 各数字は、遺物番号を示す。



011



012



013



015



456



878



016



018



019



021



023



024



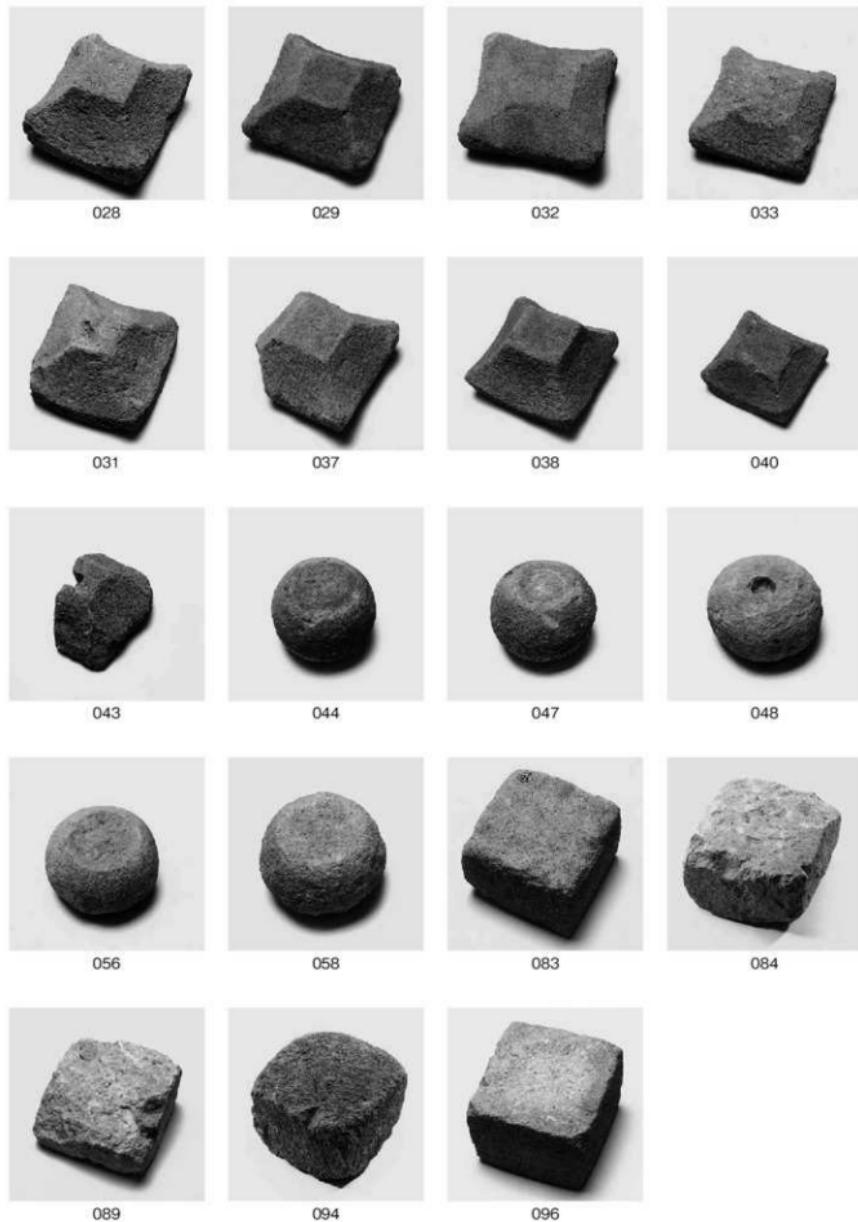
026



027

出土遺物(石製品)

図版18



出土遺物(石製品)



108



109



110



111



112



113



114



117



119

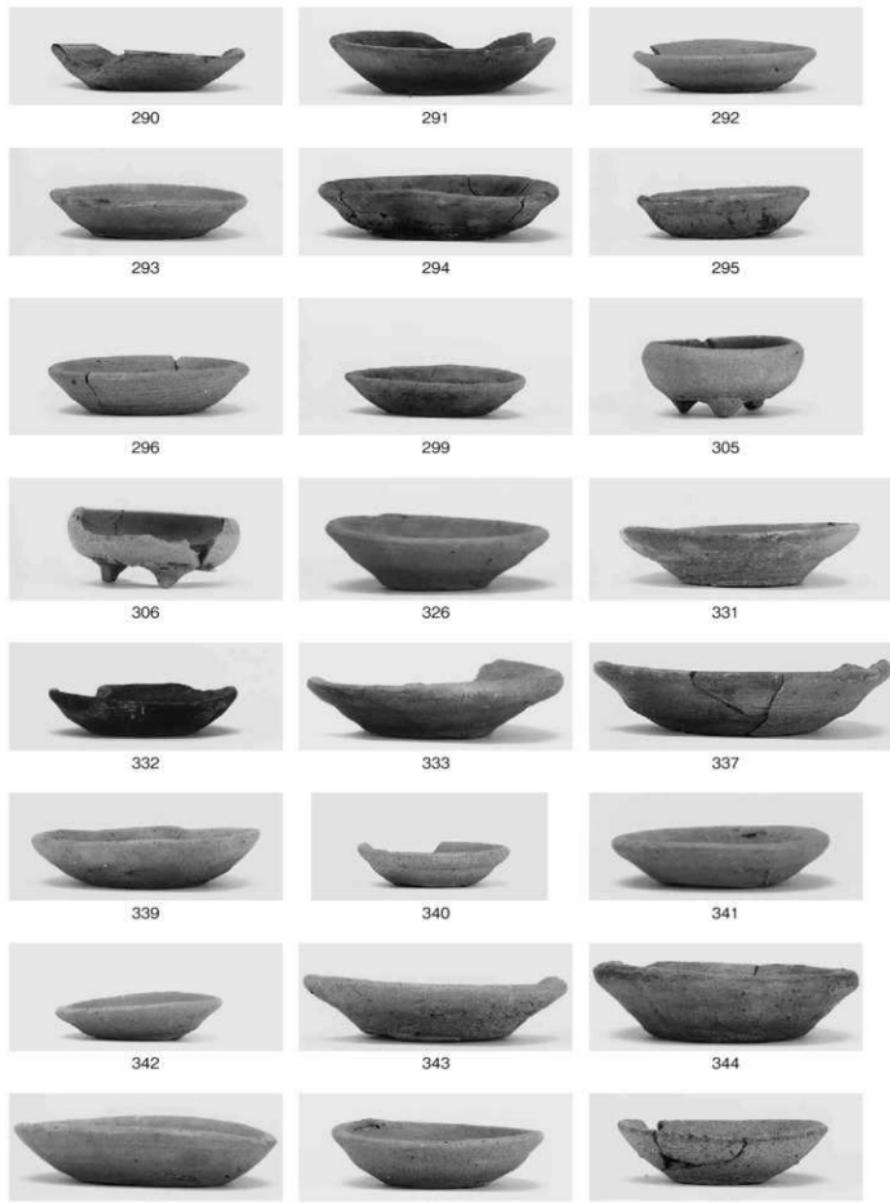


120



121

出土遺物(石製品)



出土遺物(土器)



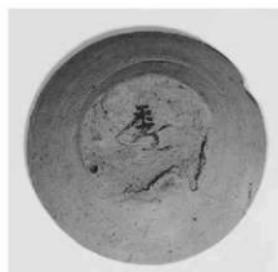
324



322



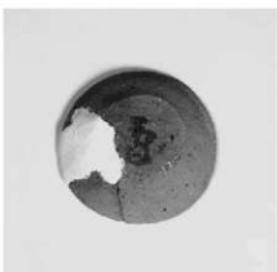
323



324



325



327



328



329



371



372



373



472



475



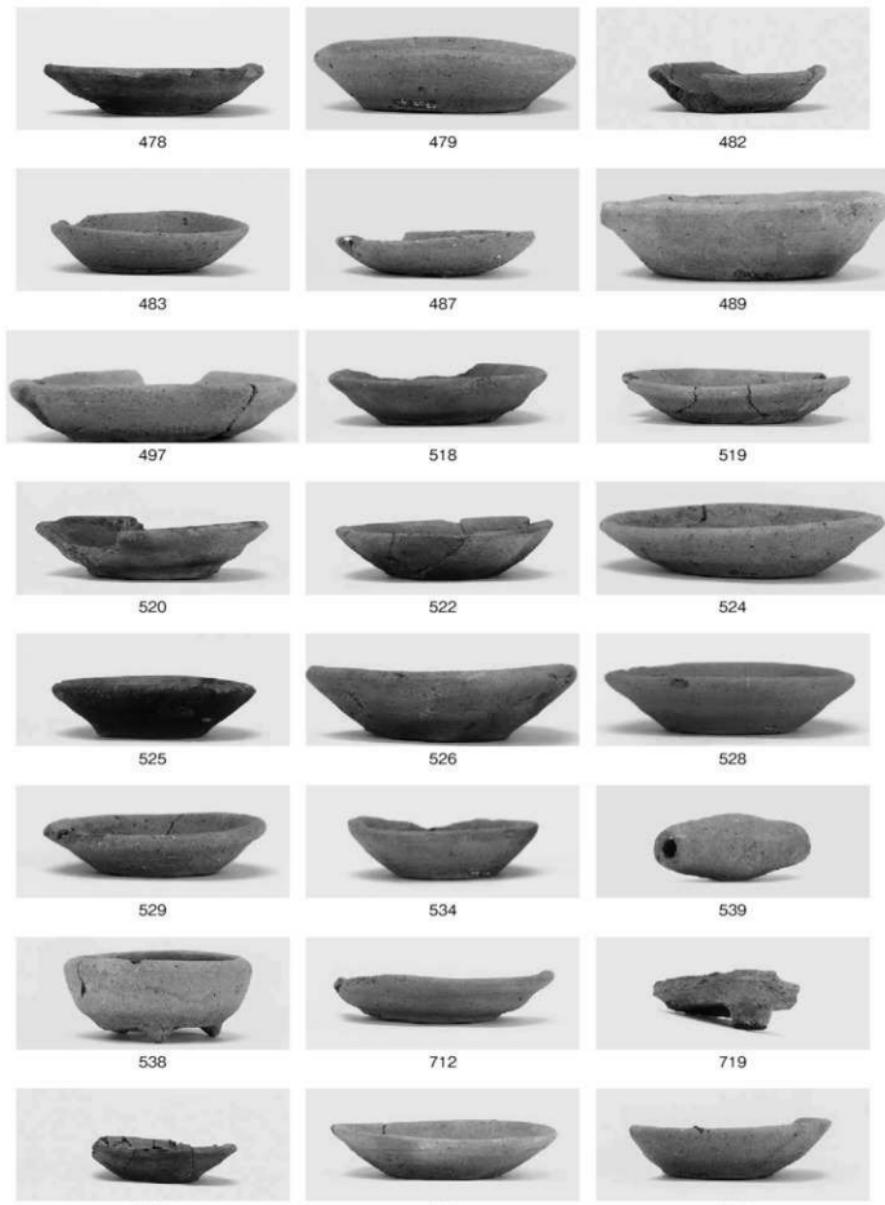
476



477

出土遺物(土器)

図版22



出土遺物(土器)



728



729



730



731



732



733



734



735



736



737



739



767



723



765



791



798



799



800

出土遺物(土器)

図版24



出土遺物(土器・陶磁器)



312



315



378



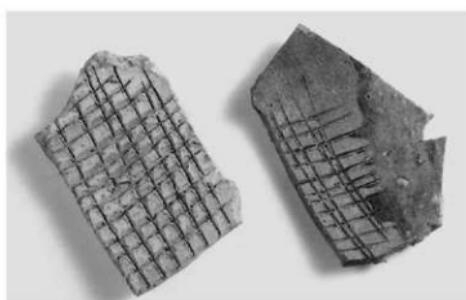
380



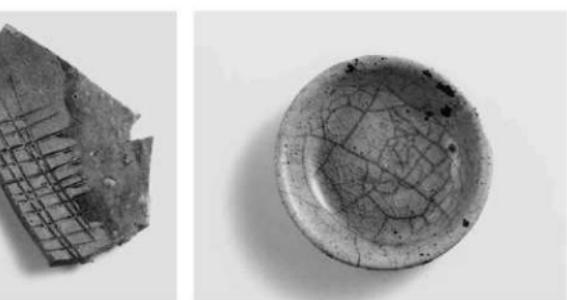
541



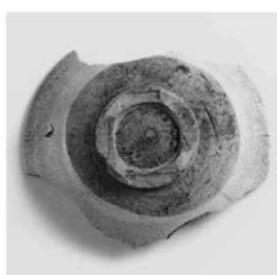
546



552



792



795

出土遺物(陶磁器)



1号礎石建物・一括



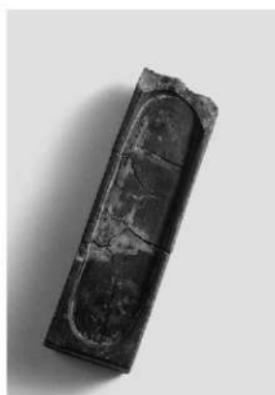
561



407



408



410



744

409

601

602

743

877

603

出土遺物(硯)

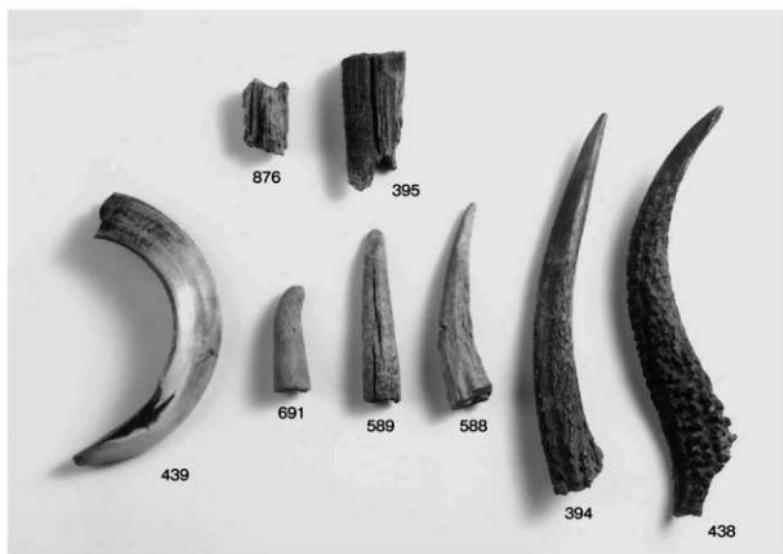


東北 砥石集合

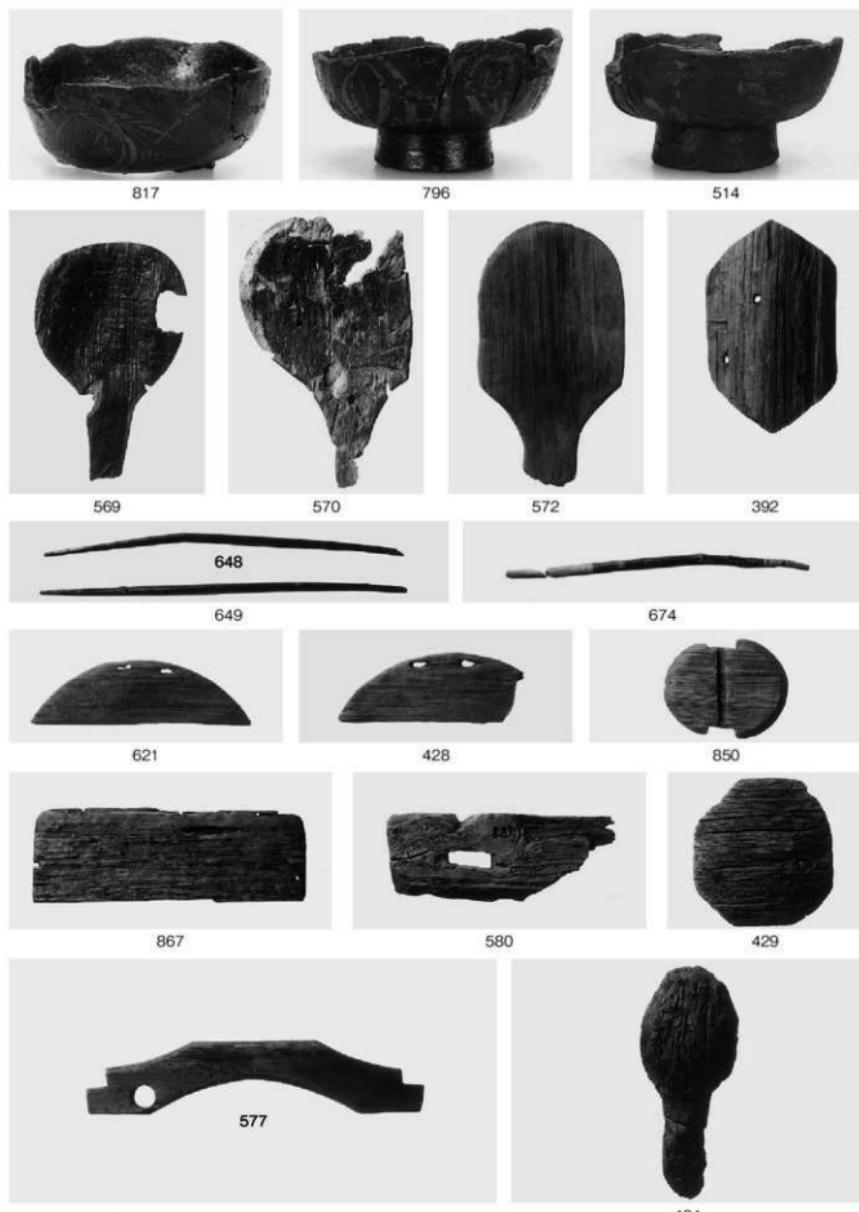


東南 砥石集合

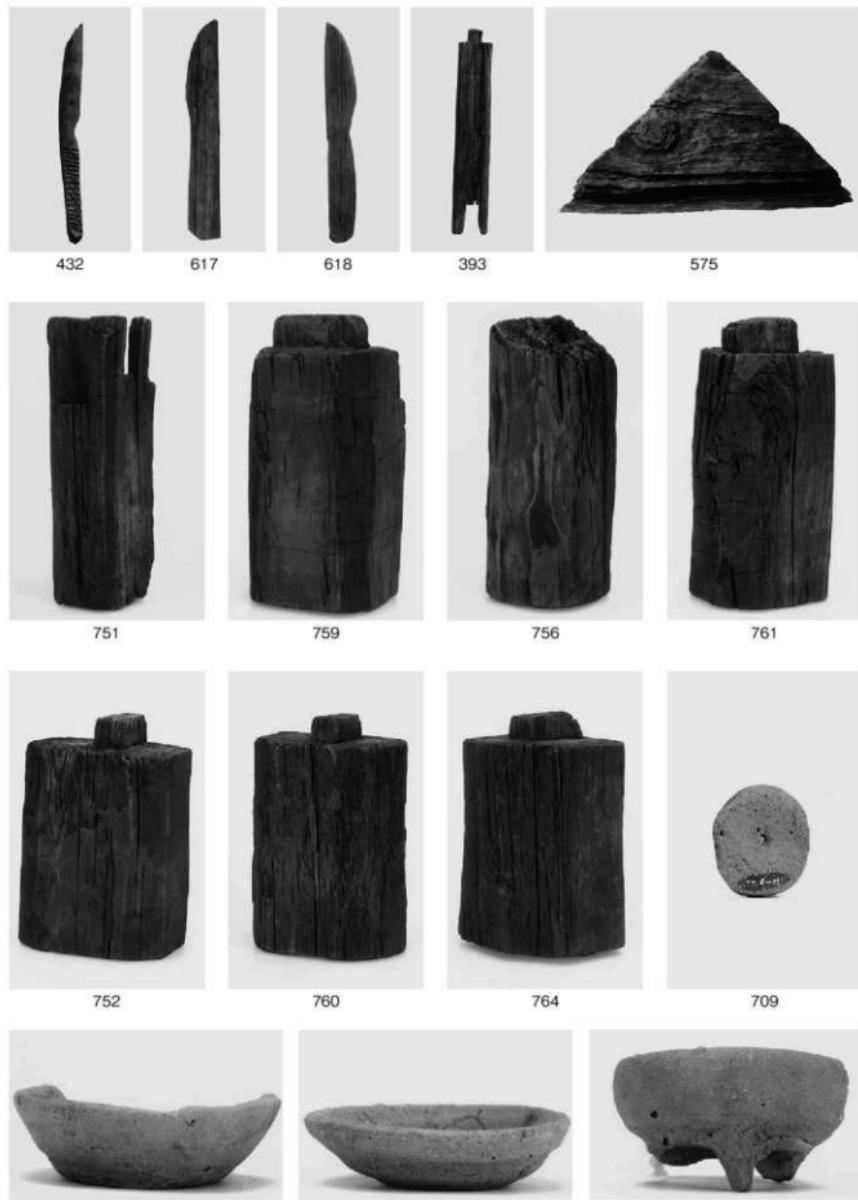
出土遺物(砥石)



出土遺物(獸角等)



出土遺物(木製品)



東一括  
出土遺物(木制品)



819

307

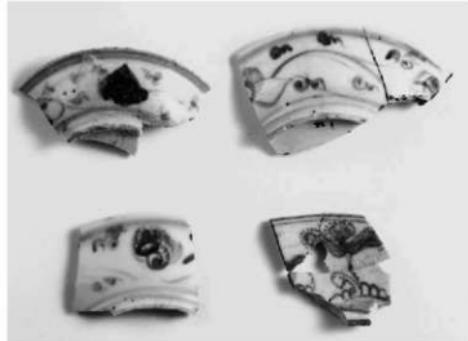
495



486

809

南西壕底部



東造成地区



西一括



815



東造成地区一括

出土遺物(陶磁器)

## 報告書抄録

ふりがな	こいかわいせき
書名	小井川遺跡Ⅲ
副書名	新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書
卷次	(全1冊)
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第255集
著者名	小林広和・北川 洋
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL055-266-3016
発行者	山梨県教育委員会・山梨県土木部
発行日	2008年3月17日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯(新)	東経(新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こいかわいせき 小井川遺跡	やまなしけん 山梨県 ちゅうおうし 中央市 ふじのなか 布施地内	19385		35° 36' 6"	138° 31' 42"	2005年6月2日～ 2006年3月16日		新山梨環状 道路建設工 事に伴う発掘 調査
所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小井川遺跡	莊園	鎌倉時代			五輪石塔・部材			
	寺院	室町時代～ 戦国時代	礎石建物、礎石建 物を中心とした附 属屋および濠	石塔類、硯、建築 部材、木製品、漆 器、陶磁器、土器				

## 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第255集

2008年3月11日印刷

2008年3月17日発行

### 小井川遺跡Ⅲ

— 新山梨環状道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

編集 山梨県埋蔵文化財センター  
 山梨県甲府市下曾根町923  
 TEL 055-266-3016  
 発行 山梨県教育委員会  
 山梨県土木部  
 印刷 株式会社アド井上